

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第172集

そう さく
惣作遺跡Ⅱ

2012

公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県西三河地方は、現在は自動車生産を中心とした工業地帯となっており、日本の経済の一翼を支えるまでに発展しています。その産業や文化を育ててきたのが、西三河の中央を南流する矢作川とその流域に広がる沖積平野および広大な碧海台地です。明治用水の開削以降、碧海台地の土地利用の幅が急速に広がり、今日の発展の基盤となっていますが、それ以前からも碧海台地の縁辺部や谷筋を中心にした一帯と沖積低地の微高地には多くの遺跡が存在します。近年はこれらの遺跡の発掘調査が進み、鹿乗川流域も特に弥生時代から古墳時代にかけて多くの集落遺跡が点在していたことが明らかになってきました。

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターでは、平成20年から21年にかけて、鹿乗川の河川改良工事に伴う事前調査として、安城市木戸町に所在する惣作遺跡の発掘調査を行いました。その結果、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴建物跡や土器棺、河道、平安時代の竪穴建物跡などが見つかるとともに、弥生土器や土師器、多種多様な木製品などの遺物が大量に出土しています。特に木簡は古代の碧海郡浅井郷の様子を知る上で重要な資料として注目されています。

本書はこれらの成果をまとめたものであり、今後学術的な資料として広く活用されとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対してご理解、ご協力を賜った関係諸機関並びに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

平成24年3月

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
理事長 加藤 高明

例言

- 1 惣作(そうさく)遺跡(遺跡番号 540132:『愛知県遺跡分布地図Ⅱ(知多・西三河地区)』1995による)は、愛知県安城市木戸町惣作に所在する遺跡である。
- 2 本書は、愛知県建設部河川課が計画する中小河川改良工事(鹿乗川)に伴う事前調査にかかる発掘調査報告書である。発掘調査は愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた(公益)愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査対象面積は2100㎡である。
- 3 発掘調査及び遺物水洗作業は平成20年9月から平成20年12月、および平成21年9月から平成21年11月にかけて行われ、その後報告書のための整理作業を平成22年9月から平成23年3月の期間実施している。なお出土遺物は、コンテナ89箱を数える。
- 4 調査担当者は鈴木正貴、成瀬友弘(以上2008年度)、池本正明、永井邦仁(以上2009年度)である。現地における発掘調査は玉野総合コンサルタント株式会社と株式会社島田組と株式会社シン技術コンサルの業務支援を受けて行っている。調査スタッフは、現場代理人:坂倉政樹・調査補助員:服部孝信・測量技師:森本辰美、前田武志(玉野)、現場代理人:中川健二・調査補助員:角上寿行・測量技師:北島誠司(島田組)、現場代理人:光松章・調査補助員:安生素明・測量技師:半浦聖吾、川久保亮(シン)である。
- 5 調査にあたっては本センター理事・専門委員をはじめ次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、安城市教育委員会、安城市埋蔵文化財センター、愛知県建設部河川課
- 6 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した。表記は世界測地系を用いている。
- 7 遺構は以下の分類記号を用い、原則調査時に使用した表記をそのまま使用した。
SB:建物、SI:竪穴建物、SK:土坑、PSP:ピット、SD:溝、SE:井戸、SN,ST:水田、SX:その他の遺構、SZ:墓、NR:自然流路
調査区表示は調査時には08A区~08C区、09A区~09C区としており、本文中でもそのまま用いている。既報告である2004年度の調査区は04A区~04H区と表示した。
- 8 本書の執筆は下記のとおりである。
第2章第5節~第7節・第3章第1節(2)・第2節(5) 永井邦仁
第3章第2節(1)~(4)・(6)・第5章第1節 樋上昇(調査研究専門員)
第3章第3節 川添和暁(調査研究主任)
第4章第1節 鈴木茂(株式会社パレオ・ラボ)
第4章第2節 黒沼保子(株式会社パレオ・ラボ)
第4章第3節 佐々木由香・ハンダリ スタルシャン(株式会社パレオ・ラボ)
その他は全て鈴木正貴が執筆している。
- 9 発掘調査および本書の作成に際しては次の方々のご指導とご協力を得た。
浅岡優、浅野啓介、天野暢保、岡安雅彦、北村和宏、黒坂貴裕、桑田訓也、鈴木とよ江、鈴木裕明、中村一郎、福岡猛志、古尾谷知浩、山田昌久、李浩基、渡辺晃宏(敬称略、順不同)
- 10 樹種同定・種実同定・プラントオバールの各分析については株式会社パレオ・ラボに、遺物の実測・トレースについては国際航業株式会社と株式会社文化財サービスに、写真撮影については写真工房 遊に委託した。また、本書の編集・図版作成については株式会社文化財サービスの協力を得た。
- 11 発掘調査及び整理については、多数の発掘作業員・整理補助員の協力を得た。
- 12 調査記録(図面・写真資料・日誌等)は、本センターにて保管している。
- 13 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査の経緯	
第2節 調査の方法	
第3節 地理的・歴史的環境	
第2章 遺構	6
第1節 遺構の概要	
第2節 O9C 区の遺構	
第3節 O8A 区の遺構	
第4節 O8B 区の遺構	
第5節 O9A 区の遺構	
第6節 O9B 区の遺構	
第7節 O8C 区の遺構	
第3章 遺物	50
第1節 土器・陶磁器類	
第2節 木製品	
第3節 石器	
第4章 自然科学的分析	128
第1節 惣作遺跡のプラント・オパール	
第2節 惣作遺跡出土木製品の樹種同定	
第3節 惣作遺跡から出土した大型植物遺体	
第5章 考察・まとめ	148
第1節 出土木製品からみた弥生時代後期～古墳時代前期の 鹿乗川流域遺跡群	
第2節 総括	
抄録	174
遺構図版	175
写真図版	

挿図目次

第1図 遺跡位置図(1)	1	第41図 A期の出土遺物(2)	52
第2図 遺跡位置図(2)	3	第42図 A期の出土遺物(3)	53
第3図 調査区位置図	4	第43図 A期の出土遺物(4)	54
第4図 004SN～010SN 遺構図	7	第44図 A期の出土遺物(5)	55
第5図 011SN～013SN 遺構図	8	第45図 A期の出土遺物(6)	56
第6図 014SN～017SN 遺構図	9	第46図 A期の出土遺物(7)	57
第7図 021SN～023SN 遺構図	11	第47図 A期の出土遺物(8)	59
第8図 117SI 遺構図	12	第48図 A期の出土遺物(9)	60
第9図 194SA・195SA 遺構図	13	第49図 A期の出土遺物(10)	61
第10図 08A区土層断面図	15	第50図 A期の出土遺物(11)	63
第11図 08A区003NR木製品出土分布図	16	第51図 A期の出土遺物(12)	64
第12図 08A区003NR土器類出土分布図	17	第52図 A期の出土遺物(13)	65
第13図 077SB 遺構図	18	第53図 A期の出土遺物(14)	66
第14図 078SB 遺構図	19	第54図 A期の出土遺物(15)	67
第15図 084SB 遺構図	20	第55図 A期の出土遺物(16)	68
第16図 344SB 遺構図	21	第56図 A期の出土遺物(17)	69
第17図 345SB～353SB 遺構図	22	第57図 A期の出土遺物(18)	70
第18図 354SB～356SB 遺構図	23	第58図 A期の出土遺物(19)	72
第19図 291SE 遺構図	24	第59図 A期の出土遺物(20)	73
第20図 08B区基本土層断面図	26	第60図 A期の出土遺物(21)	75
第21図 08B区003NR 遺構図(1)	27	第61図 A期の出土遺物(22)	76
第22図 08B区003NR 遺構図(2)	28	第62図 A期の出土遺物(23)	77
第23図 08B区003NR 遺物出土分布図(1)	29	第63図 A期の出土遺物(24)	78
第24図 08B区003NR 遺物出土分布図(2)	30	第64図 A期の出土遺物(25)	79
第25図 08B区003NR 遺物出土分布図(3)	31	第65図 A期の出土遺物(26)	80
第26図 08B区003NR 遺物出土分布図(4)	32	第66図 A期の出土遺物(27)	81
第27図 08B区003NR土層断面図	33	第67図 A期の出土遺物(28)	82
第28図 007SB 遺構図	34	第68図 A期の出土遺物(29)	83
第29図 001SD・002SX・064SX・065SX土層断面図	35	第69図 A期の出土遺物(30)	84
第30図 09A区遺構図	36	第70図 A期の出土遺物(31)	86
第31図 09B区3面遺構図(1)	37	第71図 A期の出土遺物(32)	87
第32図 09B区3面遺構図(2)	38	第72図 A期の出土遺物(33)	88
第33図 09B区4面遺構図(1)	39	第73図 A期の出土遺物(34)	89
第34図 09B区4面遺構図(2)	40	第74図 A期の出土遺物(35)	90
第35図 023SI・028SI 遺構図	42	第75図 A期の出土遺物(36)	91
第36図 049SB・050SB 遺構図	45	第76図 A期の出土遺物(37)	92
第37図 066SB・067SB 遺構図	46	第77図 B期の出土遺物(1)	94
第38図 073SD 遺構図	47	第78図 08B区003NR B期の遺物出土分布図	95
第39図 068NR 遺構図	48	第79図 B期の出土遺物(2)	95
第40図 A期の出土遺物(1)	51	第80図 B期の出土遺物(3)	96
		第81図 B期の出土遺物(4)	97
		第82図 B期の出土遺物(5)	98

第83図	C期の出土遺物	100	第123図	鹿乘川流域遺跡出土威儀具ほかの集成	153
第84図	木製品(1)	102	第124図	鹿乘川流域遺跡出土建築部材の集成	154
第85図	木製品(2)	103	第125図	鹿乘川流域遺跡出土その他の木製品の集成	155
第86図	木製品(3)	104	第126図	下懸遺跡出土木製品器種別樹種グラフ	157
第87図	木製品(4)	105	第127図	惣作・姫下遺跡出土木製品器種別樹種グラフ	158
第88図	木製品(5)	106	第128図	下懸遺跡出土木製品器種別器種グラフ	159
第89図	木製品(6)	108	第129図	惣作・姫下遺跡出土木製品器種別器種グラフ	160
第90図	木製品(7)	109	第130図	下懸遺跡出土木製品器種別木取りグラフ	161
第91図	木製品(8)	110	第131図	惣作・姫下遺跡出土木製品器種別木取りグラフ	162
第92図	木製品(9)	111	第132図	下懸遺跡出土弥生時代木製品の復元径・年輪数グラフ	164
第93図	木製品(10)	112	第133図	惣作遺跡出土木製品の器種別復元径・年輪数グラフ	165
第94図	木製品(11)	113	第134図	下懸遺跡出土古墳時代木製品の復元径・年輪数グラフ	166
第95図	木製品(12)	114	第135図	姫下遺跡出土木製品の器種別復元径・年輪数グラフ	167
第96図	木製品(13)	115	第136図	鹿乘川流域遺跡部の器種組成比較グラフ	169
第97図	木製品(14)	116	第137図	A—2期における糞の変遷	171
第98図	木製品(15)	117	第138図	惣作遺跡の遺構変遷	173
第99図	木製品(16)	118			
第100図	木製品(17)	119			
第101図	木製品(18)	120			
第102図	木製品(19)	121			
第103図	木製品(20)	122			
第104図	木製品(21)	123			
第105図	木製品器種・樹種組成図(1)	124			
第106図	木製品器種・樹種組成図(2)	125			
第107図	石器	126			
第108図	プラント・オパール分析試料採取位置	128			
第109図	北界断面試料のプラント・オパール分布図	129			
第110図	T15断面試料のプラント・オパール分布図	129			
第111図	惣作遺跡のプラント・オパール	131			
第112図	惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真(1)	136			
第113図	惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真(2)	137			
第114図	惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真(3)	138			
第115図	惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真(4)	139			
第116図	惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真(5)	140			
第117図	惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真(6)	141			
第118図	惣作遺跡 003NR から出土した大型植物遺体(1)	145			
第119図	惣作遺跡 003NR から出土した大型植物遺体(2)	146			
第120図	鹿乘川流域遺跡部の遺跡分布	149			
第121図	弥生～古墳時代の木製品器種組成比較	150			
第122図	鹿乘川流域遺跡出土掘削具ほかの集成	151			

挿表目次

第1表	試料 1g 当たりのプラント・オパール個数	130
第2表	器種別集計	132
第3表	器種別特定結果一覧	135
第4表	大型植物遺体試料一覧	143
第5表	003NR から出土した大型植物遺体	144
第6表	弥生～古墳時代の木製品器種組成比較	150
第7表	鹿乘川流域の器種別樹種組成表	168

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯

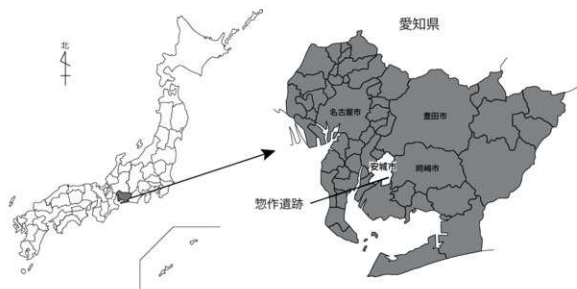
今回の惣作遺跡の調査は、中小河川改良工事（鹿乗川）に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。鹿乗川河川改良工事予定地には『愛知県遺跡分布地図Ⅱ（知多・西三河地区）』（愛知県教育委員会 1995）に記載された惣作遺跡が所在することが認識されていたが、さらに詳細に遺跡の範囲を決定することを目的に、平成12年3月に愛知県埋蔵文化財センターによって予定地内の範囲確認調査が行われた。この結果、遺跡の範囲を04 A区北端から04 H区南端までと判断され、平成16年度に旧水田用地で堤防建設予定地を中心に3295㎡の範囲を発掘調査した（報告書は『惣作遺跡』第156集）。

その後、平成20年度には、平成16年度調査区の西側に相当する旧堤防部と調査区に挟まれた道路部の発掘調査を実施した。具体的には、04 A区・04 B区の西側を08 A区、04 D区の北側と西側を08 B区、04 G区・04 H区の北側と西側を08 C区と設定した。

04 A区の発掘調査では、北東—南西方向に走る標高約6.4mの微高地の北側と北側に広がるゆるやかな落ち

込みが検出され、落ち込み部分では遺構は希薄になり、範囲確認調査の指摘通り04 A区の北側は遺跡の範囲ではないと認識されていた。しかし、08 A区の発掘調査において、北部の微低地部分で古代を中心とする水田遺構が検出され、それが調査区の北側にまでその範囲が広がることが高い確率で予測された。また、惣作遺跡と下懸遺跡の間に所在する五反田遺跡の範囲確認調査においても遺跡の存在が確認された。この結果、惣作遺跡の北方は水田遺構を挟んで五反田遺跡と下懸遺跡に接していることが明らかになった。これを受け、愛知県教育委員会と愛知県建設部は対応を協議し、まだ開発工事が進んでいない08 A区の北側を遺跡と認識し、発掘調査を行う必要があると判断した。

上記の経緯から、平成21年度には、前年度までに調査ができなかった寺領橋東側の市道部分（09 A区・09 B区）と、新たに追加された08 A区の北側（09 C区）を発掘調査した。これで、河川改修関連の現鹿乗川の東側の惣作遺跡の発掘調査は終了したことになる。



第1図 遺跡位置図(1)

惣作遺跡

第2節 調査の方法

発掘調査は、平成20年度では玉野総合コンサルタント株式会社の支援を受け、08 B区→08 C区→08 A b区→08 A a区の順に実施した(第3図)。調査担当者は鈴木正貴・成瀬友弘である。平成21年度では株式会社島田組と株式会社シン技術コンサルの支援を受け、09 A区と09 B区→09 C区の順に実施した。調査担当者は池本正明・永井邦仁である。

調査方法は、はじめにバックホウにより表土掘削を実施した。調査地点により堆積状況は異なるが、概ね築堤盛土や道路盛土および近世から現代までの旧水田耕作土となる灰色粘土または粘質シルトなどの表土を除去し、平安時代を中心とした遺構面となる黒褐色粘土層上面まで掘削した。多くの遺構は黒褐色粘土の上面から掘り込まれていることから、全ての調査区においてこの面で遺構検出を試み、1面遺構として調査を行った。その後、多くの調査区では黒褐色粘土を除去していわゆる基盤層である灰色シルト層上面で遺構検出を実施し2面遺構とした。ただし、黒褐色粘土など遺構埋土が厚く残存する部分ではこの限りではなく、3面・4面調査を行った部分もある(09 B区)。したがって、各調査区相互の遺構面の対応関係は合致しない場合が多くなっているため、この点は注意が必要である。本書では調査区ごとに遺構の説明を行うので、個別の状況はそれを参照されたい。

各調査区の最終遺構面の調査が終了した段階で、いわゆる基盤層を構成する灰白色中粒砂の厚い堆積をバックホウにより「深掘調査」を実施している。この砂を中心とした堆積物は古矢作川が出水時に一気にもたらした堆積と思われる、そこで遺構が展開したと想定することは難しいが、弥生時代中期を中心とする土器群が良好な状態で出土することが知られている。この堆積を掘削する際は湧水が激しく安全を確保して遺物を探取するために、採取の際は重機を使用している。本書で深掘とした遺物は全てこの重機掘削した際に出土したものである。

調査区内は、国土交通省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した5mグリッドを設定し、遺物は原則このグリッドごとに取り上げている。部分的に包含層を人力で掘削しながら遺構検出を行い、土坑類は半截掘削、溝や竪穴建物跡などは土層観察用ベルトを残して掘削し、必要な記録を採取した後に全掘作業を行った。

遺構の実測は電子平板による測量を実施し、成果品は全てデジタルデータで作成した。写真は6×7リバーサルフィルムとデジタルカメラによる撮影を各調査補助員が行った。調査途中の平成20年12月14日には現地説明会を開催し、検出された遺構と出土した遺物について説明した。約110人の参加者があった。また、出土した遺物は現地で遺物洗浄までの作業を終え、洗浄が終了した時点で27リットル入りコンテナで89箱に及んだ。

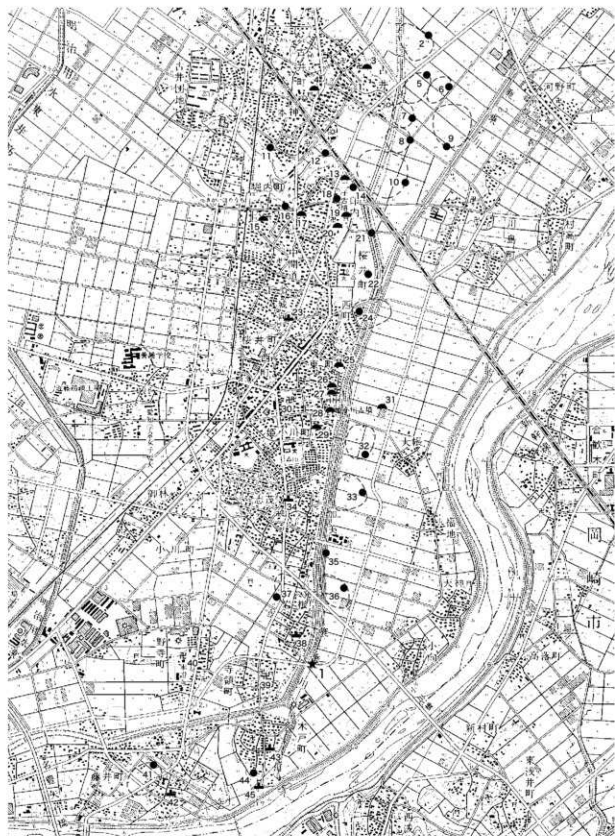
整理・報告書作成作業は平成22年度に鈴木が担当して実施した。遺物は整理補助員の協力を得て接合・選別作業を実施し、報告書に掲載する遺物の実測については一部を国際文化財株式会社へ委託し、残りを鈴木と永井と川添が行った。遺物実測図のトレースは多くの部分を国際文化財株式会社と株式会社文化財サービスに、遺物の写真撮影は写真工房遊に、樹種同定などの自然科学的分析をバレオ・ラボ株式会社に、報告書編集作業(遺構図作成を含む)は株式会社文化財サービスにそれぞれ作業を委託した。

平成23年度に報告書印刷作業を行い、印刷は新日本法規印刷株式会社に委託した。

第3節 地理的・歴史的環境

惣作遺跡は、碧海台地の縁辺に沿って流れる鹿乘川左岸の微高地上に立地する。この微高地は矢作川及びその支流によって形成されたと思われる、砂あるいはシルト層が基盤となる。遺構検出面の標高は6~7mを測り、碧海台地よりも3~4m低い。現在の鹿乘川は近代の改修により直線的に南流しているが、それ以前はたびたび流路を変えながら蛇行して流れたものと思われる、かなり入り組んだ地形があったことが発掘調査から徐々に明らかになっている。

今回の調査区では、08 B区中央部・08 C区北東部・09 A区・09 B区の部分は地形が高くやや安定しており、その周辺が低地部になる。この安定した微高地が形成されるのは弥生時代中期以降であり、それ以前は08 B区と08 C区で厚く堆積する中粒砂を運んだ旧河川が南流していたと思われる。今回の調査では、古墳時代前期には08 B区を中心に東西方向に走る河川が存在したことが明瞭に確認され、その左岸と右岸で遺跡の様相は異なっている。08 A区北半部から北にかけては緩やか

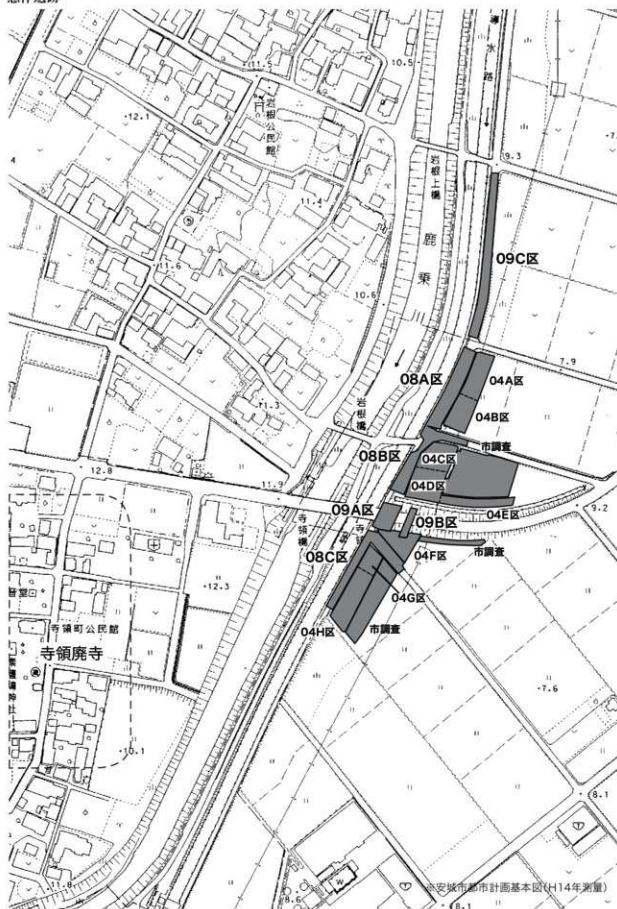


皇国土地理院発行 1/25000 地形図
 「安城」(西尾)(H15年発行)を使用

- | | | | | |
|----------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1 惣作遺跡 | 11 本神遺跡 | 21 宮下遺跡 | 31 八ツ塚古墳 | 39 寺領廃寺 |
| 2 神ノ木遺跡 | 12 釈迦山遺跡 | 22 中狭間遺跡 | 32 姫下遺跡 | 40 本蓮寺境内地 |
| 3 塚越古墳 | 13 二子古墳 | 23 桜井城跡 | 33 寄島遺跡 | 41 大畑遺跡 |
| 4 愛宕古墳 | 14 二夕子遺跡 | 24 亀塚遺跡 | 34 小川志茂城跡 | 42 藤井城跡 |
| 5 竹ノ花遺跡 | 15 堀内古墳 | 25 獅子塚古墳 | 35 下懸遺跡 | 43 木戸古城遺跡 |
| 6 上橋下遺跡 | 16 堀内貝塚 | 26 姫塚古墳 | 36 五反田遺跡 | 44 木戸城遺跡 |
| 7 野辺遺跡 | 17 碧海山古墳 | 27 崖古墳 | 37 加美遺跡 | 35 木戸城跡 |
| 8 彼岸田遺跡 | 18 桜林遺跡 | 28 姫小川古墳 | 38 岩根城跡 | |
| 9 下橋下遺跡 | 19 山伏塚古墳 | 29 王塚古墳 | | |
| 10 古井堤遺跡 | 20 比蘇山古墳 | 30 誓願寺境内地 | | |

第2図 遺跡位置図(2) (s=1:25000)

惣作道跡



第3図 調査区位置図

調査の概要

に低地となり後背湿地であったと思われる。このように惣作遺跡は、基盤形成を含め、河川の影響を強く受けて立地しているといえる。

鹿乗川に沿った碧海台地縁辺部には、多くの遺跡が集中する（第2図）。最も古い時期の遺跡としては、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土坑墓・土器棺墓・貝塚が出土した堀内貝塚があり、釈迦山遺跡、桜林遺跡、亀塚遺跡などでも遺物が採取されている。弥生時代になって遺跡が集中するのは、古井堤遺跡や上橋下遺跡、下橋下遺跡などが展開する区域で、これらの遺跡を古井遺跡群と総称する場合もある。古井遺跡群は弥生時代から古墳時代初頭まで地点を変えながら連続して営まれる集落遺跡で、弥生時代中期後半期に最盛期を迎える。ま

た弥生時代中期後半の遺跡としては中狭間遺跡や加美遺跡・下懸遺跡がある。さらに弥生時代後期から古墳時代初頭になると、人面文土器が出土した亀塚遺跡、環濠と思われる溝が検出されている本神遺跡や中狭間遺跡、遺物が大量に出土した桜林遺跡・下懸遺跡など多くの遺跡が出現する。この地域の古墳で時期が判明しているものはわずかであるが、全長69mを測る前方後方墳である二子古墳を中心とした塚越古墳・比蘇山古墳・碧海山古墳などと、全長69mの前方後円墳を中心とした獅子塚古墳・姫塚古墳・八ツ塚古墳などに分かれる。奈良時代には惣作遺跡の西約300mのところに寺領廃寺が建立され、沖積低地には多くの集落遺跡が確認されている。（鈴木正貴）

第2章 遺構

第1節 遺構の概要

本書では、既報告の『惣作遺跡』（2009）で遺構・遺物の消長をもとに提示された時期区分を踏襲し、一部修正を加えた上で、北から南へ調査区ごとに記述を進めていきたい。

A期 弥生時代から古墳時代初頭

A-1期 弥生時代前期後半～中期前葉 水神平式期～岩滑式期

A-2期 弥生時代中期後半 古井式期～凹線文期

A-3期 弥生時代後期～古墳時代初頭 山中式期～廻間1式期

A-4期 古墳時代前期 廻間2式期

B期 平安時代前半

B-1期 井ヶ谷 78号窯式期～黒笹 90号窯式期

B-2期 折戸 53号窯式期

C期 戦国時代から江戸時代

C-1期 鎌倉時代

C-2期 戦国時代～江戸時代

C-3期 江戸時代後期以降

(鈴木正貴)

第2節 09 C区の遺構

(1) 調査経過と遺構の概要

09C区は、08A区に北接する幅約5m南北長約115mの細長い調査区である。用水脇の道路敷を調査区としており緩くカーブした形状である。ほぼ中央で水路が横切る箇所があり、そこで便宜的に北半部と南半部に分けての調査となった。表土掘削は道路舗装除去後に開始し、路盤の粘土や碎石の下で近代以前の耕作土である粘土～粘質シルトの堆積が認められた。ここでは顕著な遺構・遺物がみられないことからさらに掘り下げて黒褐色粘土層上面を検出し（第1面）、08A区での調査成果を受けて農耕に関わる畦畔遺構の検出をおこなった。その後、黒色粘土層を掘り下げて基盤砂層上面の検出を行い（第

2面）、古代を中心とする遺構を検出した。ただし調査区南半部は後背湿地であるため基盤層が落ち込んでいることや、設定したトレンチによる観察でも顕著な遺構・遺物が見出せなかったことから全面掘り下げは行っていない。

(2) 第1面（水田遺構）

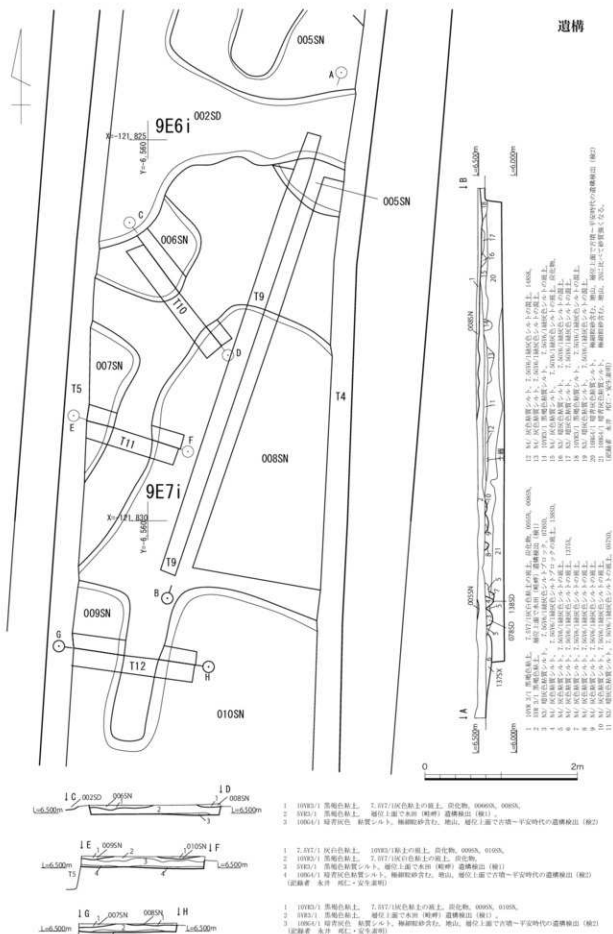
黒褐色粘土層は、調査区北半部の一部を除けばほぼ全体で検出される地層である。当該地層は上下2層に区分することができる。すなわち上層は炭化物粒が多数混入するために黒色度がより強い粘土層であり、下層はその混入が少ないため黒色度が強い粘土である。この上・下層の境は必ずしも明瞭というわけではないが、概ね区分することができる。

それらの位置づけは、上層が水田などの耕作で攪拌を受け続けた層であり、下層は耕作の届かない比較的固定化された層である。したがって下層上面はその上位に畦畔が造られると攪拌の機会が減るため同様に畦畔状の高まりとなる。つまり畦畔そのものではないが、その存在が転写されて検出される層として位置づけることができる。これを畦畔遺構と呼ぶ。なおこの転写は、基盤砂層が高くなる自然堤防頂部においては、砂層（またはシルト層）上面に対してなされる。例えば011SN・012SNの間にある畦畔遺構がそれに該当する。

09C区で実施した水田遺構の検出方法は、まず調査区東・西両壁に設定したトレンチで黒褐色粘土層の上・下層区分をおこない、畦畔状の高まりを断面で把握することから始める。しかしそれは明瞭な立ち上がりを伴わないので確証がない。次に、黒褐色粘土層を掘り下げ平面検出をおこなう。畦畔遺構は溝状遺構が交差するように検出され、その両脇の黒褐色粘土層が凹んだ田面の理土となる。その埋土掘削と同時に、平面検出した畦畔遺構の全てについてサブトレンチを設定して土層断面の精査を実施した。それによって畦畔の幅が検出時より変動することはいくつもあったが、畦畔の存在が否定されることはなかった。

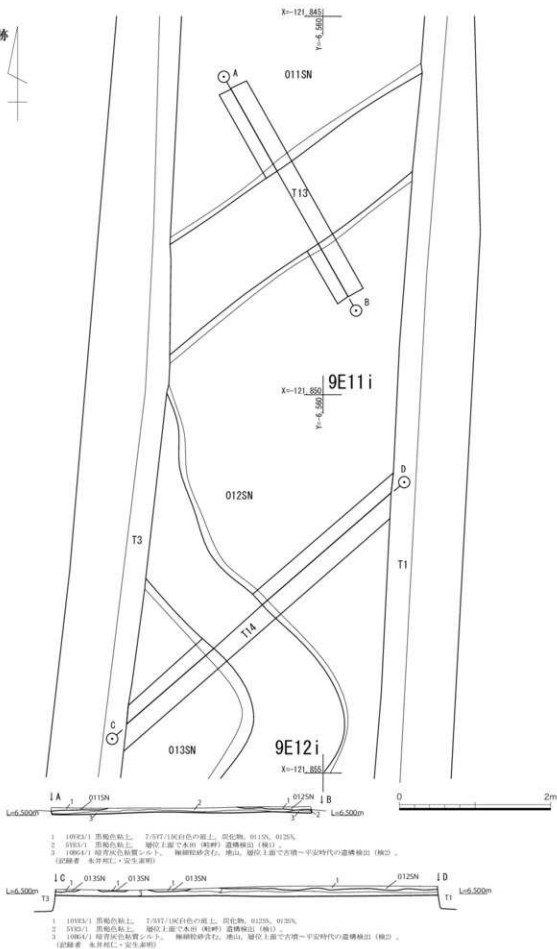
畦畔遺構の年代は黒褐色粘土層に含まれる遺物によって一定点を得ることができる。出土遺物の大半が須恵器・灰軸陶器であったが、これは第2面遺構に関わる遺物であり、混入でもある。その中でも706の山茶碗は比較的大きな破片で畦畔遺構の脇で

遺構



第4図 004SN～010SN 遺構図

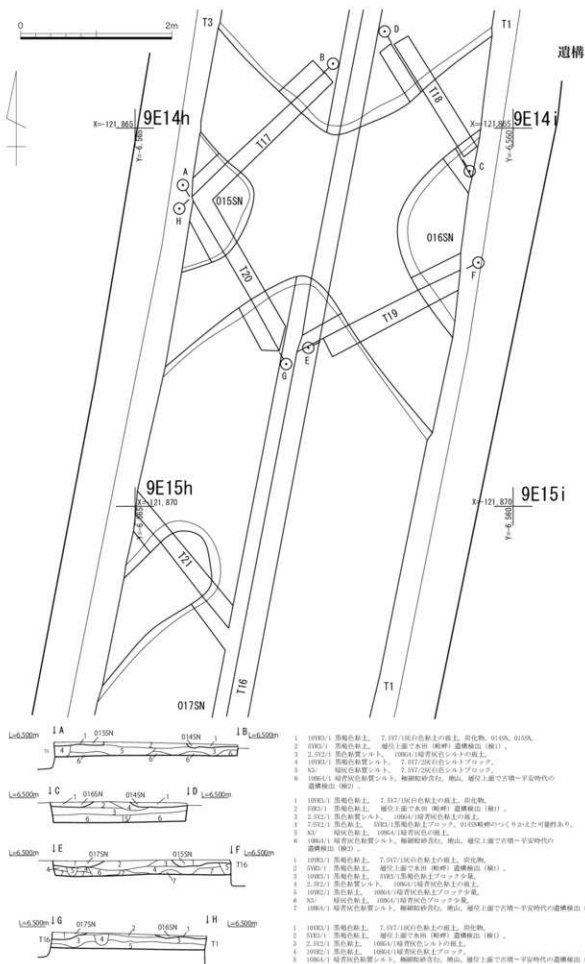
惣作道跡



- 1 1492C/1 黒褐色粘土。2/177/1層白色の粘土。炭化鏡: 011SN, 012SN。
- 2 1192C/1 黒褐色粘土。層位上層で木炭(炭屑)遺構検出(検1)。
- 3 1498A/1 緑青灰色粘質シルト。無機粘結灰石。堆山。層位上層で古墳～平安時代の遺構検出(検2)。(図録巻末付録1～付録3参照)

- 1 1492C/1 黒褐色粘土。2/177/1層白色の粘土。炭化鏡: 012SN, 013SN。
- 2 1192C/1 黒褐色粘土。層位上層で木炭(炭屑)遺構検出(検1)。
- 3 1498A/1 緑青灰色粘質シルト。無機粘結灰石。堆山。層位上層で古墳～平安時代の遺構検出(検2)。(図録巻末付録1～付録3参照)

第5図 011SN～013SN 遺構図



第6図 014SN～017SN 遺構図

惣作遺跡

出土していることから水田耕作時に混じった可能性が最も高いと考えられる遺物である。少なくともこれが畦畔（水田）遺構の上限を示している遺物であり、概ね中世の水田であると考えられる根拠である。

この他、09C区北半部では、戦国時代～近世段階の水田畦畔遺構が中世水田遺構とほぼ同一面で検出されている。前者によって後者が削平されたものと考えられる。

0035N 調査区北端で検出された水田遺構である。全体の規模は不明であるが、国土座標や現在の地割りとほぼ平行するラインであることから、比較的近代のものであると考えられる。灰白色粘土に黒褐色粘土が混じった地層である。

0045N～0085N（第4図）0035Nの南側に展開する水田遺構である。畦畔は国土座標の北に対してやや東へ振れるラインで展開する。畦畔で区画される水田面の大きさはまちまちであるが、0085Nの南側で中世水田遺構0095N・0105Nとの重複し、かつ畦畔の方向が異なっていることから別の遺構と考えられる。時期を示す遺物は出土していないが、層位的にはあきらかに上位にあることから、0045N～0085Nが新しい時期の水田であることが示される。

0095N・0105N（第4図）0085Nと重複関係にある中世水田遺構である。それぞれの北側に位置する畦畔が0085N水田面に削平されている。その南側は攪乱を受けており区画の大きさは不明である。

0115N～0235N（第5～7図）調査区南半部に展開する中世の水田遺構である。0115N・0125N間の畦畔遺構は明瞭に検出された。0125Nからは時期の根拠となる初期段階の山茶碗が出土している。畦畔遺構の幅は概ね1m前後であるが、0195N・0205N間の畦畔遺構のように幅約2mから幅約0.6mの細いものへと屈曲を伴いながら転換している箇所もある。この場合畦畔上で鳥畑のような耕作がおこなわれていた可能性もあり、均一な面積や方位で区画された例えば条里型地割の水田とは異なるものであることが示されよう。

(3) 第2面

調査区北半部は自然堤防の頂部（標高6.6m）に

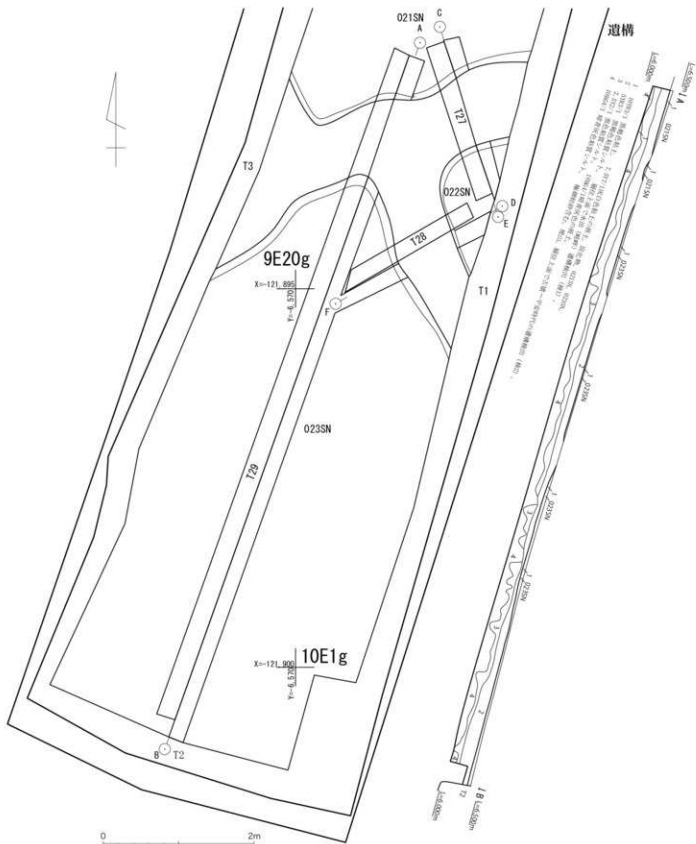
当たり、第1面調査段階で既に一部基盤砂層の露出をみている。そこから南側の後背湿地（標高6.2m）へ下る緩斜面に遺構が集中している。遺構は概ね奈良時代以降と考えられ、中世に耕作地化するまで集落が断続的に形成されたとみられる。その後耕作地化が進むと高所は削平され続けたと考えられ、遺構の大半が浅い掘り込みとして検出される。一方、南半部は概ね全体が後背湿地の中にあり、その北端付近で基盤砂層を検出することができたものの、調査区北半部ほどの遺構はみられなかった。

0575D 調査区北半部のやや南に位置する。最大幅1.86mの不整形で浅い溝状遺構である。若干の窪地状ともいえるものであるが、上述のように全体の削平を考えると、溝として掘削された可能性もあるだろう。特に注目されるのはその底面で検出された小溝群で、向きを違えて重複関係にあるなど、耕作時の筋溝のような印象がある。埋土は灰色シルトで周辺のピットなどと類似する。また遺物は須臾器碗（718）と灰軸陶器碗（719）があり、当該遺構の時期は9世紀後半以降と考えられる。

1175I（第8図）調査区北半部のほぼ中央に位置する。竪穴建物の北・西・南の3辺が検出されており正方形もしくは長方形と推定される。国土座標の南北軸に対しほぼ併行している。南北長は3.53mで深さは0.08mである。検出状況から床面はほぼ削平され掘り方部分が残存していたと考えられる。土層観察では（第8図セクション図）、1・2層が該当するがいずれも貼床に相当するものであろう。底面での精査では壁溝・柱穴ともに検出されておらず、また竈やそれに関する焼土・炭化物の集積もみられなかった。

遺物は検出作業中に出土したものが多く、出土位置が概ね床面に相当しているものと思われる。須臾器（707～715）は、蓋・杯と瓶類の口縁部（714）や甕（715）があり、8世紀中葉以前でまとまっている。土師器（716）は把手部分であるが、大きさから移動式竈のそれと考えられる。1175Iで使用されたものであろう。

掘立柱列1945A（第9図）調査区北半部の中央やや南寄りに位置する。北西～南東方向へのびる2列の掘立柱列の南側のものである。該当するピットは

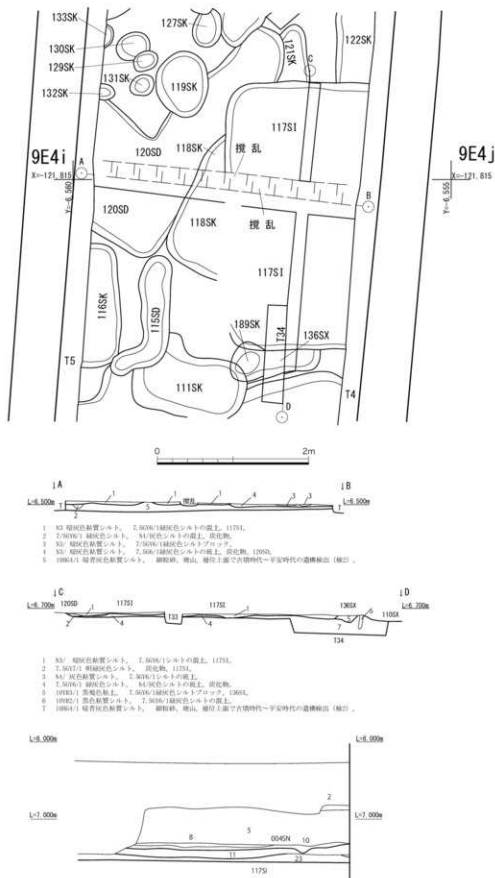


- 1 K3/ 緑褐色粘土、T.017/0C01色粘土ゾーン、砂化地。
- 2 10E01/ 黒褐色粘土、T.017/0C1色粘土の硬土、砂化地。
- 3 01E01/ 黒褐色粘質シルト、10E01/黒褐色粘質シルトの硬土。
- 4 2.01/1 黒色粘質シルト、細粒粘質粘土、硬土。

- 1 10E01/ 黒褐色粘土、T.017/0C01色粘土の硬土、砂化地、021SN、022SN。
- 2 01E01/ 黒褐色粘質シルト、硬土上面で本所(測所)遺構跡面(段口)。
- 3 2.01/1 黒色粘質シルト、10E01/黒褐色粘質粘土の硬土。

第7図 021SN ~ 023SN 遺構図

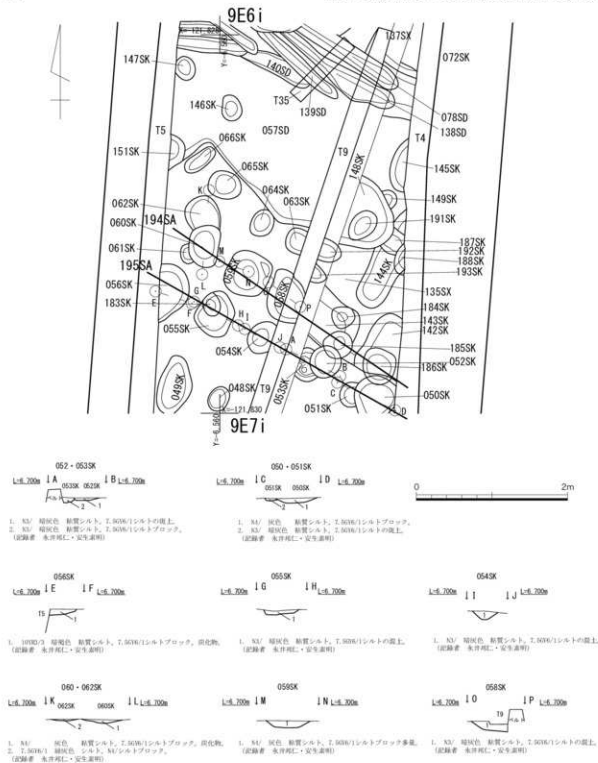
惣作遺跡



第8図 117Si 遺構図

西から056SK・055SK・054SK・053SK・051SKである。056SKはやや大きいが他は直径0.5m程度である。また深さはいずれも0.1m前後で柱痕は検出されておらず、顕著な遺物の出土はなかった。

掘立柱列195SA(第9図)掘立柱列194SAの北側でほぼ平行にのびる。該当するピットは西から060SK・059SK・058SK・185SK・186SKである。柱穴群の規模は掘立柱01と同様である。両者の重複関係はないので同時に存在した可能性も



第9図 194SA・195SA 遺構図

惣作遺跡

ある。これらの柱列北側には 057SD とした浅い溝状の凹みがあり、これとの関係も想定される。なお当該遺構からも出土遺物はなかった。(永井邦仁)

第3節 08A区の遺構

(1) 調査経過と遺構の概要

08A区は、09C区に南接する幅約12m、南北長約50mの細長い調査区である。排土処理などの都合で北部(08Aa区)と南部(08Ab区)に分けて調査を実施した。

08Aa区は、09C区と同様の堆積状況であり、北壁土層断面で上位からオリブ黄色粘質土(第1層)、オリブ黄色粘質シルト(第2層)、灰白色粘質シルト(第3層)、黒褐色粘土(第4層)、黒褐色粘土(第5層)、暗褐色粘土(第6層)、黒褐色粘土と灰白色シルトの斑土(第7層)、灰白色シルト(第8層)の順に堆積していた。各層からわずかに出土した遺物からみて、第1層は江戸時代後期以降、第3層と第4層は鎌倉時代～戦国時代、第5層は平安～鎌倉時代に堆積したと推測される。なお、08Ab区では古墳時代から平安時代にかけて存続した自然河道003NRが存在するため、第5層より下位の堆積状況が異なっていた。

調査は、事業者による道路舗装除去後に表土掘削を行い第4層までを除去した。第1面の遺構は第5層上面付近で検出し、第5層を被覆土または作土・第6層を床土と思われる水田遺構と南側の自然河道003NRを確認した。第2面遺構は第6層を除去し、概ね灰白色シルト(第8層)の上面となる高さで遺構検出を実施した。この灰白色シルトは北側がゆるやかに落ち込んでいて、遺構は中央部の微高地部分で竪穴建物・溝・土坑などが検出された。

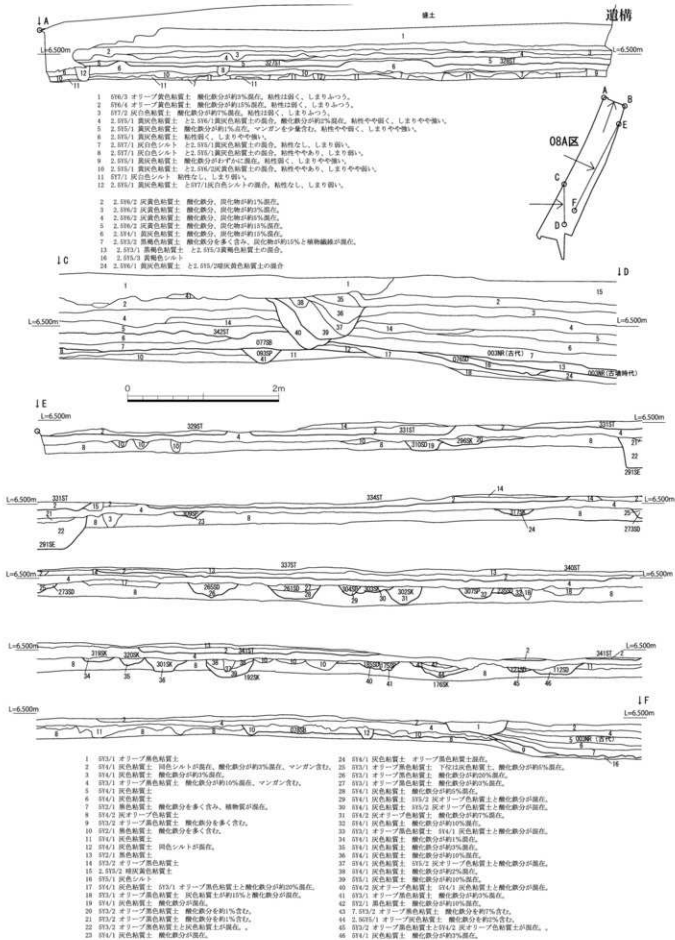
(2) 第1面

黒褐色粘土層(第5層と第6層)は調査区全体で検出される地層で、南部では003NRとして緩やかに傾斜して下がりかつ徐々に層厚が増していた。黒褐色粘土層がほぼ水平堆積する部分では、炭化物粒が多数混じるため黒色度が強い粘土層(第5層)と、炭化物粒が少ないため褐色度が強い粘土(第6層)に分けられる。第5層は耕作による攪拌を受け続けたと思われ、調査時点ではこれが水田作土もしくは

それを覆う被覆土と想定された。また、第6層は耕作の届かない比較的固定化された土壌で、調査時点ではこれが水田床土と推定され、第5層を少し下げると畦畔状の高まりとして第6層の上部が検出された。これらの状況は、最終的には09C区と同様に、第5層と第6層そのものが水田作土や床土などではなく、上位に畦畔が造られると攪拌の機会が減った結果として畦畔が転写されたかのように畦畔状の高まりが検出されたものとして考えた方がよいだろう。

08Aa区で実施した水田遺構の検出方法は、調査区西壁に所在する攪乱を利用した土層断面と東壁付近に設定したトレンチ15の土層断面で、第5層と第6層の区分を行い土層断面で畦畔状の高まりを認識し、同時に第5層上部を掘り下げ平面プランの検出を実施した。結果、畦畔状の高まりは基盤目状に検出され、部分的に高まりが途切れる水口状遺構も検出された。この時の調査では、全ての畦畔遺構について土層断面の精査を実施おらず、十分な検証は行っていないが、畦畔の存在が否定されることはないと思われる。

3275N(5T)～3425N(5T)(第10図)003NRを除く調査区全面で検出された中世の水田遺構である。概ねN-25°～35°-Wの方位を持つ方格地割をなす形で検出され、各水田区画は短辺が3.00m～5.20m以上、長辺が5.86m～8.19mを測る長方形を呈していた。この方位は09C区0115N～0235Nとおおよそ共通したものとなっており、一連のものとして理解される。畦畔遺構の幅は0.5m前後を測るものが多いが、部分的に1.0m程度にまで拡大する部分もある。3285Tと3295T間、3295Tと3305T間、3355Tと3375T間、3395Tと3415T間では畦畔遺構が途切れるように見受けられ、水口状となっていた可能性がある。畦畔遺構の年代は、第5層出土遺物の大半が須恵器・灰釉陶器であることと3415Tが003NRに切られるような形で検出されたことから、調査時点では平安時代を想定した。しかし、土層断面では肝心な部分が不明であるものの、暗褐色粘土(第6層)が003NRでも引き続き堆積して下っており、明確な切り合い関係は認められない。09C区での所見で0115N～0235Nは中世と認識されており、現段階では08A区の畦畔



第10図 O8A区土層断面図

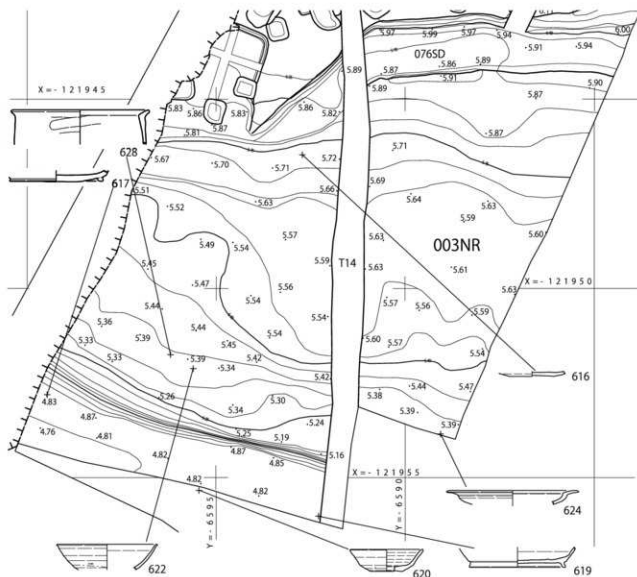
遺構

遺構もC-1期と考えておきたい。その場合、水田遺構とかつて存在した003NRとの関係が問題となるが、調査の不手際もあって不明なままである。なお、09C区北半部で確認された戦国時代～近世段階の水田畦畔遺構は、北壁土層断面の第4層で確認される畦畔状の高まりが該当するものと思される。003NR (08Ab区) (第11～12図) 003NRは08Ab区から08B区にかけて概ね東西方向に流れる自然流路である。08Ab区では003NRの北岸緩斜面が検出された。調査区南端から約12m北の部分から傾斜が始まり、南端から約2m付近までは極めて緩やかに下がり、南端から約2mの部分から南は急激に落ち込んでいた。南端の深い部分は西北西～東南東方向に流れているが、傾斜際はほぼ東西方向

を向く。南端部で上位から、灰黄褐色粘質土(第1層)、暗灰黄色粘質土(第2層)、木片などを含む黒褐色粘質土(第3層)、黒褐色粘質土(第4層)、木片などを含むオリブ黒色粘土(第5層)の順に堆積するが、緩斜面部では第1層から第3層までが堆積している。緩斜面部の黒褐色粘質土(第3層)から木簡(923)をはじめとする木製品が出土しており(第11図)、須恵器や灰軸陶器片も認められる(第12図)。第3層はC-1期、第5層はA-4期に位置づけられる。

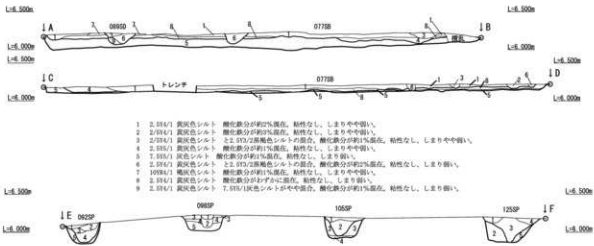
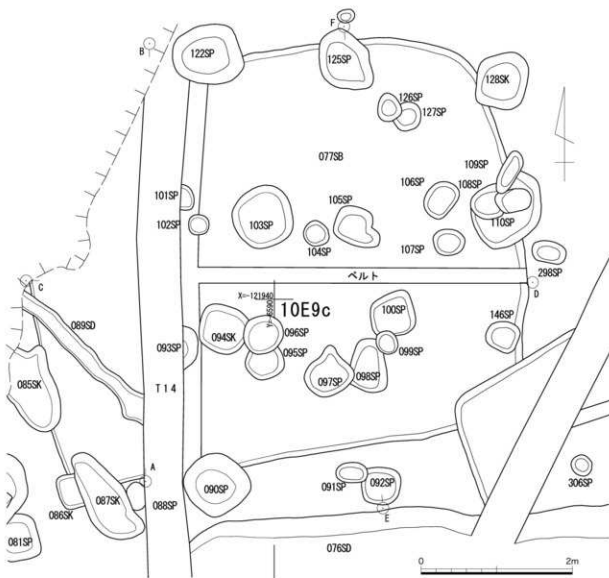
(3) 第2面

調査区北半部は後背湿地(標高約6.2m)へ下る緩斜面、中央部から南部にかけては自然堤防の微高地(標高約6.4m)に当たる。第1面で水田作土相



第12図 08A区003NR土器類出土分布図(遺構図は第2面)

惣作遺跡



- 1 2.03k/1 黄灰色シルト 礫化裏分が約1%散在。粘性なし、しまりやや強い。
- 2 2.03k/1 黄灰色シルト 礫化裏分が約1%散在。粘性なし、しまりやや強い。
- 3 2.03k/1 黄灰色シルト 土2.03k/1と同層シルトの部分。礫化裏分約1%散在。粘性なし、しまりやや強い。
- 4 2.03k/1 黄灰色シルト 礫化裏分が約1%散在。粘性なし、しまりやや強い。
- 5 T.010/1 黄灰色シルト 礫化裏分が約1%散在。粘性なし、しまり弱い。
- 6 2.03k/1 黄灰色シルト 土2.03k/1と同層シルトの部分。礫化裏分約1%散在。粘性なし、しまり弱い。
- 7 100SK/1 黄灰色シルト 礫化裏分が約1%散在。粘性なし、しまりやや強い。
- 8 2.03k/1 黄灰色シルト 礫化裏分が分子中に散在。粘性なし、しまり弱い。
- 9 2.03k/1 黄灰色シルト T.010/1同色シルトがやや中混合。礫化裏分が約1%散在。粘性なし、しまり弱い。

第13図 077SB 遺構図

当部を掘削した際に、既に一部基盤シルト層の露出が確認され、003NRと後背湿地に扶まれた微高地上に遺構が集中して分布する。遺構は概ね奈良時代以降と考えられ、中世に耕作地化するまで集落が断続的に形成されたとみられる。その後耕作地化が進むと高所は削平され続けると考えられる。調査の結果、竪穴建物3基、掘立柱建物14棟以上、井戸？2基、溝、土坑などが確認された。

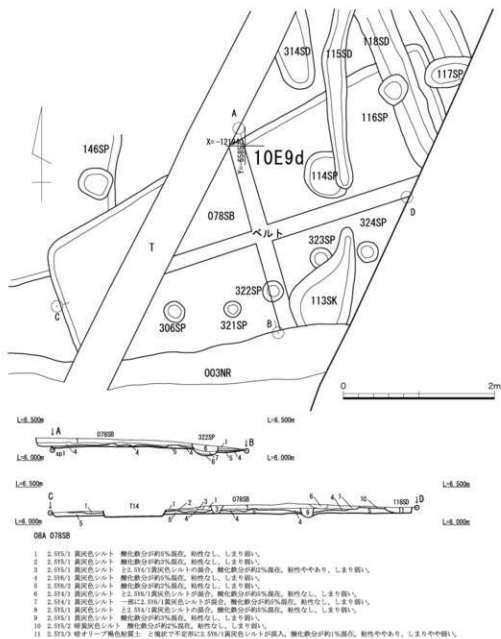
<竪穴建物>

0775B (第13図) 東西6.60m×南北5.40mの小判型に近い隅丸長方形プランの竪穴建物である。南

東隅は078SBに、北西隅は攪乱によって壊され不明である。深さ0.12mを測り、黄灰色シルトを整地して床面が造られていると思われる。柱穴と思われる土坑群が多数展開しているが、主柱穴に該当し得るものは126SPや093SPなどが存在するのみである。周溝・火処遺構などの内部施設は検出されていない。平面プランから遺構の時期は古いものと予想したが、覆土から土師器三河型甕が出土しており、8世紀後半から9世紀初頭に属すると思われる。B

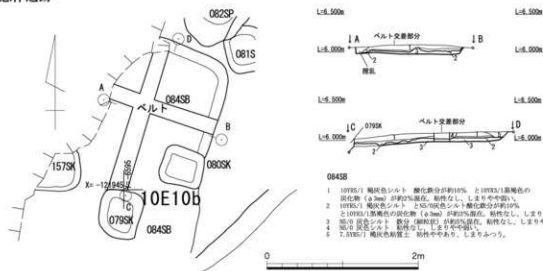
1期。

0785B (第14図) 東西5.65m×南北2.26m以



第14図 0785B 遺構図

惣作道跡



第 15 図 084SB 遺構図

上の隅丸方形になると思われる竪穴建物で、深さ0.13mを測る。南側は003NRの存在で不明となっており、東側は調査区外に拡がる。黄灰色シルトを整地して床面が造られ、柱穴と思われる土坑群が多数展開する。ただし、主柱穴に該当し得るものではなく、周溝・火処遺構などの内部施設も検出されていない。077SBを切る形で検出されていることから、9世紀初頭以降のものと思われる。

0845B (第15図) 東西1.65m以上×南北2.08m以上の規模を持つ隅丸長方形の竪穴建物で、深さ0.13mを測る。南側は003NRの存在で不明となっており、西側は調査区外に拡がる。黄灰色シルトを整地して床面が造られ、柱穴と思われる土坑群が多数展開する。ただし、主柱穴に該当し得るものではなく、周溝・火処遺構などの内部施設も検出されていない。077SBを切る形で検出されていることから、9世紀初頭以降のものと思われる。B-1期か。

<掘立柱建物>

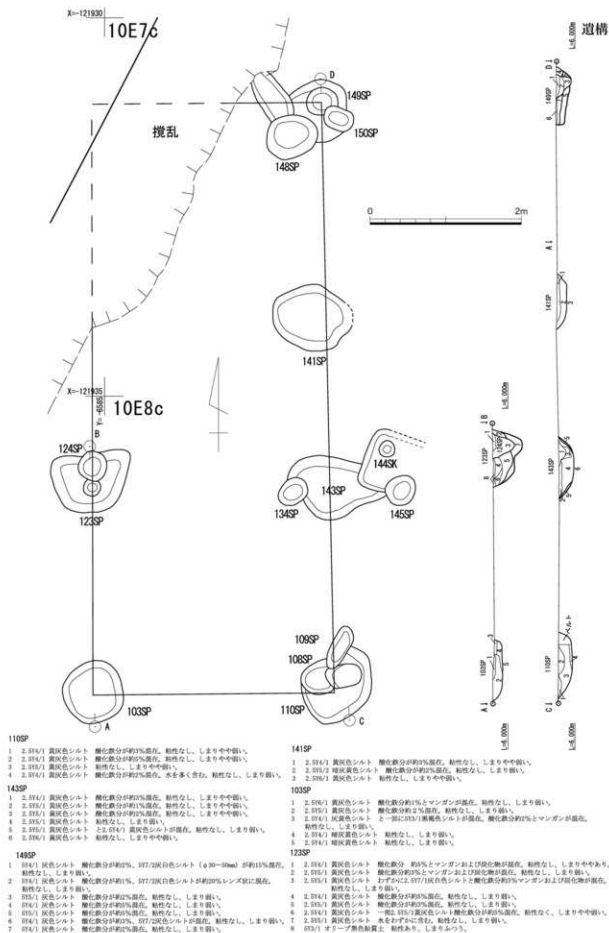
3435B (第13図) 現状で1間×3間に想定される掘立柱建物である。梁行約2.25m、桁行約5.70mの規模を持ち、ほぼ正方位を向く。該当するピットは北西から122SP・102SP・093SP・090SP・125SP・105SP・098SP・092SPである。086SKを含めると、2間以上×3間の総柱建物にも復元されるが、北に他の柱穴が読めないで、ここではその可能性を除外して考えておく。柱穴の平面形は一边が0.80m～1.00mを測る隅丸方形となり、土層断面観察から柱材は抜き取られていると思われる。

当該遺構からは出土遺物はなかったが、077SBを切る形で全ての柱穴が検出されているため、9世紀初頭以降のものと思われる。柱穴の形状からみて中世まで下る可能性は低いと思われる。B-2期か。

3445B (第16図) 梁行約3.20m、桁行約7.90mの規模を持ち、1間×3間に想定される掘立柱建物である。北西部が覆乱および調査区外により不明であるが、ほぼ正方位となっている。該当するピットは北西から123SP・103SP・149SP・141SP・143SP・110SPである。柱穴の平面形は一边が0.80m～1.00mを測る崩れた隅丸方形となり、土層断面観察から柱材は抜き取られたものと思われる。柱穴からは遺物は出土しなかったが、一部の柱穴が077SBを切る形で検出されたため、9世紀初頭以降のものと思われる、3435Bと同様に柱穴の形状からみて中世まで下る可能性は低いと思われる。

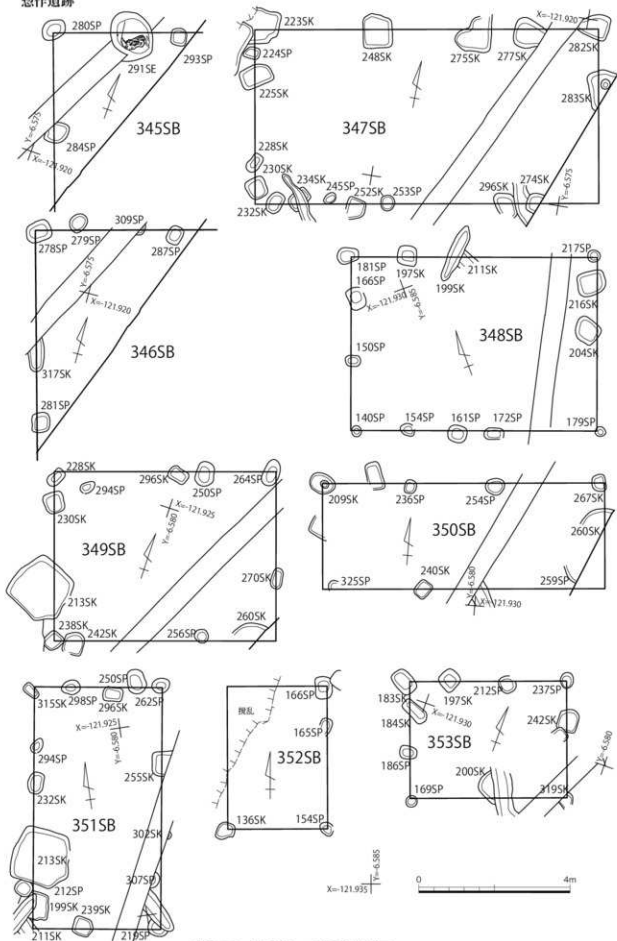
3455B (第17図) 1間以上×1間以上の掘立柱建物で、南東部の大半は調査区外に拡がる。柱穴280SP・284SP・293SPで構成され、柱穴の平面形は一边が0.45m～0.65mを測る円形に近い隅丸方形となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

3465B (第17図) 2間以上×1間以上の掘立柱建物で、南東部の大半は調査区外に拡がる。柱穴278SP・317SK・281SP・279SP・309SP・287SPで構成され、279SPと287SPは東柱の可能性が高い。柱穴の平面形は直径が0.45m～0.65mを測る円形となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時



第 16 図 344SB 遺構図

製作道跡



第 17 図 345SB ~ 353SB 遺構図

遺構

期は特定できない。

3475B (第17図) 9.07m × 4.59mの規模を持つ3間 × 3間の掘立柱建物である。南東隅の主柱穴は調査区外にあって不明だが、方位は正方位よりも北でやや西に振れる。主柱穴 223SK・248SK・275SK・282SK・283SK・296SK・252SK・230SK・225SKで構成され、この他に東柱と思われる柱穴が多数存在する。柱穴の平面形は隅丸方形を基本とし、一部の柱穴は不定形となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

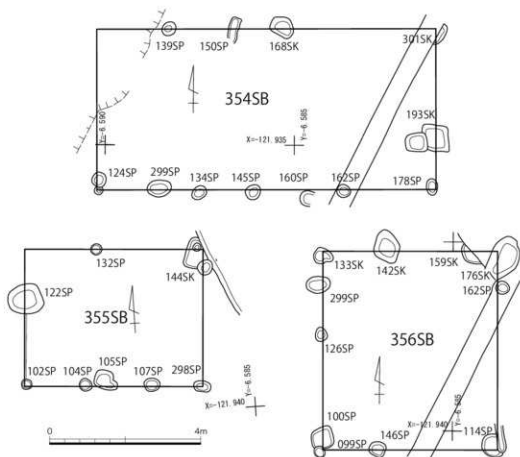
3485B (第17図) 6.51m × 4.63mの規模を持つ4間 × 3間の掘立柱建物である。柱穴 181SP・1975K・2115K・2175P・2165K・2045K・1795P・1725P・1615P・1545P・1405P・1505P・1665Pで構成される。柱間間隔がやや狭く一部の柱穴が東柱になる可能性があるが、方位は正方位よりも北でやや東に振れる。柱穴の平面形は隅丸方形で小規模となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

3495B (第17図) 2間 × 2間?の掘立柱建物

で、5.82m × 4.48mの規模を持つ。方位は正方位よりも北で西に振れる。主柱穴 228SK・296SK・250SP・264SP・270SK・256SP・238SK・230SKなどで構成され、この他に東柱と思われる柱穴が多数存在する。柱穴の平面形は円形から隅丸方形までさまざまで小規模となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

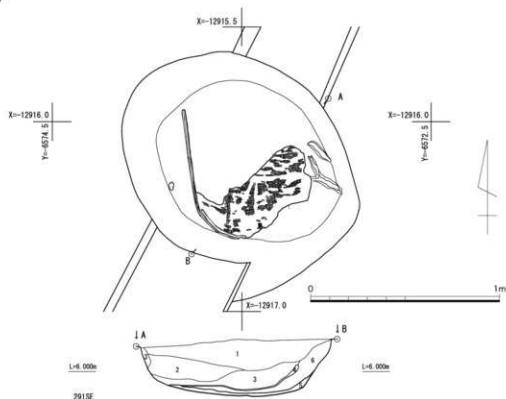
3505B (第17図) 7.48m × 2.79mの規模を持つ3間 × 1間の掘立柱建物である。南東隅の主柱穴は調査区外にあって不明だが、方位は正方位よりも北でわずかに西に振れる。主柱穴 209SK・236SP・254SP・2675K・240SK・3255Pで構成される。柱穴の平面形は概ね円形で小規模となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

3515B (第17図) 4間 × 3間の掘立柱建物で、6.39m × 3.36mの規模を持つ。主柱穴 315SK・2985P・2505P・2625P・2555K・3025K・3075P・2195P・2295K・2115K・2325K・2945Pなどで構成される。一部の柱穴は所在不明だが、方位は正方位よりも北でわずかに東に振れる。柱穴の



第18図 3545B～3565B遺構図

惣作遺跡



291SE

- 1 013/2 オリーブ黒色粘質土 と077/1灰白色粘質土の混合。礫化部分が約1/3程度。形状あり、しまりや強い。
- 2 013/2 オリーブ黒色粘質土 と077/1灰白色粘質土の混合。礫化部分が約1/3程度。形状あり、しまり強い。
- 3 013/2 オリーブ黒色粘質土 と077/1灰白色粘質土の混合。礫化部分が約1/3程度。形状あり、しまり強い。
- 4 013/2 オリーブ黒色粘質土 と076/1灰白色粘質土。形状不十分あり、しまりや弱い。(竹葉の腐葉)
- 5 013/2 オリーブ黒色粘質土。水分含有、形状不十分あり、しまり弱い。

第19図 291SE 遺構図

平面形は概ね円形で小規模となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

3525B (第17図) 1間×2間の小型掘立柱建物で、3.79m×2.70mを測る。柱穴166SP・165SP・154SP・136SKで構成され、北西隅は攪乱で不明となっている。ほぼ正方位となり、柱穴の平面形は概ね円形で小規模である。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

3535B (第17図) 4.19m×3.08mを測る2間×3間の小型掘立柱建物である。柱穴183SK・197SK・212SP・237SP・242SK・319SK・169SP・186SP・184SKで構成され、方位は正方位よりも北でやや西に振れる。柱穴の平面形は円形から隅丸方形までさまざまである。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

3545B (第18図) 9.00m×4.27mの規模を持つ5間×2間の掘立柱建物である。北西隅の主柱穴は攪乱により不明だが、方位はほぼ正方位となる。柱穴139SP・150SP・168SK・301SK・193SK・178SP・162SP・160SP・145SP・134SP・

299SP・124SPで構成される。柱穴の平面形は概ね円形で小規模となっている。柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

3555B (第18図) 4.68m×3.65mの規模を持つ3間×1間の掘立柱建物である。北西隅の主柱穴は検出されなかったが、方位はほぼ正方位となる。柱穴132SP・144SK・298SP・107SP・105SP・104SP・102SPで構成される。柱穴の平面形は全て小規模な円形で、遺物は出土せず、時期は特定できない。

3565B (第18図) 2間×2間の掘立柱建物で、5.28m×4.66mの規模を持つ。柱穴133SK・142SK・159SK・176SK・114SP・146SP・099SP・126SP・299SPで構成され、方位はほぼ正方位となる。柱穴の平面形は円形で小規模なものが多い柱穴からは遺物は出土せず、時期は特定できない。

<井戸>

0755E 長径1.20m、短径1.05m、深さ0.55mの概ね円形プランの土坑で、青灰色シルトの斑土が充

墳されていた。調査時点で最下部にて湧水が認められたために井戸としたが、井壁を保護する構造物の痕跡が確認されず、確認を得るには至っていない。2915E (第19図) 長径1.36m、短径1.36cm、深さ0.44cmの円形の土坑で、オリブ黒粘質土と灰白色粘質シルトの斑土で埋積されていた。下に平鋪された竹製網物が敷かれた状態で出土している。最下部にてわずかに湧水が認められこともあり井戸としたが、井壁を保護する構造物の痕跡が確認できない。

<溝>

0765D 幅1.47m、深さ0.50mを測る溝で003NRの北側に平行して走る。青灰色シルトが充填されていた。土層断面(第10図)では古墳時代の堆積物と思われる003NR第4層の下位に存在しており、時期はA期と推定される。

小規模溝群(第10図) 幅が0.40m前後、深さ0.10m～0.20mを測る小規模な溝群で、273SD・265SD・261SD・249SD・244SD・235SD・221SD・214SD・198SD・206SD・201SD・185SD・121SD・120SD・119SD・118SDが該当する。中央の微高地部分にみられた溝群で、概ねN-22°-Wの方位で平行する形で検出され、概ね暗灰黄色と黒褐色砂質シルトの斑土を埋土とする。溝底には流水があった痕跡は確認されず、一気に埋め立てられたものと推量される。概ね全ての遺構に切られる形で検出され、A期に属するだろう。このような溝群は鹿乗川流域の遺跡群でいざしば見かけられる遺構で、畑の畝溝の可能性も指摘される。(鈴木正貴)

第4節 08B区の遺構

(1) 調査経道と遺構の概要

08B区は、08A区に南接するL字状の調査区である。東西方向に伸びる調査区では、南北幅が狭い上にそれを横断する施設が存在したために、トレンチ調査に近い状態となっている。

08B区は003NRの存在により下半の堆積状況が南部と北部では大きく異なる。ここでは、ちょうど現鹿乗川堤防の横断面となる南壁土層断面(第20図)で堆積状況を説明する。08B区南壁土層断面では、09C区～08A区にかけて堆積するオリブ黄

色粘質土(第1層)が19層、オリブ黄色粘質シルト(第2層)が17層、灰白色粘質シルト(第3層)は25層くらいに対応すると思われる。黒褐色粘土～暗褐色粘土(第4～6層)は該当する堆積が見当たらない。上位には現鹿乗川堤防から東に伸びる造成直前の水田関連の堆積(11・13層)があり、中央から西側では現鹿乗川堤防の堆積が確認される。堤防は少なくとも2回にわたる造成が行われ、8層・10層・12層が古段階の造成、3層が新段階の造成と思われる。黒褐色粘土(第4層)以下の堆積は近世の遺構002SXなどにより攪乱され、その直下は灰オリブ色粘質土および古墳時代以降の基盤層となる灰白色中粒砂に至る。なお、灰白色中粒砂は弥生時代中期の河川による堆積物とみられ、深掘り調査を実施すると弥生土器が出土した。

調査は、事業者による堤防や道路舗装など除去後に表土掘削を行い、08B区南壁土層断面で30層付近までを除去した。南半部は近世の遺構、北半部は003NRにより第1面の遺構検出の確率は難しかったが、調査区中央部は灰白色シルト上面で止め遺構検出を実施した。中央部では、竪穴建物などの遺構が確認され、それより下位には遺構は展開しなかった(第1面のみ)。一方、南半部は近世の遺構が重複していたためこれを2面に掘り分け、北半部は003NRの古代の堆積を第1面、古墳時代の堆積を第2面として区分した。このため、この節では前ごとに記述する意味は薄いので地点ごとに分けて記述したい。

(2) 北部の遺構

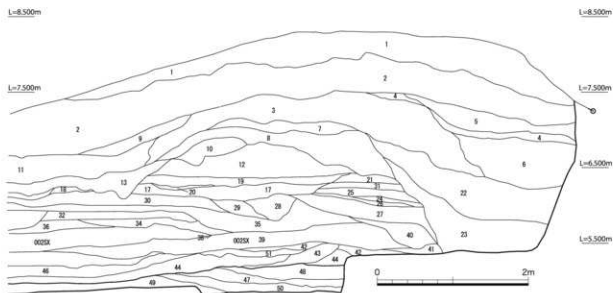
003NR(08B区)(第21～27図) 003NRは08Ab区から08B区にかけて概ね東西方向に流れる自然流路である。08B区では003NRの河底部から南岸緩斜面までが検出された。調査区北端から約10m南の部分で緩い傾斜が始まり、北端から約6m付近で急な傾斜に変わっている。08Ab区の見ると合わせると、流路幅は最大で約30m、本流に相当する深い落ち込み部分で約10mを測ることとなる。流路は調査区中央部で北側に張り出す形でやや蛇行しており、おそらく東南東方向から調査区に入り彎曲して西西南西方向に流れ碧海台地端部付近で蛇行して南に向かうものと推測される。08B区に、寺領橋の西橋脚北側部分の立会調査(県教委実施)で流路と

憩作道跡

みられる厚い粘土の堆積が確認されている。

本流部では上位から、暗灰黄褐色粘質土（第1層：第27下図9層）、黒褐色粘質土（第2層：第27下図12層）、木片などを含む黒褐色粘質土（第3層：第27下図13層）、黒褐色～オリーブ黒色粘質土（第4層：第27下図14～16層）、木片などを多く含む黒褐色～オリーブ黒色粘土（第5層：第27下図19・20層）の順に堆積する。第4層と第5層の

間で灰白色細粒砂が堆積する部分があり、第5層で大量の古墳時代前期に属する木製品と土器が出土した。南斜面部の第5層以下に相当する部分でも、北に下って傾斜する灰色シルトなどの堆積が確認され（第27下図21～23層および第27上図参照）、古墳時代前期以前から同じような位置で流路が存在しシルトなどが堆積し続けたものと思われる。おそらく古墳時代前期から流路の水流量が減少して止水



- 1 2 514/1 黄灰色粘質土 粘性中であり、しまり強い。
- 2 514/2 オリーブ褐色粘質土 粘性中であり、しまり強い。
- 3 519/5/1 暗褐色粘質土 粘性中であり、しまり強い。
- 4 2 514/1 黄灰色粘質土 粘性強く、しまり強い。
- 5 2 514/1 黄灰色粘質土 粘性強く、しまり中強い。
- 6 2 519/2 暗褐色粘質土 粘性中であり、しまり中強い。
- 7 514/1 灰黄色粘質土 粘性中であり、しまり中強い。
- 8 514/1 灰黄色粘質土 粘性土の層(φ30～200cm)が多く存在。粘性強く、しまり中強い。
- 9 514/1 灰黄色粘質土 粘性中であり、しまり中強い。
- 10 515/2 灰オリーブ粘質土 少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 11 514/2 オリーブ粘質土 粘性中であり、しまりふつう。
- 12 515/2 灰オリーブ粘質土 少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 13 519/5 暗褐色粘質土 基岩層(φ30～100cm)の砂状部を、含む。しまり強い。
- 14 2 515/2 暗褐色粘質土 凝結塊を含む。粘性あり、しまりふつう。
- 15 2 515/2 暗褐色粘質土 凝結塊を含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 16 2 515/2 暗褐色粘質土 粘性中であり、しまりふつう。
- 17 2 515/2 暗褐色粘質土 2 517/1 灰白色粘質土の厚さ、少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 18 2 515/2 暗褐色粘質土 少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 19 2 515/1 黄灰色粘質土 少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 20 2 515/2 暗褐色粘質土 粘性中であり、しまりふつう。
- 21 1019/4 褐色粘質土 少量の酸化鉄分が少量混在。粘性中であり、しまりふつう。
- 22 1019/4 褐色粘質土 量換層(φ30～100cm)が約20%、酸化鉄分が少量混在。粘性中であり、しまりふつう。
- 23 515/2 オリーブ粘質土 粘性中であり、しまり中強い。
- 24 515/1 灰黄色粘質土 粘性中であり、しまり中強い。
- 25 2 515/1 灰黄色粘質土 粘性中であり、しまり中強い。
- 26 515/2 灰オリーブ粘質土 少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまり中強い。
- 27 2 515/2 暗褐色粘質土 多量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまり中強い。
- 28 2 515/2 暗褐色粘質土 少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまり中強い。
- 29 2 515/2 暗褐色粘質土 多量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 30 2 515/2 暗褐色粘質土 多量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 31 515/2 灰オリーブ粘質土 粘性中であり、しまり中強い。
- 32 2 515/1 黄灰色粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 33 2 515/1 黄灰色粘質土 中強い。凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性あり、しまりふつう。
- 34 2 515/2 暗褐色粘質土 多量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 35 2 515/2 暗褐色粘質土 少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 36 2 515/2 暗褐色粘質土 多量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 37 2 515/2 暗褐色粘質土 少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまりふつう。
- 38 2 515/2 暗褐色粘質土 少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまり中強い。
- 39 2 514/2 オリーブ粘質土 2 517/1 灰白色粘質土の厚さ、少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまり強い。
- 40 515/2 灰オリーブ粘質土 少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。
- 41 514/1 灰黄色粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。
- 42 515/2 灰オリーブ粘質土 2 517/1 灰白色粘質土の厚さ、少量の酸化鉄分、マンガンを凝結状に含む。粘性中であり、しまり強い。
- 43 515/2 灰オリーブ粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。
- 44 514/1 灰黄色粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。
- 45 515/2 灰オリーブ粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。
- 46 514/1 灰黄色粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。
- 47 514/1 灰黄色粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。
- 48 514/1 灰黄色粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。
- 49 515/1 灰黄色粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。
- 50 515/2 灰オリーブ粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。
- 51 515/2 灰オリーブ粘質土 凝結状に少量の酸化鉄分を含む。粘性中であり、しまり強い。

第20図 O8B区基本土層断面図

遺構

性の堆積環境になり、木製品や木材などとともに徐々に粘土が埋積していったものと推察される。

003NR 第5層では大量の古墳時代前期の木製品と土器とともに、多くの分割材、丸太材、削片（木っ端）、枝片、葉、種子などの植物遺体が出土している。規模の大きい主要な材木の出土状況は第21・22図に示したが、削片や枝片などの小型木片は部分的に集中する形で出土している。木製品の出土状況（第23図）をみると、ほぼ満遍なく分布しているが、団扇形木製品や装飾性が高い横沖柄など質の高い木製品は北側に張り出した先端部分で多く認め

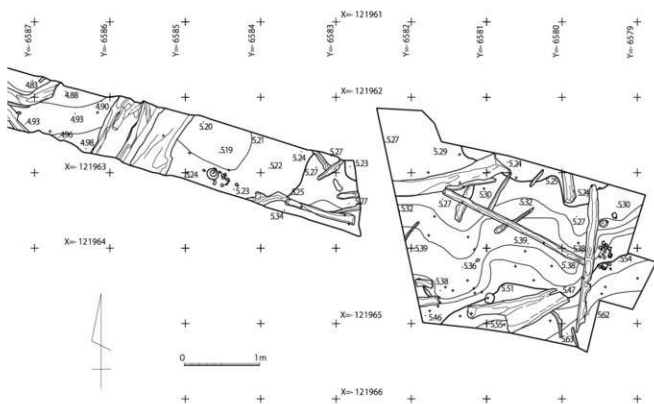
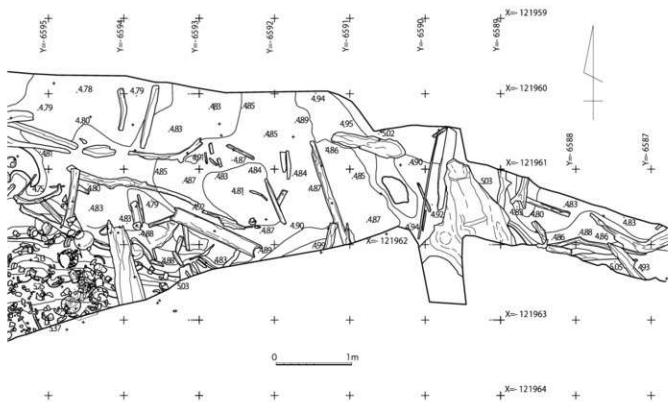
られる。土器の出土状況を見ると、東端部ではその出土量が少ない。詳細に検討すると、高杯は北側の張り出し部の両脇に（第24図）、小型壺類は北側の張り出し部の前面に、大型壺類は東側のやや南に凹んだ部分にやや偏って分布している（第26図）ようにみえ、糞類はあまり偏った分布は認められない（第25図）。

08A区を含め、以上の所見を総括すると、古墳時代前期（A—4期）の003NRは南岸の北側張り出し部を中心に木製品を含む木材と土器が多量に出土し、その分布には器種ごとに偏りが認められた。端

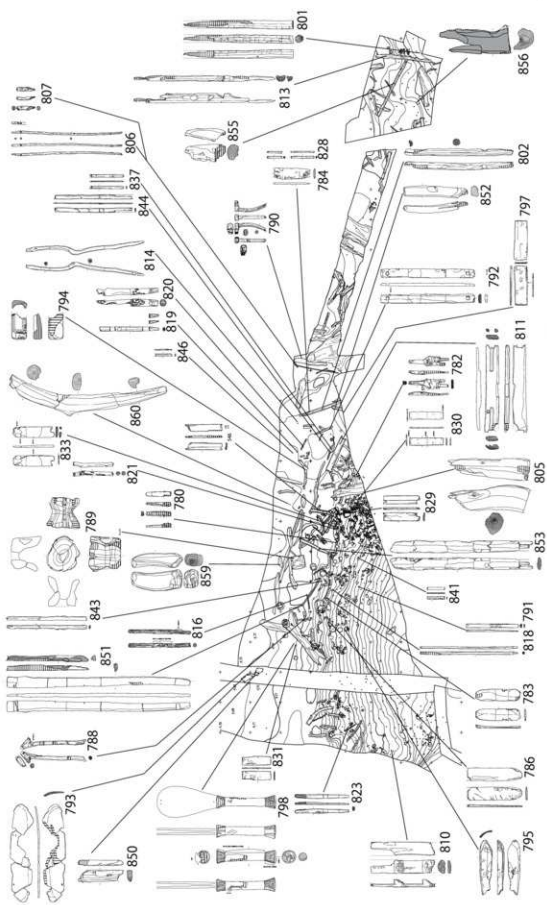


第21図 08B区003NR遺構図(1)

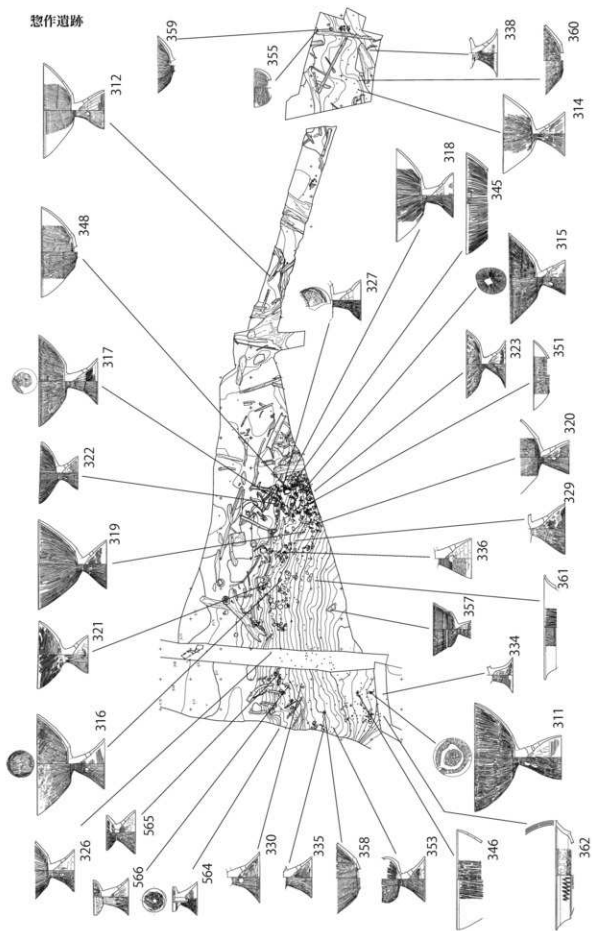
惣作遺跡



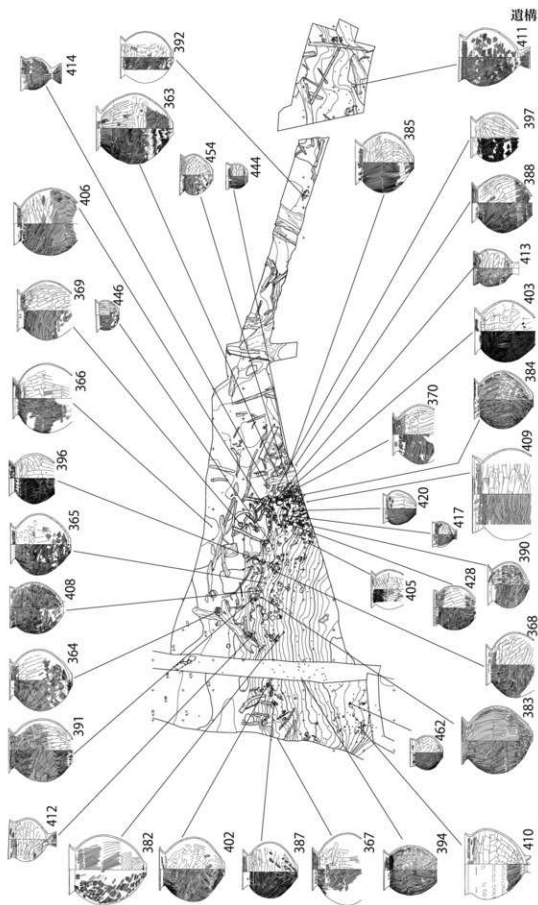
第22図 08B区 003NR 遺構図(2)



第 23 图 O8B 区 003NR 遗物出土分布图 (1)



第 24 图 O8B 区 003NR 遺物出土分布图 (2)



第 25 图 O8B 区 003NR 遗物出土分布图 (3)

惣作遺跡

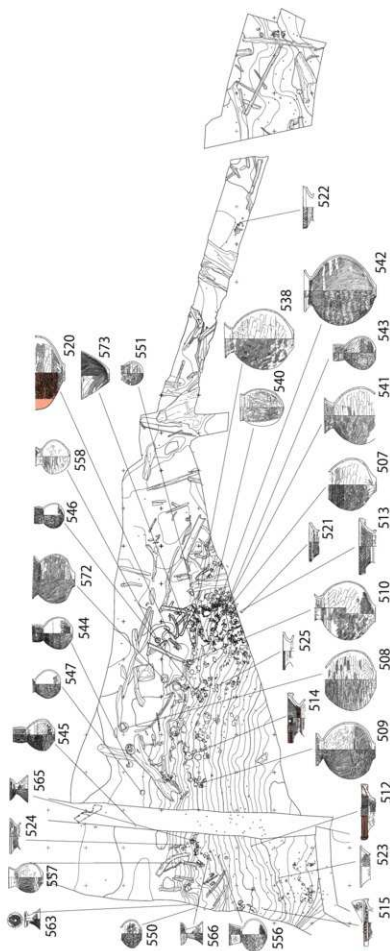
材が多く認められることから付近で木材加工が行われたものと思われるが、北側張り出し部を中心に何らかの意図的な空間利用が行われた可能性が高いといえる。古墳時代中期以降は遺物が投棄される状況は確認できないが、奈良時代末以降（B-1期）に北側緩斜面を中心に木製品と須恵器・灰釉陶器が出土するようになる。この段階では木材加工を窺わせる遺物はほとんど認められない。

(3) 中央部の遺構

ここでは小形遺構が展開する003NR緩斜面部から001SD北端までの範囲を取り扱う。竪穴建物1基や溝・土坑などが確認された。

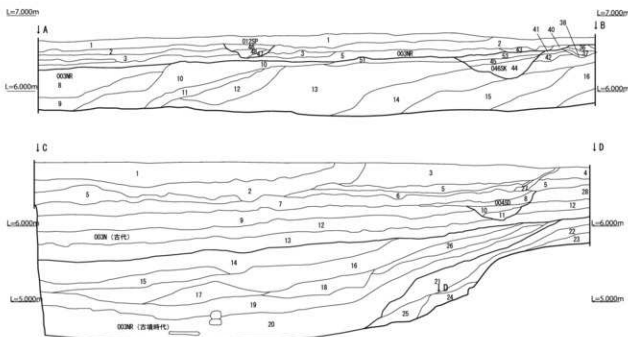
<竪穴建物>

0075B（第28図）東西4.45m以上×南北3.65m以上の隅丸長方形と思われる竪穴建物である。中央部は005SDに切れ、南部は001SDに、西部は攪乱によって壊されて不明となっている。深さ0.05mを測り、暗灰黄色粘質土を整地して床面が造られていた。柱穴と思われる土坑群が多数展開しているが、026SPなどが主柱穴に該当するものと推測される。周溝・火処遺構などの内部施設は検出されていない。覆土からO-10号室期に属する須恵器無台碗が出土しており、B-1期に属する。



第26図 08B区003NR遺物出土分布図(4)

遺構



- 1 2.074/2 凝灰質粘質土 粘性ややあり、しまりふつ。
- 2 2.197/2 灰質粘質土 角礫 (φ15~120㎜) が混在。粘性ややあり、しまりふつ。
- 3 1009B/2 灰質褐色粘質土 礫土成分を約10%含む。粘性ややあり、しまりふつ。
- 4 1009B/2 灰質褐色粘質土 礫土成分を約10%含む。粘性ややあり、しまりふつ。
- 5 1010B/2 灰質褐色粘質土 礫土成分を約10%含む。粘性ややあり、しまりふつ。
- 6 1010B/2 灰質褐色粘質土 粘性ややあり、しまりやや強い。
- 7 1010B/2 灰質褐色粘質土 粘性ややあり、しまりやや強い。
- 8 2.196/2 灰質粘質土 1010B/2層の粘質土層上一部がアソック状に混在。粘性ややあり、しまりやや強い。
- 9 2.191/2 凝灰質粘質土 粘性ややあり、しまりややあり。
- 10 2.192/2 灰質粘質土 粘性ややあり、しまりふつ。
- 11 2.191/2 凝灰質粘質土 粘性ややあり、しまりふつ。
- 12 1010B/2 灰質褐色粘質土 (φ1~5㎜) の砂質粘質土を含む。粘性ややあり、しまりふつ。
- 13 1010B/2 凝灰質粘質土 硬物混雜を含む。粘性ややあり、しまりふつ。
- 14 1010B/2 凝灰質粘質土 硬物混雜を含む。粘性ややあり、しまりふつ。
- 15 015/2 オリーブ褐色粘質土 硬物混雜を含む。粘性ややあり、しまりふつ。
- 16 2.191/2 凝灰質粘質土 粘性やや強く、しまりふつ。
- 17 022/2 オリーブ褐色粘質土 硬物混雜を含む。粘性ややあり、しまりやや強い。
- 18 2.191/2 凝灰質粘質土 19に比し10%の粘質土が混在。粘性ややあり、しまりふつ。
- 19 012/2 オリーブ褐色粘質土 硬物混雜を含む。粘性ややあり、しまりふつ。
- 20 2.191/2 凝灰質粘質土 灰色シルトが一部混在。硬物混雜や硬物な骨片を含む。粘性ややあり、しまりふつ。
- 21 2.191/2 凝灰質粘質土 2.191/2層の粘質土層の一部混在。粘性ややあり、しまりやや強い。
- 22 2.191/2 灰褐色粘質土 礫土成分を約10%含む。粘性ややあり、しまりやや強い。
- 23 014/1 灰色シルト 粘性ややあり、しまりやや強い。
- 24 014/1 灰色シルト 粘性ややあり、しまりやや強い。
- 25 010/1 灰色シルト 粘性ややあり、しまりやや強い。
- 26 1010B/2 灰質褐色粘質土 礫土成分を微量含む。
- 27 1010B/2 灰質褐色粘質土 粘性強く、しまりふつ。
- 28 1010B/2 灰質褐色粘質土 粘性ややあり、しまりやや強い。

第 27 図 08B 区 003NR 土層断面図

<溝>

0045D 003NR 南斜面で急に傾斜する肩部で検出された東西溝である。幅 0.75m、深さ 0.15m を測り、003NR 第 1 層上面から掘削されている。瀬戸窯産陶器の腰踏茶碗が出土しており、時期は C—3 期に属する。003NR 南肩に平行して検出されており、江戸時代においても河跡が微地形として残存したものと考えられよう。

0055D 0075B を切る形で検出された北東—南西方向に走る溝である。幅 0.71m、深さ 0.15m を測り、黒褐色粘質土の斑土が充填されていた。B—2 期か

C 期と思われる。

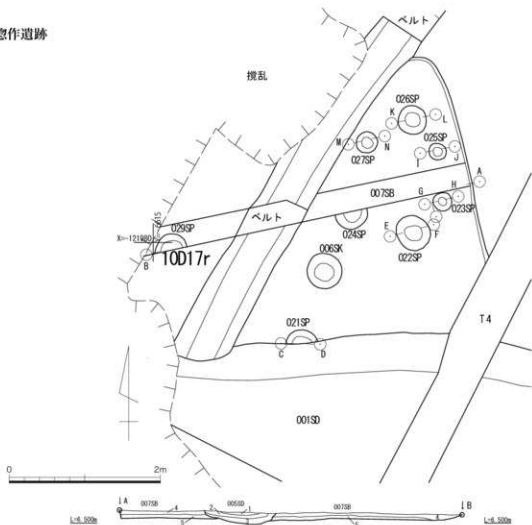
0435D 003NR 南緩斜面の上り際で検出された東西溝である。幅 0.67m、深さ 0.05m を測り、時期は B 期以降と思われる。

<土坑>

0205P 003NR 南斜面で検出された円形ビットで、直径 0.39m、深さ 0.14m を測る。内部から暗文土師器碗が出土し、時期は B—1 期に属する。

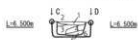
0365P 003NR 南緩斜面で検出された円形ビットで、直径 0.30m、深さ 0.09m を測る。内部から山茶碗が出土し、時期は C—1 期に属する。0205P と

製作遺跡



1. 2.015/2 磁器オリーブ褐色胎土。2.015/1黒灰色シートの堆 (φ20~30mm) が約10%混在。胎性ややあり。しまりムツ。
2. 2.015/2 黒褐色胎土。2.015/1黒灰色シートが約20%混在。胎性ややあり。しまりムツ。
3. 2.015/2 黒褐色胎土。2.015/1黒灰色シートが約10%混在。胎性ややあり。しまりムツ。
4. 2.015/2 磁器黄色胎土。胎化割合が約10%混在。胎性ややあり。しまりムツ。
5. 2.015/2 磁器黄色胎土。胎化割合が約10%混在。胎性ややあり。しまりムツ。

0215P



1. 2.015/2 磁器黄色胎土。と磁器オリーブ褐色胎土との境。
- 2.015/1黒褐色の成化物 (φ8~10mm) が約10%混在。マンガンが点状。胎性ややあり。しまりムツ。
2. 015/2 黒褐色胎土。と磁器オリーブ褐色胎土との境。2.015/1黒褐色の成化物 (φ8~10mm) が約10%混在。胎化割合が約10%混在。胎性ややあり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物 (φ8mm) が約10%混在。胎性ややあり。しまりムツ。
- 2.015/1黒灰色シートが堆積した約10%と胎化割合が約10%混在。マンガンが点状。胎性ややあり。しまりムツ。
- 2.015/2 黒褐色胎土。胎化割合が約10%混在。胎性ややあり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色シートの胎化割合が約10%混在。胎性なし。しまり弱い。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。胎性なし。しまり弱い。

0225P



1. 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒灰色シートの堆積点。胎化割合。マンガンと015/1オリーブ褐色の成化物 (φ5~10mm) が約10%混在。胎性あり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒灰色シートの堆積点。胎性ややあり。しまりムツ。

0225P



1. 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物 (φ2~10mm) が約10%混在。胎化割合。マンガンが点状。胎性あり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物 (φ8mm) が約10%混在。胎性あり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物が堆積した。胎性ややあり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物が堆積した。胎性ややあり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物が堆積した。胎性あり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。胎性ややあり。しまりムツ。

0255P



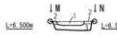
1. 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物 (φ5~10mm) が約10%混在。胎性あり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器オリーブ褐色胎土。胎性なし。しまりやや弱い。
- 2.015/2 オリーブ褐色胎土。2.015/1黒褐色シートの成化物。水分を含む。胎性ややあり。しまりやや弱い。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色シートの成化物。胎性ややあり。しまりムツ。

0275P



1. 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物 (φ8mm) が約10%混在。胎性あり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物 (φ10mm) が約10%混在。胎性あり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物が点状。胎性あり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物が点状。胎性ややあり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色シートの成化物。胎性ややあり。しまりムツ。

0265P



1. 2.015/2 磁器黄色胎土。2.015/1黒褐色の成化物 (φ5~10mm) が約10%混在。胎性ややあり。しまりムツ。
- 2.015/2 磁器黄色胎土。胎性あり。しまりムツ。
- 2.015/2 オリーブ褐色胎土。水分を含む。2.015/1黒褐色シートの成化物。胎性ややあり。しまりやや弱い。

第28図 O07SB 構構図

036SP以外にもその南部でピットが多数発見されており、B～C期に流路脇に掘立柱建物跡が展開したものと推察される。

045SK 043SDを切る形で検出された不定形土坑で、0155Kと046SKが重複する。

(4) 南部の遺構

ここでは南部に所在する001SDと002SXを紹介する。

001SD(第29図) 橋脚の基礎により大きく破損され全形を知り得ないが、幅8m以上を測る概ね東西方向に走る溝である。002SXが埋積した後に掘削されている。時期は近代以降と思われる。

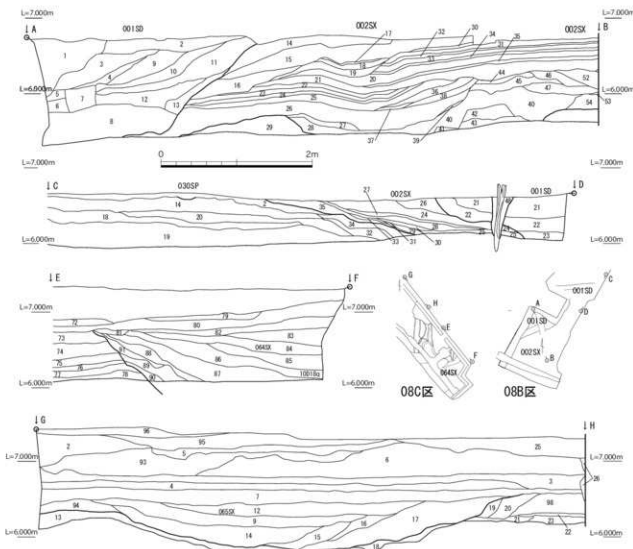
002SX(第29図) 規模や形状が不明な大型土坑である。北側の一部が確認されたのみで、下部は粗粒砂中に灰色粘質土のブロックが混在する斑土で充填

され、上部はシルトや粘質土が互層状に堆積していた。出土遺物からみてC～3期に位置づけられる。(鈴木正貴)

第5節 09 A区の遺構

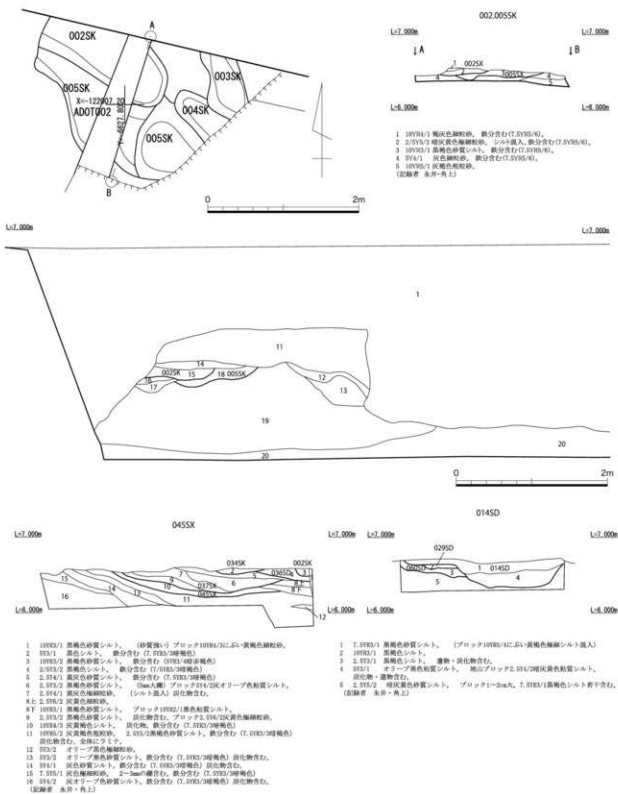
(1) 調査経過と遺構の概要

調査区は市道の築堤となっていた地点であり、築堤が造られる以前は水田であったとみられる。築堤盛土を除去後に表土掘削を行ったが、盛土直下は擾乱が入っており、これを除去するとほぼ完全に粗粒砂の堆積が広がっていることが判明した。この砂層は隣接調査区で検出された近世～近代の流路と考えられ、当該期の陶器片などが出土した。砂層の堆積は厚く、中世以前の遺構面を大きくえぐり込んでい

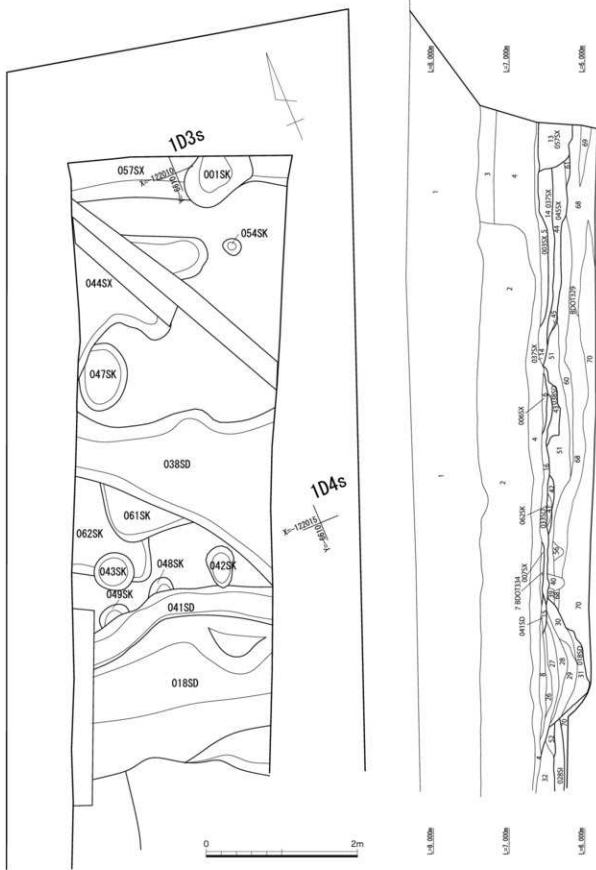


第29図 001SD・002SX・064SX・065SX土層断面図

惣作遺跡

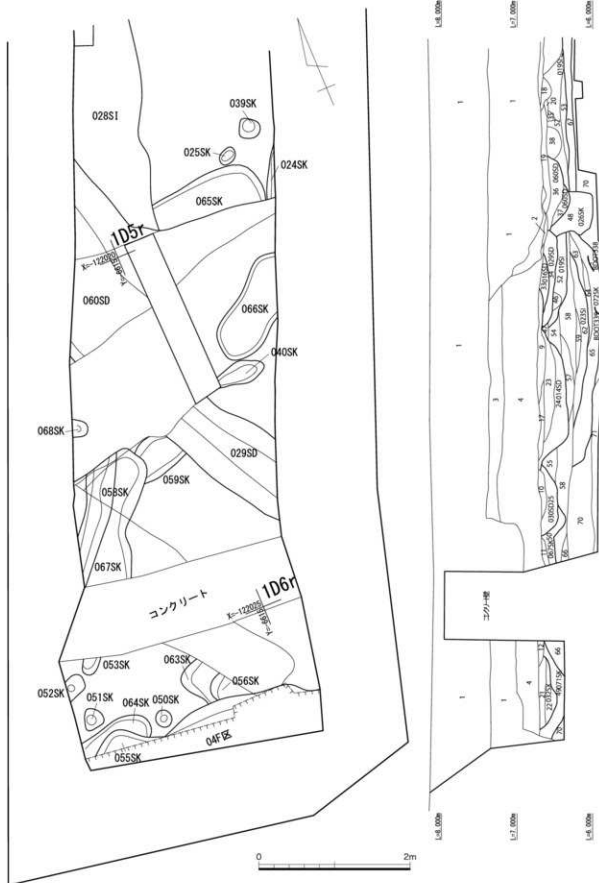


第30図 O9A区遺構図



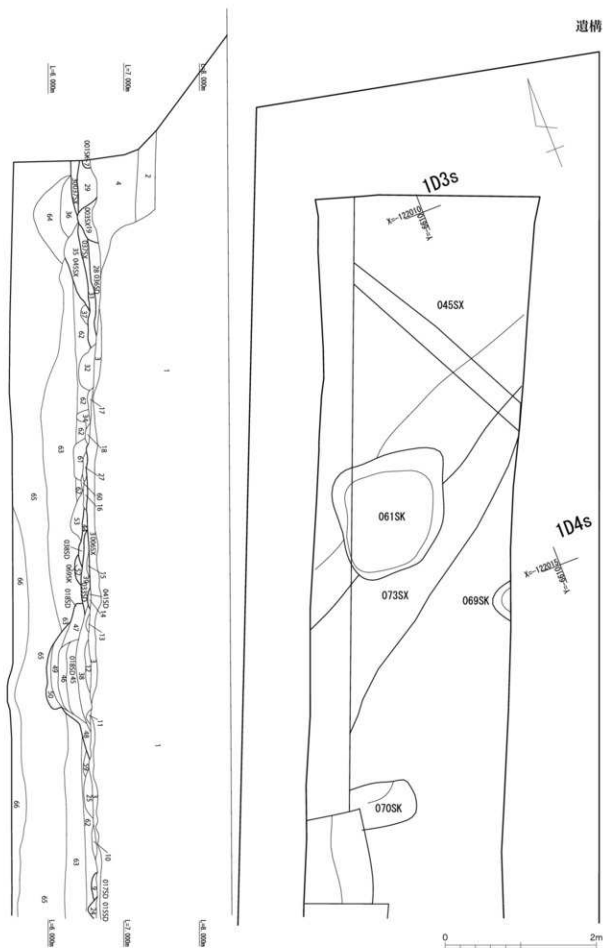
第31図 09B区3面遺構図(1)

惣作遺跡



第 32 図 09B 区 3 面遺構図 (2)

遺構

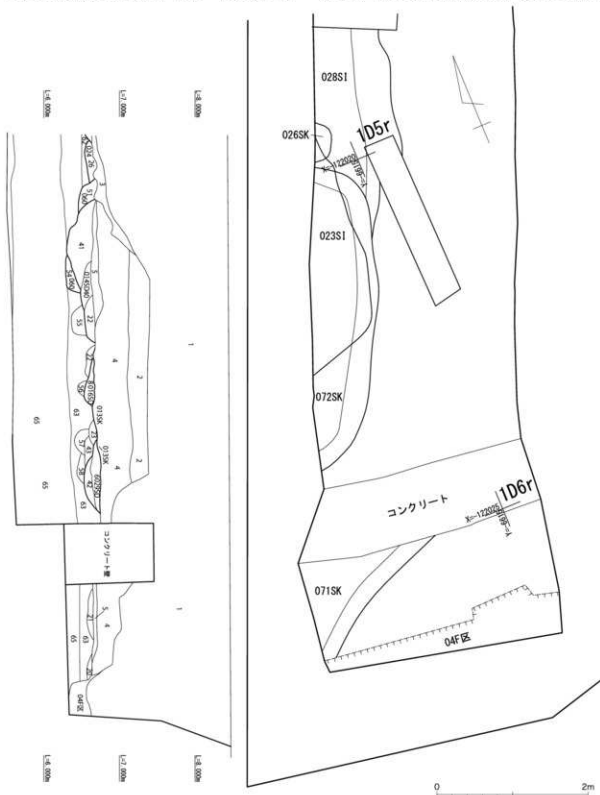


第33図 O9B区4面遺構図(1)

惣作遺跡

ため遺構の検出はほぼ不可能と思われた。しかしながら調査区北西隅では、09B区と同様の自然堤防基盤層がわずかに残存しており、その上位で須恵器などを含む遺物包含層を約5平方メートル検出する

ことができた。それ以外の箇所は、流路の底とみられる深さまで粗粒砂層を掘削し、そこで弥生土器片を含む粗粒砂層を検出したが、基本的に流路堆積とは区別が不可能でまた湧水が激しいことから遺物を



第34図 O9B区4面遺構図(2)

採取するにとどまった。

0025K 調査区北西隅に位置する。0055K と重複して検出された。不整形な皿状を呈する遺構である。平面検出では 0055K とは若干ずれる。土層観察では両者は明確に区分される。なお、0025K の南東方向延長に 0045K が存在しており、同一遺構の可能性はある。なお顕著な遺物の出土はなかった。

0055K 調査区北西隅に位置する。0025K と重複して下位で検出された。長軸 1.71m、短軸 1.11m の不整形な平面形状で断面が皿状の土坑である。検出面からの深さは 0.27m であり、埋土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物は須恵器杯 (674・675) が出土している。遺物から 8 世紀中～後葉の時期と考えられる。09A 区北側にあたる 08B 区では竪穴建物が検出されていることから、当該遺構もその可能性が考えられる。(永井邦仁)

第 6 節 09 B 区の遺構

(1) 調査経過と遺構の概要

調査区は、09A 区の東側に位置し、同じく市道築堤下であった。表土掘削時は 09A 区同様に攪乱が約 1.2m の深さまで及んでいたが、遺構検出面には一部が達していた程度であった。このことから、09A 区と 09B 区の間で近世以降の流路および攪乱は収束していると考えられる。遺構検出面は明確なものは 1 面しか認められないが、遺構の重複は激しく、調査区全体では 2 度、調査区南部では 4 度の遺構検出を実施している。そのため一部遺構は、上位で検出された遺構が下位遺構の上層部分に該当する場合もある。ここでは遺構の種類別に報告する。

(2) 溝

0145D (斜行溝) 調査区南部に位置する。東北から南西方向へのびる国土地標に対して斜行する溝である。検出長は 3.34m で断面は逆台形を呈する下層部分 (土層断面図 1 層) と北側へ浅く広がる上層 (土層断面図 4 層) の一部分で構成される。検出面での幅は 2.28m、底部幅は 0.70m である。下層部分の断面形状から、当初は明確な区画目的で掘削されたものと推察される。土層観察によれば 0295D・0605D との重複関係ではその後位置づけられる。

これらの事実から当該調査区内で検出されたなかで比較的新しい遺構であることが示される。遺物は 0295D 出土破片なども接合する灰軸陶器皿 (680) などがり、9 世紀後半以降であると考えられる。他に須恵器碗 (681) もあるが、やはり先行遺構からの混入と考えられる。

0295D (0165D・0605D) 調査区南部に位置する。当初 0165D の平面形状が検出されその後 0295D が判明し、前者が後者の上層部分に該当することがわかった。またさらに遺構検出面を下げて再検討したところ、0285I 等の弥生時代竪穴建物を切り込む同形状の遺構が検出され (0605D)、0295D の下層部分であると考えた。

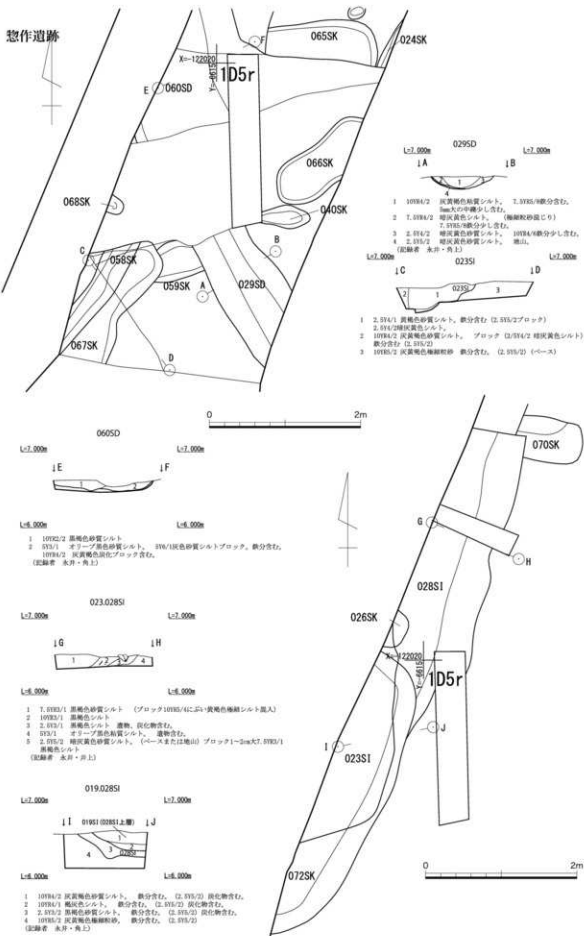
国土地標に対して西へ 30° 振れて斜行する溝である。検出長は 1.33m で上層 (0165D) の幅は 0.99m、下層 (0295D) の幅は 0.84m である。底までの深さは 0.37m である。0295D の南東方向延長には同様の溝 (04F 区 SD70) が検出されており、同一の遺構とみられる。

また、この溝の西側に併行して同規模の 0305D が検出されており、ともに灰軸陶器が出土していることから同時に存在した可能性が高いと考えられる。両溝間の幅は約 1m であるが、側溝を有する道路であったと推察される。

出土遺物には玉縁口縁の灰軸陶器碗が含まれ、K-90 号空期で 9 世紀後半以降と考えられる。

0305D (0115D) 調査区南部に位置する。0165D 同様に当初 0115D が検出され、その後下層部分に該当する 0305D が検出された。国土地標に対して西へ 32° 振れて斜行する溝である。検出長は 4.55m で上層 (0115D) の幅は 0.65m、下層 (0305D) の幅は 1.06m である。底までの深さは 0.22m で、断面形状は U 字形である。重複関係から 0145D・0165D に先行するものと考えられる。0305D を南東方向へ延長すると 04F 区の SD68 に該当する。出土遺物は 8 世紀後葉とみられる須恵器の他に灰軸陶器片も含まれ、時期も 9 世紀以降へ下る。

0185D 調査区中央に位置する。ほぼ東西方向に延びる溝である。調査区内での検出長は 2.57m である。断面形状は逆台形であり、検出面での幅 2.26m、底部幅 0.78m、深さ 0.64m である。他の遺構との重



第 35 図 023S1・028S1 選構図

複関係はないが、出土遺物から斜行溝に先行する可能性が高い。層位は大別して上層と下層がある。上層は浅く皿状の堆積（調査区西壁の17・38層、同東壁の8・26層）である。下層はやや崩れた逆台形の堆積であり、調査区西壁で観察したところ、(1)最初の掘削に伴う堆積（49・50層）、(2)上部で両側に広がる掘り返しに伴う堆積（47・48層）、(3)さらに(2)を掘り返したものである（45・46層）。これは調査区東壁に対応させると(1)は31層、(2)は30層、(3)は27・28・29層が相当する。上層も含めると4時期の変遷が想定される。遺物の大半は上層から出土したが、小片が大半である。内訳は須恵器・灰陶陶器で、須恵器はO-10号窯期、須恵器はK-14号窯期～K-90号窯期である。注目されるのは、底部外面に「寺」と墨書された須恵器杯があり、下層(2)とする調査区西壁付近の47層相当から出土していることである。この須恵器は器形が判別しにくいO-10号窯期～IG-78号窯期の無台椀もしくは盤と考えられる。このことから8世紀後葉～9世紀前葉の時期に、寺院に関わる施設が溝付近に所在してこの区画として当該溝が掘られたものと考えられ、その時期は「寺」墨書土器を若干さかのぼる8世紀後半と想定しておきたい。

(3) 土坑

0235K 調査区南部で検出された、弥生時代後期の土坑である。その大半は調査区西壁から西側に残存していると思われる。検出部分は東・南辺の一部である。平面形は隅丸正方形と推定され、その形状から調査段階では竪穴建物と認識していたが、調査区西壁での土層観察によると、平らな底面のないレンズ状堆積（54・57・58・59・62層）が相当することが判明し、遺物も土器片が多数出土することから、廃棄土坑の一種の可能性が考えられる。また、その下部には類似する堆積状況の0725K（後述）もあり、一連のものである可能性も高く、0725K埋没後の凹みに廃棄が続けられたものとも考えられる。いずれにせよ検出地点は弥生時代～平安時代の各遺構の重複が最も濃く、平面形にはやや不安定な要素がある。

他の遺構との重複関係では、0265Kと遺構・遺物両面から当該遺構が先行するのは確実であるが、

0285I（特にその下層）との関係が0265Kによって隠れてしまい判別できていない。遺物は小片になった弥生土器が多数出土している。

0265K 調査区西壁の断面観察の際に検出された、長軸0.52m、深さ0.52mの底面が平らな小土坑である。弥生時代の竪穴建物（0235Iほか）との重複関係も埋土の点からも明瞭である。埋土（調査区西壁48層）はラミナ状堆積であり、土坑形状も合わせると素掘りの井戸であった可能性が考えられる。出土遺物は底部近くで土師器の屈折脚高杯が正位で出土した。遺物の時期から推測して古墳時代前期と考えられるが、調査区内で当該期に特定できた唯一の遺構でもある。

0725K 調査区南部にて各遺構を調査した最終段階で検出された。調査区西壁での土層断面観察によると、長軸は南北方向で4.00m、検出面からの最大深0.40mの椀状の断面形である。調査区西壁の土層観察では、63～65層が該当するが、上位の0235Kと位置や堆積状況が大きく違わないことから、一連の遺構である可能性もある。遺物は0235Kや0285Iなどの上位遺構ほどではないが多数の弥生土器片が出土している。

(4) 竪穴建物

0285I（0195I）（第35図）調査区南部で検出された、弥生時代後期の竪穴建物である。検出部分は東辺全体と南・北辺の一部である。当初は0235Iと称して調査していたものであるが、土層断面観察によって0285Iの埋土が上下2層に大区分され、その上層を0235Iとして認識していたことが判明したため、それまでにおこなった遺物の取り上げ遺構名などを0285I上層へと振り替えている。

0285I上・下層の関係であるが、調査区西壁での観察によると、上層は52・53層であるのに対し、下層は67層で0265Kとの重複部分までしか見出すことができない。つまりこの上・下層を、1棟の竪穴建物の埋土とその貼床と評価するのは難しいのである。加えて0235Kや0725Kが上・下層の間で形成されている点も合わせると、それぞれが別の竪穴建物埋土である可能性が指摘できる（上層が0195I）。しかしながら、後述する遺物の出土状況からは上・下層の区分は明瞭ではないという問題があ

惣作遺跡

る。

平面形は一边が4.22mの隅丸正方形と推定される。検出面からの深さは0.35mで壁溝が南東隅の一部で認められた。調査段階では明確な床面を把握することができず、掘り方に違したとみられる時点(O28SI下層)でようやく検出できている。

遺物の大半は、上層やそれに掘り込まれた土坑(調査区壁面でのみ確認)から出土している。東壁に接するようにして、台部を欠損しただけの台付甕(81)が倒位で出土した。他に弥生土器の破片を周辺で7点取り上げているが、いずれも出土層位は下層と認識している。ただし台付甕がそうであるように、出土層位が一部上層にも食い込んでいる遺物もいくつかみられ、先述したように上・下層を別の竪穴建物と認識するには困難な事象も伴っている。

(5) その他の遺構

045SX 調査区北端で検出された古代以前の落ち込み地形である。基盤砂層は調査区北西隅へ向かって緩やかに傾斜しており、その上に弥生時代～奈良時代の遺物を包含する土層が堆積している。この地形から推測すると09B区の東側が自然堤防の頂部になると考えられ、特に弥生時代の集落はそこを中心にして展開していたと推測される。遺物は底部に刻書のある須恵器(695)が出土している。(永井邦仁)

第7節 08C区の遺構

調査経過と遺構の概要

08C区は、09A区と09B区の南に位置するV字状に細長い調査区である。堆積状況は東端部で上位から暗灰黄色粘質土(第1層:第37図65層)、灰黄色粘質土(第2層)、灰黄色粘質土(第3層:第37図73層)、灰黄色粘質土(第4層:第37図74層)、暗灰黄色粘質土(第5層:第37図75層)、にぶい黄色粘質土(第6層:第37図76層)、黄灰色粘質土(第7層:第37図77層)、黄灰色粘質土(第8層:第37図78層)の順に堆積していた。各層からわずかに出土した遺物からみて、第1層は江戸時代後期以降、第2層は平安時代～戦国時代に堆積したと推測され、第3層または第4層の上面で弥生時代の遺構が検出された。なお、西部では江戸時代を中心とした自然河道068NRが存在するため、堆積状況

が異なっている。

調査は、事業者による道路舗装除去後に表土掘削を行い第2層までを除去した。第3層上面付近で遺構検出を行い、遺構がかなり重複していることが判明し、上位(第1面)と下位(第2面)に分けて調査した。部分的に第3面相当の遺構も存在する。また、全ての遺構面の調査終了後に、基盤層となる砂層を重機により掘削し、弥生土器を多数採取した。

(2) 第1面

灰黄色粘質土(第3層)などの安定した堆積層は調査区東部に展開しており、大半の遺構はそこで検出された。遺構は竪穴建物2棟、溝、土坑などが存在する。

<竪穴建物>

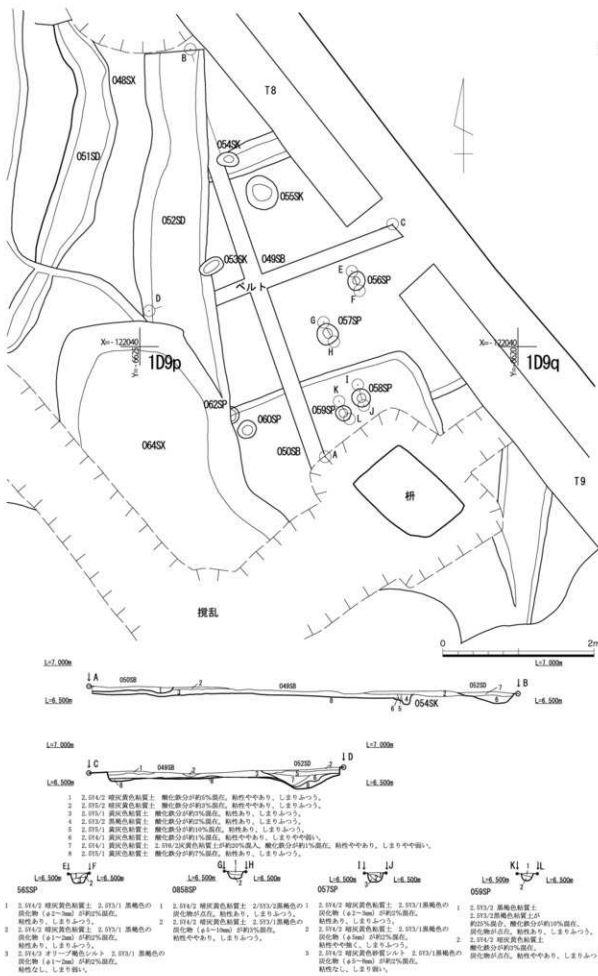
0495B(第36図) 北北西-南南東方向で5.60m以上×東北東-西西南方向で3.06m以上を測る隅丸長方形と思われる竪穴建物である。西部は052SDに切られ、東部は調査区外に拡がり、南端部は050SBに切られる。深さ0.09mを測り、暗灰黄色粘質土を整地して床面が造られていた。北部に周溝になる可能性を持つ溝が存在するが、覆土はその外側にも拡がっており、柱穴と思われる土坑群が多数展開している。その他の火処遺構などの内部施設は検出されていない。覆土から弥生土器片(1-3)が出土しており、A-2期に属する。

0505B(第36図) 北北西-南南東方向で1.62m以上×東北東-西西南方向で2.60m以上を測る隅丸長方形と思われる竪穴建物である。北隅部のみが検出され、多くの部分は064SXによって破壊されていた。0495Bを切る形で検出され、深さ0.10mを測る。058SPや060SPなど主柱穴と思われる土坑群が存在しているが、周溝や火処遺構などの内部施設は検出されていない。覆土から弥生土器片(4-5)が出土しており、A-2期に属する。

<溝>

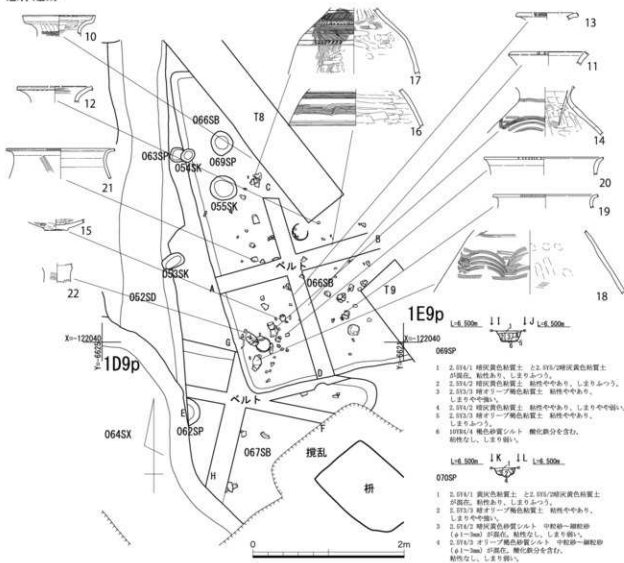
0475D 調査区東部で0495Bよりも西側に南北に走る溝である。幅1.20m、深さ0.08mを測る浅い溝で、竪穴建物が展開する微高地を画するかのような配置で認められた。時期は特定できないが、新しいものと思われる。

0515D 概ね南北に蛇行して走る幅0.36m、深さ0.10mを測る溝である。時期は不明。

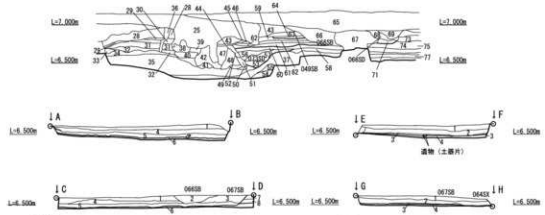


第36図 O49SB・O50SB 遺構図

惣作道跡



- 069SP
2. 334/2 緑灰色粘質土 土334/2緑灰色粘質土の混成。粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
- Lt. 500m
- 070SP
2. 334/2 緑灰色粘質土 土334/2緑灰色粘質土の混成。粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
- Lt. 500m



- 066SB
2. 334/2 緑灰色粘質土 土334/2緑灰色粘質土の混成。粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。

- 067SB
2. 334/2 緑灰色粘質土 土334/2緑灰色粘質土の混成。粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。
 2. 334/2 緑灰色粘質土 粘り強。しまりあつ。

第37図 O66SB・067SB遺構図

0525D 南北に走る幅2.06m、深さ0.51mを測る溝である。竪穴建物を切る形で検出され、時期は新しいものと思われる。

<その他の遺構>

0645X 東側調査区の南端部に展開する不定形の大形土坑である。出土遺物からみて江戸時代以降と思われる。下部は湧水層まで達するが、その性格は不明。

(3) 第2面

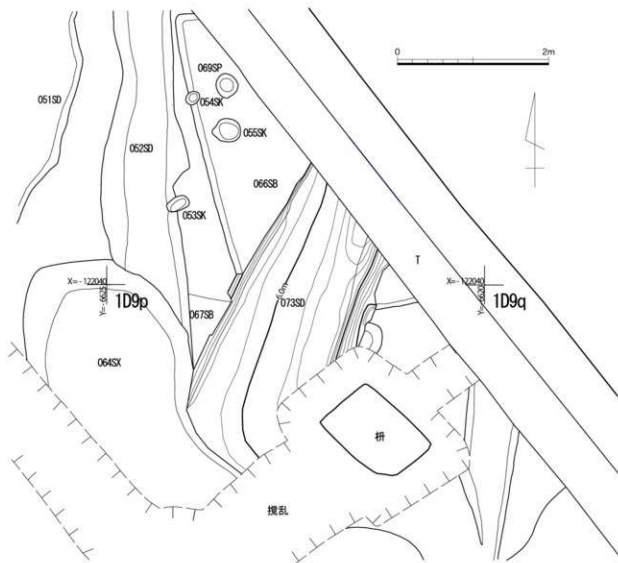
第1面遺構の下位で検出された遺構群を第2面の遺構として報告する。遺構は竪穴建物2棟、溝、土坑などがある。

<竪穴建物>

0665B (第37図) 北北西-南南東方向で4.38m

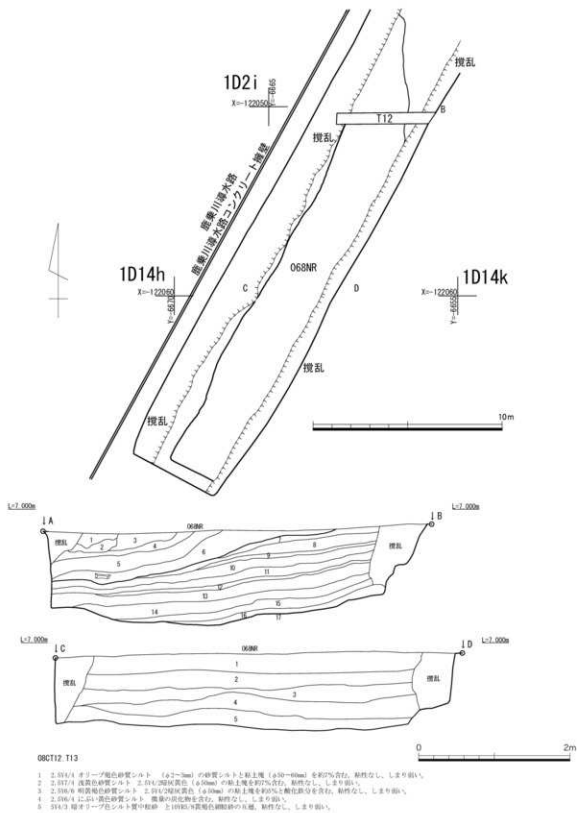
×東北東-西西南方向で2.56m以上を測る隅丸長方形の竪穴建物である。東部は調査区外に拡がり全形を知り得ない。南部で0675Bを切り、上位に0495B、下位に0735Dが存在する。深さ0.16mを測り、暗灰黄色シルトを整地して床面が造られ、主柱穴0695SP・0705SPなどが検出された。中央部に裏埋設遺構0715Z、南西隅部に壺埋設遺構0725Zが存在するが、これらの遺構は0665Bの貼床(整地土)より上部が欠落した状態で出土しており、ここでは0665B以前の遺構で0665B構築の際に破壊されたものと理解しておく。壁溝や火処遺構などの内部施設は検出されていない。覆土から弥生土器片(10~22)が出土しており、A-2期に属する。

0665B (第37図) 東西1.78m以上×南北1.75m



第38図 0735D遺構図

惣作遺跡



第 39 図 O68NR 遺構図

以上を測る圓丸長方形と推測される竪穴建物である。052SDと064SXに大きく切られ、北東部のみ検出された。066SBに切られ、上位に050SB、下位に073SDが存在する。深さ0.16mを測り、暗灰黄色シルトを整地して床面が造られ、支柱穴062SPが確認された。壁溝や火処遺構などの内部施設は検出されておらず、覆土から出土した弥生土器片(8・9)からA—2期に属すると考えられる。

<土坑>

071SZ 066SB内部の貼床直下で検出された裏埋設遺構である。直径0.21m、残存する深さ0.11mを測る円形土坑全体に弥生土器甕(24)が倒立した状態で埋設されていた。上部は066SBに破壊されたものとみられる。土器棺墓の可能性も考えられるが、確認を得るには至っていない。

072SZ 066SB内部の貼床直下で検出された壺埋設遺構である。長径0.18m、短径0.11m、残存する深さ0.17mを測る楕円形土坑全体に弥生土器壺(25)が正立した状態で埋設されていた。上部は066SBに破壊されたものとみられる。土器棺墓の可能性も考えられるが、確認を得るには至っていない。

<その他の遺構>

065SX 調査区北部に所在する不定形土坑である。遺構の時期そのものは新しいものと推測されるが、弥生土器片などが出土した。

068NR(第39図) 調査区西部を大きく南流する自然流路で、東岸の斜面のみが検出された。深さは1.3m以上を測り、明黄褐色砂質シルトやオリーブ褐色砂質シルトなどが厚く堆積していた。東側で常滑窯産赤物製品が、調査区西端部で木製品が若干量出土しており、時期はC—3期と思われる。

(4) 第3面

第2面遺構の下位で検出された遺構を第3面の遺構として報告する。遺構は溝1条のみである。

073SD(第38図) 066SB・067SBの下位で検出された幅1.75m、検出面からの深さ0.15mを測る溝である。おおよそN—20°—Eの方位を持ち、南端部で溝幅が増している。調査時点では方形周溝墓の溝を想定して掘削したが、確認を得るには至っていない。内部から弥生土器壺や甕(26～50)が出土しており、時期はA—2期に属する。(鈴木正貴)

第3章 遺物

第1節 土器・陶磁器類

(1) A期

08C区 0495B 出土遺物 (第40図1~3) 弥生土器壺・壺などが出土した。1は外面ハケ調整された甕で口縁部下端に棒状工具による連続刺突が認められる。2は口縁部にイタによる部分刺突が存在する太頭壺、3は口縁部が緩やかに外反する甕で外面がイタナデ調整される。

08C区 0505B 出土遺物 (第40図4・5) 弥生土器甕などが出土した。4と5は台付甕の脚部でハケ調整が認められる。

08C区 0655X 出土遺物 (第40図6・7) 口縁部にイタによる連続刺突があるハケ調整された弥生土器甕(6・7)などが出土した。

08C区 0675B 出土遺物 (第40図8・9) 8と9は口縁部端部に棒状工具による部分刺突が認められる太頭壺で、9は口縁部にイタによる部分刺突、頸部に不揃いな工具による直線紋と大きな波状紋が施されており、古井式に属する。

08C区 0665B 出土遺物 (第40図10~22) 弥生土器壺・壺などが出土した。10は口縁部上端部に棒状工具による部分刺突が認められる受口状口縁の太頭壺で、頸部に不揃いな工具による波状紋が施される。11は口縁部面に棒状工具による刺突、12は口縁部下端にイタによる部分刺突、13は口縁部面にハケによる連続刺突が施された壺である。14・16~18は外面がミガキまたはナデ調整、内面がナデまたはイタナデ調整された太頭壺で、14と18は頸部にクシによる波状紋と体部上半にクシによる横位弧紋の組み合わせ、16は不揃いな工具による3条の直線紋、17はヘラによる横位直線紋と不揃いな工具による連続刺突や斜線紋が認められる。15は外面がミガキまたはナデ調整された壺底部である。19~21は口縁部面に連続刺突が存在する甕で、20は口縁部が緩やかに外反し、19と21は口縁部が短く屈曲する。22は台付甕の脚部である。これらは古井式の古~中段階に位置づけられる一括資料である。

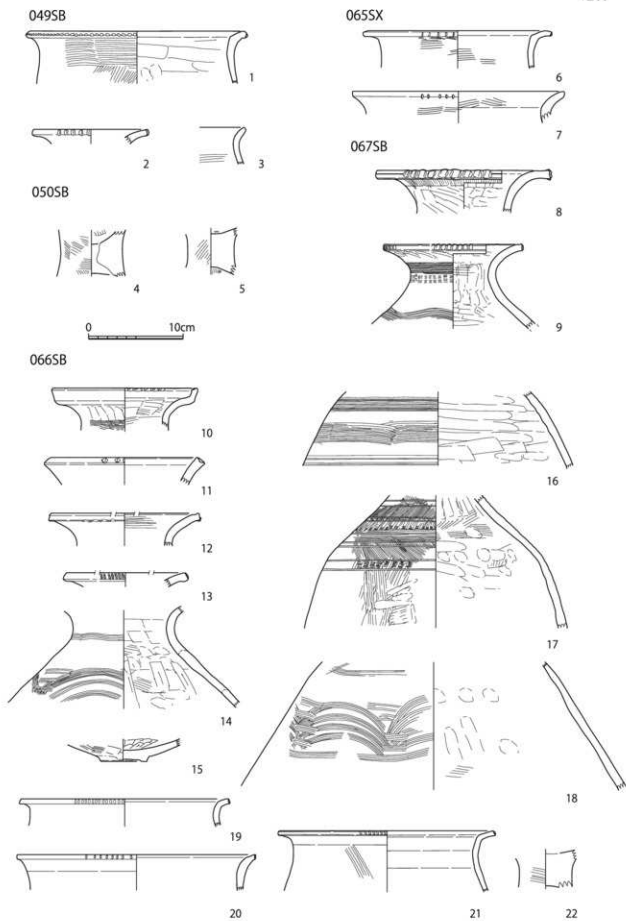
08C区 0515D 出土遺物 (第41図23) 23は口縁部端部にハケによる連続刺突がある。

08C区 0715Z 出土遺物 (第41図24) 0665B床面下部で検出された瘞埋設遺構0715Zに埋設された甕である。口縁部端部下端にハケによる連続刺突があり、頸部以下の外面は斜位または履位のハケ調整が認められる。

08C区 0725Z 出土遺物 (第41図25) 0665B床面下部で検出された瘞埋設遺構0725Zに埋設された壺下半部である。外面は体部上位にクシによる直線紋、胴部最大径部分が横位、それより下半が斜位のミガキ調整、内面はナデまたはイタナデ調整が施されている。底部は粘土を糺ぎ足して平底に造形される。

08C区 0735D 出土遺物 (第41~42図26~50) 弥生土器壺・壺・高杯などが多数出土した。26~30は太頭壺で、26と27は受口状口縁を持ち、27には口縁上端部に棒状工具による部分刺突が認められた。28はヘラによる連続弧紋と不揃いな工具による縦位波状紋、29は不揃いな工具による横位波状紋が5条、30は不揃いな工具による横位波状紋と斜位直線紋が施される。31と32は細頸壺である。31は口縁部端下部に棒状工具による連続刺突紋、頸部に不揃いな工具による短い直線紋、体部上半に同じく横位波状紋5条、最大径部から下位はミガキ調整が施される。33は壺底部、34は高杯の杯部である。35~47は甕口縁部で、短く屈折するように外反するものが多い。体部外面については、36はハケ調整が明瞭に残り、37はハケ調整の後にナデ調整?がなされるが、それ以外は不明瞭であるもののイタナデ調整かナデ調整が観察される。内面は斜位のケズリ調整またはハケ調整が認められる。35は口縁部端部に棒状工具による2個刺突が施され、上面に不揃いな工具による波状紋が施される。36の口縁部にはイタによる部分刺突が、40と47の口縁部には棒状工具による部分刺突が、37・39・41・43~46の口縁部にはイタによる連続刺突が認められた。48~50は台付甕の脚部で、49は脚部上位にヘラによる横紋が2条施される。

09B区 0015K 出土遺物 (第43図51~58) 太頭壺・細頸壺・台付甕などの弥生土器が存在する。51は受口状口縁の太頭壺で口縁部上端部に棒状工具によ



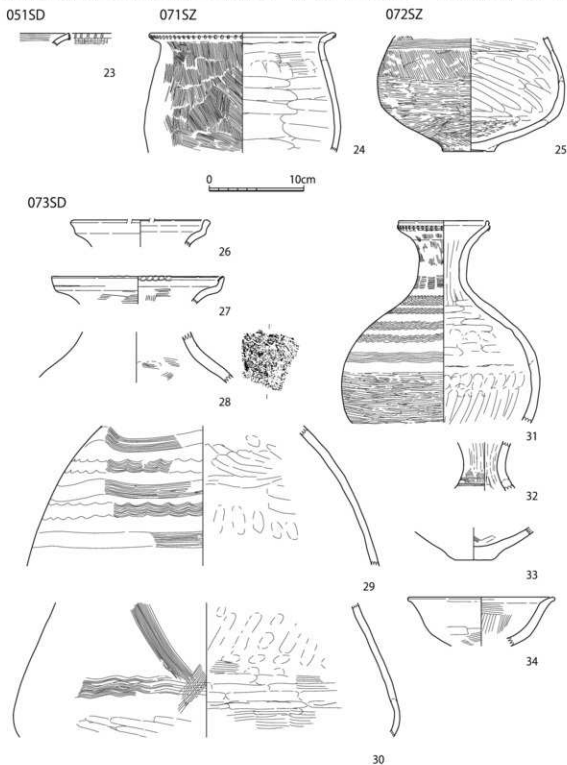
第40図 A期の出土遺物(1)

惣作遺跡

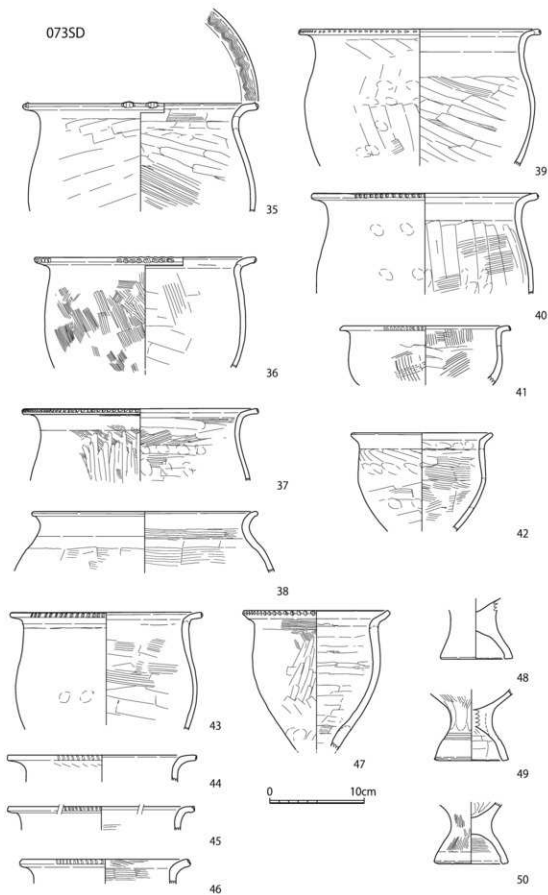
る部分刺突が認められ、頸部に縦位ヘラ直線紋が施される。52は緩く外反する口縁部端面に棒状工具による部分刺突が認められる太頸壺で、頸部に直線紋が施される。53と57は凹線紋系細頸壺で、57は凹線紋の下位にハケ原体による刺突とクシによる横位直線紋が施される。56は頸部にヘラ波状紋と

不揃いな工具による波状紋が施される。54は台付甕の脚部である。58は壺下半部の破片を円形に打ち欠いた円盤状製品である。

09B区 0145D 出土遺物 (第43図 59～61) 緩やかに屈曲する口縁部で外面にハケ調整された裏口縁部 (59) と壺底部 (60) と平底裏底部 (61) など

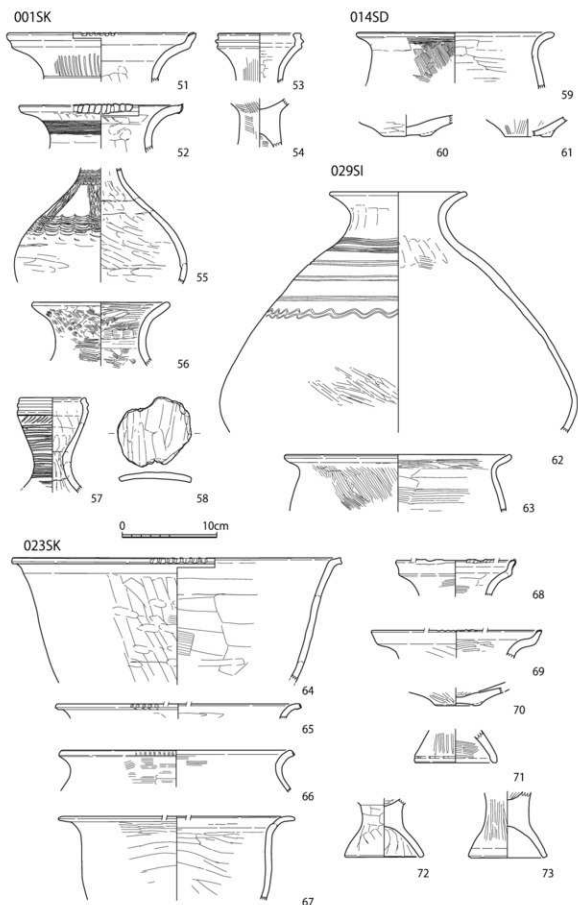


第41図 A期の出土遺物(2)



第42図 A期の出土遺物(3)

製作遺跡



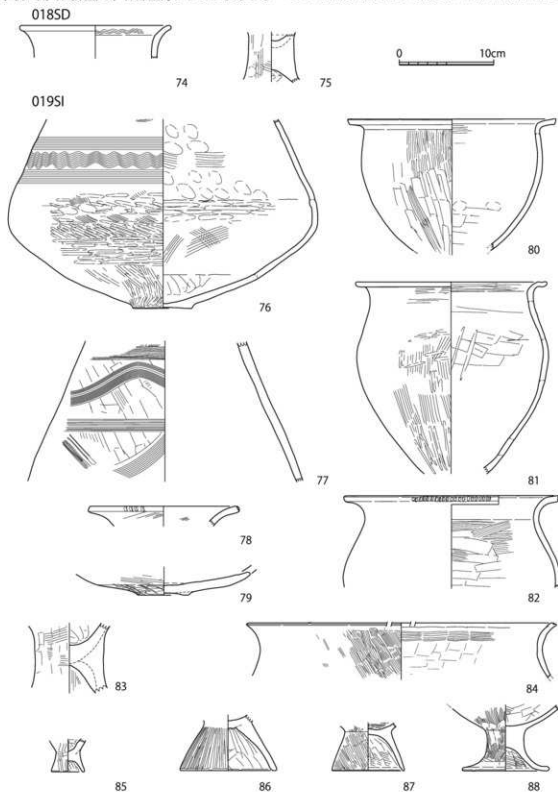
第43図 A期の出土遺物(4)

の弥生土器が出土した。60と61は底部脇に粘土を
継ぎ足して平底にしている。

09B区 0295I 出土遺物（第43図 62・63） 太頸壺
や甕などの弥生土器が存在する。62は口縁部が逆
ハ字状に開く太頸壺で、体部上方にクシによるゆる

い波状紋が2条と直線紋が3条とやや細かい波状
紋1条が施され、胴部に斜位ミガキ調整がなされる。

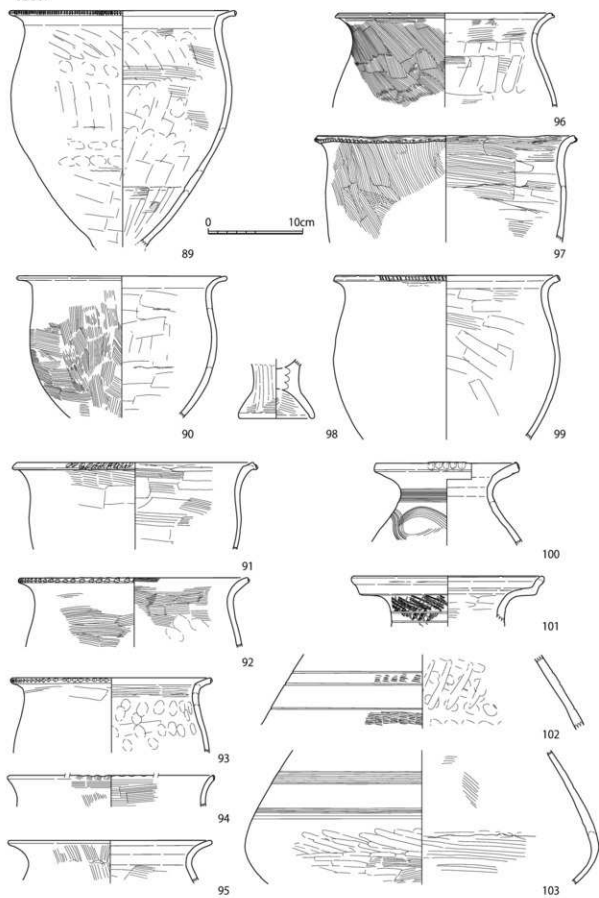
63は体部にハケ調整がなされた甕口縁部である。
09B区 023SK 出土遺物（第43図 64～73） 64
と65は深鉢状を呈する甕で、64は口縁部端面に棒



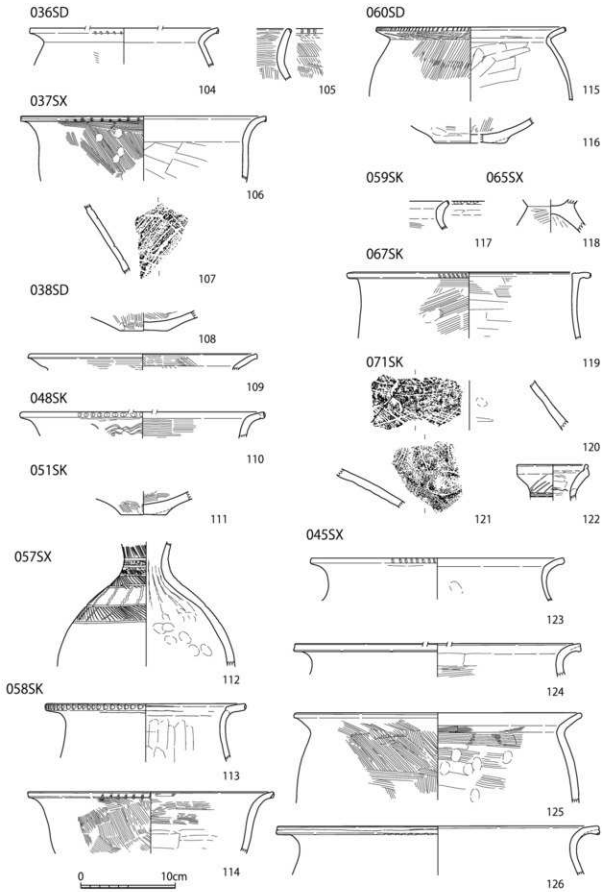
第44図 A期の出土遺物(5)

惣作遺跡

028SI



第45図 A期の出土遺物(6)



第 46 図 A 期の出土遺物 (7)

製作遺跡

状工具による部分刺突が、65 はイタによる部分刺突が存在する。66 はく字状に折れる口縁部端部に部分刺突が認められる。68 と 69 は受口状の口縁部を持つ甕で、68 は上端面にイタによる部分刺突が認められる。70 は壺底部、71～73 は台付甕の脚部である。これらの弥生土器は概ね古井式古段階に属する資料である。

09B 区 0185D 出土遺物（第 44 図 74・75）74 は口縁部内面に波状紋が施された甕、75 は台付甕の脚部である。

09B 区 0195I 出土遺物（第 44 図 76～88）76～79 は太頸甕と思われる。76 の外面は体部上方で不揃いな工具による直線紋・細かい波状紋・直線紋が施され、胴部から下半はミガキ調整が施されている。77 は体部上方で直線紋と大きく湾曲する波状紋が 2 組施されている。78 は口縁部端面に棒状工具による部分刺突が認められる。80～82 は口縁部が横に広がる甕で、82 は口縁部端面にイタによる連続刺突が認められる。84 は口縁部部に沈線が巡る甕、83 は台付甕の脚部である。これらは弥生時代中期に属するが、85 は小型の台付甕脚部、86 と 87 は台付甕脚部、88 は台付甕の脚部で、それぞれ比較的新しい資料と思われる。

09B 区 0285I 出土遺物（第 45 図 89～103）89～99 は甕で、89・91・93・99 は口縁部端面にイタによる連続刺突が、97 は口縁部端部下端に棒状工具による部分刺突が、92・94 はハケによる連続刺突が施されている。90 と 96 は体部外面に細かいハケ調整がみられ、92 と 97 はやや粗いハケ調整（クシ条痕か）が施される。89 は胴部最大径付近でスガが付着し体部下半は表面が艶くなっていた。100～103 は太頸甕で、100 は口縁部端面に棒状工具による部分刺突が認められる。101 は受口状口縁となり、頸部に不揃いな工具による斜位直線紋とこれに交差するヘラによる直線紋が施されている。102 はヘラによる直線紋で画された間に不揃いな工具による短い直線紋を入れる紋様帯が 2 段存在する。103 は不揃いな工具による直線紋が 2 条存在し、胴部から下半はミガキ調整が施されている。概ね古井式に属する一括資料といえる。

09B 区 0365D 出土遺物（第 46 図 104・105）104 は口縁部がくの字状に屈曲する甕で口縁部端面

下端にイタによる連続刺突がある。105 は内外面にハケ調整された甕でハケによる連続刺突がある。

09B 区 0375X 出土遺物（第 46 図 106・107）

106 は深鉢状に口縁部が開く甕で口縁部端部下端にハケによる連続刺突が施されている。107 はクシによる斜位直線紋が交差する壺体部片である。

09B 区 0385D 出土遺物（第 46 図 108・109）

108 は壺底部、109 は口縁部がくの字状に屈曲する甕である。

09B 区 0485K 出土遺物（第 46 図 110）110 は口縁部端面に棒状工具による刺突がある甕で、外面に不揃いな工具による波状紋が施されている。

09B 区 0515K 出土遺物（第 46 図 111）111 は弥生土器壺底部片である。

09B 区 0575X 出土遺物（第 46 図 112）112 は細頸甕の体部片で、ヘラによる沈線で画された外面には上位からクシ状工具による縦位直線紋、同じくクシ連続刺突が 2 段、同じく斜位直線紋、ヘラによる縦位波状紋、交差する斜位直線紋が順に施されている。

09B 区 0585K 出土遺物（第 46 図 113・114）113 は口縁部が屈曲する甕で、端面にイタによる連続刺突が認められる。114 は深鉢状の甕で口縁部端部下端にハケによる連続刺突がある。

09B 区 0605D 出土遺物（第 46 図 115・116）

115 は口縁部がくの字状に屈曲する甕で口縁部端面にハケによる連続刺突がある。116 は平底甕の底部片である。

09B 区 0595K 出土遺物（第 46 図 117）117 は深鉢状の甕で口縁部端面にイタによる連続刺突がある。

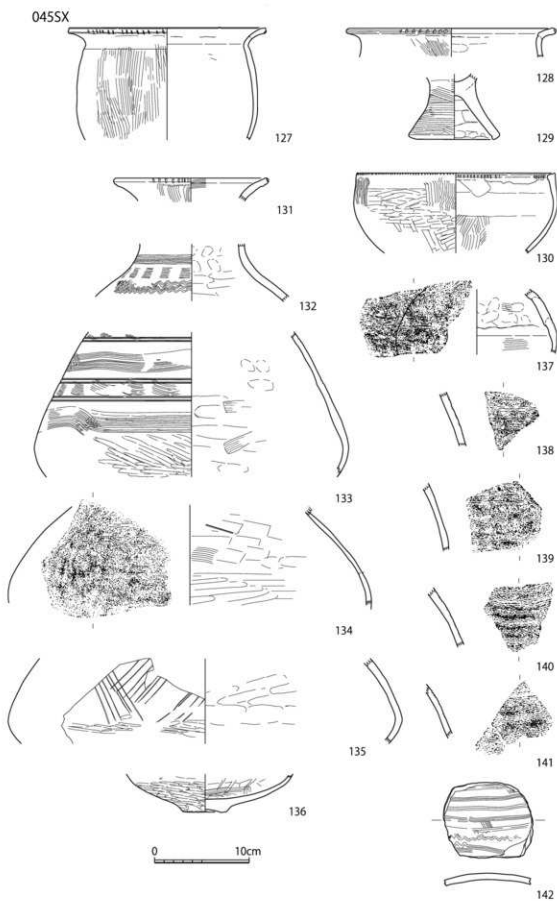
09B 区 0675K 出土遺物（第 46 図 119）119 は口縁部が直角に屈曲する甕で口縁部端面にイタによる連続刺突がある。

09B 区 0715K 出土遺物（第 46 図 120～122）

120 と 121 は壺体部片で外面にヘラで紋様が施されている。122 は細頸甕の口縁部で頸部にヘラによる沈線が巡る。

09B 区 0455X 出土遺物（第 46・47 図 123～142）

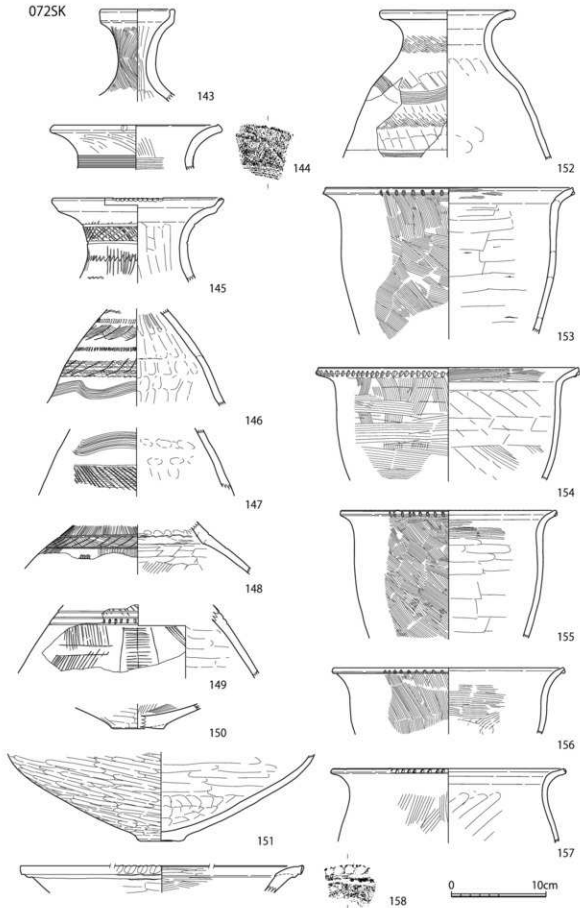
123～129 は甕で 125・127・128 は体部外面にハケ調整が認められる。123 は口縁部端面にイタによる連続刺突が、126 は口縁部下半に粘土が焼き



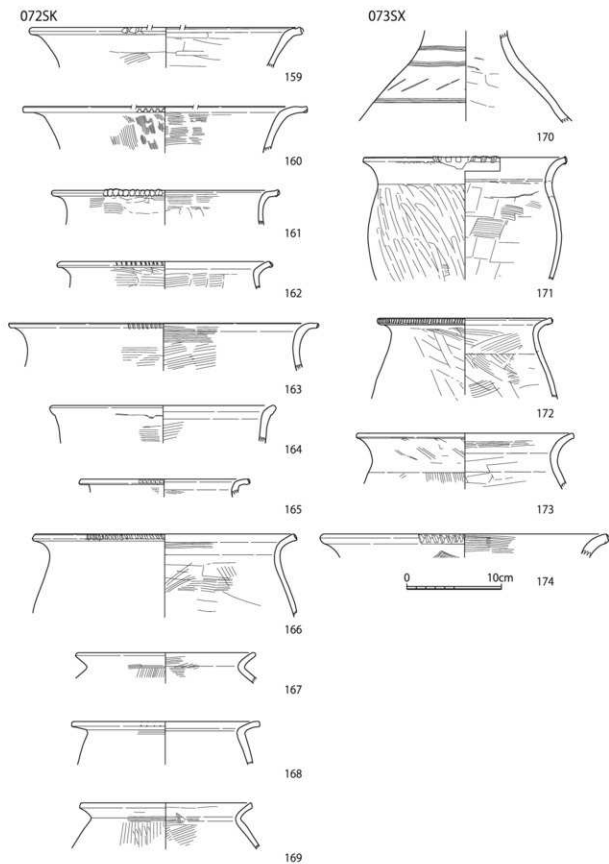
第 47 図 A 期の出土遺物 (8)

惣作遺跡

0725K



第48図 A期の出土遺物(9)



第 49 図 A 期の出土遺物 (10)

惣作遺跡

足された後に端面下端に連続刺突が、127と128は口縁部端面下端にイタによる連続刺突が施される。130は口縁部が直立する鉢で、肥厚する口縁部端面の内側角部にイタによる連続刺突が施され、粗くミガキ調整された体部上位に不揃いな工具による縦位直線紋が推定4単位みられる。131～135は太頸壺で、131は口縁部端面にイタによる連続刺突がある。132は頸部から体部にかけて上位からクシによる直線紋、短い直線紋、細かい波状紋が順に施されている。133はヘラによる2条の沈線と画された外面に不揃いな工具による短い弧紋、緩い波状紋、短い弧紋、緩い波状紋が順に施され、胴部にはミガキ調整がなされている。134はクシによる直線紋が数条あり、その下位に波状紋などが認められる。135はヘラ状工具による斜位の直線紋が施されている。136は壺底部で、外面にミガキ調整される。137～142は壺体部片で、137は不揃いな工具による直線紋や波状紋が、138～142はクシによる波状紋が数条あり、142は円盤状に打ち欠かれたものである。

098区 0725K 出土遺物 (第48・49図 143～169)

143～152は壺、153～169は甕である。143は頸部が不揃いな工具による直線紋が羽状に認められる受口細頸壺である。144と145は太頸壺で、144は口縁部端面に棒状工具による1個刺突がある。145は受口状口縁部の上端面に棒状工具による部分刺突があり、頸部にヘラ沈線の区画内に斜格子紋が施され、その下位に縦位直線紋とその後にヘラによる波状紋がみられる。146は不揃いな工具による波状紋の上にヘラによる斜線紋が重なり、その間に二枚貝(ハイガイか)による連続刺突、下部に不揃いな工具による波状紋が巡る。147は不揃いな工具による波状紋がみられ、下部には横位直線紋と斜線紋が交差する紋様帯が巡る。148はヘラによる直線紋2条により画された内部に斜線紋が交差する紋様帯が認められる。その下部は縦位直線紋で区画された部分に格子状紋がみられる。149は上位にヘラ沈線と棒状工具による連続刺突が、下位にヘラによる直線紋を組み合わせた紋様帯が認められる。150・151は肩底部で外面にミガキ調整が観察される。152は肩部がやや角張った形状の太頸壺で、頸

部に不揃いな工具による短い斜線紋が、体部と同じく波状紋と短い斜線紋と横位直線紋がみられる。

甕は深鉢形で口縁部がやや折れるもの(153・154・158)、深鉢形で口縁部が短く折れるもの(164)、深鉢形で口縁部が緩やかに外反するもの(155・156・159・160)、甕形で口縁部が彎曲するもの(157・161・163)、甕形で口縁部が短く折れるもの(162・165)、甕形で口縁部が長く折れるもの(166～169)に区分できる。153・155・156は口縁部端面下端にハケによる連続刺突が、154・160は口縁部端面下端にイタによる連続刺突が、157・159・162・163・166は口縁部端面にイタによる連続刺突が、158・161・165は口縁部端面に棒状工具による連続刺突が、168は口縁部端面上下端部に非常に細かい連続刺突が施されている。調整は内外面ともハケ調整を基本とし、部分的にイタナデ調整が認められる。167～169は比較的新しいか。

098区 0735K 出土遺物 (第49図 170～174)

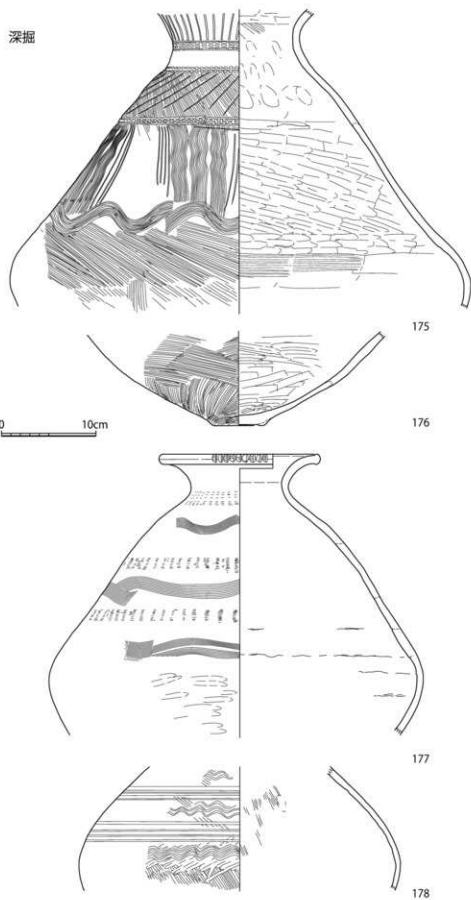
170はクシによる直線紋とヘラによる斜位の連続刺突が存在する太頸壺である。171～174は甕の口縁部で、171と172は外面にイタナデ調整が施される。171の口縁部端面に棒状工具による部分刺突が、172と174の口縁部端面にイタによる連続刺突がみられる。

深掘調査の出土遺物 (第50～56図 175～294)

ここでは各調査区で最終遺構面の調査を終えた後に基盤層である砂層を掘削した際に出土した資料を紹介する。この砂層は河川性堆積物の一部であり、概ね04D区で検出された自然河道SD59に相当するものと理解される。弥生時代中期の土器が多く含まれているが、遺物採取の状態が良好ではないため上位の遺物が混入してしまっているものも認められる。175～255・292・293は2008年度調査区の深掘調査、256～291・294は2009年度調査区の深掘調査で出土した資料である。

175～212と220～230は2008年度調査の壺、213～219と231～253は2008年度調査の甕、254・255は鉢である。

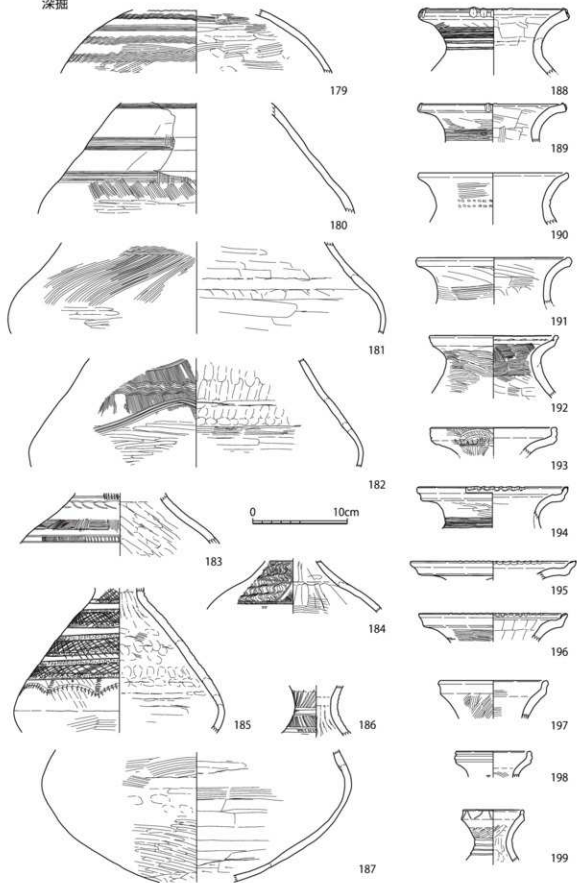
292は口縁部上端面に棒状工具による部分刺突がある太頸壺である。頸部に不揃いな工具による連続



第 50 図 A 期の出土遺物 (11)

製作遺跡

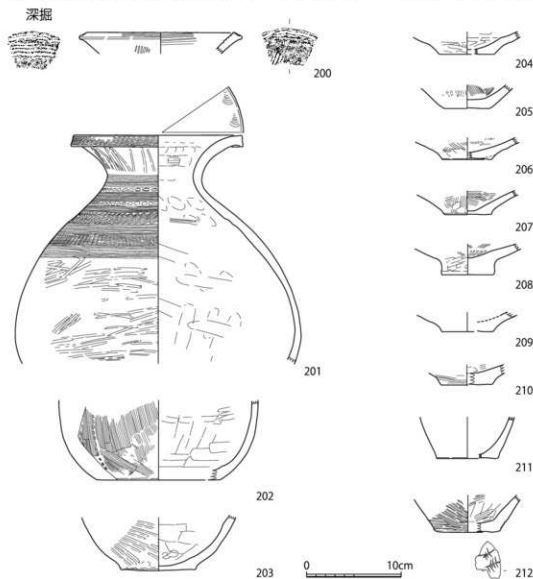
深掘



第 51 図 A 期の出土遺物 (12)

刺突と3条の緩い波状紋が巡る。293は口縁部が欠ける太頸壺だが、体部上半に不揃いな工具による4条の緩い波状紋が巡り、その間にはハケ状の調整痕が残る。175は肩がわずかに張る太頸壺である。頸部にはクシによる縦位直線紋と横位直線紋で区画された部分に二枚貝による連続刺突が巡る紋様帯がある。体部は、直線紋で区画された内部に不揃いな工具による斜線紋と交差するクシによる斜線紋、直下に二枚貝による連続刺突、クシによる縦位直線紋数状により画された内部に不揃いな工具による緩い縦位波状紋が3条、不揃いな工具による大きな横位波状紋、不揃いな工具による斜線紋の順に紋様が施されている。176は外面にクシによる条痕が認められ

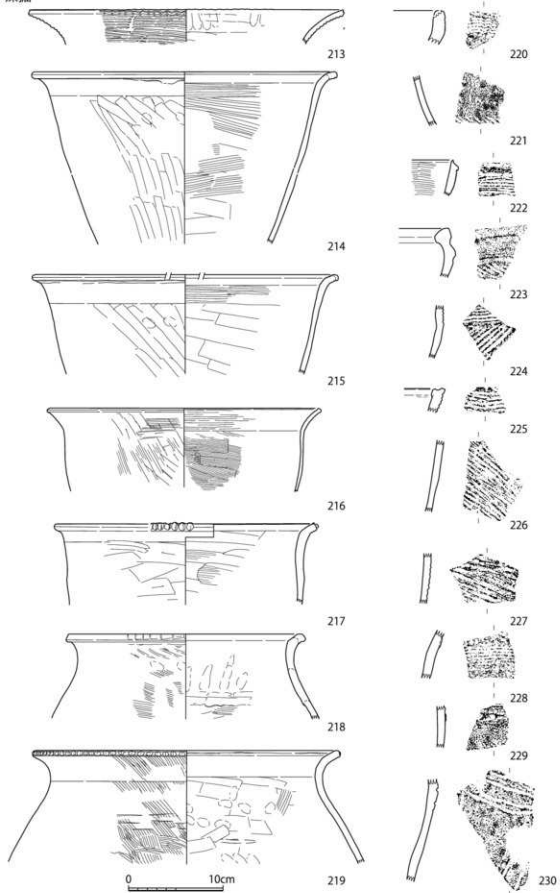
る壺底部で、175と同一個体の可能性もある。瓜郷式に属するか。177は口縁部端面にイタによる部分刺突(9個)がある太頸壺で、体部に不揃いな工具による非常に短い連続直線紋と同じく緩い波状紋の組み合わせが3段施されている。178はクシによる直線紋と細かい波状紋の組み合わせが2段あり、胴部にハケ調整およびミガキ調整が交差する太頸壺である。179はクシによる横位の直線紋と細かい波状紋が、180は不揃いな工具による直線紋と短い連続斜線紋が、181は不揃いな工具による細かい波状紋と長い連続斜線紋が、182は不揃いな工具による斜線紋の上に細かい波状紋や大きな波状紋を重ねる紋様帯が施される。183は不揃いな工具による横位直



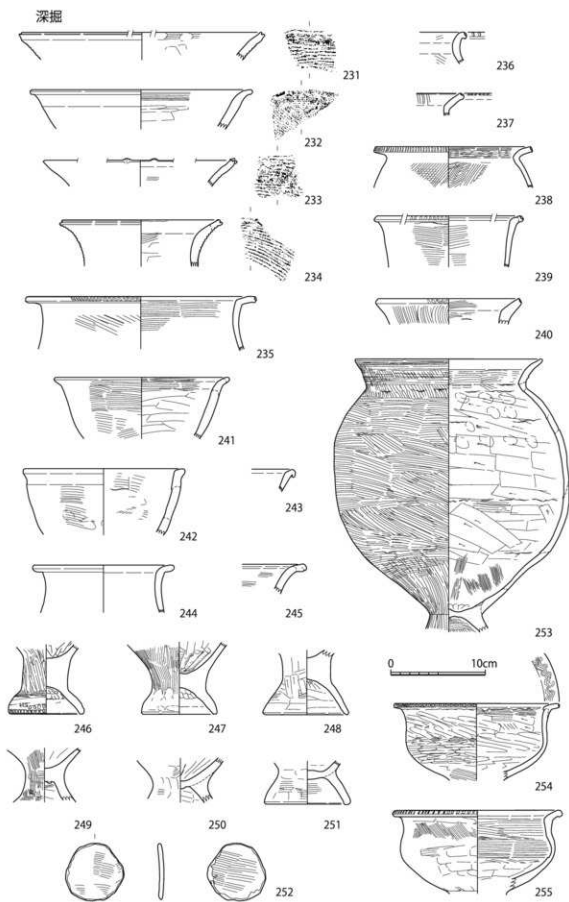
第52図 A期の出土遺物(13)

惣作遺跡

深掘



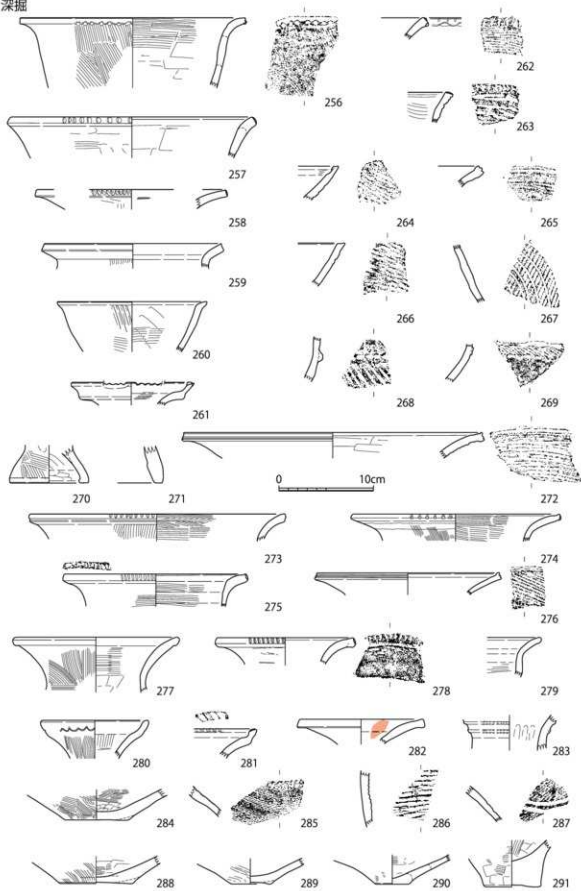
第 53 図 A 期の出土遺物 (14)



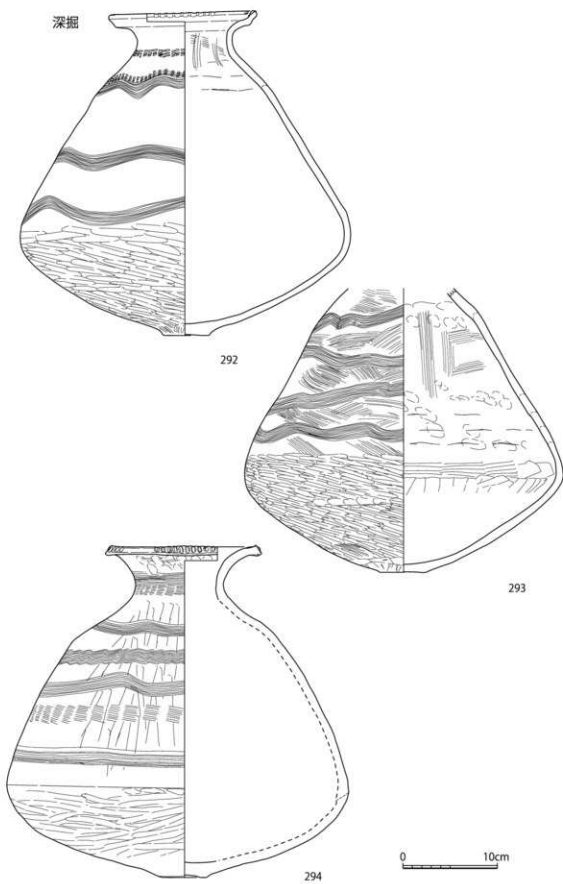
第 54 図 A 期の出土遺物 (15)

惣作遺跡

深掘



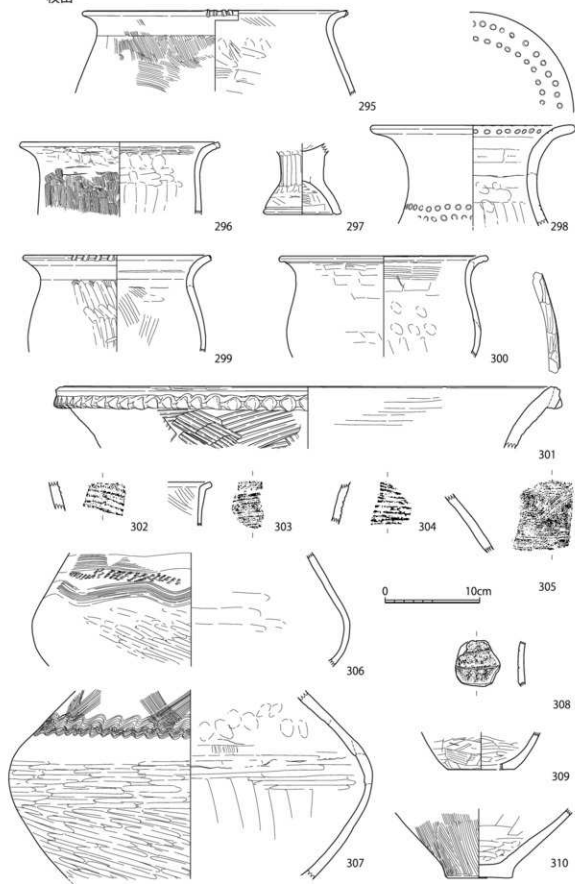
第55図 A期の出土遺物(16)



第56図 A期の出土遺物(17)

惣作遺跡

検出



第 57 図 A 期の出土遺物 (18)

線紋に短い縦線紋をまばらに連続させ赤彩が施され、その下位に二枚貝による連続刺突が観察される。184は不揃いな工具による縦連続波状紋にヘラによる横位直線紋が施され、185は4本のクシによる直線紋で画された中にヘラによる斜格子紋と二枚貝による連続刺突による紋様帯が4セット存在する。187は外面にミガキ調整がなされた壺底部である。188と189は口縁部端面に棒状工具による部分刺突があり、頸部に不揃いな工具による直線紋が巡る。190は頸部に原体不明の刺突が巡る。191は頸部に不揃いな工具による直線紋が巡る。192～196は受口状の口縁となる太頸部で、193は不揃いな工具による斜線と縦位波状紋と縦位直線紋がありヘラによる弧紋が重ねられる。194～196は口縁部上端面に棒状工具による部分刺突があり、194と196には頸部に不揃いな工具による直線紋が巡る。197～199は細頸部で、197は不揃いな工具による施紋が、198は凹線紋が、199はヘラによる施紋が認められる。200は口縁部端面に押し紋があり、外面にクシによる紋様がみられる。201は口縁部端面にクシによる波状紋、上面に扇状紋、クシによる直線紋で区画された中に連続刺突と細かい波状紋と塵状紋が施される。体部の上位からミガキ調整が施されている。202～212は壺底部で、202は棒状刺突が縦位に並ぶ。203と212は外面に貝条痕が残る。204～210は底部がやや突出する平底壺である。

裏は、大きく逆ハの字状に開くもの(213)、深鉢形で屈曲する口縁部が長いもの(216)、深鉢形で屈曲する口縁部が短いもの(214・215・217)、裏形のもの(218・219)、深鉢形で小型のもの(241～243)に分けられる。213は外面に貝殻条痕が、218と219はハケ調整が施され、その他はナデまたはイタナデ調整がなされる。217は口縁部端面に棒状工具による部分刺突が、218は口縁部端面にイタによる連続刺突が、219は口縁部端面にイタによる細かい連続刺突がみられる。213は岩滑式に属する他は概ね古井式に属する。220・222～228・231～234は外面に貝殻条痕が施されるもので、概ね岩滑式から古井堤式までに属すると思われる。231・234は口縁部端面に沈線が巡る。235～240は口縁部端面にイタによる連続刺突がある

裏で、235・238は口縁部が横方向に開く。246～251は台付裏の脚部で、底部が厚いもの(246・248)から薄くなるもの(250・251)まで存在する。246は底部端面に棒状工具による連続刺突がある。253は台付裏であるが、時期は古墳時代まで下る可能性がある。

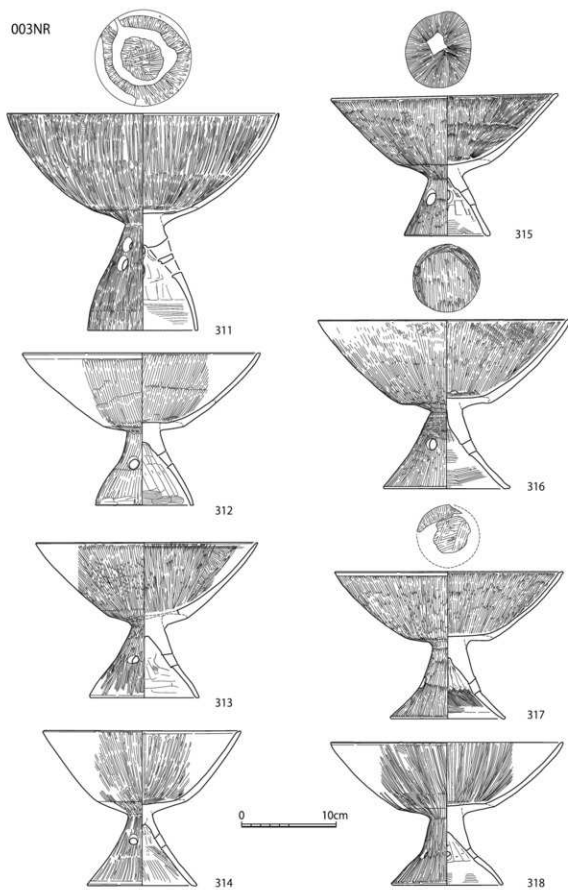
254と255は口縁部が外に折れる鉢で、口縁部端面にイタによる連続刺突が巡る。254は口縁部上端面に不揃いな工具による波状紋が施され、体部外面の大部分はミガキ調整がなされる。一方、255は体部上半の外面にハケ調整がみられる。

256～291は2009年度調査の資料であるが、2008年度調査と比べると資料は少ない。294は肩がやや大きく張る太頸部で、口縁部端面に棒状工具による部分刺突が巡る。頸部に不揃いな工具による直線紋と短い連続直線紋があり、以下緩い波状紋、細かい波状紋、緩い波状紋、短い連続直線紋、直線紋の順に紋様が施される。256は棒状工具による連続刺突が巡る深鉢形の裏で、外面にハケ調整がみられる。257・258はイタによる連続刺突が巡る裏、259は口縁部が屈曲する裏、260は短く口縁部が折れるものである。261・281は口縁部上端面に棒状工具による部分刺突がある受口状口縁の壺である。263～268は外面に条痕が残るもので、263は口縁部端面にイタによる刺突が、267は条痕を重ねてヘラで円弧紋が、268・269は貼付突帯が認められる。272・276は口縁部端面に沈線が巡る条痕部の深鉢形の裏である。273・275・278は口縁部端面にイタによる連続刺突がある裏、274はハケによる連続刺突を持つ裏である。277と278は太頸部の口縁部で278はイタによる刺突がある。280はヘラによる連弧紋と不揃いな工具による縦位直線紋が外面にみられる細頸部、282は口縁部内部に赤彩がみられる壺である。288～290は壺底部、291は裏底部で、下部外面にハケ調整がみられる。

その他の出土遺物(第57図295～310)ここでは極めて新しい遺構もしくは遺構外から出土したA期に属する資料を紹介する。295は棒状工具による部分刺突がある外面ハケ調整の裏、296は直立する体部から口縁部が開く外面ハケ調整の裏、299は棒状工具による連続刺突があるイタナデ調整の裏、300はナデ調整の裏である。297は台付裏の脚部で

惣作遺跡

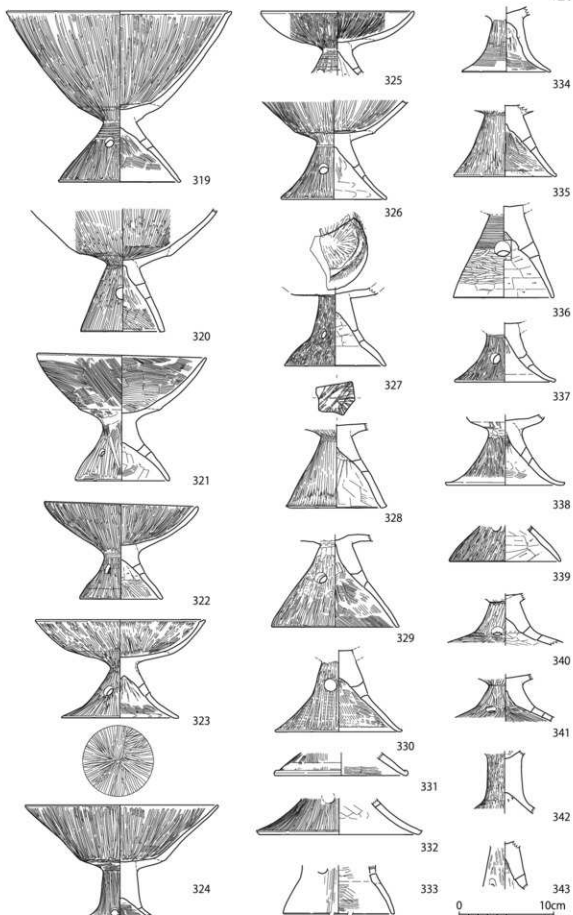
003NR



第58図 A期の出土遺物 (19)

003NR

遺物



第 59 図 A 期の出土遺物 (20)

惣作遺跡

底部が極めて厚い。298は口縁部上端面に2列、体部上方にも2列の竹管による連続刺突が認められる壺である。301は外面に羽状条痕が施される深鉢であり、この他にも302と304にも外面に条痕紋がみられる。305～307は不揃いな工具による施紋が施された壺で、305は直線紋と波状紋と直線紋、306は緩い波状紋と連続刺突と大きな波状紋、307は交差する斜線と細かい波状紋がなされる。309は壺底部、310は甕底部で、共に平底で、310は外面にハケ調整が残る。

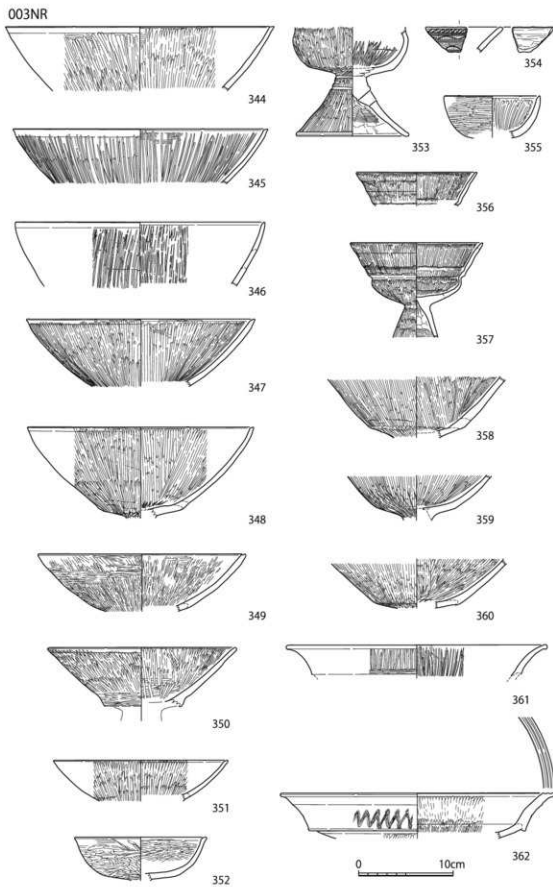
08B区 003NR出土遺物（第58～75図 311～601）高杯・甕・壺・鉢など様々な器種の土師器が多量に出土した。B期に属する資料は概ね第4層と第5層から出土しており、ここではその資料を中心に器種別に紹介する。主な遺物の出土位置は第24～26図に示した。遺物の時期は概ね廻間Ⅱ式期に併行するものと思われる。

311～362は高杯で、形状から概ね以下の12類に区分できる。杯部が稜線を持たず深い碗形を呈し脚部はやや高く端部が内彎するもの（A類：311）、浅い杯部が稜線を持たずに逆ハ字状に開き脚部が直線的に開くもの（B類：322）、浅い杯部が稜線を持たずに逆ハ字状に開き脚部が外反して開くもの（C類：323）、杯部が外面下部で稜線を持ちやや内彎しながら逆ハ字状に開き脚部の端部がわずかに内彎するもの（D類：312・313・318・321）、杯部が稜線を持ちやや内彎しながら逆ハ字状に開き脚部が直線的に開くもの（E類：316・317）、杯部が稜線を持ちやや直立ぎみに逆ハ字状に開き脚部が直線的に開くもの（F類：314・319）、杯部が稜線を持ち逆ハ字状に直線的に開き脚部も直線的に開くもの（G類：315・320）、杯部が稜線を持ち逆ハ字状に直線的に開き直立した脚部が屈折して開くもの（H類：324）、杯部の屈折部が突帯状に張り出す稜線を持つもの（有稜高杯、脚部は不明：I類：350）、杯部が稜線を持たず丸みを持つ椀型となるもの（脚部は不明：J類：352・355）、杯部が段を持つもの（K類：356・357）、杯部が大きく彎曲して口縁部に至るもの（脚部は不明：L類：353）の12類である。

多くの高杯は成形後にハケ調整がなされ、さらにその上にミガキ調整が施されているとみられる。杯部は内外面とも縦位の（すなわち放射状の）細かい

ミガキ調整が、脚部は外面のみ縦位の細かいミガキ調整がなされるのを基本とする。杯部見込み（底部内面）は細かいミガキ調整が放射状に施されるもの（ミガキa：315など）と、一方向の平行線状に施されるもの（ミガキb：316など）と、放射状に近いもののそれが乱れてランダムな方向を向くもの（ミガキc：311など）に区分が可能である。脚部には円孔透かしが概ね3単位設けられ、内面は上部がケズリ調整、下部はハケ調整が施される場合が多い。

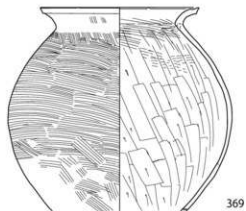
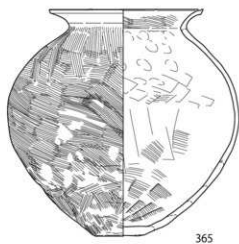
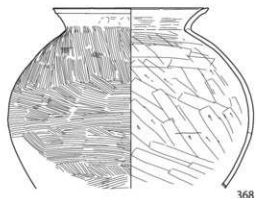
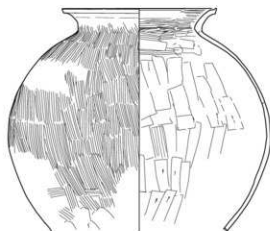
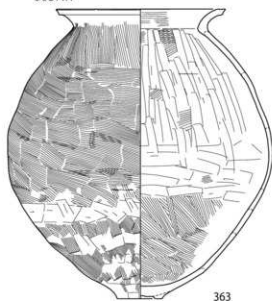
311は高杯A類でミガキcが施され、脚部の透かしは円孔が2個ずつ設けられていた。312は高杯D類で口縁部外面に横ナデ調整がある。313は高杯D類で口縁部内面に横ハケ？調整がみられる。314・319は高杯F類で口縁部上面に面を持つ。315は高杯G類でミガキaがなされる。316は高杯E類でミガキbが施され、脚部上位に横位ハケ？調整がみられる。317は高杯E類でミガキcが施される。322は脚部上位に横位のミガキ調整が残る高杯B類である。324は高杯H類でミガキaが施され、杯部の屈曲部分に横位のミガキ調整が残る。325は杯部のミガキ調整がまばらで脚部上位に横位のミガキ調整が残る高杯C類である。327はミガキaが残る高杯D類で、杯口縁部の接合面に羽状の刻線が刻まれている。328は脚部下端面が断面方形となるものでミガキcが施される。330は高杯E類に近い脚部で外面のミガキ調整がまばらである。334は高杯C類の脚部と思われ、外面のミガキ調整は上部に留まっている。336は比較的高い脚部で上方にクシ？による横位直線紋が施される。340・341は脚部が外折するもので、340は外面下半に横位のミガキ調整が残る。344～349は口縁部に内傾する上端面が存在する高杯杯部で、344～348は口縁部外面上端に横ナデ調整がみられる。349は杯部が浅くなるもので、口縁部外面上位に横位のミガキ調整が施される。350は高杯I類で内外面とも下方は横位のミガキ調整がある。352と355は高杯L類で、352は内外面ともほぼ全面に横位を基調とするやや乱れたミガキ調整が、355は外面のみ横位のミガキ調整が残る。353は高杯L類だが、口縁部が括れる可能性もある。脚部上位にヘラ沈線が巡る。356・357は表面が黒色化した高杯K類でミガキ調整が丁



第 60 図 A 期の出土遺物 (21)

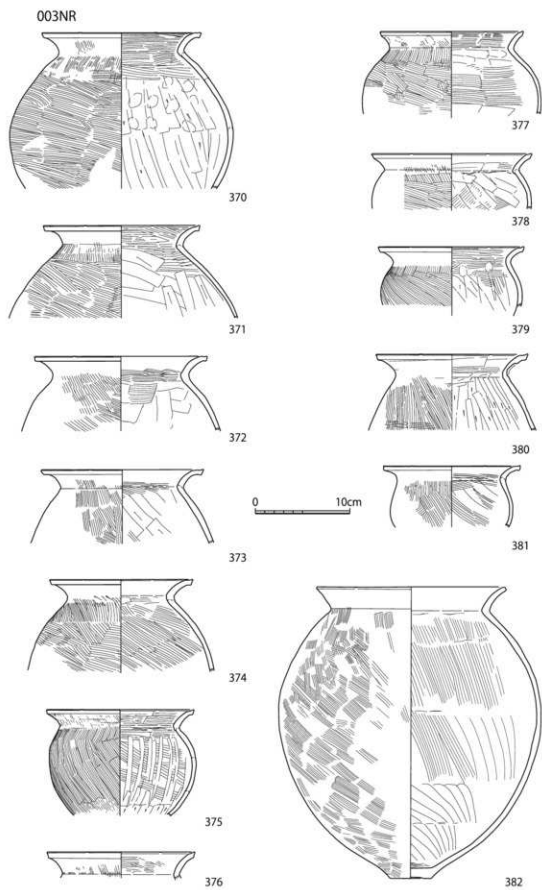
惣作遺跡

003NR



0 10cm

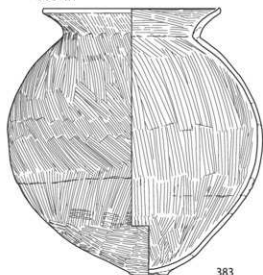
第61図 A期の出土遺物(22)



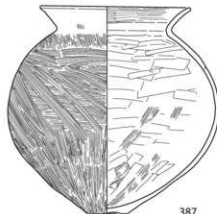
第 62 図 A 期の出土遺物 (23)

惣作遺跡

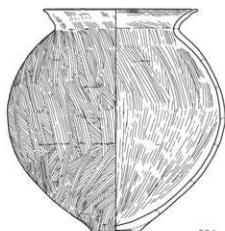
003NR



383



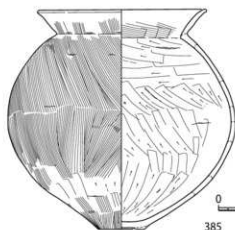
387



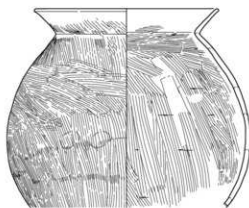
384



388



385



389

0 10cm

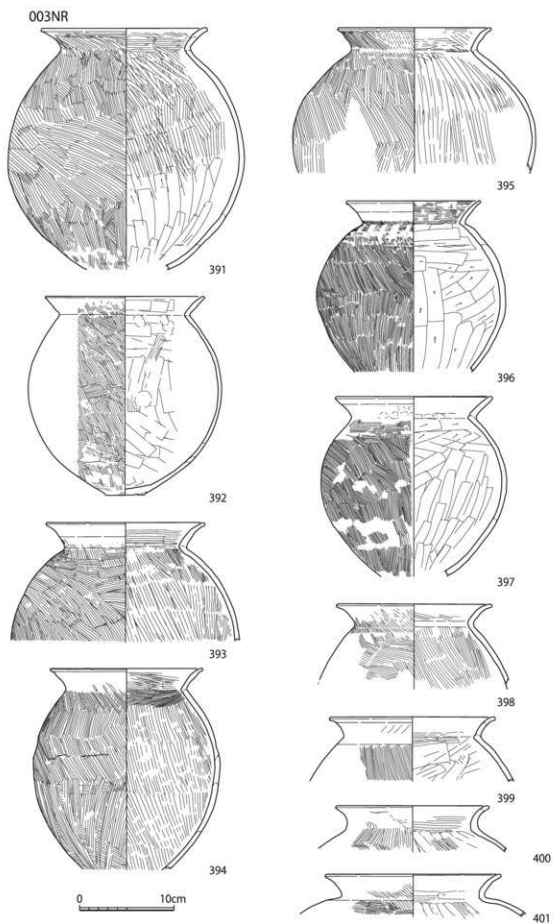


386



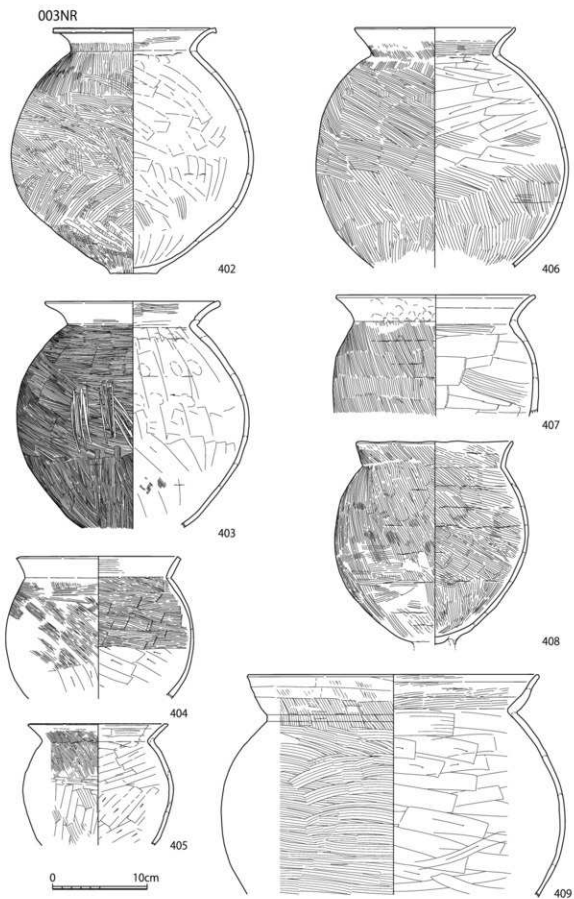
390

第 63 図 A 期の出土遺物 (24)



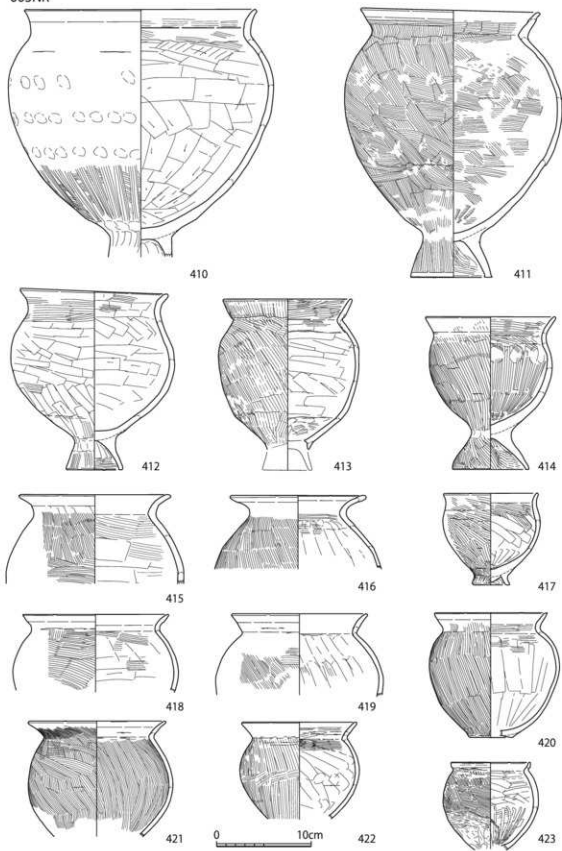
第64図 A期の出土遺物(25)

惣作遺跡



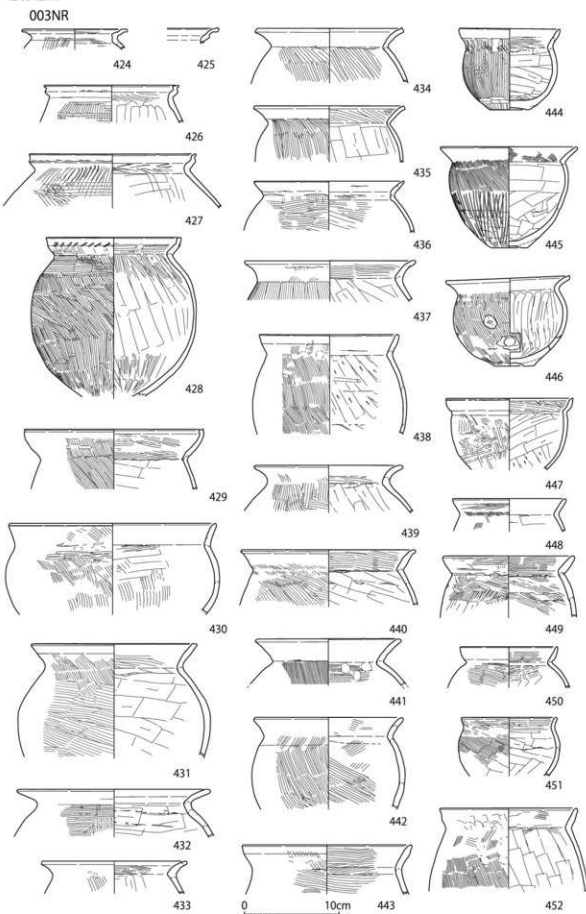
第 65 図 A 期の出土遺物 (26)

003NR



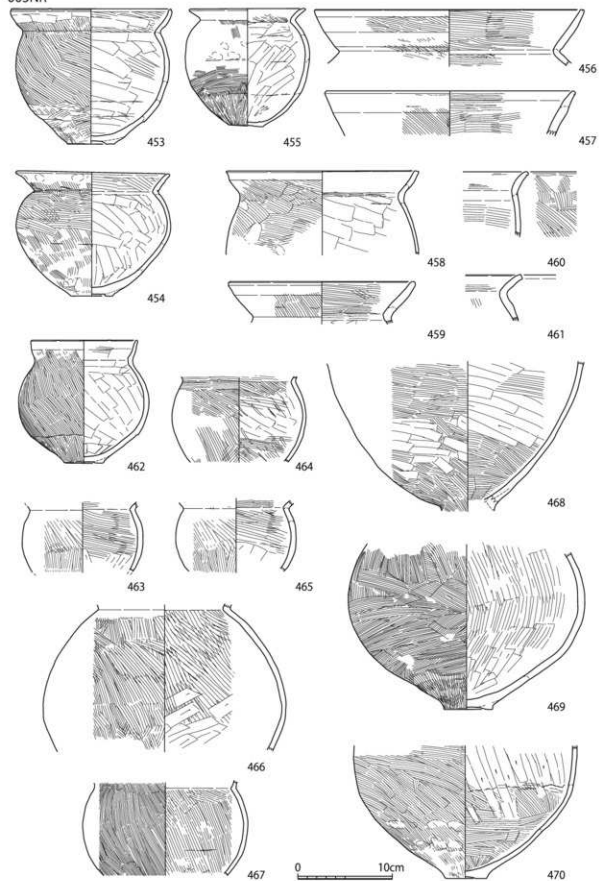
第66図 A期の出土遺物(27)

惣作遺跡



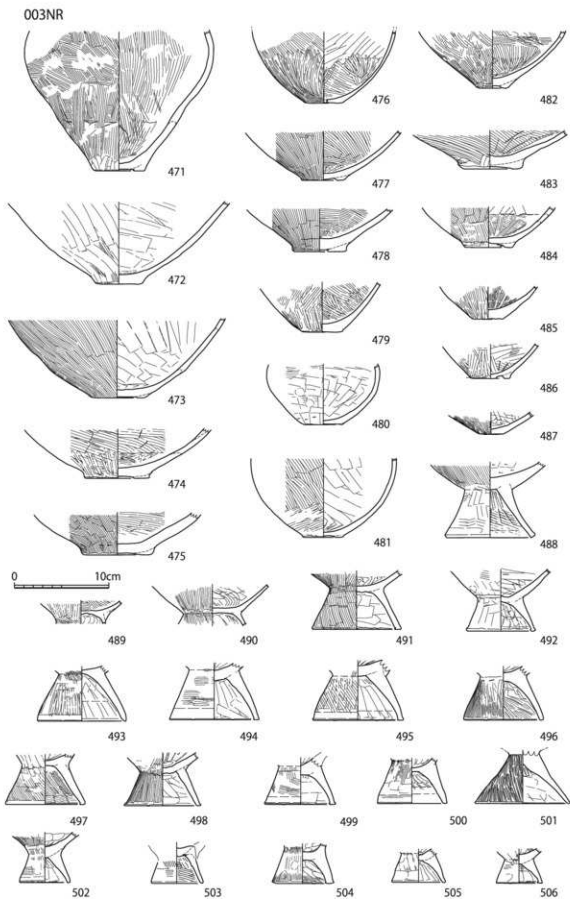
第 67 図 A 期の出土遺物 (28)

003NR



第 68 図 A 期の出土遺物 (29)

惣作遺跡



第 69 図 A 期の出土遺物 (30)

卑に施されている。361・362は奇道式に属する高杯で、362は口縁上端面に沈線が、杯部外面に波状紋が巡る。

363～506は甕で、形状から概ね以下の12類に区分できる。口縁部が直角に折れて反し口縁端部にやや外傾する面を持ちさらに上部にも狭い横ナデ調整が施されるもの（A類：363～381）、口縁部が直角に折れて反し口縁端部がやや尖り気味に丸く取まるもの（B類：382～400・415・418～422）、口縁部が直角に折れて反し口縁端部が断面方形に近い形状となるもの（C類：402・403）、口縁部が鈍角に折れて直線的に開き口縁端部が断面方形になるもの（D類：404・405）、口縁部が鈍角に折れてやや外反しながら開くもの（E類：407・408）、口縁部が鈍角に折れて開き粘土を継ぎ足すことによりわずかに段差が生じるもの（F類：406・409・411）、口縁部が鈍角に折れて内彎しながら開くもの（G類：413・438・447・453）、口縁部が緩やかに彎曲しながら折れて開くもの（H類：410・412・414・417）、いわゆるS字状口縁となるもの（I類：424～427）、いわゆる有段口縁となるもの（J類：428）、口縁部が短く開くもの（K類：423）、口縁部が長く開くもの（L類：456～457）の12類である。

底部まで残存する資料は限られるが、概ねA類・B類・C類は粘土を継ぎ足して造られた平底甕、E類・F類・H類・I類は脚部を持つ台付甕と思われる。調整痕は外面が上部で縦位ハケ調整、最大頸部で斜位ハケ調整、内面はケズリカイタナデまたはハケ調整が施されるものが多い。

363は甕A類で口縁部がやや厚く体部は砲弾形を呈する。364は甕A類で口縁部がやや薄く体部は球形に近くなるもので、甕A類はこの形状のものが多く、甕A類の内面は口縁部が横ハケ調整、底部が斜めハケ調整、それ以外の体部の大部分がケズリカイタナデ調整が施されているが、374は体部の大部分を斜めハケ調整。375は体部の大部分を斜めハケ調整の後にイタナデ調整が施されている。外面ハケ調整を基調とする甕B類の中で、383・474は下半部でハケ調整の後にタタキ調整が認められる。403は甕C類で体部中央に部分的なミガキが施されている。410は台付甕H類で体部上半部の外面にハケ調

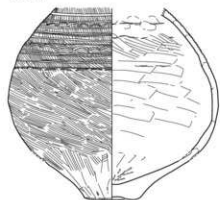
整が残存していない。417は小型の台付甕H類で脚部は著しく低い。424～427はいわゆるS字状口縁台付甕で424はB類、426・427はA類に属する。428は有段口縁甕で口縁部外面に連続刺突が巡る。429は屈曲して開く口縁部が内彎しその端部で短くS字状に折れるものである。445は小型の甕D類になるが、体部下半に粗いハケ調整が残る。446は小型甕で甕A類に近い形状を持つが、体部下半に焼成後の穿孔が施されるものである。447は甕G類で体部外面にミガキ調整がみられる。445は小型の甕B類で体部外面下部にミガキ調整がみられる。

468～487は甕底部と思われる土器片であるが、壺との区別が難しい資料も存在する。476・485・486の外面下部にミガキ調整が認められる。488～506は台付甕の脚部で、490はS字状口縁台付甕に作うものと思われ、胎土も白色系を呈する。これらは脚端部に面を持つものが多いが、500～503のように端部が丸みを持つものもある。

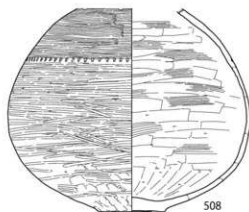
507～562は壺類で、507～527・538・541・542は広口壺、543～551・556は直口壺、540・557・558は短頸壺である。507は体部外面全体がハケ調整された後に上部のみにヘラによる沈線と連続紋が施される。508は肩部にクシによる横位直線紋、胴部以下に横方向ミガキ調整がなされ、その境界部に連続刺突がある。509はやや外傾する口縁部端部にクシによる単斜方向の連続刺突があり、胴部のみがミガキ調整される。510は頸部と体部の境界部に突帯を持ち、体部外面上位にヘラによる沈線が巡る。ミガキ調整は確認できない。511は頸部と体部の境界部の突帯に連続刺突があり、体部外面上位にクシによる直線紋と波状紋の組み合わせが2組存在し、その下端部に連続刺突、下半部はハケ調整後に縦位ミガキ調整がみられ、胴部最大径部のみ横位角にミガキ調整が認められる。512～522はいわゆるバレススタイル壺である。512と514は口縁部外面に擬凹線紋と赤彩の上に4本の棒状浮紋が4単位施され、内面の頸部と口縁部の境界に稜を持つ。512は口縁部内面に部分赤彩が、514は棒状浮紋の横に円形浮紋と頸部内面に赤彩が施される。515・518も棒状浮紋があり口縁部内面にクシによる連続羽状刺突が巡り、518には擬凹線紋が確認される。513・522は口縁部外面にクシによる連続羽状刺突

惣作遺跡

003NR



507



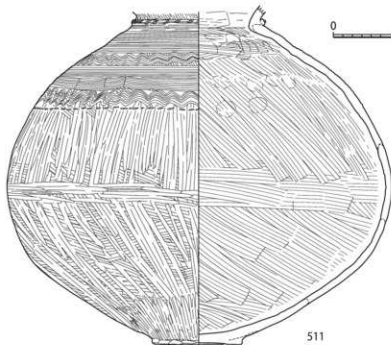
508



509

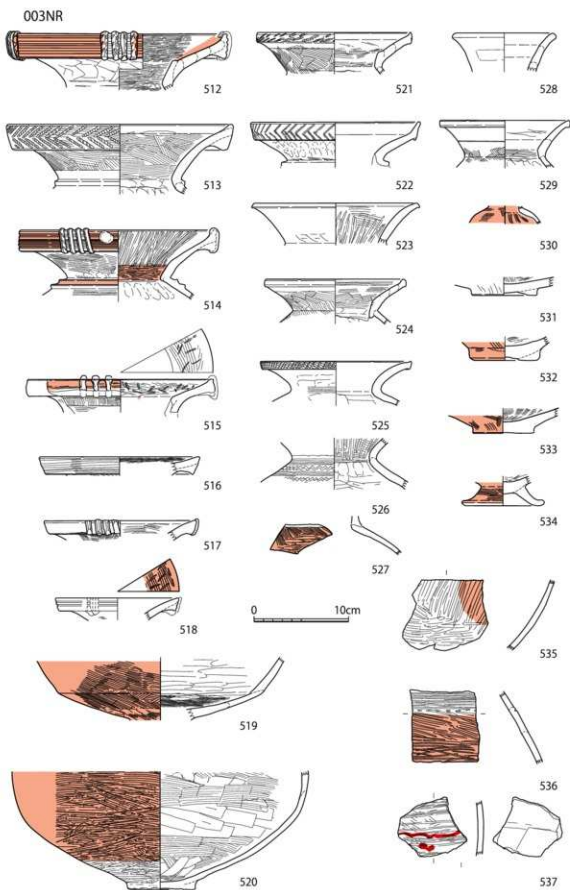


510



511

第70図 A期の出土遺物(31)



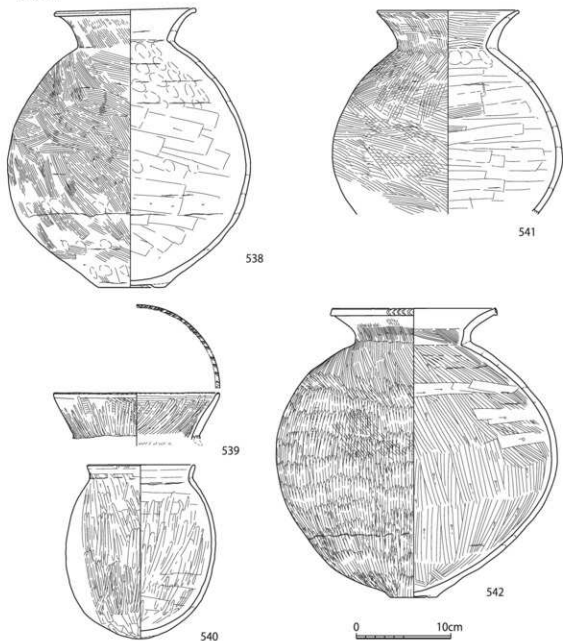
第71図 A期の出土遺物(32)

惣作遺跡

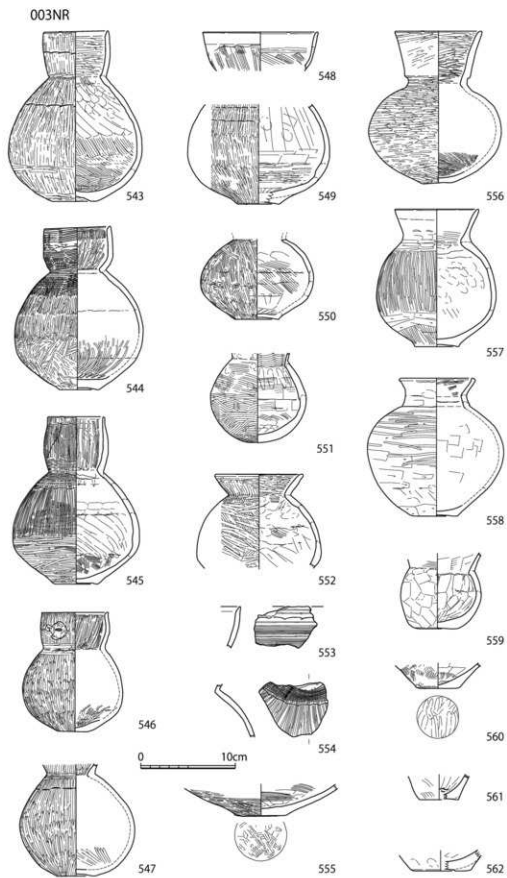
が、521は同じ部分にクシによる連続斜位刺突が巡り、517は棒状浮紋が施されるが、これらは赤彩が確認されなかった。519と520は底部片で外面に赤彩が認められる。523は口縁部内面にミガキ調整が残り、524は口縁部内面に稜があり、525は口縁部端面に連続刺突がみられる広口壺の口縁部である。526は体部上位にクシによる直線紋と波状紋が施され、527は赤彩が残る。528は単純口縁の壺である。531～534は壺底部と思われ、532～534は赤彩が認められる。534は外反する脚部を持つ。

535～537はいわゆるバレススタイル壺の体部片と思われる。538と541は端部がやや尖り気味の単純口縁で全体には特に装飾は認められない壺形土器で、外面にハケ調整が、内面にハケ調整またはイタナデ調整が施される。539は口縁部上端面にハケによる連続刺突がある広口壺で、口縁部内外面にミガキ調整が残る。540は著しく低い口縁部を持つ短頸壺で、体部内外面にミガキ調整がなされる。542は口縁部端面に連続羽状刺突がある広口壺で、外面にミガキ調整が丁寧になされる。

003NR

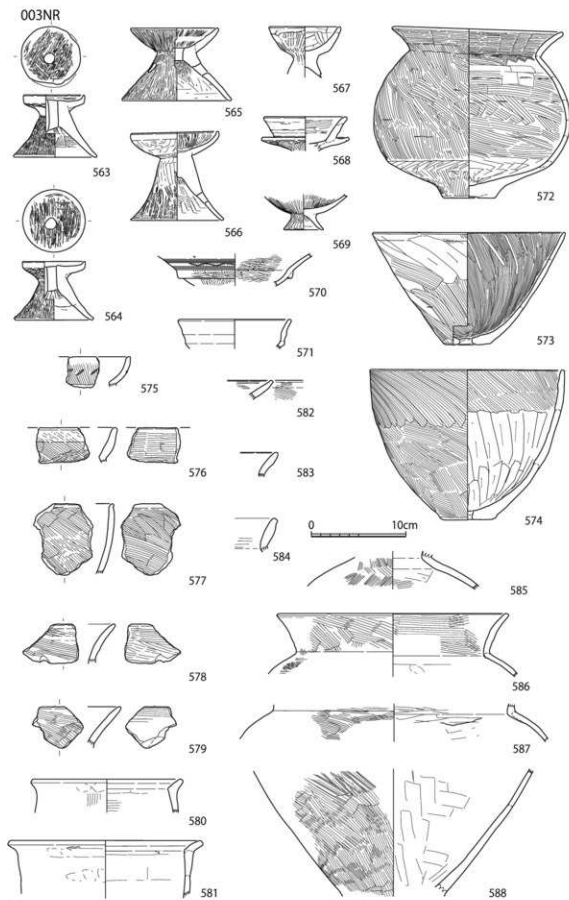


第72図 A期の出土遺物(33)

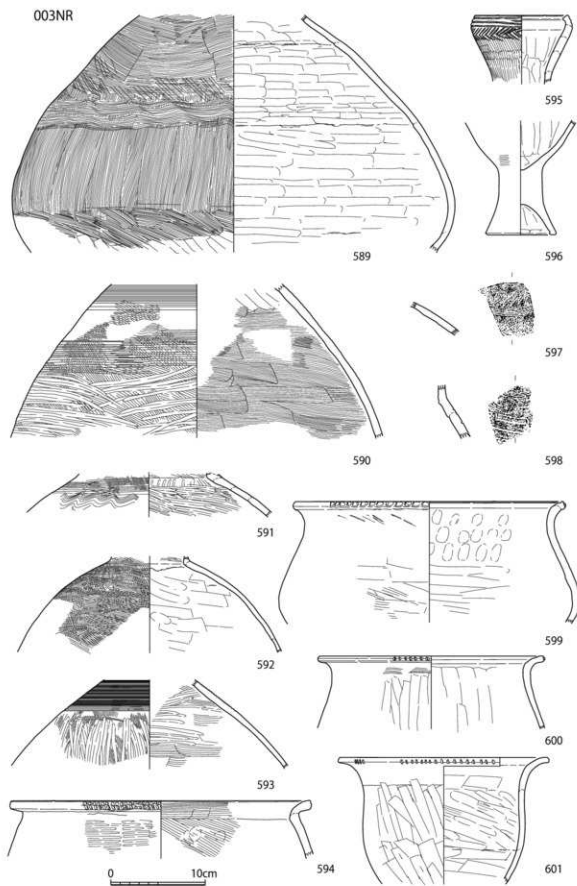


第73図 A期の出土遺物(34)

惣作遺跡

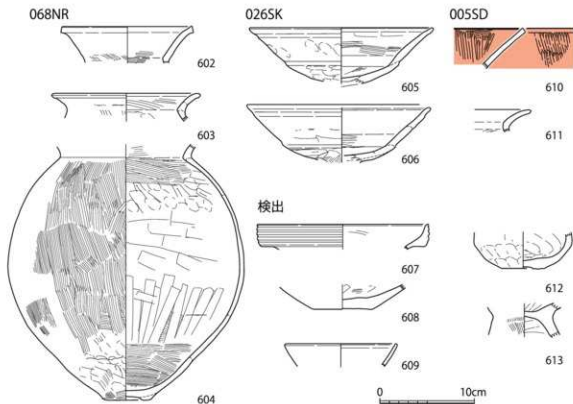


第74図 A期の出土遺物(35)



第 75 図 A 期の出土遺物 (36)

製作遺跡



第76図 A期の出土遺物(37)

543～562は小型壺で、外面はハケ調整後に丁寧なミガキ調整が、内面はハケ調整またはイタナデ調整が施されるものが多い。543～549はいわゆるヒサゴ壺である。543は緩く内彎する直立した口縁部中央と体部上方の2ヶ所に二枚貝による横位連続刺突が巡り、最大径部直下と底部付近の2ヶ所に横位のミガキ調整がある。544は口縁部のミガキ調整が分かりにくい二枚貝による横位連続刺突が外面中央に巡り、体部上位にクシによる横位直線紋がある。外面下半はランダムなミガキ調整、口縁部と体部下半の内面にも縦位ミガキ調整がなされる。545は口縁部外面上下両端部に二枚貝による横位連続刺突があり、その間に二枚貝による斜位刺突が並ぶ。体部上位にも二枚貝による横位連続刺突があり、その上部にクシによる横位直線紋が巡る。546は口縁部と体部の境界部外面に横位のミガキ調整がある。口縁部の一部が剥離している。547・549・554は体部上位に二枚貝による横位連続刺突が巡る。550は全体がやや扁平な小型平底壺、551は外面がハケ調整のみの小型丸底壺、552・557は単純口縁の小型広口壺で、552はランダムなミガキ調整が、557は縦位ミガキ調整が残る。553はいわゆる

ヒサゴ壺と思われる、クシによる横位直線紋と二枚貝による横位連続刺突が口縁部外面を巡る。555は壺底部で外底面にもランダムなミガキ調整が残る。556は口縁部が幅広い縁帯状となる小型壺で、外面と口縁部内面に横位のミガキ調整が施され、狭い平底となる。558は頸部が屈曲し口縁部が開く小型壺で、粗い横位のミガキ調整がある。559は指オサエまたはイタナデ調整される小型壺、560は外底面にも一方向のミガキ調整が残る。

563～565は器台で、563・564は口縁部が短く直立するもの、565は口縁部が逆ハ字状に開くものである。上面のミガキ調整は、563がランダムな方向、564は一方、565は放射状になされる。566・567は小型高杯、568は杯部の外側に罅状の受部を持つ高杯？、569は脚部が低く杯部が椀型となる高杯？である。570は外面にクシによる横位直線紋や二枚貝による連続刺突が施されるもので、精製の高杯か。571は形状が356・357に似るが焼成の雰囲気は異なる。

572はくの字状口縁を持つ鉢で、外面は口縁部が横ハケ調整、体部は斜めハケ調整、底部はケズリ調整とハケ調整が施される。573と574は体部が逆

ハ字状に開きそのまま口縁端部に至る鉢で、底部中央に穿孔が認められる。579～588は08Ab区から出土した裏口縁部などの土器片である。

589～601は003NRから出土した弥生土器である。589～593は太頸歯の体部片で、589・592は不揃いな工具による波状紋が、590は不揃いな工具による直線紋が、591は不揃いな工具による直線紋と波状紋が、593はクシによる直線紋が施される。594は口縁部端面にイタによる連続刺突がある裏、596は台付裏の脚部である。595は細頸歯の口縁部で、外面上部にハケ状工具による横位連続刺突を施して3条の凹線紋を模しており、その下位にハケ状工具による羽状の連続刺突が巡る。凹線紋系土器の模倣と思われる。597・598は体部外面にクシによる施紋が残る壺片である。599～601は口縁部端面にイタによる連続刺突が巡る裏である。

08C区 068NR 出土遺物（第76図602～604） 近世の自然流路であるが、広口壺の口縁部（602）と裏（603・604）などが出土した。

09B区 026SK 出土遺物（第76図605・606） 605・606は高杯の杯部で底部から屈曲した口縁部は緩やかに反転するもので、古墳時代中期（松戸式期に併行）に属する。

08B区 0055D 出土遺物（第76図610・611） 610は高杯の杯部で口縁部は直線的に開き赤彩が認められる。611は単純口縁をもつ裏片である。（鈴木正貴）

(2) B期

08Aa区 水田遺構出土遺物（第77図614・615） 水田遺構からは須恵器や土器器が出土している。しかし09C区で山茶碗が出土していることから、これらが水田の時期に直接関わらないことが判明する。614は須恵器長頸壺、615は土師器三河型裏で8世紀後葉～9世紀初頭である。

08Aa区 0775B 出土遺物（第77図616） 616は土師器三河型裏で、8世紀後葉～9世紀初頭である。

08A区・08B区 003NR 出土遺物（第77図617～659） 出土遺物は、取り上げ時に明らかに003NRと判明したもの他、検出面やトレンチで出土しながら位置関係から003NRに該当すると考えられるものも含んでいる。実測図は、08A・B区各々について須恵器・灰釉陶器・土師器の順に提示する。

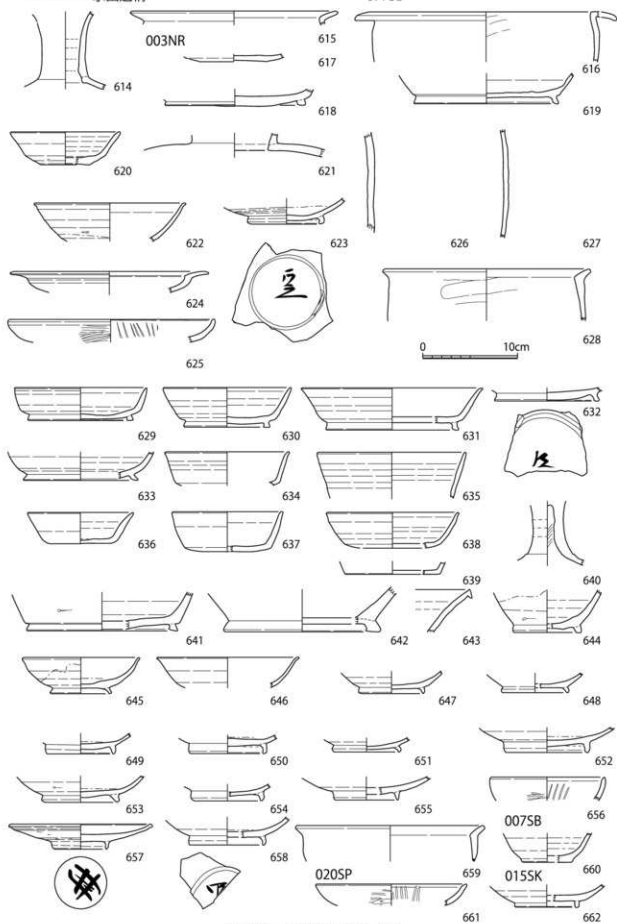
08A区は流路右岸に相当し、同左岸に相当する。08B区に比較して土器出土量は少なく、特に灰釉陶器では圧倒的な差がある。617・618・620は須恵器杯で概ね8世紀代である。619は平瓶の底部とみられる。621は瓶頸の頸部。626・627は須恵器裏の胴部。622～624は灰釉陶器である。623の底部外面には「豆」の墨書がある。624は段皿である。概ねK-90号窯期と考えられる。625は土師器皿で内面に放射状の暗文、外面は丁寧なヘラミガキがなされる。産地は不明である。628は土師器三河型裏で、口縁が短く屈曲部が厚いことから9世紀後半と考えられる。

08B区では須恵器・灰釉陶器ともに供膳具が目立つ。629～635は須恵器杯である。629がC-2号窯期（8世紀前葉）、それ以外はNN-32号窯期～O-10号窯期とみられる。632は底部外面に判読不明の墨書がある。636～639は須恵器無台杯である。637はC-2号窯期、626・638はNN-32号窯期、639はO-10号窯期である。640は高盤の脚部。641は平瓶の底部。642は水瓶の底部である。643は裏の口縁部で、いずれもO-10号窯期に相当するであろう。645～655は灰釉陶器極もしくは皿である。三日月形の高台が多いことからK-90号窯期を主体とし若干O-53号窯期も含まれるであろう。656は内面に暗文のある土師器杯もしくは杯である。外面横方向のヘラミガキは疎らである。産地は不明である。

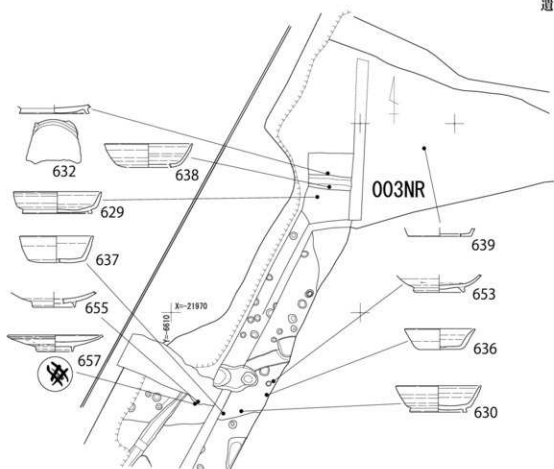
08B区では、土層断面観察による分層にある程度対応して遺物の取り上げを行っており、流路堆積の下位（第5層）から上位（第2層）への時間的推移をたどることができる。多くは流路の緩斜面から出土している（第78図）。第5層からは629や639の須恵器が出土しており、8世紀代に相当する。次いで第4層からは634・640が出土しており、8世紀後葉に相当する。これら（特に第5層）は基本的には混入資料と思われるが、第4層および第5層上位の堆積時期を反映している可能性がある。第3層からは灰釉陶器が出土しており、第2層も合わせて9世紀後半～10世紀前半に相当する。なお646の灰釉陶器は第5層出土とされているが、出土グッドは調査区内でも不安定な状況下にあったため正確ではない。このように当該流路は8～10世紀の

惣作遺跡 水田遺構

077SB



第 77 図 B 期の出土遺物 (1)



第78図 O8B区 O03NR B期の遺物出土分布図

間に進行した堆積であることが示されるが、9世紀前半に相当する遺物がほとんど見られない点は注意しておかねばならない。

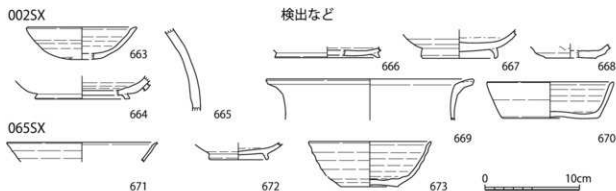
O8B区 0075B 出土遺物 (第77図 660) 660は須恵器無台椀である。底部は糸切り離してO-10号窓期。

O8B区 0205P 出土遺物 (第77図 661) 661は土師器椀で、内面に放射状の暗文、外面に疎らなヘラミガキがなされる。産地は不明である。7世紀後半

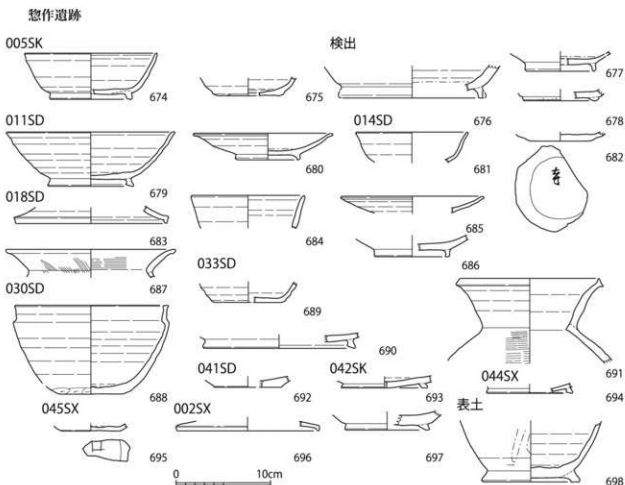
～8世紀前半であろう。

O8B区 0155K 出土遺物 (第77図 662) 662は灰釉陶器椀。K-90号窓期で9世紀後半。

O8B区 0025X・0655X・その他の出土遺物 (第79図 663～673) 近世の掘り込み O025Xには須恵器なども混入している。663は須恵器無台椀、664は厚みのある椀で体部に融着がある。665は甕の胴部。同じく O655Xでも須恵器椀 (671)・灰釉陶器椀 (672) が出土している。検出面では8世紀前



第79図 B期の出土遺物(2)



第80図 B期の出土遺物(3)

半と考えられる須恵器杯(666)からK-90号窯期で9世紀後半と考えられる灰軸陶器碗(667)までの遺物が出土している。量が極端に多いわけではないがO-10号窯期で8世紀後葉と考えられる須恵器(668・670・673)が目立っており、08B区の遺構の主要な時期を示しているものと解される。

09A区0055K出土遺物(第80図674・675) 674・675は須恵器有台・無台杯でいずれもO-10号窯期古段階で8世紀後葉に位置づけられる。

09A区その他の出土遺物(第80図676～678) 676は須恵器瓶類の底部であるが、復元される底径から平瓶の可能性が考えられる。O-10号窯期以降で8世紀末～9世紀代である。677は灰軸陶器碗でK-90号窯期。678は山茶碗で底径から初期段階とみられる。

09B区0115D出土遺物(第80図679・680) 679は須恵器碗。O-10号窯期。下層の0305Dで出土した破片と接合しており、広口壺(688)とほぼ同じ時期に使用されたものであろう。680は灰

軸陶器皿。小さく三日月高台で口縁は玉縁となる。K-90号窯期古段階で9世紀中葉。破片は併行する0295Dやそれを切り込む0145Dなどでも出土している。0295D・0305Dとして掘られた斜行溝の埋没時期を示すと考えられる。

09B区0145D出土遺物(第80図681) 680はもともと0295Dに含まれていたものである。681は須恵器碗。遺構の重複関係から0145Dは680よりも新しい時期と考えられるが、直接それを示す遺物の出土はない。

09B区0185D出土遺物(第80図682～687) 出土遺物は小片が多い。682は須恵器無台杯で底部全面をヘラケズリする。底部外面に「寺」墨書がある。O-10号窯期古段階で8世紀後葉に位置づけられる。683・684は須恵器の蓋・杯でO-10号窯期。685は灰軸陶器皿。686も灰軸陶器碗でK-90号窯期。0185Dが埋没した時期の上限を示すものと考えられる。687は土師器裏。口縁内外面にハケ調整痕がみられる。古墳時代中期もしくは7世紀後半～

8世紀前葉の長胴甕の可能性もある。

09B区030SD出土遺物(第80図688)688は須恵器広口壺。胴部立ち上がりにヘラゲズリがなされる。頸部の屈曲が少なく、時期は8世紀中葉とみられる。

09B区033SD出土遺物(第80図689~691)689は須恵器無台杯、0-10号室期。690は須恵器杯もしくは盤。038SDや042SK出土の破片もこれに接合した。691は須恵器甕。口縁端部は斜めで胴部外面に平行タタキ痕がみえる。

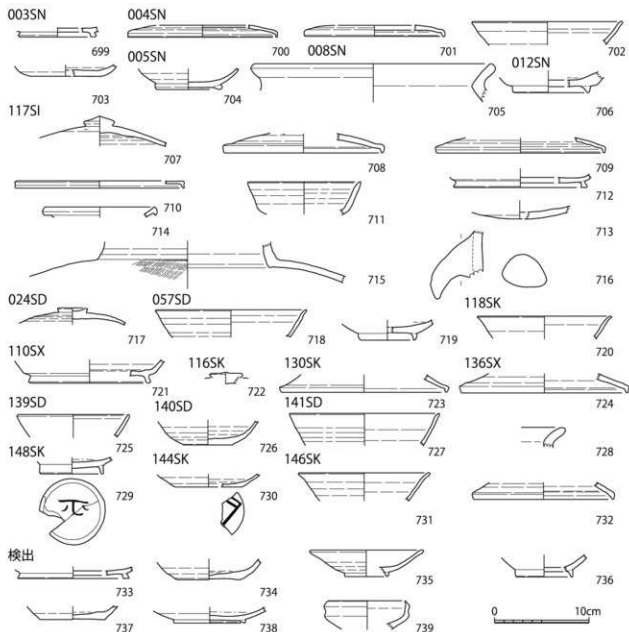
09B区041SD出土遺物(第80図692)692は須

恵器無台杯。

09B区042SX出土遺物(第80図693)693は須恵器杯もしくは盤の底部。高台より底部がやや下へ突出する。8世紀代とみられる。

09B区044SX出土遺物(第80図694)694も693と同様である。8世紀代の可能性が考えられる。09B区045SX出土遺物(第80図695)695は須恵器無台杯の底部。外面に焼成前の刻書がある。「#」のようである。

09B区002SX出土遺物(第80図696)須恵器蓋である。滑らかな曲線でかえりも小さい。8世紀前



第81図 B期の出土遺物(4)

惣作道跡

半である。

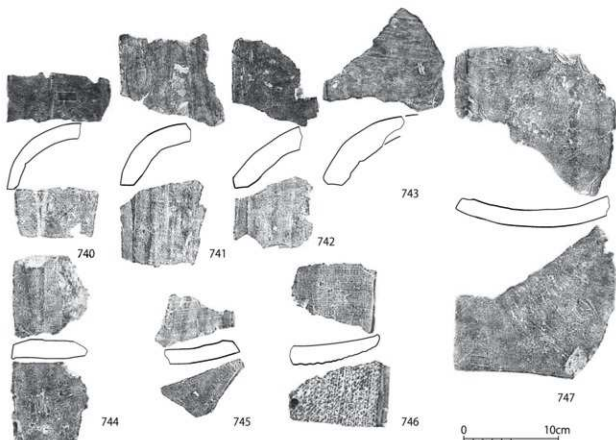
09B 区検 1・表土の出土遺物 (第 80 図 697・698)

697 は山茶碗であるが、貼付けの高台が明瞭で比較的初期段階のものである。09C 区水田遺構で出土したもの (675) に近い。11 世紀後半を中心とする時期である。698 は須恵器水瓶の底部である。外面に自然釉が流下する。8 世紀末～9 世紀代である。09C 区水田遺構 (SN) 出土遺物 (第 81 図 699～706) 水田遺構を検出した黒色粘土層は、その下面で検出された古代の集落遺構に関わる遺物包含層である。したがって、出土遺物の大半は須恵器 (699～703)・土師器 (705)・灰軸陶器 (704) である。須恵器は概ね 8 世紀前半で、土師器は 9 世紀後半の三河型甕である。灰軸陶器は H-72 号窯期であろう。そして注目されるのが水田遺構である掘削畦畔直上で出土した初期段階の山茶碗 (706) で、出土遺物の時期幅の下限に位置している。水田が機能していた時期の一定点を示す資料である。

09C 区 117SI 出土遺物 (第 81 図 707～716) 須恵器と土師器がある。須恵器は蓋 (707～710) と

杯 (711～713) と瓶類の口縁部 (714) と甕 (715) がある。いずれも小片であるが、8 世紀前葉～中葉のものであり、117SI の時期を示していると考えられる。土師器は把手部分であるが大きさから移動式竈の把手と考えられる。117SI では造り付け竈跡は検出されなかったことから、こうした移動式竈を使用していた可能性も考えられる。

09C 区土坑・ピット出土遺物 (第 81 図 717～731) 竪穴建物以外からは散発的に小片が出土する程度である。概観すると須恵器・灰軸陶器が大半で若干の土師器 (728) がある。須恵器無台椀 (726) などは 8 世紀後葉の可能性があるがこの時期の遺物はごく少数である。注目されるのは掘立柱列とその周辺で墨書土器 2 点が出土していることである。729 は灰軸陶器で、K-90 号窯期～O-53 号窯期の椀の底部外面に明瞭な墨書がある。「心」にも読めるが、変形させて花押のような使い方をしていたのかもしれない。730 は須恵器無台椀の底部外面墨書である。門構えの一部のようでもあるが判読不明。器自体は薄く緩い立ち上がりで 9 世紀中葉のもので



第 82 図 B 期の出土遺物 (5)

考えられる。

09C 区検出面・その他の出土遺物（第 81 図 732～739） 検 2 面は古代集落遺構の検出面であり、出土遺物は須恵器・灰釉陶器がほとんどである。須恵器（732～734）は概ね 8 世紀前半～中葉である。灰釉陶器（735・736）は 9 世紀後半以降で、8 世紀後半～9 世紀前半の空白期間があることがわかる。トレンチ出土遺物も同様の傾向を示すが、739 のように一見須恵質な焼成で白色を呈する土器については時期等不明な点がある。中世以降のものかもしれない。

瓦（第 82 図 740～747） 瓦は総破片で 83 点出土しており、全てが古代のものである。当該遺跡の南西約 300m には 7 世紀後半創建の古代寺院である寺願庵寺があり、そこで使用された瓦と共通する点が多い。そのため寺願庵寺への供給瓦が流出した可能性も考えられるが、これまでの発掘調査で、04C 区では比較的大きな破片の丸・平瓦が 75 点出土しており、ここを中心として遺跡内に瓦葺き建物があつた可能性を想定しておく必要がある。ここでは丸瓦と平瓦に大別して報告するが、丸・平瓦を通じた傾向として、凸面のナデをおこなうものが多い点が指摘されよう。

740 は無段式丸瓦である。裁頭円錐形模骨に粘土板を巻き付けて成形したもので、凸面は全面横方向へラナデでタタキは不明。凹面は布目痕と分割界線、側縁はヘラケズリによる面取りがみられる。08B 区 003NR 第 2 層出土。741 は有段式もしくは無段式丸瓦である。一木の模骨に粘土板を巻き付けて成形したもので、凸面は縦方向の指ナデ、凹面は布目痕と側縁のヘラケズリによる面取りがみられる。色調は明灰褐色で焼成は硬質である。08B 区の包含層出土。742 は無段式丸瓦である。側板連結模骨に粘土板を巻き付けて成形したもので、凸面は全面指ナデするものの格子タタキらしき痕跡がみえる。凹面は模骨の側板痕と布目痕がある。側縁は 2 度ヘラケズリによる面取りをする。色調は青灰色で焼成は硬質である。08B 区の包含層出土。743 は無段式丸瓦である。裁頭円錐形模骨に粘土板を巻き付けて成形したもので、凹面に粘土板切り出し時の糸切痕と、分割の目印を刻み込むために模骨に付属させた組痕

（分割界線）がみえる。凸面を全面ナデしておりタタキは不明。色調は暗灰褐色で焼成は硬質である。側縁は凸・凹面で 2 度のヘラケズリによる面取りをする。08Aa 区 003NR 出土。

744 は反りが全くなく、製斗瓦の可能性が考えられる。桶巻き作りで成形し、凹面に布目と側縁にヘラケズリによる面取りがみられる。凸面は横方向へラナデしておりタタキは不明。色調は明褐色で焼成は硬質。08B 区包含層出土。745 は桶巻き作りで成形し、凸面は丁寧な指ナデでタタキは不明。08Ab 区 003NR 出土。746 は凸型成形形による一枚作りである。凹面は布目のみみられ、凸面は側縁平行の縄タタキ痕がある。凸面側縁をヘラケズリによる若干の面取りをする。色調は灰褐色で焼成は硬質である。08Aa 区 003NR 出土。747 は桶巻き作りで成形し、凹面に布目とわずかに模骨痕がみえる。凸面は斜位の縄タタキのちナデ消している。色調は灰白色で焼成は硬質である。08B 区の包含層出土。（永井邦仁）

（3）C 期

08Aa 区・08B 区 003NR 出土遺物（第 83 図 748～756） 003NR では第 1 層を中心に中世以降の遺物が出土しているが、概ね 9 世紀後半～10 世紀前半に属する第 2・3 層からも新しい資料が散見される。748～753 は尾張型山茶碗で概ね第 5 型式から第 6 型式に属する。754 は土師器内埴形内耳鍋で、口縁部が直線的にやや開くもので、16 世紀前半頃に位置づけられる。755 は瀬戸・美濃窯産陶器鉢鉢で大室前半。756 は常滑窯産陶器赤物製品の底部であり、16 世紀以降のものであろう。

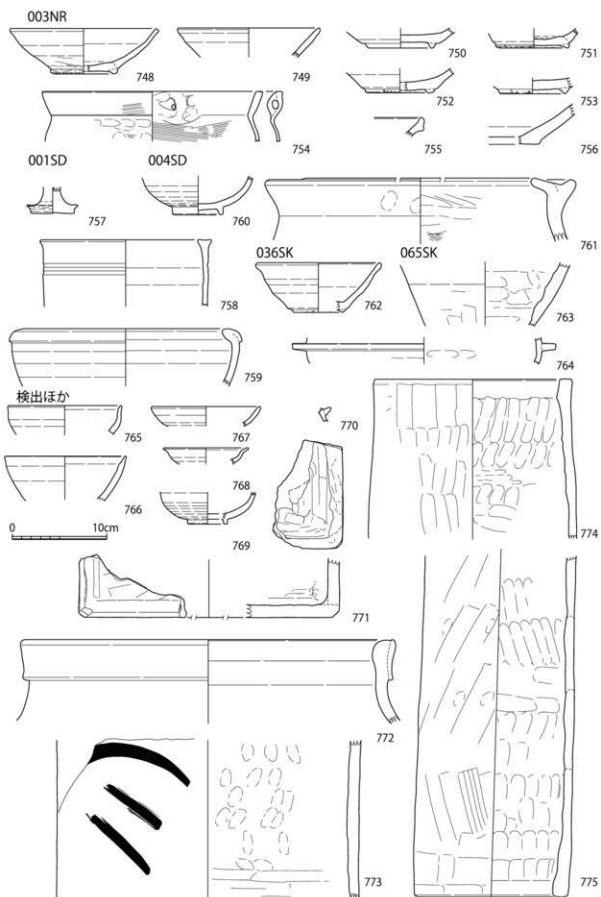
08B 区 0015D 出土遺物（第 83 図 757～759） 757 瀬戸・美濃窯産陶器鉄軸乗轡、758 は瀬戸窯産陶器鉄軸半副轡、759 は瀬戸窯産陶器灰軸火鉢で、いずれも 19 世紀前半に位置づけられる。

08B 区 0045D 出土遺物（第 83 図 760・761） 760 は瀬戸・美濃窯産陶器灰軸丸碗、761 は常滑窯産陶器赤物轡で概ね 18 世紀の属する。

09B 区 0365D 出土遺物（第 83 図 762） 762 は第 7 型式に属する尾張型山茶碗である。

08C 区 0655X 出土遺物（第 83 図 763・764） 763 は古瀬戸製品の壺または瓶類、764 は土師器羽付釜の跨部である。764 は 15 世紀後半～16 世紀

惣作遺跡



第 83 図 C 期の出土遺物

に属する。

その他の出土遺物（第83図765～775）765・766は瀬戸・美濃窯産陶器天目茶碗で、前者は08C区深掘調査、後者は08B区表土から出土している。767は大窯第2段階の灰釉丸皿、768は大窯第1段階の灰釉端皿、769は腰鉋茶碗で08A区の出土資料である。770は09A区から出土した土師器内壺型羽釜の鈎部である。771～775は常滑窯産陶器赤物製品で、771・773は08B区、772は08A区、774・775は08C区068NRの上層から出土した。771は平面長方形の火鉢類、772は赤羽中野編年11型式に属する甕、773は外面に墨書が記された井筒？、774・775は土管である。（鈴木正貴）

第2節 木製品

木製品の所属時期は出土遺構から、深掘調査：古井式期？、08Aa区・08B区003NR第5層：縄間Ⅱ式期、08Aa区・08B区003NR第3層：古代（10世紀？）、08C区068NR・08B区002SX：江戸時代後期と考えられる。

以下、古い時期から順を追って記述を進めていくが、最後に古代の木簡を紹介する。

(1) 深掘調査出土木製品（第84図776～779）

概ね古井式期に属する資料である。776はコナラ節の芯持ち材で、上端部が二又に分かれることから、竪穴建物の柱材である可能性が高い。777と778は幅の狭い板で、樹種は777がヒノキ、778がタケ亜科。779は残材で、樹種はエノキ属。

(2) 08Aa区・08B区003NR第5層出土木製品

縄間Ⅱ式期に属する木製品は82点で、掘削具（780～788）、農具（789）、工具（790・791）、調度品（792）、容器（793～797・799）、祭祀具・威儀具（798・800）、建築部材（801～813）、土木材（814・819・820）、丸棒（815～817・821～823）、角棒（824～828）、板（829～848）、分割材（849～857）、丸太（858～860）がある。掘削具（第85図780～788）780は伊勢湾型曲柄鋸の軸部で、筆者分類のD類に属する（極土2000）。樹種はコナラ節であることから、曲柄平鋸であることがわかる。783・784・786・787はい

ずれも伊勢湾型曲柄平鋸の刃部で、筆者分類のI類にあたる。すべて樹種はコナラ節。781は伊勢湾型曲柄三又鋸で、樹種はアカガシ亜属。782は伊勢湾型曲柄四又鋸で、軸部はC類。樹種はアカガシ亜属。785・788は上記曲柄鋸の膝部で、いずれもサカキの枝分かれ部分を用いる。

農具（第86図789）789は白で、周囲3方向に棒状の把手を残して透かし彫りを入れる、いわゆる把手白である。樹種はケヤキの芯持ち材を用いている。

工具（第86図790～791）790は横斧柄で、台部の先端には袋状鉄斧を装着するよう、作られている。台部には一条、凸帯をめぐらせ、鉄斧装着部分も丁寧にヤリガンナで加工をほどこすなど、通常の横斧柄とは異なるきわめて精巧な作りである。樹種はアカガシ亜属の枝分かれ部分を用いる。

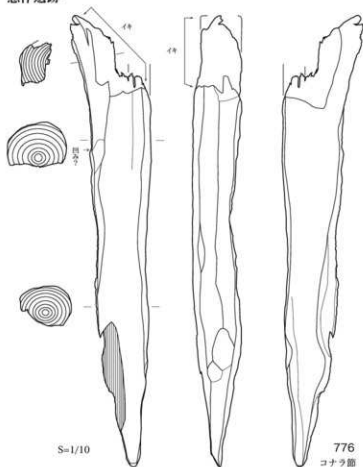
791はヒノキの楕目板で、図面上の中央から下端部にかけて、薄く仕上げられていることから、ヘラと判断した。

調度品（第86図792）792は案（肘掛け）で、両端部付近に脚部を差し込むための、方形の穿孔をほどこす。樹種はツブラジイの板目材。

容器（第87・88図793～797・799）799は長軸8.2cm、短軸4.4cm、高さ2.0cmで、平面が楕円形を呈し、わずかな立ち上がり部分の周囲には15カ所の穿孔があり、さらに底部中央にも穿孔をほどこす。立ち上がり部分の穿孔からカゴ状のものを編んで立ち上げたものと考えられることから、カゴの底板としている。樹種はヒノキ。愛知県内では、春日井市勝川遺跡と一宮市八王子遺跡からほぼ同形のものが出土しているが、この両者については、底部中央の穿孔はない（愛知県埋蔵文化財センター1992・2001）。

796は破片資料で接合する部分はほとんどないが、底部の4カ所に低い脚がつく槽である。平面形は隅丸長方形になると思われる。樹種はクスノキの2分の1分割材からの横木取り。794はクリの横木取り2分の1分割材を用いた槽で、平面は長方形を呈する。793・795もクスノキの横木取り2分の1分割材から作った槽で、平面形は長楕円形を呈し、793には破損後に再接合をおこなったとみられる穿

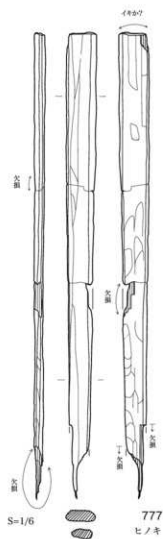
惣作遺跡



S=1/10

776

コナラ属



S=1/6

777

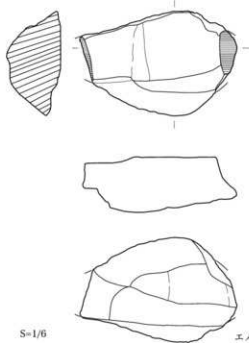
ヒノキ



S=1/2

778

タケ類科

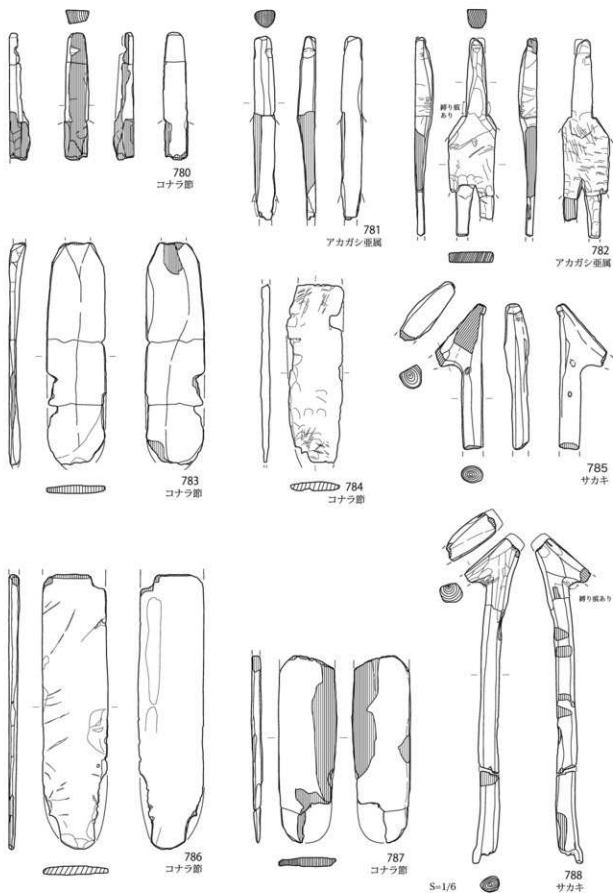


S=1/6

779

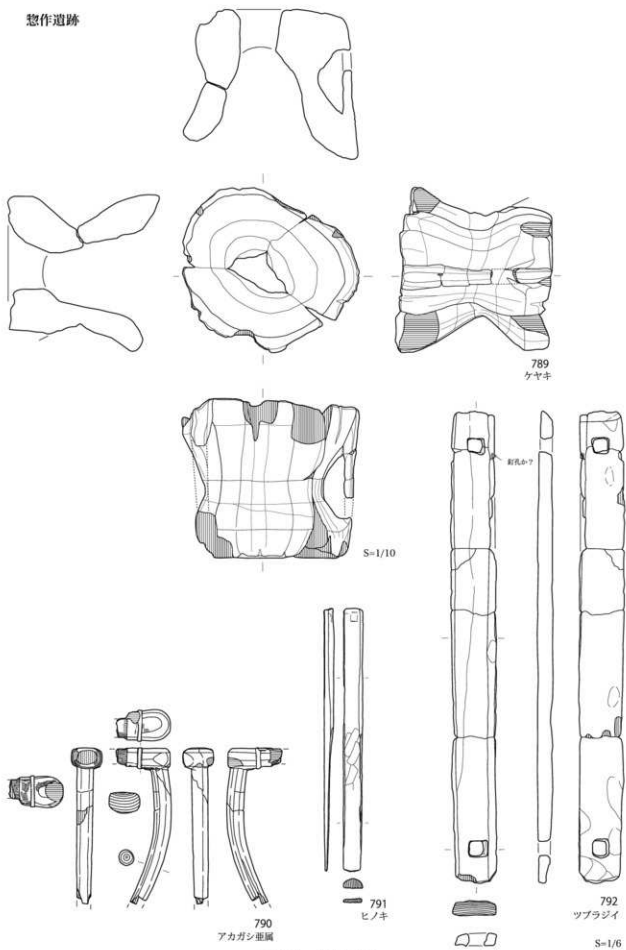
エノキ属

第84図 木製品(1)

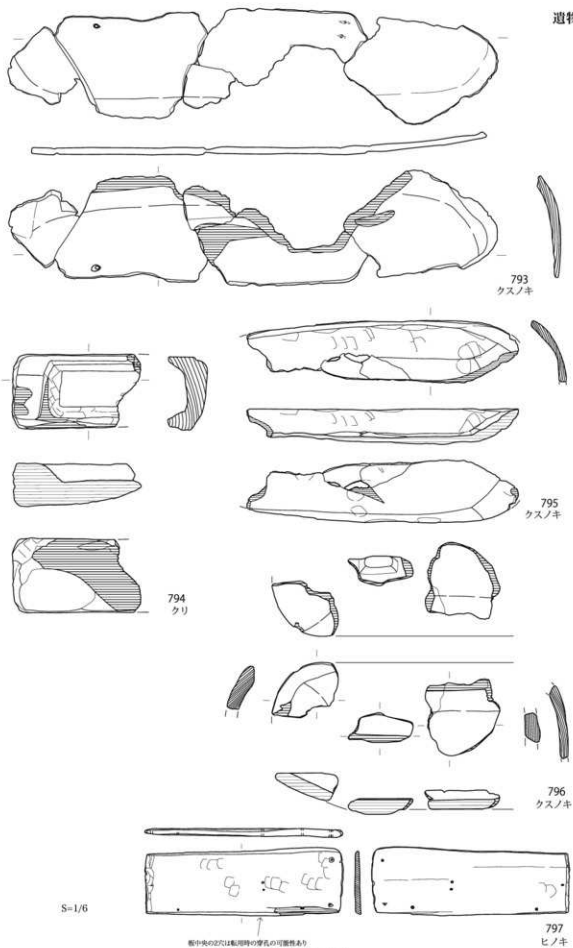


第85図 木製品(2)

惣作遺跡



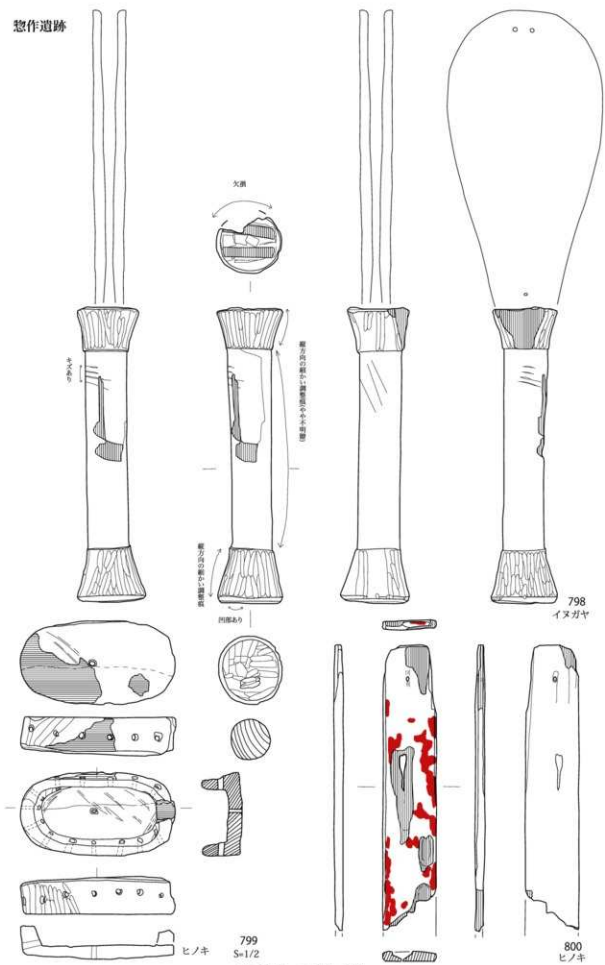
遺物



箱中央の穴は私印時代の穿孔の可能性あり

第 87 図 木製品 (4)

惣作遺跡



第88図 木製品 (5)

孔がある。

797 は箱の側板で、短辺は片側に 2 カ所、もう一方に 1 カ所の穿孔、長辺は底部にあたる辺に 2 カ所の穿孔があり、さらに中央付近にも縦方向に 2 カ所の穿孔をほどこす。樹種はヒノキの板目材。

祭祀具・威儀具 (第 88 図 798 ~ 800) 798 は団扇形木製品で、獣毛や鳥の羽などを挟み込んだと考えられる 2 枚の板からなる要部は欠損しているが、受部の上面に要部の痕跡が残っている。握部はほぼ直線的で、受部と鍬部はわずかに段をなしてハの字状に広がる。受部と鍬部には縦方向のヤリガナ痕が明瞭に残る。残存長は 15.6cm で、鈴木裕明氏による団扇形木製品の分類では、③類に属する。鈴木氏によると、これまで出土している③類の団扇形木製品はいずれも樹種がヒノキの心去り材 (分割材) を用い、畿内中樞部で製作されたとしている (鈴木 2001)。しかし本遺跡例はイヌガヤの分割材で樹種が異なるうえ、鈴木氏の実見でも他の③類と少し異なり、在地で製作した可能性を指摘されている。

800 はヒノキの板目材で、片面と図面上の上側面に赤彩をおこない、上端付近に穿孔をほどこす。用途は不明だが、何らかの祭祀具である可能性が高い。建築部材 (第 89 ~ 91 図 801 ~ 813) 801 ~ 805 は柱で、うち 802 ~ 804 は上端部に段を設ける。801 は丁寧に面取りをほどこす。樹種は 801 がマキ属、802・803・805 がコナラ節、804 がクスギ節で、いずれも芯持ち材。

806・807 は垂木で、樹種は 807 がマキ属、806 はクスノキ科の芯持ち材。

811 はマグサあるいは躰放しで、樹種はクリの板目材。両側に刃付が入る方形の穿孔部とそれに続く方立をはめ込む溝があり、図面上の左側に扉の軸穴が方立の溝に接して開いている。扉の軸穴は方形で、片側にしかないことから、片開きの扉であることがわかる。軸穴が貫通していないことから、躰放しである可能性が高い (奈良国立文化財研究所 1993)。扉を止めるための扉当りはない。

810 は棒子で、2 段のステップが残る。樹種はマツ属の芯持ち材。809 は輪なぎこみの細工をほどこす建築部材で、樹種はヒノキの 4 分の 1 分割材。808 はヒノキの板目材を用いた棒状品で、3 カ所に別材が当たった痕跡と思われる凹みがある。812 は

マキ属の 2 分の 1 分割材で、面取りした両側縁に別材を接合するための太栓をはめ込む穴を 2 カ所ずつ開けている。非常に分厚い床板あるいは壁材と考えられる。813 はコナラ節の芯持ち材で、2 カ所に切れ込みが入る。横架材として用いられた可能性が高い。

土木材 (第 92 図 814・819・820) 814・819・820 は杭。樹種は 814 がコナラ節、819 がスダジイ、820 がガマズミ属で、いずれも芯持ち材。

丸棒 (第 92 図 815 ~ 817・821 ~ 823) 815 は有袂丸棒で、コナラ節の芯持ち材。同様の有袂丸棒が竪下遺跡からも 2 点出土している。817・818 はヒノキ、816・821・822 はマキ属、823 はアカガシ亜属の丸棒。

角棒 (第 93 図 824 ~ 828) 824 はマキ属の有頭角棒。825 は 2 カ所に穿孔を有するスギの角棒。826 はヒノキ、827 はスギ、828 はアカガシ亜属の角棒。

板 (第 93・94 図 829 ~ 848) 830・831 はヒノキ、829・832 ~ 834 はツブラジイの穿孔板。835 ~ 844・846 はヒノキ、845 はサワラ、847・848 はクリの板。

分割材 (第 95・96 図 849 ~ 857) 849 はクスギ節の 2 分の 1 分割材で、両端部付近に浅く方形の溝を彫る。850 はクスギ節の 8 分の 1 分割材。851 はヒノキ、852 はクリ、853 はツブラジイ、855 はエノキ属、854 はムクノキの 4 分の 1 分割材。856・857 はムクノキの 2 分の 1 分割材。

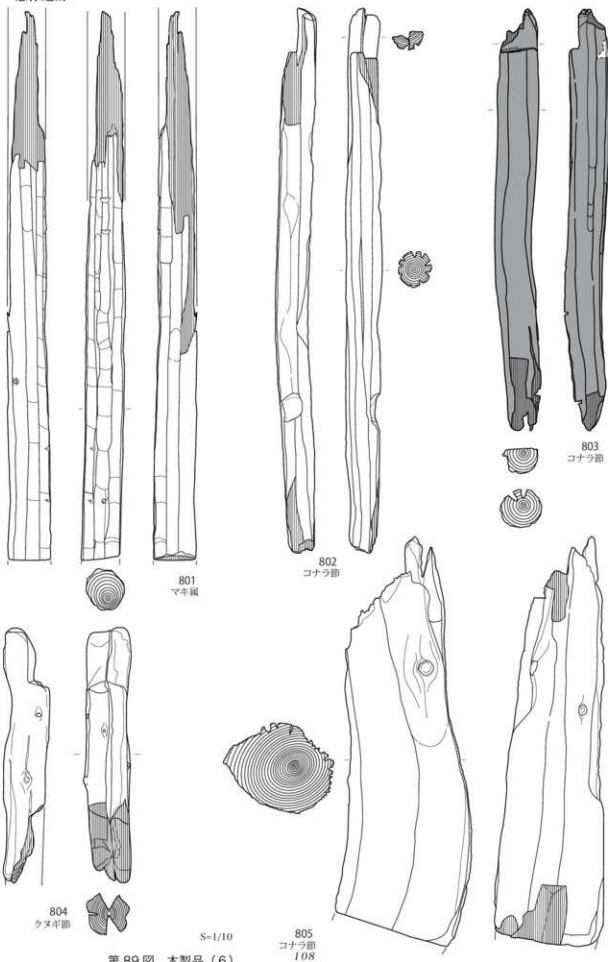
丸太 (第 96 図 858 ~ 860) 859 はコナラ節、858 はクリ、860 はムクノキの丸太。

(3) 08Aa 区・08B 区 003NR 第 3 層出土木製品

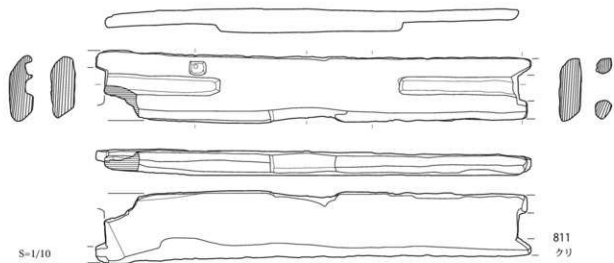
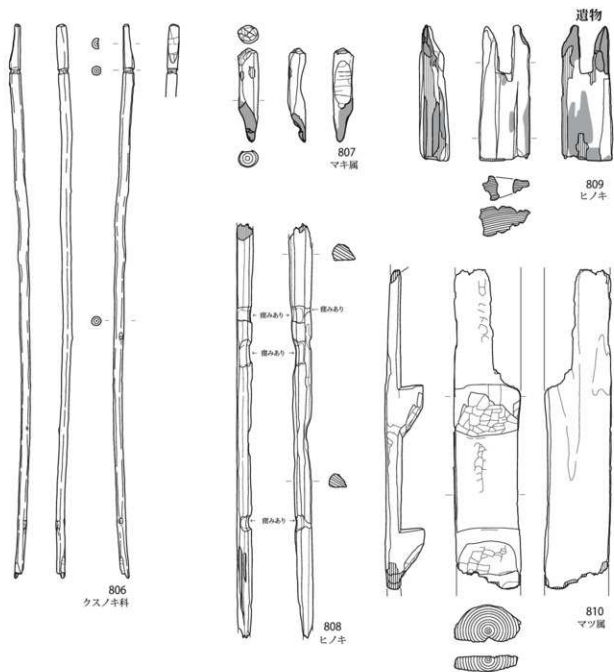
古代に属する木製品は 32 点で、工具 (861)、容器 (862 ~ 873)、祭祀具 (874)、土木材 (875・876)、角棒 (878・880・881)、板 (877・879・882 ~ 889)、残材 (891)、その他 (890) がある。工具 (第 97 図 861) 861 はヒノキの角棒で上面・下面ともに刃刃傷が多数残ることから、作業台として使用された可能性が高い。

容器 (第 97・98 図 862 ~ 873) 862 ~ 869 は曲物底板、870 ~ 872 は曲物側板で、いずれも樹種はヒノキ。うち、862 は大型品で、細く割ったのち両端部付近に穿孔をほどこす。863・864 は平面

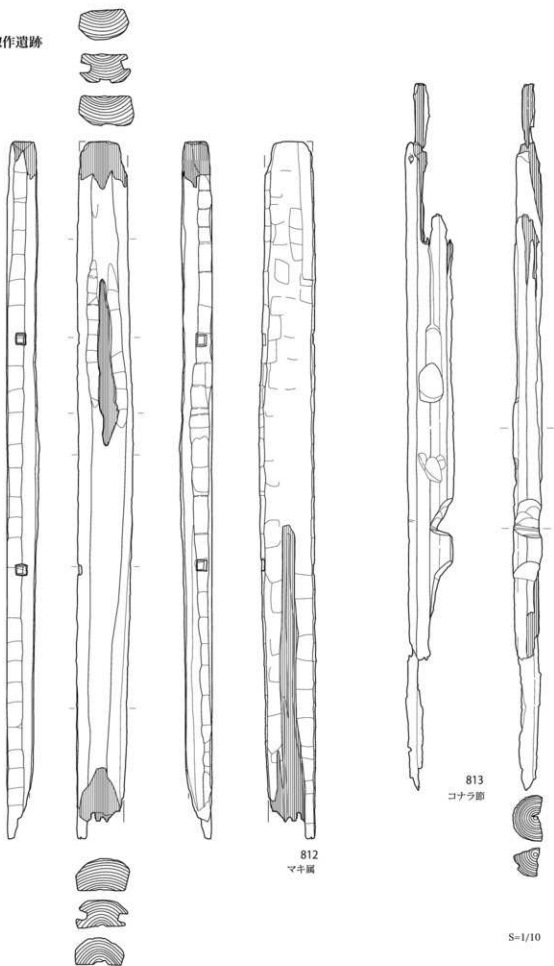
製作遺跡



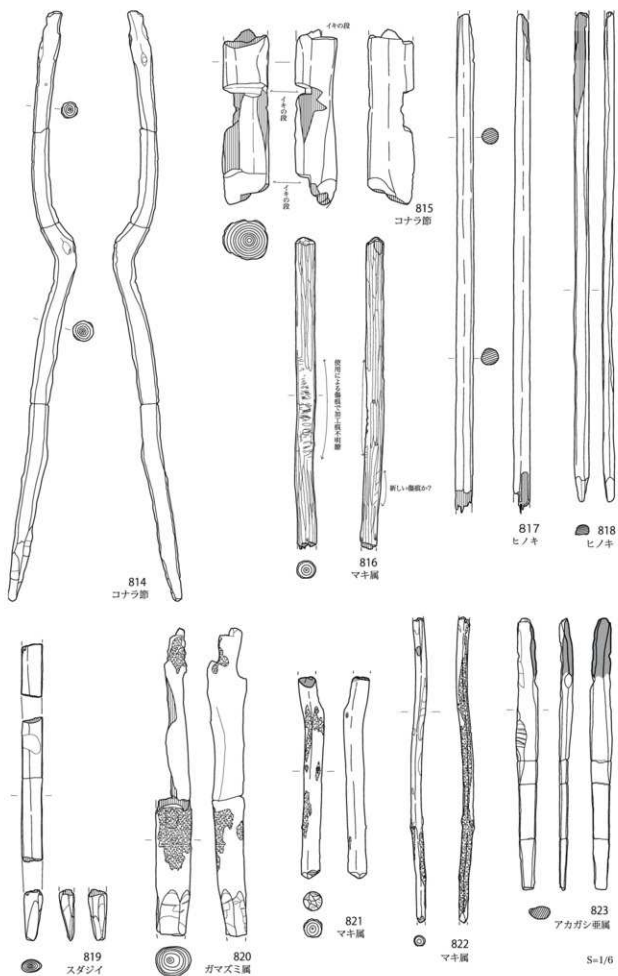
第 89 図 木製品 (6)



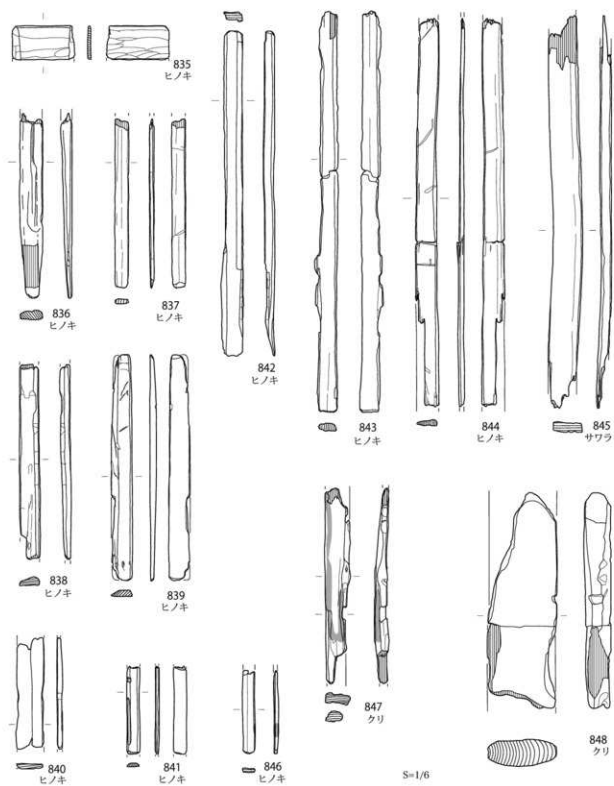
惣作遺跡



第91図 木製品(8)

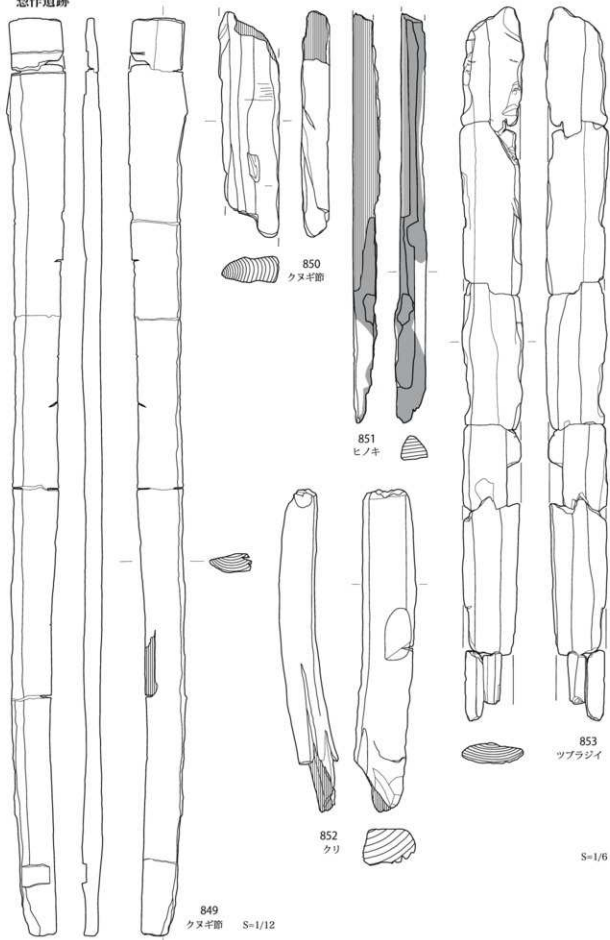


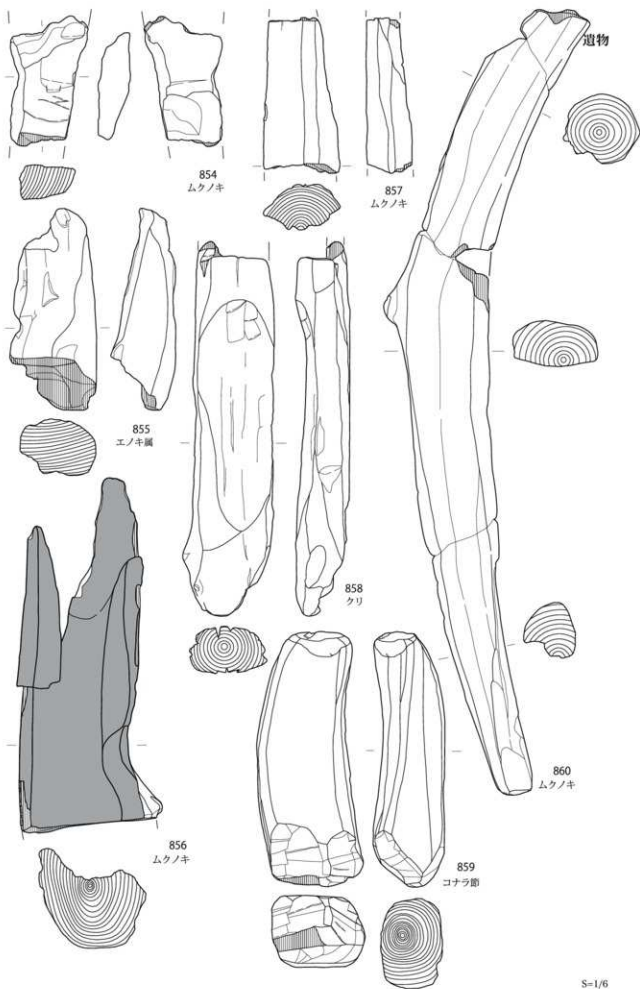
第92図 木製品 (9)



第94図 木製品 (11)

惣作遺跡





が楕円形を呈する。865は中央部に補修孔とみられる小孔が開く。867・868は表面に刃物傷がつく。866は内面に黒色物質を塗布する。

873はスギの板目材で、わずかに湾曲することから、結桶の部材と考えられ、所属時期は中世以降か。祭祀典(第98図874)874はヒノキの板目材で、下端を尖らせる。畜串である可能性が高い。

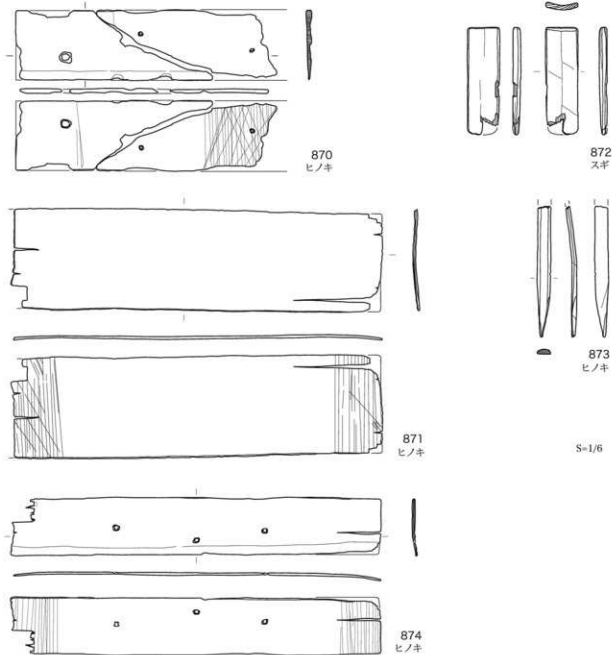
土木材(第99図875・876)876はマツ属、875はクスギ節の芯持ち材を用いた杭。

角棒(第99図878・880・881)878はヒノキの

4分の1分割材で、丁寧に断面を正方形に面取りしたうえ、両端を細くし、中央に穿孔をほどこす。用途は不明。

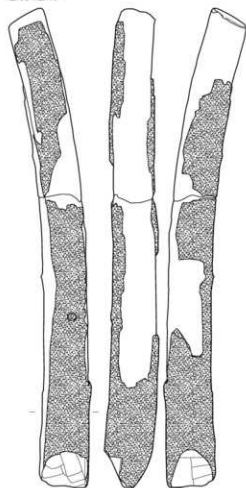
880・881はヒノキの角棒で、それぞれ図面上の横一列に11カ所、方形の穿孔をほどこす。この穿孔のうち、880の両端より一つ内側の穿孔はいずれも貫通させうえに別材を埋め込んでいるのに対し、それ以外の穴はすべて未貫通である。一見すると、連子窓の窓枠のようだが、用途は不明。

板(第99・100図877・879・882～889)879

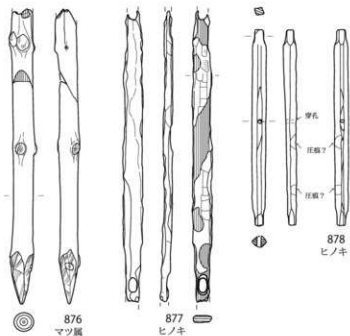


第98図 木製品(15)

惣作遺跡



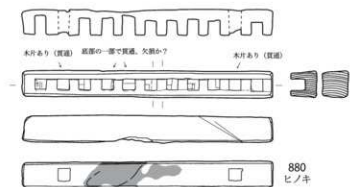
875
クス平節



876
マツ属

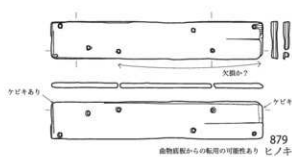
877
ヒノキ

878
ヒノキ



木片あり (貫通) 貫通の一部で貫通、欠損か? 木片あり (貫通)

880
ヒノキ

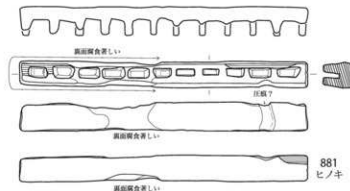


ケビキあり

欠損か?

ケビキ

879
動物標本からの転写の可能性あり
ヒノキ

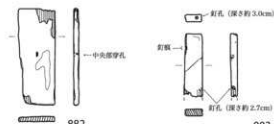


表面腐食著しい

表面腐食著しい

表面腐食著しい

881
ヒノキ



中央部穿孔

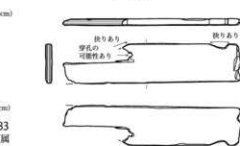
釘孔 (長さ約3.0cm)

釘痕

釘孔 (長さ約2.7cm)

882
スギ

883
ツガ属



釘痕あり

釘痕あり

穿孔の
可能性あり

釘痕あり

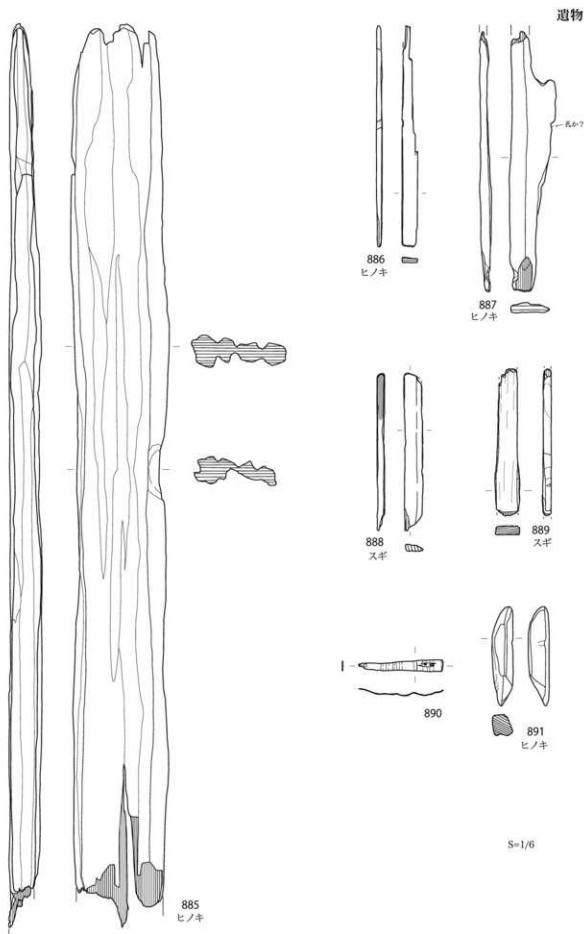
釘痕あり

穿孔の
可能性あり

884
ヒノキ

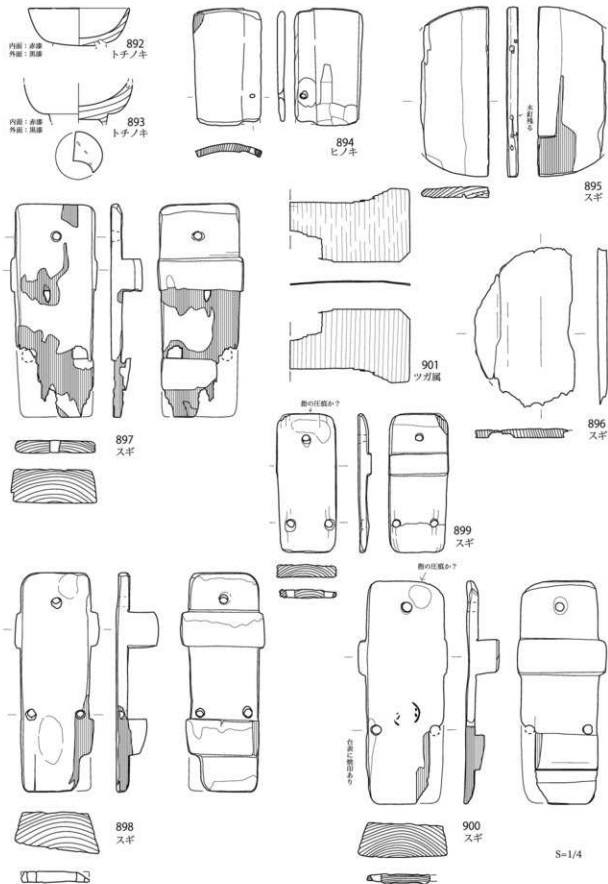
S=1/6

第99図 木製品 (16)



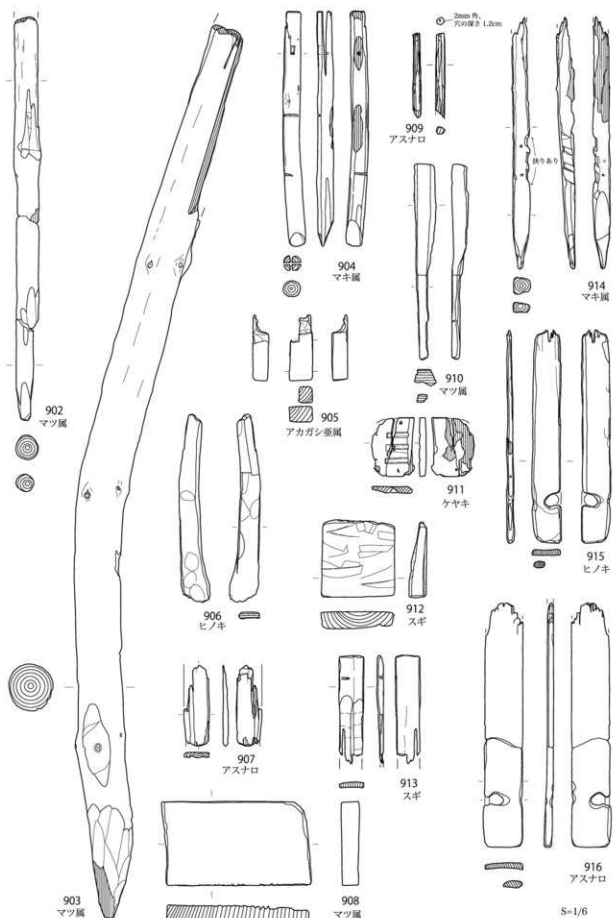
第100図 木製品(17)

惣作遺跡



第 101 図 木製品 (18)

遺物



第102図 木製品 (19)

惣作遺跡

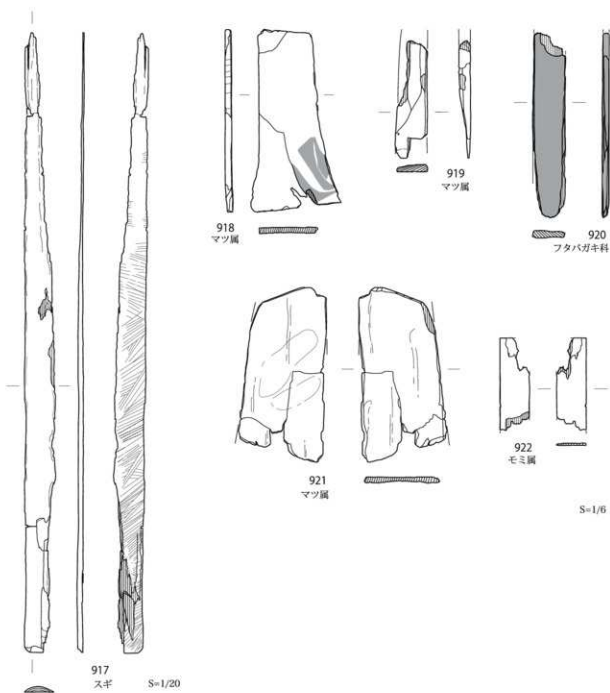
はヒノキの板目材で、平面が長方形の板。小孔が6カ所、ランダムに開いている。877もヒノキの板目材による穿孔板で、両端付近に楕円形の穿孔をほどこす。

882はスギの柵目材による穿孔板で、中央に小孔が開く。883はツガ属の柵目材による穿孔板で、側面に2カ所目釘穴が開く。884はヒノキの板目材による有扶板。885～887はヒノキ、888・889はスギの板。

残材(第100図891) 891はヒノキの残材。その他(第100図890) 890はカバ皮で、樹種は不明。

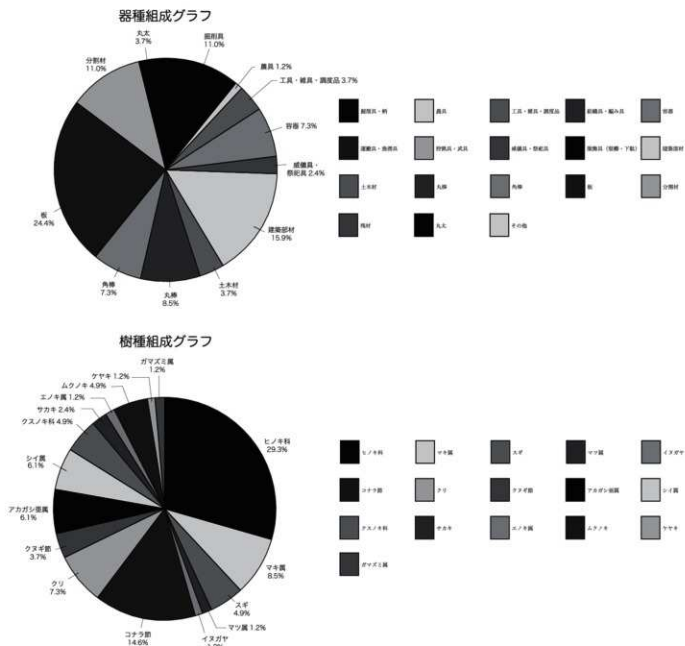
(4) 08C区 068NR・08B区 0025X 出土木製品

江戸時代後期に属する木製品は31点で、容器(892～896・901)、服飾具(897～900)、土木材(902・903)、丸棒(904・909)、角棒(905・910・914)、板(906～908・912・913・915・916・918～922)がある。



第103図 木製品(20)

惣作道跡



第 105 図 木製品器種・樹種組成図 (1)

容器 (第 101 図 892 ~ 896・901) 892・893 は漆椀で、内面は赤色漆、外面には黒色漆を塗る。トチノキの 2 分の 1 分割材からの横木取り。

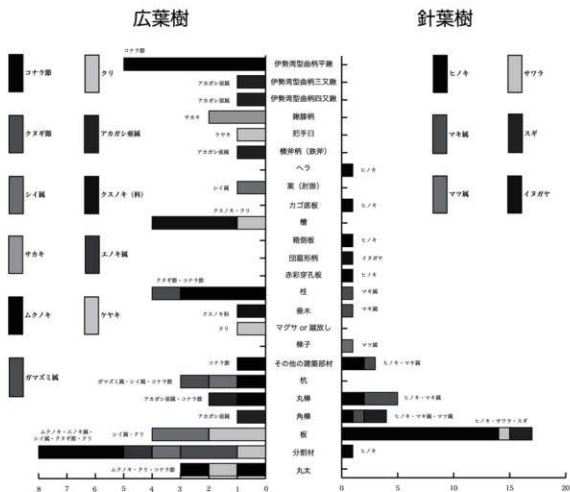
894 は結桶の側板で、ヒノキの椀目材。896 は曲物底板で、樹種はスギ。895 は断面に接合のための目釘が残り、結桶底板。樹種はスギである。901 は曲物側板で、樹種はツガ属。

土木材 (第 102 図 902・903) 902・903 はマツ属の芯持ち材による杭。

丸棒 (第 102 図 904・909) 904 は図面上の下端部を尖らせ、上端部には十字に切れ目を入れたうえ、横から穿孔をほどこしている。マキ属の芯持ち材で、用途は不明。

909 はアスナロの椀目材で、図面上の上端部に小孔を開ける。用途は不明。

角棒 (第 102 図 905・910・914) 905 はアカガシ亜属 4 分の 1 分割材の角棒で、図面上の上端部



第106図 木製品器種・樹種組成図(2)

に穿孔をほどこす。910はマキ属の芯持ち材で、図面上の中央やや下に2カ所穿孔と溝を刻む。914はマツ属の板目材による角棒。

板(第102・103図906～908・912・913・915・916・918～922)915はヒノキの柱目板で、図面上の下端部付近に穿孔をほどこす。916はアスナロの柱目材で、122同様、穿孔をほどこす。911はケヤキの柱目板で、片面に3条、浅い溝を平行に彫る。

906はヒノキ、907はアスナロ、912・913・917はスギ、908・918・919・921はマツ属、922はモミ属、920はフタバガキ科の板。(補上昇)
(5) 木筒(第104図923)

木筒は、流路堆積08A区003NRで出土した。木製品の集積に混じて出土し、ほぼ中央で切り折られ2片に離断した状態であった。なお、2片は10cm以下の近接した距離で出土していることから、廃棄後に水流によって移動した可能性はほとん

どないと考えられる。したがって出土地点がほぼ廃棄地点とする。

木筒の全長は57.3cm、幅は3.2cm、厚さは0.7cmである。やや厚みのある長い板状である。9.3cm～10.0cmの間隔で直径約0.4cmの穿孔が4カ所にみられ、それらを避けて墨書がなされている。このことから、何らかの機能をもった木製品を木筒に転用したものと考えられるが、元の木製品については不明である。墨書は両面になされている。仮に第1面・第2面とする。

第1面はほぼ全体で墨痕が認められ、釈文は「道大巻 得得麻呂 得□□[巻力]大 □天平護田 具部足国 == (戯画力)」である。文意はなく繰り返り返しがあることから習書とみられる。筆致は明瞭で一文字ずつ丁寧に記している。年号と思われる「天平」はやや小さめで、人名と考えられる「具部足国」は自身の氏名で書き慣れているためか筆致に軽さが感じられる。最下部に判読不明な墨痕があるが、筆

惣作遺跡

先を整えたのかあるいは戯画の可能性も考えられる。

第2面は、特に上半部で墨痕は視認できないが、表面の腐食が進むなかで墨の部分の腐食が遅れることからそこが逆に浮き上がって判読することができる。積文は・「□ 大本 本本本 本 本 本=（戯画力）」である。

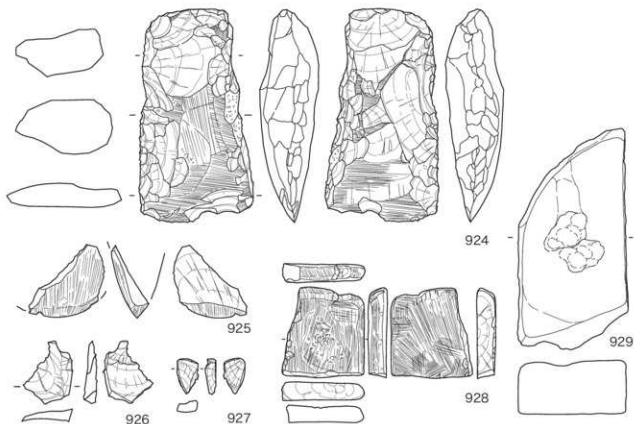
記載の内容については以前報告したとおりで（永

井邦仁 2011）、分類上は習書木簡と位置づけられ、木簡学会による分類型式は 065 型式である。（永井邦仁）

（6）まとめ

最後に、廻間Ⅱ式期の惣作遺跡出土木製品について、簡単にまとめておく（第 105・106 図）。

器種組成に関しては、紡織具（編み具）・運搬具（漁撈具）・狩猟具（武具）・残材などを欠くとともに、



924~927 は 1/2

928・929 は 1/4



第 107 図 石器

農具が少なく(白のみ) ことが指摘できる。

また横斧柄が、同時期に他の遺跡で出土するものとは次元の異なる装飾性豊かで精巧なつくりであり、日常的な木工作業に用いたものとは考えにくい。ただ、分割材や丸太が出土していることから、本遺跡で木製品生産をおこなっていたことは疑いない。

団扇形木製品は上記のように、型式分類としては近畿中樞部から出土するものと共通するが、樹種など細かな点で異質なところもあり、この惣作遺跡ないしは周辺の遺跡で作られたものである可能性が高い。団扇形木製品のほかに、用途は不明だが赤彩をほどこした穿孔板なども出土していることから、前述の横斧柄と併せて、縄間Ⅱ式期の惣作遺跡には上位階層者が居住していた可能性を窺わせる。

樹種組成では、ヒノキ科(ヒノキ・サワラ)・コナラ節・マキ属・クリ・アカガシ亜属・シイ属・スギ・クスノキ科・クスノ節の順となる。マキ属・コナラ節・クリが多いのは下懸遺跡・姫下遺跡と共通する特徴で、遺跡西側の碧海台地上の植生を反映しているものと考えられる(樋上2009a)。

特定器種の用材法では、伊勢湾型曲柄平鏝にはコナラ節、鉾鏝柄にはサカキを用いる点が尾張低地部と共通するが、白にクスノキではなくケヤキを使用しているのはきわめて珍しい(樋上2009b)。

その他、姫下遺跡や下懸遺跡との比較、鹿乘川流域遺跡群全体での評価などは、総括において論じることとした。(樋上昇)

第3節 石器

今回の調査では、7点の石器が出土した。古墳時代・古代の層などから出土している資料があるものの、概ね弥生時代中期の吉井式期に属するものと考えられる。すべてについて写真を掲載し、6点は図化を行なった(第107図924～930)。

924・925は磨製石斧(両刃石斧)である。924

は全形のわかる資料で、全面の敲打・剥離調整がよく残り、刃部・肩部を中心に部分的な研磨が施されたものである。断面形状は丸みを帯びたやや扁平な形状を呈するものである。塩基性岩製。925は刃部のみが残存である。塩基性岩製。926・927は小型剥片石器に対応する剥片と考えられる。926の石材はチャートで、927は下呂石円礫である。下呂石について、安城市域では時期を問わずに円礫が主体になるようである。928・930は砥石である。928は平面・側面ともによく使用されており、磨滅による線状痕が著しい。平面には敲打による使用痕が認められた。側面が欠損しているのも、このような使用による作用が原因のようである。花こう岩製。930は平面部分に溝状の使用痕が認められるものである。砂質凝灰岩製。929は凹石と考えられる。長さ23.2cmと大きな礫の中央部に5×3cm大の凹みを有するものである。凹みの断面形状は、緩いU字状を呈する。片麻岩製。(川添和暁)

引用文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 1992『勝川遺跡Ⅳ』
 愛知県埋蔵文化財センター 2001『八王子遺跡』
 鈴木裕明 2001『団扇形木製品と靡土』『日本考古学の基礎研究』茨城大学考古学研究室
 永井邦仁 2011『安城市下懸遺跡・惣作遺跡出土の木簡』『研究紀要第12号』愛知県埋蔵文化財センター
 奈良国立文化財研究所 1993『木器集成図録 近畿原始篇(解説)』
 樋上 昇 2001『3～5世紀の地域間交流—東海系曲柄鏝の波及と展開—』『日本考古学』第10号、日本考古学協会
 樋上 昇 2009a『弥生後期—古墳初期の下懸遺跡出土木製品に対する評価』『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
 樋上 昇 2009b『弥生時代の木材利用』『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会

第4章 自然科学的分析

第1節 惣作遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

安城市木戸町の鹿乗川左岸に所在する惣作遺跡は、自然堤防およびその後背湿地に立地している。この惣作遺跡において行われた発掘調査で、平安時代～江戸時代の水田層と推測される土層が検出され、土壌試料が採取された。以下に、採取された土壌試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、水田稲作および遺跡周辺のイネ科植物について検討した。

(2) 試料と分析方法

分析用試料は、北壁断面より採取された8試料(試料No.1～8)とT15断面より採取された4試料(試料No.1～4)の12試料である(第108図)。各試料について、北壁断面の試料No.1(11層)は灰色粘土、試料No.2(10層)は黒褐色粘土と灰色粘土のブロック混在層、試料No.3(6層)は黒褐色粘土、試料No.4(5層)はやや砂質の黒褐色粘土、試料No.5(4層)は黒褐色粘土、試料No.6(3層)も黒褐色粘土、試料No.7(2層)はやや砂質の紫灰色～黒褐色粘土、試料No.8(1層)は灰黄色の砂質粘土である。また、T15断面の試料No.1(8層)は緑灰色の砂質シルト質粘土、試料No.2(4層)は黒褐

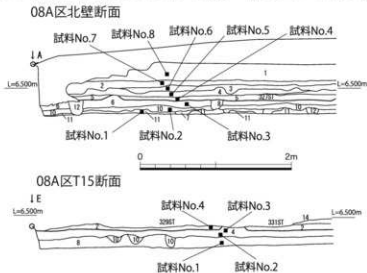
色～褐色の粘土、試料No.3(4層)も黒褐色～褐色の粘土、試料No.4(2層)は紫灰色の粘土である。時期について、北壁断面の試料No.4.5が平安時代、試料No.6.7が中世?、試料No.8が江戸時代と考えられている。プラント・オパール分析はこれら12試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約0.04mm)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、鏡鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

(3) 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め(第1表)、それらの分布を第109図(北壁断面)と第110図(T15断面)に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

北壁断面：検境の結果、試料No.3より上位でイネのプラント・オパールが観察され、最上位の試料No.8の3,500個を除くと8,000個以上と多く検出されているが、上位に向かい減少する傾向が認



第108図 プラント・オパール分析試料採取位置

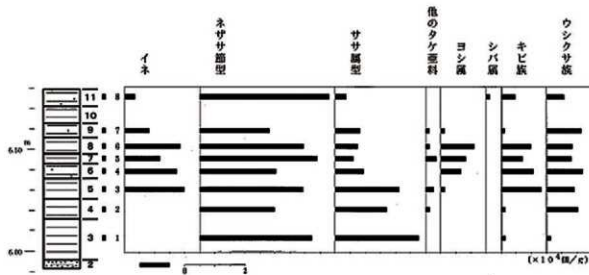
められる。最も多く検出されたのはネザサ節型で、20,000個以上の検出個数を示している。ササ属型は、下部試料では20,000個前後と比較的多く観察されているが、上部では7,000個前後と検出個数を下げている。ウシクサ族は最上部と最下部を除き10,000個前後を示し、キビ族はイネが検出され始める試料No.3より急増するが、上部では減少している。ヨシ属も試料No.3より上位に向かい急増するが、上部では急減している。その他では、シバ属が最上部試料で若干観察されている。

T15断面：上位3試料で10,000個前後のイネのプラント・オパールが得られている。最も多く検出されたのはやはりネザサ節型で、上位2試料では20,000個以上を示している。ウシクサ族も上位2試料で10,000個弱とやや多く検出され、ササ属型は最下部試料で10,000個を超えているが、その後急減し、再び上位に向かい漸増している。キビ族は北壁断面と同様にイネが検出され始める試料より急

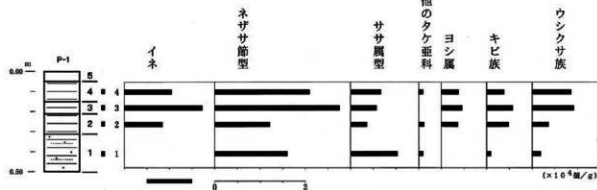
増しており、ヨシ属も上位3試料で観察されている。

(4) 稲作について

上記したように、北壁断面では試料No.3(6層)より上位で、また、T15断面では試料No.2(4層)より上位でイネのプラント・オパールが検出され、おおむね8,000個以上の検出個数を示している。ここで検出個数の目安を示すと、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原1984)。このことから稲作の検証としてこの5,000個を目安に遺構の状況をふまえて判断されている。先にも記したが、北壁断面の6層(試料No.3)～2層(試料No.7)では8,000個を超えるイネのプラント・オパールが検出されており、これらの層準において稲作が行われていた可能性は高いとプラント・オパール分析からは判断される。この6層の時期については不明であるが、直上の5層が鎌倉時代と考



第109図 北壁断面試料のプラント・オパール分布図



第110図 T15断面試料のプラント・オパール分布図

惣作遺跡

えられていることから、北壁断面周辺では鎌倉時代かそれよりも少し前の時期より稲作が行われるようになったと推測される。同様に、T15 断面周辺では4層（試料 No.2）堆積期より稲作が行われるようになったとみられるが、詳しい時期については不明である。なお、北壁断面の最上部の試料 No.8 では3,500個と5,000個に達していないことから、この1層において稲作が行われていた可能性は低いとプラント・オパール分析からは判断される。しかしながら、少ないながらもイネのプラント・オパールが検出されていることから、発掘状況や花粉分析等、本層における稲作についてはさらに検討が必要と考える。

(5) 遺跡周辺のイネ科植物

最も多く検出されているネザサ節型のササ類（ケネザサ、ゴキダケなど）は開けた日の当たるところでの生育が考えられる。そのうちケネザサ（ミヤコネザサ）は現在、名古屋市周辺の丘陵のやや平坦な台状地においてススキ・ケネザサ群落といった草地を形成している（愛知県 1995）。こうしたことから遺跡周辺の丘陵部空き地や森林の林縁部などに上記のようなネザサ節型のササ類やウシクサ族が多く生育していたと推測される。一方、ササ属型のササ類（スズタケ、ミヤコザサなど）については、遺跡周辺に成立していたと考えられる落葉広葉樹林（花

粉分析の項参照）の下草的存在で生育していたとみられる。しかしながら北壁断面では稲作が始まって以降ササ属型は大きく減少している。これについて、稲作の始まり等による遺跡の発展に伴い遺跡周辺の森林は一部切り開かれ、そうしたことによってササ属型のササ類も生育地を狭めたことが考えられよう。

キビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種か、エノコログサ、スズメノヒエ、イヌビエなどの雑草類かについて現時点では分類できず不明である。しかしながら稲作が考えられる層準においてキビ族の多産がみられることから、少なくともこれらの層準におけるキビ族についてはタイヌビエなどの稲作に伴う雑草類の可能性が高いと思われる。

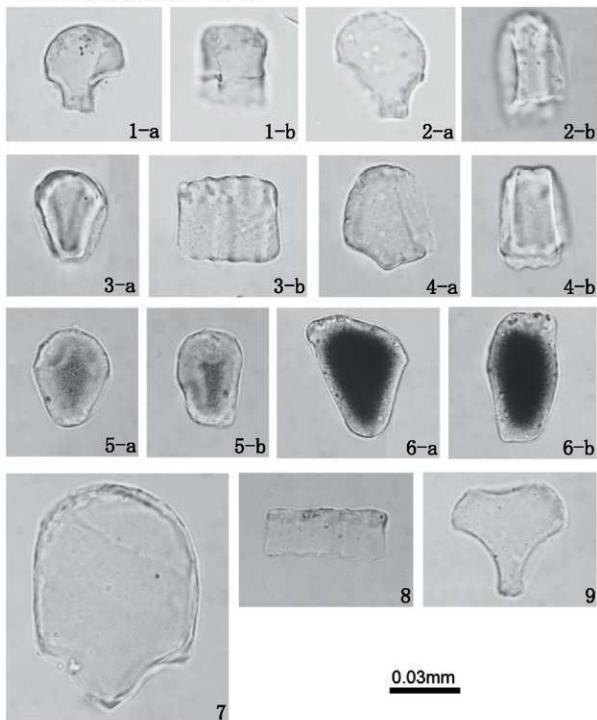
ヨシやツルヨシといったヨシ属もイネが検出されている層準において観察されており、稲作地周辺の水路などに生育地を広げたと推測される。しかしながら北壁断面の上位試料においてヨシ属は激減している。これについて、稲作の発展に伴う集約化などで稲作地周辺は整備されるなどの影響で生育地を狭めたことが考えられよう。

引用文献

愛知県 1995『愛知県の植物相』南川幸編。328 p.

断面	試料 番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
北壁	1	0	37,300	27,600	0	0	0	1,400	1,400	2,800
	2	0	24,800	17,000	1,300	0	0	1,300	10,500	3,900
	3	19,800	34,300	21,100	2,600	1,300	0	13,200	9,200	2,600
	4	17,300	25,300	9,300	0	6,700	0	10,700	12,900	6,700
	5	11,800	39,000	5,900	3,500	8,300	0	7,100	8,300	8,300
	6	18,400	34,400	7,400	1,200	11,100	0	9,800	8,600	7,400
	7	8,100	23,100	8,100	1,200	1,200	0	1,200	11,500	4,600
	8	3,500	42,900	3,500	0	0	1,200	4,600	5,800	8,100
T15	1	0	16,000	10,400	900	0	0	900	1,900	3,800
	2	8,500	12,100	3,600	1,200	3,600	0	4,800	3,600	7,300
	3	17,300	27,600	5,800	0	4,600	0	5,800	9,200	5,800
	4	10,500	20,900	6,700	1,000	3,800	0	3,800	8,600	10,500

第1表 試料1g当たりのプラント・オパール個数



図版 惣作遺跡のプラント・オパール

- 1, 2: イネ (a: 断面、b: 側面) 1: 試料No. 4、2: 試料No. P-1-2
 3: ネザサ節型 (a: 断面、b: 側面) 試料No. P-1-2
 4: ササ属型 (a: 断面、b: 側面) 試料No. P-1-4
 5: 他のタケ亜科 (a: 断面、b: 側面) 試料No. 5
 6: ウシクサ族 (a: 断面、b: 側面) 試料No. P-1-4
 7: ヨシ属 (断面) 試料No. 5
 8: キビ族 (側面) 試料No. 3
 9: シバ属 (断面) 試料No. 5

惣作遺跡

第2節 惣作遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

惣作遺跡は安城市木戸町の鹿乗川左岸に所在する遺跡で、弥生時代から江戸時代までの様々な遺構や遺物が確認されている。ここでは08A区～08C区から出土した木製品および木材181点の樹種同定を行なった。なお、樹種同定に際しては、独立行政法人森林総合研究所木材特性研究領域の能城修一氏にご指導いただいた。

(2) 試料と方法

試料は、調査区08Aa区から6点、08Ab区から27点、08B区から117点、08C区から31点の出土木製品および木材で、合計181点である。

方法は、剃刀を用いて試料の3断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

(3) 結果

樹種同定の結果、針葉樹はモミ属、カラマツ、マツ属複雑管束亜属、ツガ属、スギ、ヒノキ、サワラ、アスナロ、マキ属、イヌガヤの10分類群、広葉樹はヤナギ属、クリ、ツブラジイ、スダジイ、アカガシ亜属、クスギ節、コナラ節、ムクノキ、エノキ属、ケヤキ、クスノキ、クスノキ科、フタバガキ科、サカキ、バラ属、アカメガシワ、トチノキ、ガマズミ属の18分類群、タケ亜科1分類群の合計29分類群が確認された。樹種別に集計したものを第2表に、樹種同定結果の一覧を第3表に示す。

以下に同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を第112～117図に示す。

1) モミ属 *Abies* マツ科 第112図 1a-1c(No.140)

飯道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織においてじょう状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1～4個存在する。

モミ属は暖帯から温帯にかけて生育する常緑高木で、ウラジロモミ・シラバ・トドマツなど5種ある。材は柔軟で加工容易であるが割れやすく、狂いが出て保存性が低い。

2) カラマツ *Larix kaempferi* (Lamb.) Carrière マツ科 第112図 2a-2c(No.2)

飯道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射飯道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔はヒノキ型で、放射組織の上下に放射飯道管があり、壁孔縁は丸みを帯びる。

カラマツは宮城県以南の温帯に分布する落葉高木である。材は水湿に強い。

3) マツ属複雑管束亜属 *Pinus* Subgen. *Diploxylon* マツ科 第112図 3a-3c(No.58)

飯道管、垂直・水平樹脂道、放射組織、放射飯道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射飯道管の水平壁は内側へ向かって鋸歯状の突起がみられる。

マツ属複雑管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靱性は大である。

樹種	計
モミ属	1
カラマツ	1
マツ属複雑管束亜属	9
ツガ属	2
スギ	19
ヒノキ	53
サワラ	1
アスナロ	3
マキ属	10
イヌガヤ	1
ヤナギ属	2
クリ	7
ツブラジイ	5
スダジイ	1
アカガシ亜属	7
クスギ節	7
コナラ節	19
ムクノキ	11
エノキ属	6
ケヤキ	2
クスノキ	3
クスノキ科	1
フタバガキ科	1
サカキ	3
バラ属	1
アカメガシワ	1
トチノキ	2
ガマズミ属	1
タケ亜科	1
合計	181

第2表 樹種別集計

4) ツガ属 *Tsuga* マツ科 第112図 4a-4c(No.100)

仮道管、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は急である。分野壁孔はスギ型～ヒノキ型で1分野に2～4個存在する。放射組織の上下に放射仮道管がある。

ツガ属は暖帯から福島県以南の温帯に生育する常緑高木で、ツガとコマツガがある。材はやや強い程度で耐朽・保存性は中庸、割裂・乾燥は容易である。

5) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 第112・113図 5a-5c(No.102)・6a-6c(No.134)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯・温帯下部に生育する。材は比較的軟で切削加工は容易、保存性は中庸で、割裂性は大きい。

6) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第113図 7a-7c(No.17)・8a-8c(No.87)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1分野に2個存在する。

ヒノキは温帯から暖帯に分布する。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く、狂いが少ない。

7) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第113図 9a-9c(No.94)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。ヒノキによく似ており、早材から晩材への移行はやや急で晩材部は狭い。樹脂細胞は年輪界付近にまばらに散在する。分野壁孔はやや大型のヒノキ型～スギ型で、1分野に普通2個存在する。

サワラは岩手県以西の温帯山中に生育する常緑高木である。材は耐朽・保存性は中庸だが、水湿にはよく耐える傾向がある。

8) アスノ科 *Thuopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 第113図 10a-10c(No.71)

仮道管、樹脂細胞、放射組織からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、樹脂細胞が豊富である。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1分野に不揃いに3～4個存在する。

アスノ科は温帯に分布する常緑高木である。材の加工性・割裂性は中庸だが、耐朽・保存性が高い。

9) マキ属 *Podocarpus* マキ科 第113・114図

11a-11c(No.24)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかで、年輪界はやや不明瞭である。樹脂細胞は豊富で年輪にほぼ均等に散在する。分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個存在する。

マキ属は関東以西の暖帯、亜熱帯に生育する常緑高木で、イヌマキ、ナギの2種がある。材は耐朽性があり、樹脂が多く耐水性がある。

10) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonii* (Knight ex Forbes) K.Koch イヌガヤ科 第114図 12a-12c(No.22)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。仮道管は薄壁で、晩材部の幅は非常に狭い。樹脂細胞は豊富で早材・晩材を通じて平等に分布する。分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個存在する。仮道管にらせん肥厚がみられる。

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯に生育する常緑の低木または小高木である。材は堅硬・緻密である。

11) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 第114図 13a-13c(No.178)

やや小型の道管が単独もしくは数個複合してやや密に散在する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列の異性で、道管放射組織間の細胞では円形の壁孔が明瞭である。

12) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第114図 14a-14c(No.116)

大型の道管が年輪界に並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火災状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は同性で主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木で、材は耐朽性・耐湿性に優れ、保存性が高い。

13) ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 第114図 15a-15c(No.38)

環孔性の放射孔材で、年輪の始めの道管は単独でやや大きく、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火災状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管の穿孔は単一となる。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で割裂性・乾燥は中庸、耐久性は著しく低い。

14) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex

惣作道跡

T.Yamaz. et Mashiba プナ科 第 114 図 16a-16c(No.46)
環孔性の放射孔材で、年輪の始めの道管は単独でやや大きく、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小形で薄壁の小道管が集団をなして大炎状に配列する。道管の穿孔は単一となる。軸方向柔組織はいびつな線状である。放射組織は単列同性である。

スタジイは福島県・新潟県佐渡以南の暖帯に生育する常緑高木である。材はやや重硬で割裂性・乾燥・耐朽性は中庸だが狂いが出やすい。

15) コナラ属 *Aカガシ* 亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* プナ科 第 115 図 17a-17c(No.118)

円形でやや大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織は短線状～いびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で単列のものとは広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、イチイガシ、アカガシ、ハナカガシ、ツカバネガシ、アラカシなど 8 種がある。材はきわめて堅硬、弾性強く強軟で、水湿に強い。16) コナラ属 *クヌギ* 節 *Quercus* sect. *Aegilops* プナ科 第 115 図 18a-18c(No.151)

年輪界はじめに大型の道管が並ぶ環孔材で、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の 2 種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギ・アベマキがある。材は全体的に重硬である。

17) コナラ属 *コナラ* 節 *Quercus* sect. *Prinus* プナ科 第 115 図 19a-19c(No.40)・20a-20c(No.45)

年輪界はじめに大型の道管が並ぶ環孔材で、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った小道管が大炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の 2 種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は全体的に重硬である。

18) ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 第 115・116 図 21a-21c(No.131)・22a-22b(No.180)

中型の径で厚壁の道管が単独ないし 2～3 個複合し、年輪を通じて均等に分布する散孔材。軸方向柔組織は周囲状～5 列幅程度の帯状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は 1～6 細胞幅で、方形細胞が上下端に 2 細胞程度連なる異性である。

ムクノキは関東以西の暖帯、亜熱帯に生育する落葉高木である。材は堅く密で強軟である。

19) エノキ属 *Celtis* ニレ科 第 116 図 23a-23c(No.155)

大型の道管が年輪界のはじめに配列し、晩材部では径を減じた薄壁の小道管が集団をなして接線～斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は 3～8 列幅の異性で精細胞がみられ、膨らんだ細胞中に結晶を含む。

エノキ属は温帯から熱帯分布する落葉性の小高木から高木で、エゾエノキやエノキなど 4 種がある。材はやや硬いが強度や耐朽性は比較的低く、狂いが出やすい。

20) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第 116 図 24a-24c(No.78)

大型の道管が年輪界のはじめに 1 列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線～斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。小道管にはらせん壁厚がみられる。放射組織は 4～8 列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶を含む。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や河畔によく生育する。材は重硬で狂いが出にくい。

21) クスノキ *Cinnamomum Camphora* Steb. クスノキ科 第 116 図 25a-25c(No.43)

径の大きい道管が単独ないし 2～4 個複合して散在する散孔材であるが、晩材部では道管径を減じ、半環孔状となる。軸方向柔組織は周囲状～翼状で、道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で 1～3 細胞幅で大型の油細胞がある。

クスノキは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材はやや軽軟なものから中庸程度まで幅広いが、切削加工は容易、耐水性・耐朽性・耐虫性は極めて高い。

22) クスノキ科 *Lauraceae* 第 116 図 26a-26c(No.52)

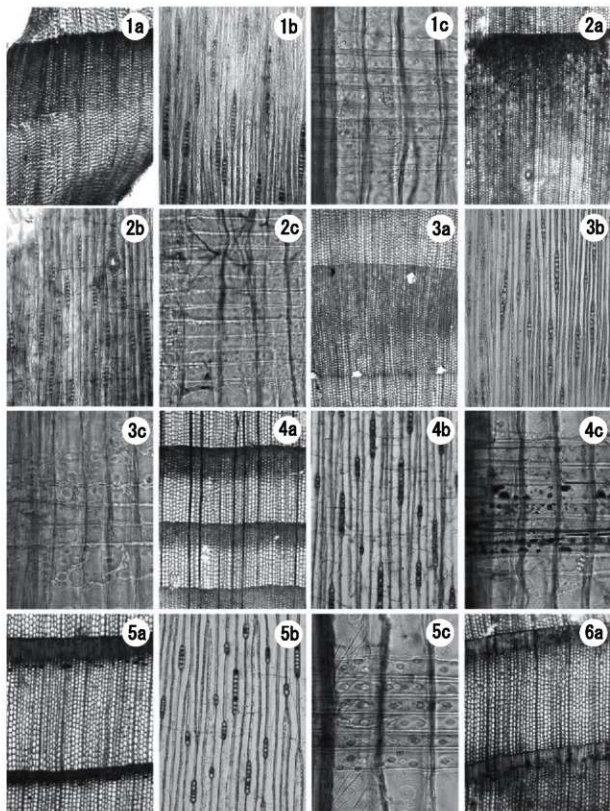
径中庸の道管が単独ないし 2～4 個複合してまばらに散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は 1～3 細胞幅の異性で油細胞がある。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属、タブノキ属、クロモジ属など 8 属がある。木材組織からはクスノキ科以外は識別困難なため、クスノキを除いたとクスノキ科とする。

23) フタバガキ科 *Dipterocarpaceae* 第 116 図 27a-27c(No.148)

大型で円形の道管が、単独で散在する散孔材である。年輪界は不明瞭で、晩材部に垂直樹胞道がみられる。軸方向柔組

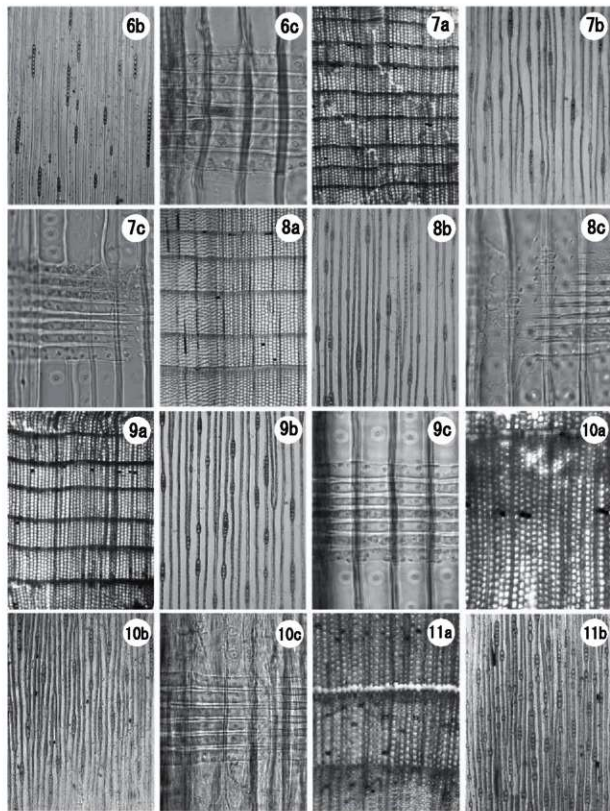
惣作遺跡



第 112 図 惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (1)

1a-1c. モミ属 (No 140)、2a-2c. カラマツ (No 2)、3a-3c. マツ属複雑管束亜属 (No 58)、4a-4c. ツガ属 (No 100)、5a-5c. スギ (No 102)、6a. スギ (No 134)

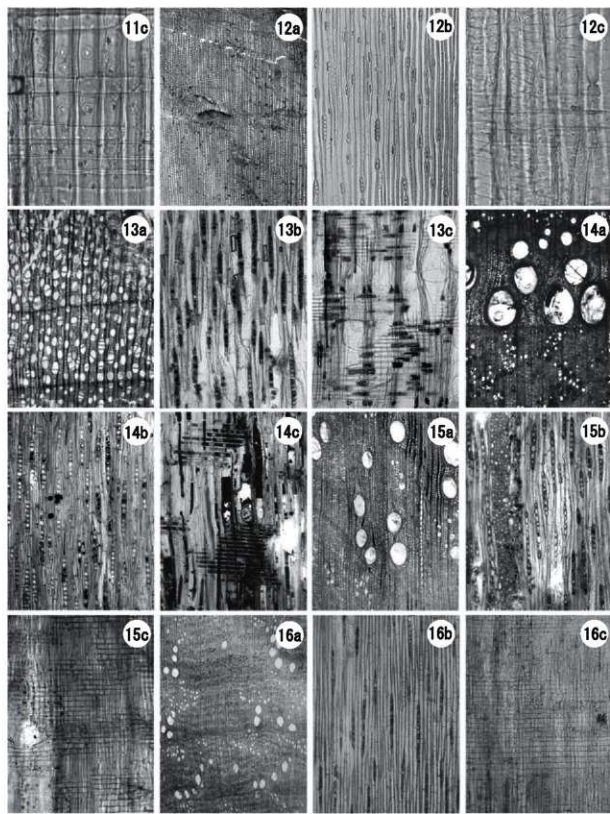
a: 横断面 (スケール=500 μ m)、b: 接線断面 (スケール=200 μ m)、c: 放射断面 (スケール=50 μ m)



第 113 図 惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (2)

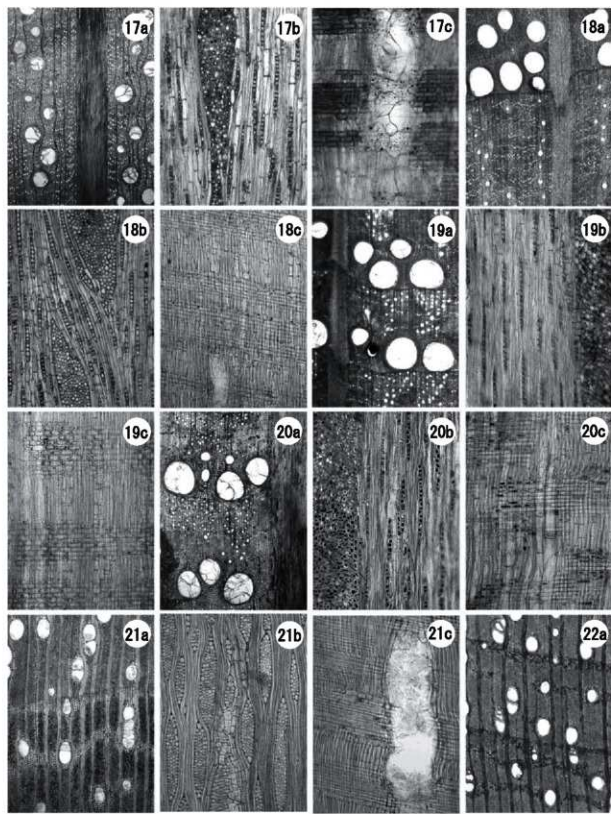
6b-6c. スギ (No 134)、7a-7c. ヒノキ (No 17)、8a-8c. ヒノキ (No 87)、9a-9c. サワラ (No 94)、10a-10c. アスナロ (No 71)、11a-11b. マキノ属 (No 24)
 a: 横断面 (スケール=6a-9a:500 μ m, 10a-11a:200 μ m), b: 接線断面 (スケール=200 μ m), c: 放射断面 (スケール=50 μ m)

惣作遺跡



第114図 惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真(3)

11c. マキ属 (№24)、12a-12c. イヌガヤ (№22)、13a-13c. ヤナギ属 (№178)、14a-14c. クリ (№116)、
 15a-15c. ツブラジイ (№38)、16a-16c. スダジイ (№46)
 a: 横断面 (スケール=500 μ m)、b: 接線断面 (スケール=200 μ m)、c: 放射断面 (スケール=11c-12c:50 μ m、
 13c-16c:200 μ m)

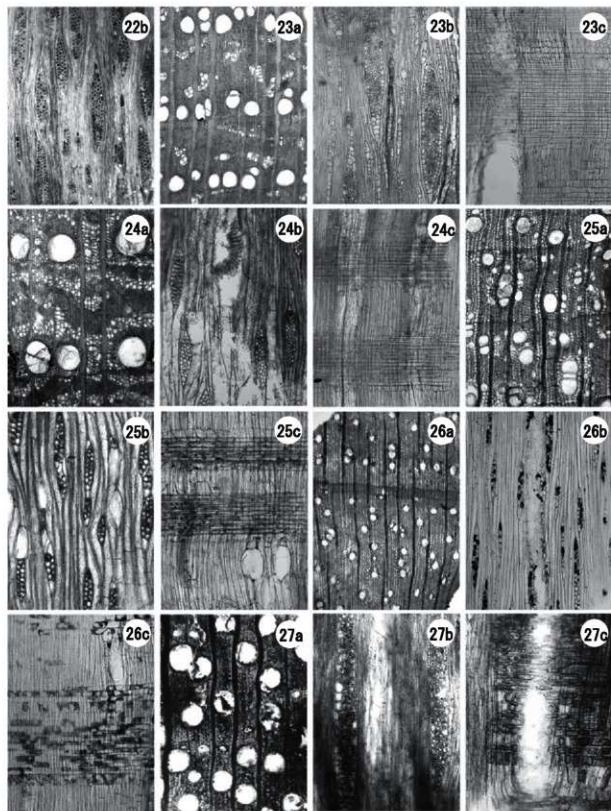


第 115 図 惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (4)

17a-17c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 118)、18a-18c. コナラ属クヌギ節 (No. 151)、19a-19c. コナラ属コナラ節 (No. 40)、20a-20c. コナラ属コナラ節 (No. 45)、21a-21c. ムクノキ (No. 131)、22a. ムクノキ (No. 180)

a: 横断面 (スケール=500 μ m)、b: 接線断面 (スケール=200 μ m)、c: 放射断面 (スケール=200 μ m)

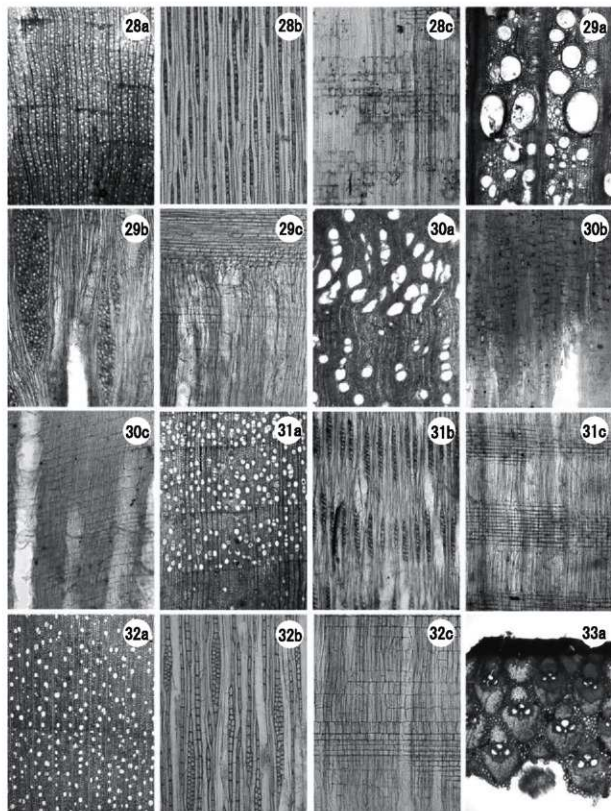
惣作遺跡



第116図 惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真(5)

22b. ムクノキ (No. 180)、23a-23c. エノキ属 (No. 155)、24a-24c. ケヤキ (No. 78)、25a-25c. クスノキ (No. 43)、26a-26c. クスノキ科 (No. 52)、27a-27c. フタバガキ科 (No. 148)

a: 横断面 (スケール=500 μ m)、b: 接線断面 (スケール=200 μ m)、c: 放射断面 (スケール=200 μ m)



第 117 図 惣作遺跡出土材の光学顕微鏡写真 (6)

28a-28c. サカキ (No 175)、29a-29c. バラ属 (No 174)、30a-30c. アカメガシワ (No 153)、31a-31c. トチノキ (No 37)、32a-32c. ガマズミ属 (No 113)、33a. タケ亜科 (No 149)

a: 横断面 (スケール=500 μ m)、b: 接線断面 (スケール=200 μ m)、c: 放射断面 (スケール=200 μ m)

惣作道跡

織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は3～6列幅程度の異性で、細胞高は1mmを超える。

フタバガキ科は東南アジア、アフリカ、南米などの熱帯に分布する常緑高木である。日本には自生しないが、ラワン材として多く持ち込まれている。

24) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 第117図 28a-28c (No.175)

小径で角張った道管が単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は20段階程度の階段状である。放射組織は異性でほぼ1列である。

サカキは暖帯から亜熱帯に分布する常緑の小高木である。材は硬く強靱、割裂は困難である。

25) バラ属 *Rosa* バラ科 第117図 29a-29c (No.174)

やや大型の道管が年輪層に並ぶ環孔材で、晩材部の小道管はほぼ単独である。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん厚膜がみられる。放射組織は異性で、単列のものど放射組織がみられ、細胞高が1mmを超えるものもある。

バラ属は亜熱帯から亜寒帯に分布する落葉の低木である。ノイバラ節、ハマナシ節、サンショウバラ節などに分かれ約15種があるが、変種や園芸種も多い。

26) アカメガシワ *Mallotus japonicus* (Thunb. ex Murray) Muell. Arg. トウダイグサ科 第117図 30a-30c (No.153)

やや厚壁の道管が晩材部に向けて徐々に径を減じ、晩材部では小道管が放射方向に配列する半環孔材である。軸方向組織は短接線状である。道管の穿孔は単一で、道管放射組織間の壁孔は円形である。放射組織は単列の異性である。

アカメガシワは宮城県・秋田県以西の温帯から暖帯に分布する落葉高木で、日当たりのよい二次林にふつうに生育する。材は軽軟で耐久性が低く、器具材・薪炭材などに用いられる。

27) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 第117図 31a-31c (No.37)

やや小型の道管が単独もしくは複数放射方向に複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列の同性で、接線断面において扇形に配列する。

トチノキは温帯から暖帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性はない。

28) ガマズミ属 *Viburnum* スイカズラ科 第117図 32a-32c (No.113)

小型の道管が単独で年輪内に均等に散在する散孔材である。道管の穿孔は20段階程度の階段状である。放射組織は異性で、1～4細胞幅で細胞高が高い。

ガマズミ属は温帯から熱帯に分布する落葉または常緑の高

木または低木で、日本にはカンボク・オオカメノキ・ヤブデマリ・ガマズミなど16種ある。

29) タケ亜科 *Gramineae* subfam. Bambusoideae イネ科 第117図 33a (No.149)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、維管束が柔細胞中に散在する不斉中心柱である。タケ亜科は12属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別することは難しい。

二次肥大成長を行わないため木本とはいえないが、高木化するために木材のように用いられる。割裂性が非常に大きい。

(4) まとめ

全体ではヒノキが最も多く、針葉樹ではスギ、マキ属が続く。広葉樹ではコナラ節やムクノキが多い。広葉樹は18分類群が検出されているが、その多くは数点のみの検出である。1点検出されたフタバガキ科は日本には生育しない南洋材であるため、おそらく後世に持ち込まれたラワン材が混入したものである。

ヒノキやマキ属の割合が多いのは、下懸道跡など近隣道跡における樹種組成と類似しており、道跡周辺にこれらの樹種が豊富に存在していたと推測される(植田・野村 2009)。

本道跡のある地域周辺は照葉樹林帯に属しており、本道跡においてもシイ属、アカガシ亜属といった常緑広葉樹が確認できることから、シイカシ林があったと推測される。同様にクスノキやサカキやマキ属も暖温帯に生育する樹種である。

一方、クスノギ節やコナラ節、アカメガシワ、マツ属複雑維管束亜属は二次林的要素が強く、ガマズミ属もクスノギ-コナラ林によく生育する低木であることから、自然植生の利用に伴った二次林の存在も伺える。さらにムクノキやエノキ属なども日当たりの良い土地を好むことから、やや開けた土地が道跡周辺に存在したと考えられる。

また、針葉樹であるモミ属のモミ、ツガ属のツガなどは暖温両帯にまたがって広葉樹と混生し、モミは谷地に、ツガは尾根に分布する傾向がある。また、カラマツはやや標高の高い位置に分布する針葉樹であるため、これらの樹種は周辺の山地から採取されたものと思われる。

引用文献

植田弥生・野村敏江 2009 「樹種同定」『下懸道跡』愛知県埋蔵文化財センターP102-103

第3節 惣作遺跡から出土した大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スタルジャン (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

安城市木戸町の鹿乗川左岸に所在する惣作遺跡は、自然堤防およびその後背湿地に立地している。標高は約7mである。調査では、古墳時代から中世と推測される遺構が検出され、遺構内や河川跡から土壌試料が採取された。以下に、古墳時代の土器内と古代(平安時代か)の畑などで採取された土壌試料について行った大型植物遺体の同定結果を示し、利用植物および周辺の植生について検討した。

(2) 試料と方法

試料は土壌試料25試料である。採取位置と試料数の内訳は、08Aa区の柱穴である128SPと162SP(採取位置の詳細は不明)から採取した2試料、08Ab区の河川跡である003NR出土土器P988の内部から採取した2試料、08B区の003NRの5層出土土器(P328, P392, P402, P407, P409(2試料あり), P443, P444, P446, P450, P490, P496, P500, P511, P604)の内部から採取した15試料、同じく5層出土の土器だが遺物番号は不明の1試料、003NR出土だが出土層位が不明な土器(P107, P116)の内部から採取した2試料、08C区の性格不明遺構である071SZから採取した2試料、08Aa区の溝群(詳細な出土位置不明)から採取した1試料である。試料番号は収納されたコンテナごとにNo.1から付してあったが、ここでは便宜的に試料番号の前にコンテナ番号を付けて区別した。試料の一覧を第4表に示す。試料の時期は土器内の土壌が弥生時代中期および古墳時代前期で、溝群の土壌が平安時代?で、そのほかは古代~中世である。

土壌の水洗量は、溝群が1000cc、これ以外については300ccを基準とし、300ccに採取量が満たない試料は採取量のほぼ全量を水洗した(128SPと162SPは100cc、P392は75cc、P407とP328は200cc)。ただし、P107内部の土壌量は10g未満であったため、水洗せずに土壌中の種実の有無を確認した。2試料に分けて採取してあった試料はどちらか一方の試料を水洗した。水洗は最小0.25mm

目の篩を用いて行った。大型植物遺体の抽出および同定は肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数困難な分類群はおおよそその産出数を記号(+)で示した。試料は愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

(3) 結果

同定の結果、大型植物遺体が産出した試料は003NR出土の土器内部採取試料と溝群採取試料のみで、08Aa区の128SPと162SP、08C区の071SZからは種実が全く得られなかった。003NR出土の土器内部から得られた木本植物は、ナラガシワ殻斗・未熟果と、ミズナラ・ナラガシワ殻斗・幼果、コナラ属コナラ節果実、ムクノキ核、エノキ果実・核、クワ属核、アオツツラフジ種子、ヒサカキ属種子、バラ属果実・核、アカメガシワ種子、サンショウ種子、ブドウ属種子、クサギ種子、ウコギ属核、ニワトコ核、ガマズミ属核の16分類群、草本植物はカナムグラ核と、ミスヒキ果実、ヤナギタデ果実、イヌタデ果実、ボントクタデ果実、タデ属A果実、タデ属B果実、ウシハコベ種子、アガサ属種子、キケマン属種子、マメ科炭化種子、カバハミ属種子、ノブドウ種子、スミレ属種子、メロン仲間種子、ヒョウタン仲間種子、スズメウリ種子、ゴキツル種子、ウリ科種子、ヒシ属果実、ヤブジラミ属錠

試料No.	調査区	グループ	遺構名	層位	遺物No.	備考	時期
00-1	08Aa		128SP				古代~中世?
00-2	08Aa		162SP				古代~中世?
00-3	08B	003NR	5層	P909	(1/2)		古墳時代前期
00-4	08B	003NR	5層	P409	(2/2)		古墳時代前期
00-5	08B	003NR	5層	P443			古墳時代前期
00-6	08B	003NR	5層	P490			古墳時代前期
00-7	08B	003NR	5層	P504			古墳時代前期
00-8	08B	003NR	5層	P504			古墳時代前期
07-1	08Ab	003NR	5層	P988	(1/2)		古墳時代前期
07-2	08Ab	003NR	5層	P988	(2/2)		古墳時代前期
07-3	08B	003NR	5層	P407			古墳時代前期
07-4	08B	003NR	5層	P444			古墳時代前期
07-5	08B	003NR	5層	P450			古墳時代前期
08-1	08B	10E13b	003NR				古墳時代前期
08-2	08B	10E13c	003NR	P107			古墳時代前期
08-3	08B	003NR	5層	P116			古墳時代前期
08-4	08B	003NR	5層	P328			古墳時代前期
08-5	08B	003NR	5層	P392			古墳時代前期
08-6	08B	003NR	5層	P402			古墳時代前期
08-7	08B	003NR	5層	P446			古墳時代前期
08-8	08B	003NR	5層	P500			古墳時代前期
08-9	08B	003NR	5層	P511			古墳時代前期
08-10	08C	130b	071SZ				弥生時代中期
08-11	08C	130b	071SZ				弥生時代中期
-			溝群				古代(平安?)

第4表 大型植物遺体試料一覧

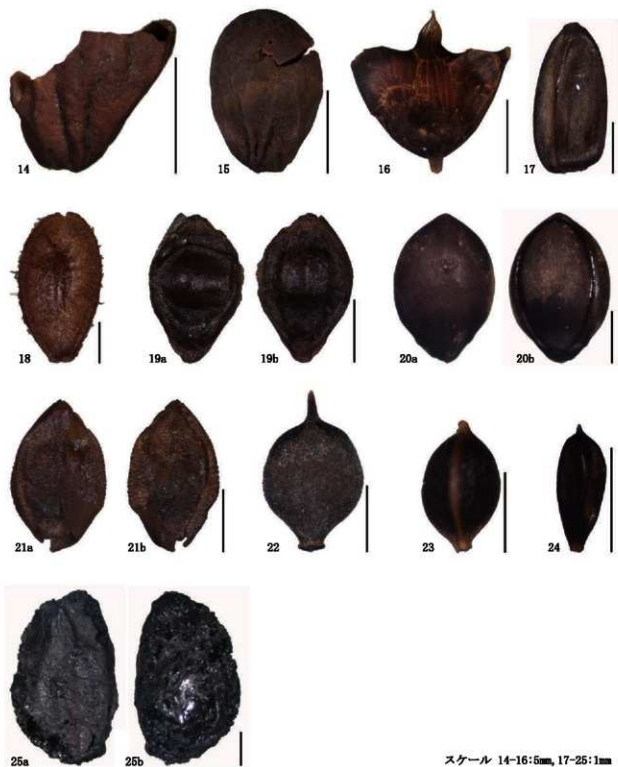


スケール 1, 2, 11, 12:5mm, 3, 4-10, 13:1mm

第 118 図 惣作遺跡 003NR から出土した大型植物遺体 (1)

1. ナラガシワ未熟果 (P496, No.16-7), 2. ナラガシワ殻斗 (P496, No.16-7), 3. パラ属果実 (P443, No.16-5), 4. パラ属核 (P444, No.17-4), 5. ブドウ属種子 (No.18-1), 6. ウコギ属核 (P604, No.16-8), 7. ガマズミ属核 (P604, No.16-8), 8. タデ属 A 果実 (No.18-1), 9. タデ属 B 果実 (P988, No.17-1), 10. マメ科炭化種子 (P496, No.16-7), 11. メロン仲間種子 (No.18-1), 12. ヒョウタン仲間種子 (P450, No.17-5), 13. スズメウリ種子 (P988, No.17-1)

惣作遺跡



第 119 図 惣作遺跡 003NR から出土した大型植物遺体 (2)

14. ゴキツル種子 (P407, No.17-3), 15. ウリ科種子 (P446, No.18-7), 16. ヒシ属果実 (P446, No.18-7), 17. キク科果実 (P490, No.16-6), 18. アサザ種子 (P407, No.17-3), 19. イヌビエ属有ふ果 (P988, No.17-1), 20. キビ有ふ果 (P604, No.16-8), 21. アワ有ふ果 (P116, No.18-3), 22. スズ属 A 果実 (No.18-1), 23. スズ属 B 果実 (No.18-1), 24. カヤツリグサ属果実 (No.18-1), 25. 不明炭化種実 (P450, No.17-5)

かに、科以下の同定ができなかった不明の炭化種実と芽があった。種実以外には昆虫遺体が含まれていた。003NR 出土の大型植物遺体同定結果の一覧を第5表に示す(ただし、大型植物遺体を得られなかった P107 は除く)。溝群サンプルからはシソ属炭化果実が1点得られた。

図版に主要な大型植物遺体の写真を示し、同定の根拠とする。記載は省略する。

(4) 考察

土壌試料 25 試料を水洗した結果、大型植物遺体を得られたのは河川跡である 003NR 出土の土器内採取試料と溝群採取試料のみであった。003NR から出土した大型植物遺体はほとんど未炭化の種実のため、河川跡の水成堆積物内に堆積した種実が残存し、河川跡以外の陸地の遺構では、炭化して無機物となった種実以外は残存しにくかったと推定される。河川跡の堆積状況や土器がどのように出土したかは不明だが、主体は未炭化種実であり、入っていた土器と直接関係があるというよりも、河川跡の堆積物が土器内に入り込んだ可能性が高いと考えられる。

古墳時代の土器の出土位置は不明のため、出土位置による傾向については議論できないが、5層堆積当時に利用されていた栽培植物として、スモモとメロン仲間、ヒョウタン仲間、キビが挙げられる。メロン仲間は藤下(1984)によると、種子の大きさからおおむね次の3群に分けられるとしている。長さ6.0mm以下は雑草メロン型、長さ6.1~8.0mmはマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1mm以上はモルディカメロン型である。図版に示したメロン仲間の大きさは、長さ7.3mm、幅3.5mmで、大きさで分類するとマクワウリ・シロウリ型であった。他の栽培植物としては、出土層位は不明の P116 内から出土したアワがある。キビやアワの出土部位は未炭化の有ふ果であるため、遺構付近で脱穀作業を行っていた可能性や、付近に畑作地があり、自然の営力で流れ込んだ可能性などが考えられる。クワ属とバラ属、マメ科には栽培種と野生種があり、マメ科は大きさ(長さ4.7mm、幅2.5mm)と形態から野生種と考えられる。クワ属とバラ属については、形態から両者の区別をつけるのは困難である。このほ

か、食用可能な分類群としては、ナラガシワとサンショウ、ニワトコ、ヒシ属、シソ属が産出した。ミズナラ-ナラガシワの殻斗や効果は小片で両者の区別ができなかったが、遺跡立地を考慮すると、ナラガシワである可能性が高い。同様に、コナラ属コナラ節の果実は破片のため形態からはナラガシワとミズナラ、カシワ、コナラの識別ができないものの、破片の形状と遺跡立地を考慮するとナラガシワがコナラである可能性が高い。ナラガシワは殻斗や未熟果が産出しており、河川跡のごく近くに生育していたと推定される。

そのほかの植物では、ムクノキやエノキ、アカメガシワといった陽地を好む落葉性の樹木が多く、それらにアオツツラフジやブドウ属、カナムグラ、ノブドウ、スズメウリなどのつる性植物が絡まっていたと推定される。河川跡周辺は落葉樹が生育しているものの、明るく開けた場所であったと考えられる。ただし、ミズヒキのように林内に生育する分類群もみられるため、付近にある程度森林とよべる林分があり、そこからもたらされた種実もあったと推察される。

草本植物では、浮葉性の水草であるヒルムシロ属やアサザ、ヒシ属、抽水植物であるヘラオモダカやホタルイ属、ミクリ属などが一定量みられるため、河川跡はある程度水深があり、ほとんど流れがない池のような状況の場所があったと考えられる。河川跡の周辺の乾いた草地にはイヌタデなどのタデ類やウシハコベ、アカザ属、カタバミ属などが生育していたと推定される。

古代(平安時代か)の溝群ではシソ属の炭化果実(長さ1.8mm、幅1.6mm)が1点産出したのみで、穀類などは検出されなかった。当時の未炭化の栽培植物は畑には残存しないと考えられるため、何らかの要因で炭化した種実のみが偶発的に残存したと考えられる。

引用文献

- 藤下典之 1984 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学一総括報告書』同明舎出版 P.638-654

第5章 考察・まとめ

第1節 出土木製品からみた弥生時代後期～古墳時代前期の鹿乘川流域遺跡群

(1) 鹿乘川流域遺跡群における集落と古墳の分布

鹿乘川流域遺跡群は矢作川右岸を碧海台地の縁辺にほぼ並行して流れる河道（古鹿乗川）に沿うかたちで南北約5km、東西約1kmにわたって展開する遺跡群である。遺跡群の形成は、下橋下遺跡や堀内貝塚など縄紋時代後期～晩期の遺跡を除けば、おおむね弥生時代中期前葉に始まり、古墳時代中期にはほぼ終焉を迎える。おおむね碧海台地上の東端に古墳が築かれ、台地下直下の沖積低地に集落群が広がっている。

第120図をみる限り、台地から古鹿乗川に流れ出る谷筋が3本認められる。古墳・集落の分布状況から、亀塚遺跡と姫下遺跡の間で大きく二群に分かれることは間違いない。さらに亀塚遺跡より北側の集落群のうち、坂戸遺跡～古井堤遺跡と宮下遺跡～亀塚遺跡が、両者を隔てる谷筋によってさらに二群に分けられる可能性が高い。すなわち鹿乘川流域遺跡群は、坂戸遺跡～古井堤遺跡を北群、二太子遺跡～亀塚遺跡を中央群、姫下遺跡から惣作遺跡を南群とする3つの集落群によって形成された複合的な遺跡群とみることができる。

古墳もまた、塚越古墳（全長46m、前方後円墳 or 前方後方墳）を盟主墳とする北群、二子古墳（全長69m、前方後方墳）を盟主墳とする中央群、姫小川古墳（全長69m、前方後円墳）を盟主墳とする南群に分けられる。

これまでの調査で木製品が出土している遺跡は、北から坂戸遺跡・上橋下遺跡・釈迦山遺跡・彼岸田遺跡（以上、北群）・二太子遺跡・桜林遺跡・宮下遺跡・中狭間遺跡・亀塚遺跡（以上、中央群）・姫下遺跡・下懸遺跡・惣作遺跡（以上、南群）である。うち本稿では、愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、筆者が整理・報告をおこなってきた南群の3遺跡を中心に、出土木製品の器種組成・樹種組成などさまざまな視点から分析を進めていきたい。

(2) 出土木製品の器種組成からわかること

第6表と第121図は鹿乘川流域遺跡群において、出土木製品の時期がある程度限定できる遺跡について、器種の大分類に従って数値化したものである。

第121図をみると、まず廻間Ⅰ～Ⅲ式期の下懸遺跡と廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期の姫下遺跡は、他と比べて木製品の出土点数が格段に多いことがわかる。それゆえ、かつての調査ではあまり取り扱ってこられなかった丸棒～丸太の比率が高くなるとともに、掘削具～矢板の器種組成についてもより複雑で、掘削具の占めるパーセンテージが5%程度と低い。ただし、出土点数が極端に少ない古井堤期の姫下遺跡と惣作遺跡を除けば、どの遺跡も器種組成そのものはよく似ていることがわかる。

次に、姫下・下懸・惣作遺跡から出土している木製品について検討する。

掘削具では、直柄横鎌・曲柄平鎌・曲柄二又鎌・曲柄多又鎌・一木平鋸などの器種が、複数の遺跡から出土している（第122図）。伊勢湾型曲柄鎌に関しては、輪部の形態から尾張系（004）・東三河～遠江系（162）・伊勢系（166）に分類が可能である。このうち、下懸遺跡と惣作遺跡では尾張系と東三河～遠江系が、姫下遺跡では3つの系統がともに出土している。姫下遺跡ではさらに、近畿系と考えられるナスビ形曲柄二又鎌（167）が出土している。ただ、樹種にはコナラ節を用いていることから、近畿や伊勢からの搬入品ではなく、姫下遺跡で製作されたとみて間違いない。いずれの遺跡においても、コナラ節・クス平節などの板・分割材・丸太が出土していることから、基本的に掘削具はそれぞれの遺跡で製作されていた。このことは姫下・下懸・惣作の3遺跡のみならず、鹿乘川流域遺跡群の北群および中央群の木製品出土遺跡すべてにおいて同様である。

また、台輪の可能性を有する中央に半円形の刺り込みをほどこした大型の板（姫下038と下懸1441）や、用途不明の穿孔円盤（姫下159と下懸1586）のように、きわめてよく似た木製品が姫下遺跡と下懸遺跡からそれぞれ出土していることは、両遺跡の木製品生産において、何らかの共通する需要と技術的基盤があったことを示している（第125図）。

手工業生産に関しては木製品生産以外に、姫下遺跡において梓（014）・総かけ（187）など複数の紡織具が出土していることが重要である。特に総かけは、東村純子による分類では絹織雑用とされるB類に属する（東村2011）。

姫下・下懸・惣作遺跡からは、それぞれ上位階層者（首長や王）が用いるのにふさわしい木製品が出土している。下懸遺跡では弥生時代後期前半（八王子宮式期）の装



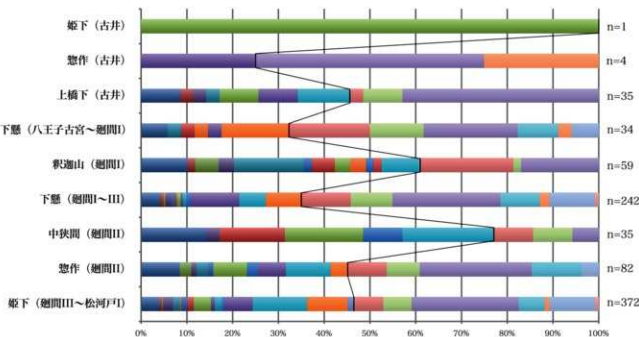
第120図 鹿栗川流域遺跡群の遺跡分布 (S = 1:25000)

惣作遺跡

第6表 弥生～古墳時代の木製品器種組成比較

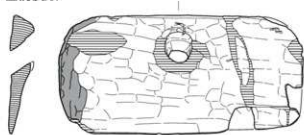
	上橋下 (古井)	姫下 (古井)	惣作 (古井)	下郷 (八王子古宮～廻間I)	釈迦山 (廻間I)	下郷 (廻間I～II)	中快調 (廻間II)	惣作 (廻間II)	姫下 (廻間III～松河戸)	計
厨器具	3			2	6	10	5	7	15	48
厨器具(未)	1				1	2			2	6
厨器具柄					3	1		2	1	7
農具	1				2	3	1	1	8	16
工具	1			1	9			2	6	19
雑具(火鋸臼・惣えさし)									1	1
調理品(乳・餅・餅・餅)					1	2		1	5	9
紡織具・編み具				1	3	1	5		5	15
容器	3	1			2	2	6	6	14	34
容器(未)						1			3	4
運搬・漁撈具?						2			6	8
武器(甲・箭)				1	2					3
威嚇具・祭祀具					1	2	3	2	2	10
服飾具(帯・下駄)					1					1
文房具(木簡)										
柱	3		1	1		26		5	23	59
建築材(柱除く)	4				5	14	7	8	44	82
杭				5		19		3	33	60
矢板									5	5
丸棒	1			6	12	26	3	7	24	79
角棒	3			4	1	22	3	6	23	62
板	15		2	7	10	57	2	20	87	200
分割材				3		21		9	21	54
残材			1	1		5			4	11
丸太				2		24		3	37	66
その他						2			3	5
合計	35	1	4	34	59	242	35	82	372	864

- *厨器具
- *厨器具(未)
- *厨器具柄
- *農具
- *工具
- *雑具(火鋸臼・惣えさし)
- *調理品(乳・餅・餅・餅)
- *紡織具・編み具
- *容器
- *容器(未)
- *運搬・漁撈具?
- *武器(甲・箭)
- *威嚇具・祭祀具
- *服飾具(帯・下駄)
- *文房具(木簡)
- *柱
- *建築材(柱除く)
- *杭
- *矢板
- *丸棒
- *角棒
- *板
- *分割材
- *残材
- *丸太
- *その他



第121図 弥生～古墳時代の木製品器種組成比較

直柄横鍬



下懸 1546
アカガシ垂属

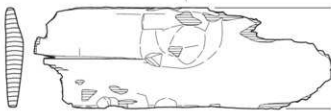


泥除け具未成品

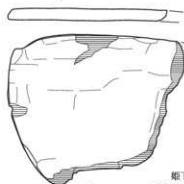
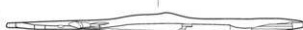
考察・まとめ



直柄横鍬 (エブリ) 未成品



瓶下 161
コナラ節



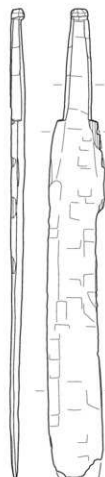
瓶下 002
アカガシ垂属

伊勢湾型曲柄平鍬
(尾張系)

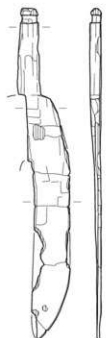


瓶下 004
コナラ節

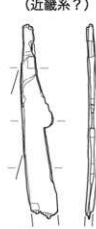
同 (東三河~遠江系) 曲柄二又鍬 (伊勢系) ナスビ形曲柄二又鍬 (近畿系?)



瓶下 162
コナラ節



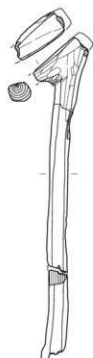
瓶下 166
アカガシ垂属



瓶下 167
コナラ節



鍬鏟柄



製作 788
サカキ

1/6 0

40cm

惣作遺跡

飾甲(1401-1)、惣作遺跡では廻間Ⅱ式期の団扇形(798)と赤彩板(800)、姫下遺跡では廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期の漆塗り丸棒(204)がそれである(第123図)。

下懸遺跡の裝飾甲は、神谷正弘の分類で弥生時代の短甲式木甲とされており、本例を含めてこれまで全国でも11例しか認められていない(神谷2010)。惣作遺跡の団扇形も、全国で20例に満たない貴重品である(鈴木2001・2003)。また、惣作遺跡の横斧柄や姫下遺跡の机天板(185)も優品で、後者は特に食器具を載せて饗宴などに用いた案とされている(長友2005)。

これら優品の所属する時期が、それぞれ遺跡ごとにずれている点がきわめて重要である。下懸遺跡は廻間Ⅰ～Ⅲ式期の木製品も大量に出土しているが、大型建物の建築部材以外はすべて日常的なもので、廻間Ⅰ式期以降に上位階層者がいた可能性は低い。すなわち鹿乗川流域遺跡群において、特別な木製品を所持する人物は、複数ある集落のそれぞれに同時併存して居住していたのではなく、南群の各集落を束ねる役割を担って、弥生時代後期以降、下懸遺跡→惣作遺跡→姫下遺跡とその居住地を移動していた可能性を示している。なかでも姫下遺跡は、ほとんどの木製品が廻間Ⅲ式期～松河戸Ⅰ式期に属しており、それが姫小川古墳の築造時期(4世紀前半頃、三田2005)に近いことから、姫小川古墳の被葬者は姫下遺跡に居住していた可能性がきわめて高い。

建築部材についても、第124図のような格の高い掘立柱建物の部材がそれぞれの遺跡から出土している。このうち下懸遺跡の1455は廻間Ⅰ～Ⅱ式期で1557は廻間Ⅱ～Ⅲ式期、惣作遺跡の812は廻間Ⅱ式期、姫下遺跡の206・217・221は廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期に属する。つまり惣作遺跡と姫下遺跡では、上位階層者が居住した時期にのみ、大型掘立柱建物の部材が出土している。特に姫下遺跡では各種部材がよく揃っていることも、3世紀後半～4世紀前半頃における王の居住地としてふさわしい。一方、下懸遺跡の大型建築部材は他の集落で解体されたものが、再転用のためにここでストックされていた可能性も考えられる。

(3) 出土木製品の樹種組成からわかること

まずは、器種ごとの樹種組成からみていく(第126図・第127図)。いずれの遺跡も掘削具・農具には広葉樹材を、建築部材(柱を除く)には針葉樹材を優位的に用いている。特に掘削具は、コナラ節・クスギ節・アカガシ亜属とサカキ(膝柄)にほぼ使用樹種が限定される。柱

材は八王子古宮～廻間Ⅰ式期の下懸遺跡を除けば、広葉樹(特にコナラ節)が多く用いられている。比較的その地域の植生が反映される杭は、惣作遺跡以外でマキ属の使用がめだつ。それ以外の器種では、特定の樹種が優占されることはないが、針葉樹ではヒノキ科・マキ属・スギ、広葉樹ではコナラ節・クリ・クスギ節が多方面に用いられている。また分割材・丸太は広葉樹が多いものの、残材は針葉樹が多数を占めることから、姫下・下懸・惣作遺跡における木製品生産は、いずれかの樹種に限定されるものではなかったことがわかる。

樹種別の器種組成グラフ(第128図・第129図)においても、ヒノキ科・マキ属・スギ・コナラ節・クリ・クスギ節の用途が多様であったことが確認できる。このなかで特にコナラ節は掘削具・柱を含む建築部材・杭、マキ属・クリもまた建築部材・杭としての利用が多い。一方アカガシ亜属は、下懸・姫下遺跡では掘削具が半数以上を占めることから、尾張低地部ほどではないにせよ、多用途に使えらるほど碧海台地には豊富に自生していなかった可能性がある。シイ属(ツブラジイ・スダジイなど)は、各遺跡でアカガシ亜属と同等の出土量はあがるが、半数以上は用途が特定できない板である。クワ属(ヤマグワ)は、弥生時代の西日本では主に精製の刳物容器(高杯・鉢・椀など)に用いられたが、ここでは容器としての利用例はない。ケヤキもまた、東日本では刳物容器としての使用例が多いが、ここでは惣作遺跡の白が1点あるのみである。

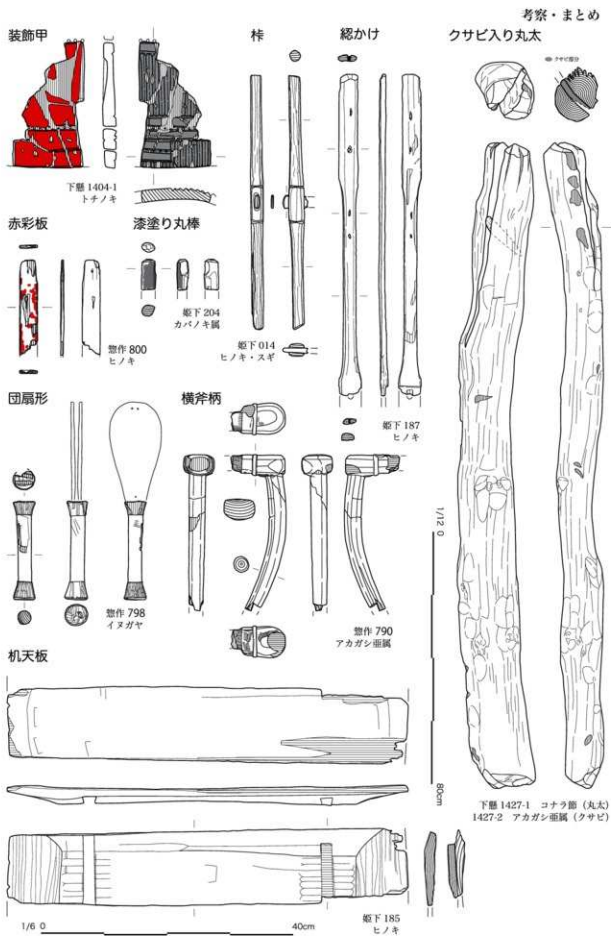
(4) 出土木製品の樹種別木取りからわかること

第130図・第131図は樹種別に、出土木製品の木取りをグラフ化したものである。グラフ上で、左から芯持ち丸木材・1/2分割材・1/4分割材・1/8分割材・椀目材・追椀目材・板目材の順となっている。これはおおそ左の方がより木材の加工度が低く、右にいくほど加工度が高くなる(加工の手順が進んでいる)ことを示している。

またグラフでは、上の樹種ほど芯持ち丸木材の比率が高く、下の樹種ほど板目材の比率が高くなるように配置している。そして、出土点数が多い(二桁のもの)樹種はゴチック体の太字で示している。

これらを見てわかるのは、3遺跡ともにコナラ節・マキ属・クリ・クスギ節は芯持ち丸木材の比率が高く、ヒノキ科・スギ・アカガシ亜属は低いということである。

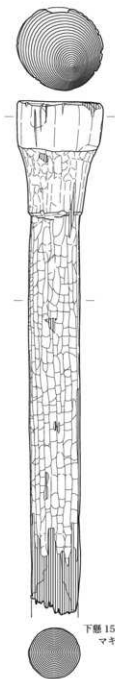
芯持ち丸木の方が、伐採された材がそのままに近い状態で使用されている(特に樹皮付き)ことから自生地に



第 123 図 鹿乗川流域遺跡群出土土威儀具ほかの集成 (S=1/6)

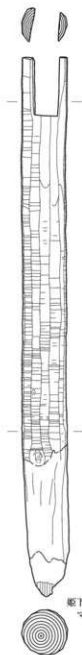
惣作遺跡

掘立柱建物丸柱



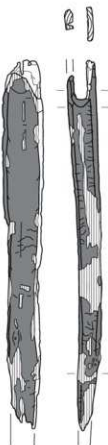
下層 1557
マキ属

同（輪なぎこみ）



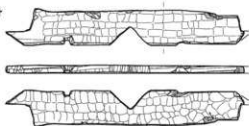
部下 206
マキ属

掘立柱建物ごひら柱
（輪なぎこみ）



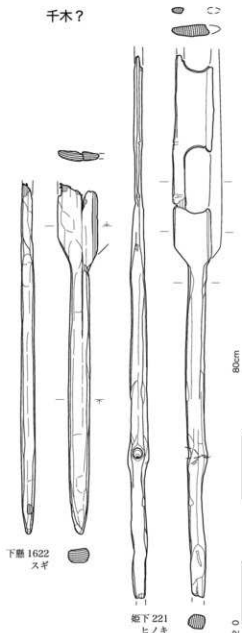
部下 217
クリ

垂木受け



下層 1465
ヒノキ

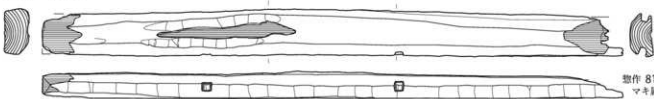
千木？



下層 1622
スギ

部下 221
ヒノキ

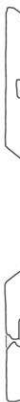
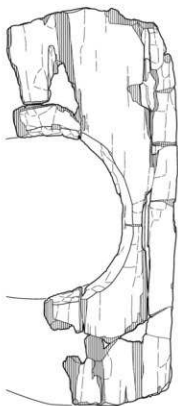
壁板 or 床板



惣作 812
マキ属

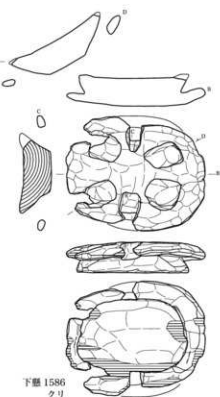
第 124 図 鹿乗川流域遺跡群出土建築部材の集成 (S=1/6)

台輪？



穿孔円盤

考察・まとめ

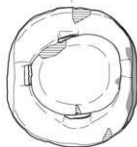


下懸 1586
クリ

下懸 1441
クリ



1/12 0
30cm



下懸 150
クリ



下懸 038
クスノキ



第 125 図 鹿乗川流域遺跡群出土その他の木製品の集成 (S=1/6)

惣作遺跡

近いことを示し、椀目材や板目材はすでに別の場所で作採・加工されたものが持ち込まれている可能性がより高くなる。特に板目材の場合は、径の限られた材から効率よく幅広の板を採ることが出来る用材法であるため、地元で入手しにくい樹種ほど板目材になる率が高いと考えられる（もちろん、針葉樹は板目に採りやすく、広葉樹は板目に採りにくいという材の分割方法は踏まえた上でのことだが）。

このようにみえてくると、やはり3遺跡に近い碧海台地縁辺部は、コナラ節・マキ属・クリ・クスギ節を主体とした二次林的植生（雑木林）であり、ヒノキ科・スギ・アカガシ亜属はやや遠隔地からある程度加工がなされた状態で持ち運ばれた可能性が高いといえる。

(5) 材の復元径・年輪数からわかること

第132～135図は、3遺跡から出土した木製品のうちで、木取りなどから本来の材径が復元できるものを抽出し、その材径と、計測した年輪数から伐採時におけるおおよその年輪数を計算し、樹種ごとにグラフ化したものである。各図ともに、上が復元材径、下が復元年輪数のグラフで、横軸がそれぞれ材径と年輪数となっており、棒グラフは下が針葉樹で上が広葉樹である。

八王子古宮～廻間Ⅰ式期の下懸遺跡と廻間Ⅱ式期の惣作遺跡では、材径の復元が可能だった木製品は、すべて直径30cm以下に収まっている。復元年輪数でも40年以下のものが多い。下懸遺跡で年輪数が100年近い樹種はヒノキ科で、惣作遺跡で100年を超えるものはコナラ節である。マキ属にも80年近いものもあり、全体に材径に対して年輪数が多い、つまり年輪幅が詰まった木が多く用いられている。

一方、廻間Ⅰ～Ⅲ式期の下懸遺跡と廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期の姫下遺跡では、資料数が多いこともあり、材径・年輪数ともに大きくばらつく。両遺跡を併せてみた場合、材径では20cm以下、30～50cm、60cm以上の3つのピークを認めることができる。これはそれぞれ、筆者の分類による小径木・中径木・大径木にほぼ相当している（樋上2010）。樹種ごとにみていくと、小径木にはマキ属・コナラ節・クリがめだつが、コナラ節とクリは中・大径木にもわずかに認められる。ヒノキ科とスギは、前述のように加工が進んだものが多いために材径の復元できたものは少ないが、小径木から大径木まで各種サイズがまんべんなく利用されている。アカガシ亜属で材径復元が可能なのは、やはり大径木が多い。

年輪数では、20～30年を高いピークとする正規分布と、70～110年の低い山、そして130年以上のものがある。特に250年以上に連なっている。年輪数30年以下の樹種では、材径と同じくマキ属・コナラ節・クリ・クスギ節がめだつ。これらの樹種は、前節でも触れたとおり、碧海台地の縁辺に二次林として存在しており、20～30年のサイクルで伐採され、芯持ち丸木のまま加工して、柱や建築部材・杭などに用いられていたことを示している。

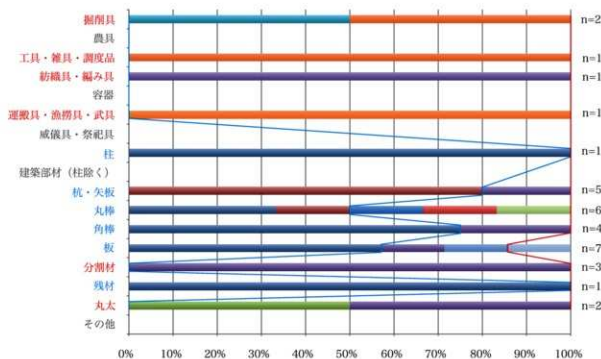
中径木に対応する年輪数70～110年の木材のうち、コナラ節は曲柄平鎌など刃部幅の狭い掘削具に、大径木にあたる年輪数130年以上のヒノキ科は大型の建築部材に、アカガシ亜属は曲柄二又鎌などの掘削具に利用されている。

現地性の高いコナラ節やクリには、まれに年輪数が150年を超えるような材も存在するが、ほとんどは復元材径が50cmに満たない中径木である。

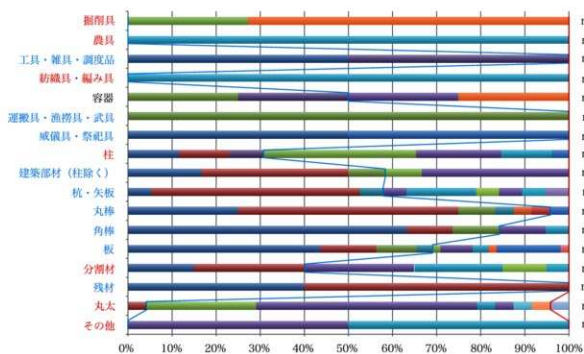
下懸遺跡は弥生時代後期前半（八王子古宮式）から廻間Ⅲ式期まで、ほぼ途切れることなく継続しているのに対し、惣作遺跡は廻間Ⅱ式期、姫下遺跡は廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期と、集落の時期幅が比較的限定されている。第120図をみると、姫下遺跡・下懸遺跡・惣作遺跡はそれぞれ500～600mの間隔で立地している。このうち特に姫下遺跡と下懸遺跡の間には、碧海台地に大きく谷が入り込んでいることから、この両集落では、伐採の際に利用する森林のエリアはほとんど重ならないと思われる。惣作遺跡もまた、下懸遺跡からは600mほど離れているうえに、存続時期が他の2遺跡に比べて短いことから、下懸遺跡の伐採エリアとは微妙にかぶらなかつた可能性がある。少なくともこの3遺跡に限定した場合、碧海台地上の森林利用としては、利用率が高いマキ属・コナラ節・クリ・クスギ節のうち、コナラ節・クリの一部を中～大径木になるまで残したうえで、他は20～30年のサイクルで伐採を繰り返していたと考えられる。そして、周辺に利用可能な樹木が乏しくなると、今度は集落ごと移動した可能性が高い。こういった材径と年輪数から復元できる伐採のサイクルと集落移動の状況は、近世の木地師（渡辺1977）や焼畑（福井1974）が20～30年ほどの間隔を空けて同じ場所に戻ってくるという民俗事例と一致している。これは伐採後、20～30年間放置することにより、再び利用（伐採）できるだけの森林資源が再生することを示している。あるいは



下懸遺跡（八王子古宮～廻間I式期）



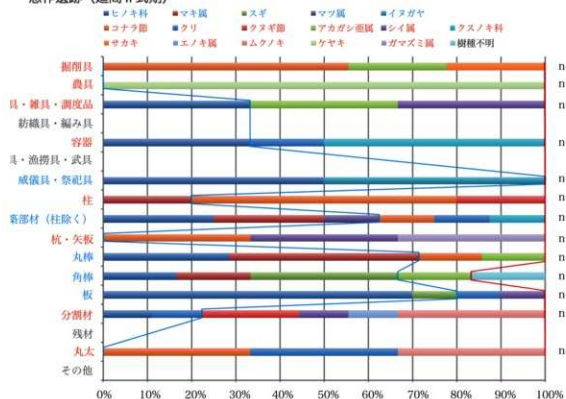
下懸遺跡（廻間I～III式期）



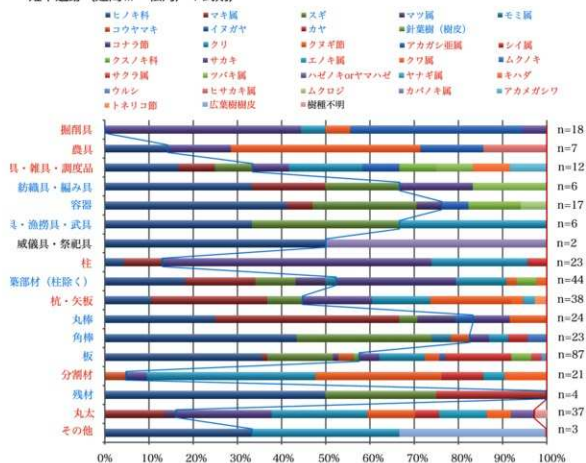
第126図 下懸遺跡出土木製品器種別樹種グラフ

惣作遺跡

惣作遺跡 (週間Ⅱ式期)



姫下遺跡 (週間Ⅲ～松河戸Ⅰ式期)

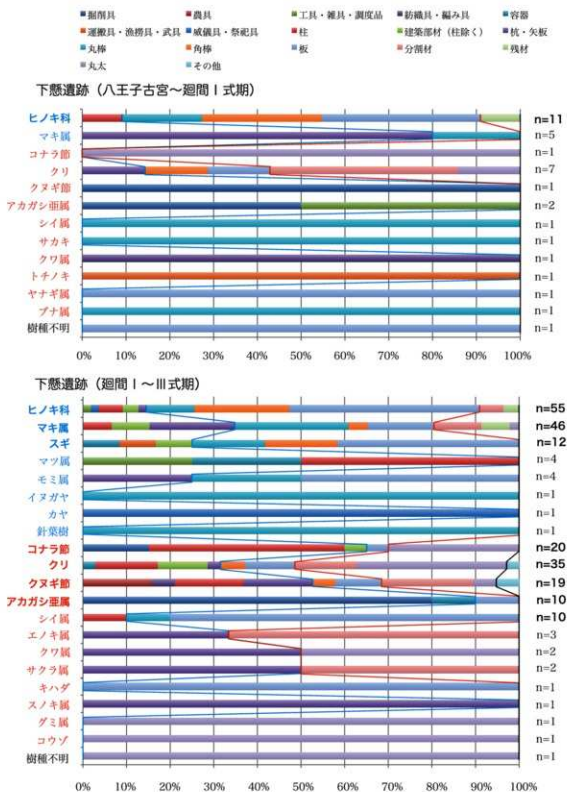


第 127 図 惣作・姫下遺跡出土木製品器種別樹種グラフ

は伐採を行ったあとの碧海台地上にも火入れをおこない、焼畑として数年間利用していた可能性も十分に考えられる。

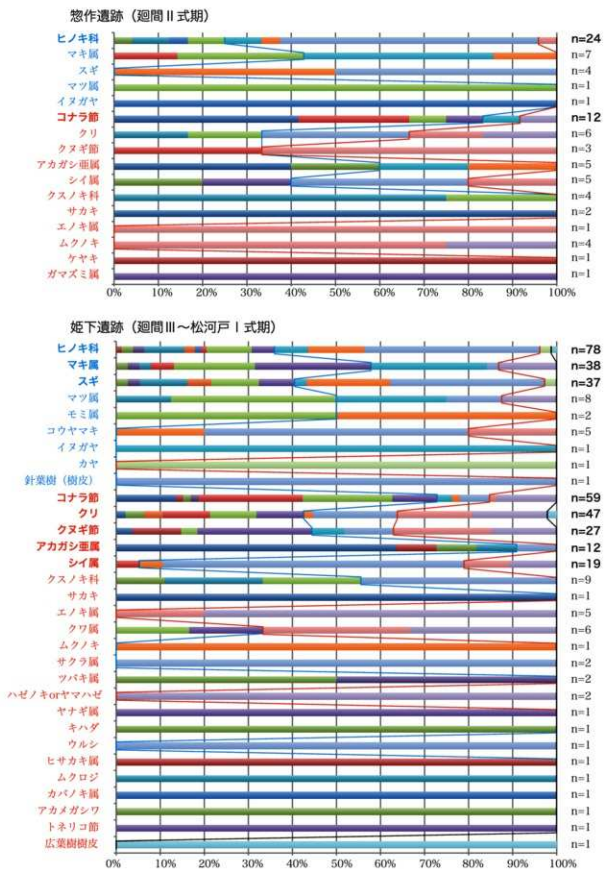
(6) 鹿乗川流域遺跡群における植生と使用樹種の変遷
 ここまでは、主として南群の3遺跡(姫下・下懸・

惣作遺跡)について、出土木製品からみた弥生時代後期～古墳前期における集落の階層性と、碧海台地上の植生についてみてきた。最後に、さらに時代幅を古井式期(弥生時代中期後葉)から江戸時代までに広げて、鹿乗川流域遺跡群における植生および使用樹種の変遷について確



第128図 下懸遺跡出土木製品樹種別器種グラフ

惣作遺跡



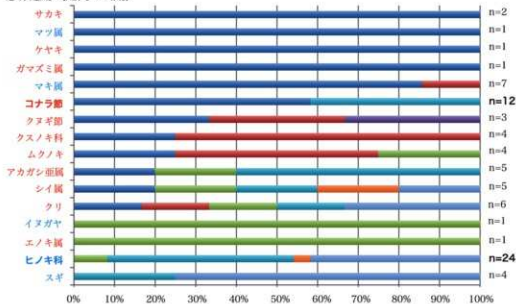
第 129 図 惣作・廻下遺跡出土木製品樹種別器種グラフ



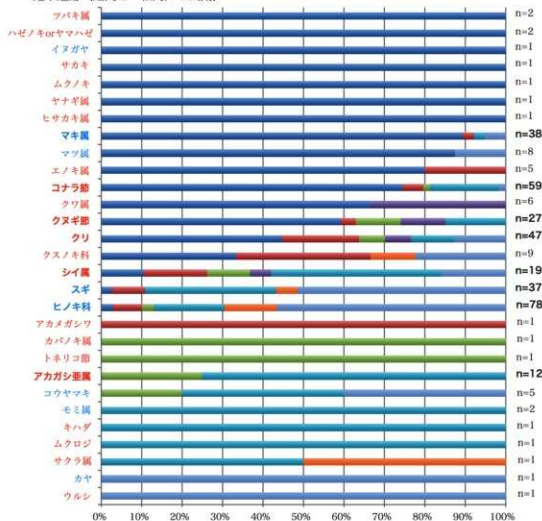
第 130 図 下懸遺跡出土木製品樹種別木取りグラフ

惣作遺跡

惣作遺跡 (廻間Ⅱ 式期)



廻下遺跡 (廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ 式期)



第 131 図 惣作・廻下遺跡出土木製品樹種別木取りグラフ

認しておきたい。

第7表は上橋下・中狭間・姫下・下懸・惣作の5遺跡について、古井式期から江戸時代後期までの使用樹種と、姫下遺跡の廻間Ⅲ～松河戸1式期における樹種サンプル（自然木および低加工の棒・板など）を、時代順にまとめたものである。

まず姫下遺跡の樹種サンプルでは、これまで検討してきた樹種のうち、コナラ節・クスギ節・クリ・シイ属・マキ属・ヒノキ科・クワ属などが多いのに対し、スギ・アカガシ属・クスノキ科・サカキは非常に少ない。ヒノキ科を例外とすれば、前者は碧海台地上で容易に調達できた樹種であり、後者は外部から持ち運ばれた樹種であったことを示している。前者のグループにはヤナギ属・エノキ属も含まれる。ヤナギ属は姫下遺跡の杭に用いられていることから、やはり入手しやすい樹種であったことがわかる。エノキ属もまた、各遺跡から確実に出土しているが、下懸遺跡の杭以外は用途不明品ばかりであることから、豊富にはあるが、あまり使いみちがない樹種だったのかも知れない。

第136図のグラフで姫下遺跡の樹種サンプルをみれば一層あきらかなように、古墳時代前期の碧海台地上の植生は広葉樹が圧倒的に多く、なかでもコナラ節・クスギ節・クリ・シイ属・ヤナギ属・エノキ属で全体の約75%を占めている。一方、針葉樹はヒノキ科・マキ属・マツ属を除くと非常に少ない。ヒノキ科は、針葉樹としては多い部類に入るのだが、それでも樹種全体のわずか3%に満たない。

ところが使用樹種におけるヒノキ科の比率をみると、弥生中期後葉～廻間1式期では15%、廻間1～松河戸1式期では23%、古代では77%、鎌倉時代では79%、江戸時代では23.5%と非常に高く、なかでも古代と鎌倉時代は、樹種の4分の3以上をヒノキ科が占めるにおよんでいる。以上のことから、使用樹種としてのヒノキ科は、やはり他地域から搬入されたものである可能性が高く、さらに時代を追うごとにヒノキ科への依存度がより増していることがわかる。古墳時代までは、一部の必要な樹種（ヒノキ科・スギ・アカガシ亜属など）を外部に依存する以外は、基本的に在地で入手が容易な樹種を用いているが、古代以降の用材選択は、ほぼ全面的に外部（矢作川上流域か）からの搬入品（製品としての搬入品も多い）に頼っており、もはや遺跡所在地周辺の植生を全く反映していないことが、この鹿乘川流域遺跡

群の分析からみとることができる。

（7）まとめ

南北約5km、東西約1kmにおよぶ鹿乘川流域遺跡群は、碧海台地に入り込む谷筋と台地上に展開する古墳の分布状況からみて、北群・中央群・南群という3つの遺跡群からなる複合的な遺跡群と考えられる。北群は坂戸遺跡から古井堤遺跡まで、塚越古墳を盟主墳とする墓域を有する。中央群の範囲はやや狭いが、二太子遺跡から亀塚遺跡まで、二子古墳を盟主墳とする墓域がある。南群は姫下遺跡から惣作遺跡（あるいは大畑遺跡）まで、姫小川古墳を盟主墳とする墓域を有する。

南群では愛知県埋蔵文化財センターの調査によって、姫下遺跡・下懸遺跡・惣作遺跡から多量の木製品が出土しており、所属時期は古井式期（弥生時代中期後葉）から江戸時代後期におよんでいる。この3遺跡のうち、時期を弥生時代後期から古墳時代前期に絞ると、下懸遺跡が八王子古宮式期（弥生時代後期前半）から廻間Ⅲ式期（3世紀後半頃）と最も長期間にわたる木製品が出土しており、惣作遺跡は廻間Ⅱ式期（3世紀前半頃）、姫下遺跡は廻間Ⅲ～松河戸1式期（3世紀後半～4世紀前半頃）に属している。

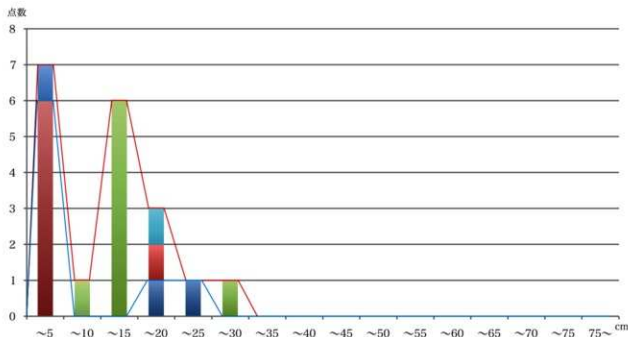
このうち、八王子古宮式期の下懸遺跡から赤彩甲片、惣作遺跡から廻間団形と赤彩板、姫下遺跡から漆塗り丸棒・机天板・大型掘立柱建物建築部材など、上位階層者（首長・王）の居住を示す木製品が出土している。このことから鹿乘川流域遺跡群の南群では、複数集落を束ねた上位階層者は、下懸遺跡→惣作遺跡→姫下遺跡と居住地を移動させていた可能性が高い。そして姫下遺跡の存続時期が姫小川古墳（全長69mの前方後円墳）の築造時期（4世紀前半頃）にきわめて近いことから、姫下遺跡は姫小川古墳被葬者（王）の生活の場であり、王の管轄下の元に木製品生産のほか、絹織物の紡織作業もおこなわれていた。一方、下懸遺跡については、惣作・姫下遺跡の時期にも他地域があり、木製品生産もおこなわれていることから、ここには一般層が継続して居住していたと考えられる。

こういった集落変遷の要因の一つには、近接する碧海台地での木材利用が縮んでいた可能性がきわめて高い。上記3遺跡から出土した木製品について、樹種・復元径・復元年輪数を検討すると、碧海台地上にはコナラ節・クリ・クスギ節・シイ属・マキ属などを主体とする森林が存在していたことがわかる。この森林は、およそ20～

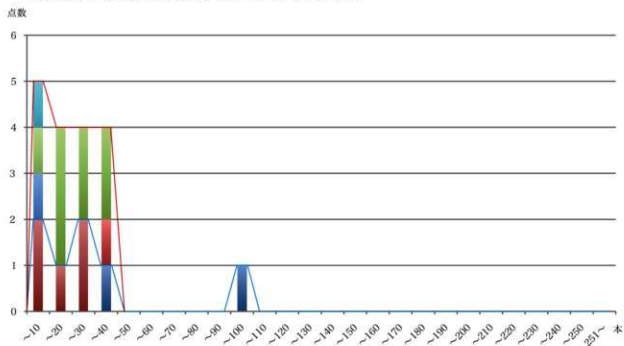
惣作道跡



下懸遺跡 樹種別復元材径グラフ (八王子古宮～廻間Ⅰ式期)



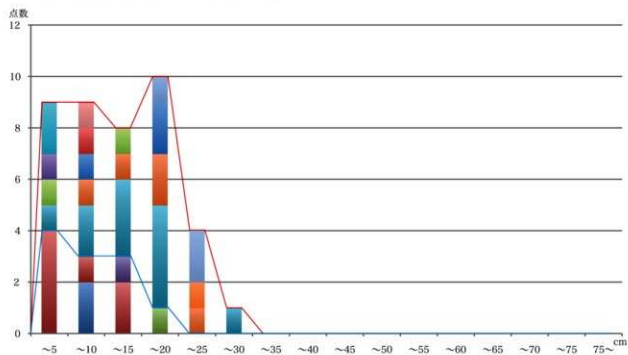
下懸遺跡 樹種別復元年輪数グラフ (八王子古宮～廻間Ⅰ式期)



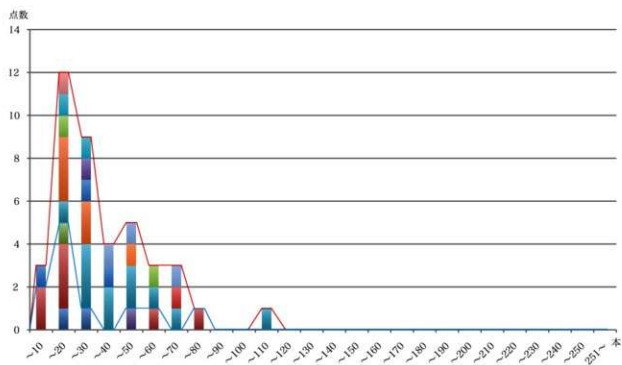
第 132 図 下懸遺跡出土弥生時代木製品の復元径・年輪数グラフ



惣作遺跡 樹種別復元材径グラフ (廻間Ⅱ時期)



惣作遺跡 樹種別復元年輪数グラフ (廻間Ⅱ時期)

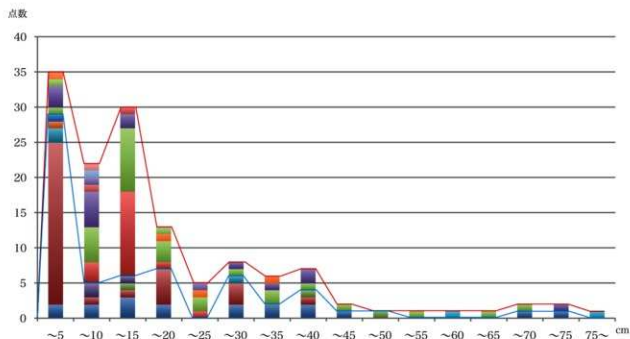


第 133 図 惣作遺跡出土木製品の樹種別復元径 - 年輪数グラフ

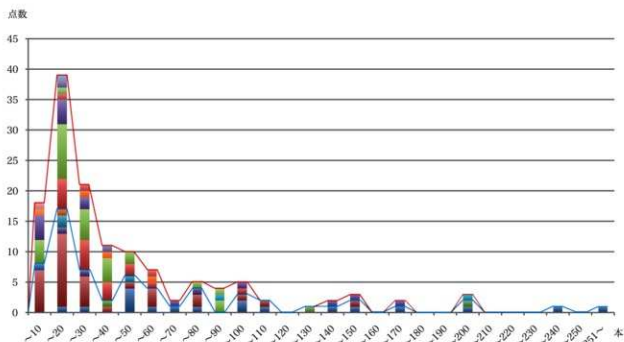
惣作遺跡



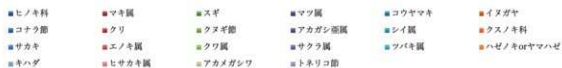
下懸遺跡 樹種別復元材径グラフ (廻間Ⅰ～Ⅲ式期)



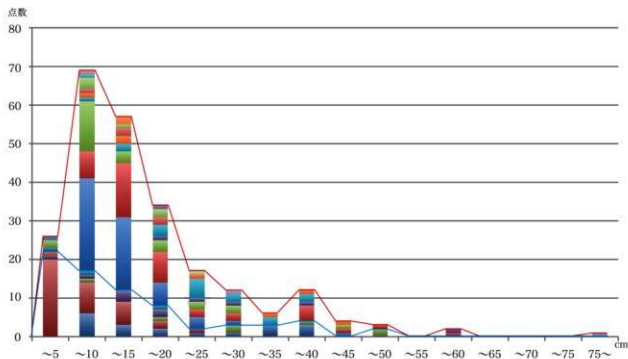
下懸遺跡 樹種別復元年輪数グラフ (廻間Ⅰ～Ⅲ式期)



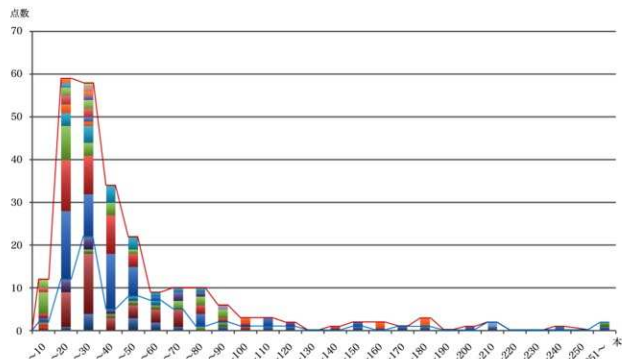
第 134 図 下懸遺跡出土古墳時代木製品の復元径 - 年輪数グラフ



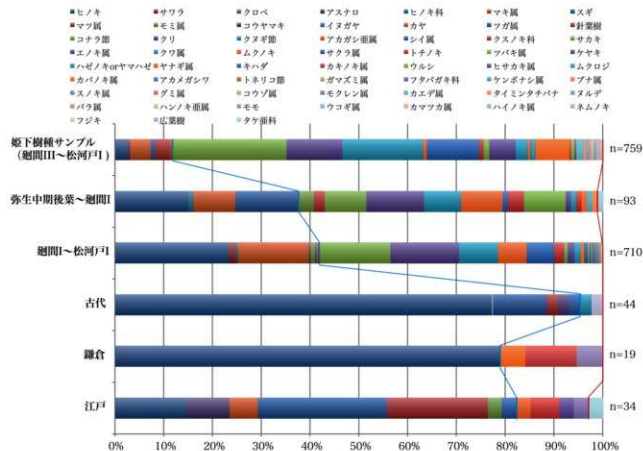
姫下遺跡 樹種別復元材径グラフ (廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ時期)



姫下遺跡 樹種別復元年輪数グラフ (廻間Ⅲ～松河戸Ⅰ時期)



第 135 図 姫下遺跡出土木製品の器種別復元径・年輪数グラフ



第 136 図 鹿乗川流域遺跡群の樹種組成比較グラフ

30年を一つのサイクルとして伐採から再生までを繰り返しており、近傍で使用できる木材が枯渇すると集落を移動していた可能性がある。このサイクルは近世の木地師や焼畑とほぼ一致していることから、碧海台地上の伐採をおこなったエリアについては、一定期間焼畑をおこなっていた可能性もある。

また、遺跡周辺の碧海台地上にはあまりなかったヒノキ科・スギ・アカガシ亜属などの樹種については、現在の豊田市域（佐々木・松葉・植田 2005）より矢作川の水運を利用して搬入していたとみられる。さらに時期が下って古代以降になると、ヒノキ科への依存度が急激に高まる一方、逆に碧海台地上の森林は、燃料材以外の用材供給地としてほとんど顧みられなくなっていった。

（随上 昇）

引用文献

愛知県埋蔵文化財センター 2007 『上下遺跡・鹿乗川流域遺跡群（高庄線鉄塔移設地点）』
 愛知県埋蔵文化財センター 2009 『下懸遺跡』
 安城市教育委員会 1999 『中扶間遺跡』
 安城市教育委員会 2001 『釈迦山遺跡』

神谷正弘 2010 『日本出土の木製短甲・組合せ木甲・福箱木甲について』『古文化談叢』第 65 集、九州古文化研究会
 佐々木由香・松葉礼子・植田弥生 2005 『水入遺跡出土木材の樹種同定』『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
 三田敦司 2005 『塚越古墳・二子古墳・姫小川古墳』伊藤秋男・赤塚次郎編『愛知県史 資料編 3 古墳』愛知県
 鈴木裕明 2001 『田原形木製品と陶埴』茨城大学考古学研究室 20周年記念論文集『日本考古学の基礎研究』
 鈴木裕明 2003 『古墳時代前期の田原形木製品の展開とその背景』石野博信編『初期古墳と大和の考古学』学生社
 長友朋子 2005 『弥生時代から古墳時代への食事様式の変化とその歴史的意義』『待産山考古学論集—都出比呂志先生退官記念—』大阪大学考古学研究室
 東村純子 2011 『糸をつくり、経を織る。』『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
 随上 昇 2010 『木工技術と地域社会』『木製品から考える地域社会—弥生から古墳へ—』雄山閣
 福井勝義 1974 『焼畑のむら』朝日新聞社
 渡辺久雄 1977 『木地師の世界—個人と集団の谷間—』創元社

惣作遺跡

第2節 総括

(1) 惣作遺跡における弥生時代中期の裏の変遷

惣作遺跡の遺構変遷については、すでに「惣作遺跡」(宮腰編 2009)により簡潔にまとめられている。今回の調査成果は概ねこれに合致するものであったが、新たな知見として、(1) 流路岸で古墳時代前期の遺物が多量に出土したこと、(2) 古代末から中世にかけての水田遺構を発見したことが加えられよう。一方、これとは別に「惣作遺跡」2009の遺構変遷ではA-2期が前半と後半に大別されているものの、その区分以上に目まぐるしく遺構が変遷するという問題が内在していた。そこで、具体的な遺構変遷を考察する前に惣作遺跡A-2期の細分を試みることにした。

A-2期の時期を細分するために今回は弥生土器裏に着目した。A-2期は弥生時代中期後葉のいわゆる古井式を中心とする時期だが、西三河地域の古井式期の土器の変遷については、三河地域の様式と編年をまとめた論考(前田・鈴木 2002)、岡島遺跡を分析した松井直樹(松井 1998)、川原遺跡を対象とした石黒立人(石黒 2001)、台付裏の成立を議論した鈴木とよ江(鈴木 2000)らの論考がある。鹿乘川流域遺跡群を対象とした先行研究はなく、上述した研究を参考にし、主に器形を中心に分類を試みて段階設定を行った。なお、各々の一括資料には前後の時期の土器が混入しているものが多く、分析の際はこれを恣意的に除外していることを断っておきたい。

a 段階(深掘調査出土資料と 04D 区 SD59): 深鉢形の裏で体部が直線的に開き口縁部は2回短く外折するもの(1類: 214 など)と、裏形の裏で体部が直立気味になり口縁部が短く外折するもの(2類: 217 など)がある。体部外面はイタナデ調整が基本となり、台付裏の脚も伴う。古井式の最古相に相当する。

b 段階(09B 区 0725K 出土資料): 深鉢形の裏で体部が直立気味になり口縁部は2回の短い外折が緩いもの(3類: 153 など)と、同じプロポジションで口縁部がやや長く1回外折するもの(4類: 154 など)もある。体部外面はハケ調整が基本となり、体部がやや湾曲して裏形に近づいている。

c 段階(09B 区 0285I・08C 区 0735D 出土資料): 体部は湾曲する裏形の裏で2回外折してやや長い口縁部に至

るもの(5類: 89 など)と、裏形の裏で体部上位はやや直線的で口縁部の外折が目立たずに大きく外反するもの(6類: 96 など)もある。5類が主体で、2回の外折により内面に形成された頸部(口縁部と体部の間)の面が最も発達する。体部外面はハケ調整に加えイタナデ調整が多くなる。脚はやや高くなる。なお、c 段階の後半として 0715Z 出土資料を考えておきたい。

d 段階(09B 区 0195I と 0285I 上層・08C 区 0665B 出土資料): 裏形の裏で2回外折して形成された口縁部が長く水平に近くなるもの(7類: 80 など)が主体となる。口縁部が受口様に内面に凹むものさえみられる。体部外面はハケ調整とイタナデ調整の両者がある。脚は高くなる。0665B の上位に構築された 0495B 出土資料などがあり、前後2区分される可能性があるが、今回は具体的な区分には至らなかった。c 段階と d 段階が古井式中相に相当するだろう。

e 段階(09B 区 0455X 出土資料): 図には示さなかったが、体部が緩く湾曲する裏形の裏で1回外折し長い口縁部を持つもの(8類: 127 など)がある。7類と8類は形状の差が大きいように感じられ、本来は d 段階と e 段階の間にいくつかの段階が含まれている可能性が考えられる。古井式最新相に当たるか。

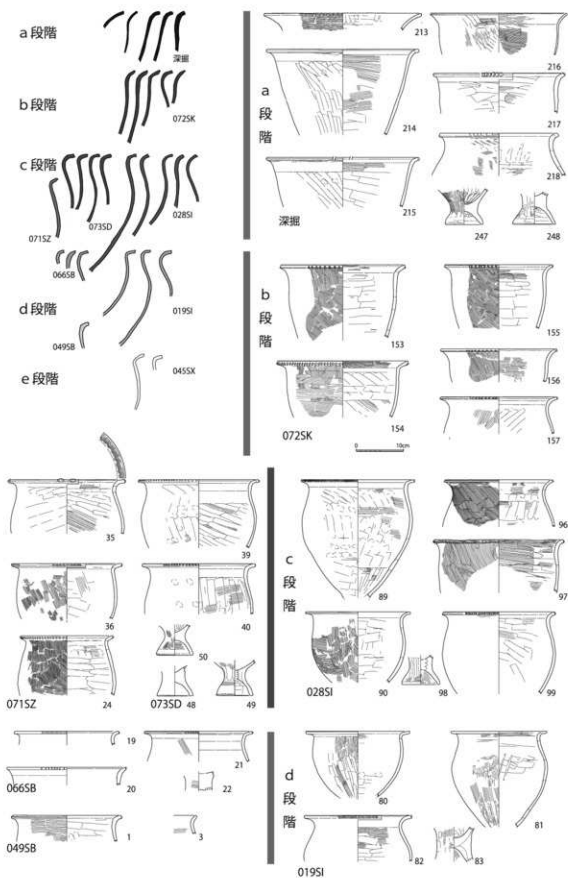
以上の a 段階から d 段階までの変遷は、出土遺構の重複関係(08C 区で深掘調査 → 0735D → 0715Z → 0665B → 0495B および 09B 区で 0725K → 0285I → 0195I)とも矛盾しない。なお、この変遷案は西三河の古井式成立に関する問題に少なからず影響するものと推察されるが、紙幅と筆者の力量が不足しているためここでは触れず、後考に委ねたい。

(2) 惣作遺跡の遺構変遷

上記の検討を踏まえ遺構変遷をまとめておきたい。A-1期: 04D 区と 04E 区を中心とする微高地に集落が展開すると思われ、西は流路、東は後背湿地となる。今回の報告では遺物が散見されたものの、遺構変遷では特に新知見はみられない。

A-2期 a 段階: 河道(谷地形)が遺跡西半部で蛇行しながら南流する。粗い砂が厚く堆積することから激しい流れであったと思われ、04D 区 SD59 や今回の深掘調査の出土資料からみて、人々の営みが近在していたことが推定されるに過ぎない。

A-2期 b 段階: 09B 区 0725K の存在から河道(谷地形)の埋積が進み微高地が西へ広がったと思われる。た



第 137 図 A-2 期における甕の変遷

惣作遺跡

だ072SK以外の遺構がほとんどないことから、依然として人々の営みが近在した程度であろう。

A—2期 c 段階：09B区 028SI・08C区 073SD・04C区 SU05 などから、拡大した微高地上に竪穴建物・溝・土器埋設遺構などが展開した。04C区 SZ01 や 08C区 073SD を方形周溝墓とみることは疑問があるものの、土器埋設遺構 04D区 SX13・04D区 SX13・08C区 071SX・08C区 072SX などは土器棺墓の可能性があり、微高地西側の河道近接部が墓域であったと推定できる。調査区東部の微高地中央は居住域と思われる。

A—2期 d 段階：08C区 066SB・同 066SB・09B区 019SI? などからみて、微高地西側の墓域と推定されたエリアでも居住域となったと考えられる。

A—2期 e 段階～A—4期：今回の調査ではA—2期 e 段階～A—3期の知見を加えることはあまりできなかったが、微高地北側に推定されていた河道の様相が具体的に判明した。結果、廻間Ⅱ式併行期（A—4期）に河道南岸で木製品の生産と水辺の祭祀を想定させる状況が確認された。多量の土器を含むことから、微高地上に展開した居住域はこれまでの想定よりも長く廻間Ⅱ式併行期まで盛行し、最終的には松河戸式併行期（09B区 026SK）まで継続していたと思われる。

B—1期：廻間Ⅱ式併行期で河道の埋積は進み、松河戸式併行期から岩崎 17 号竪式期までは様相は不明で人々の営みを見い出すことは難しい。鳴海 32 号竪式期に出土遺物が増加し、井ヶ谷 78 号竪式期には河道南の微高地上に溝で囲まれた区画に掘立柱建物が建ちその周辺にも遺構が展開した。河道北側の微高地も安定してきたとみられ、8 世紀後半から竪穴建物が認められるようになる。「呉部足国」の人名が記された木簡もこの時期に相当し、仏教や寺院に関わりの深い渡来系氏族が所在し、寺領

寺に関係したものと想定される。

B—2期：折戸 53 号竪式期には河道南の微高地にあった区画は消えるが、河道の南北両微高地で竪穴建物や掘立柱建物が展開したと思われる。河道 08 区 003NR も 10 世紀前半南までの遺物を含んでいるが、それ以降の様相は不明瞭となる。

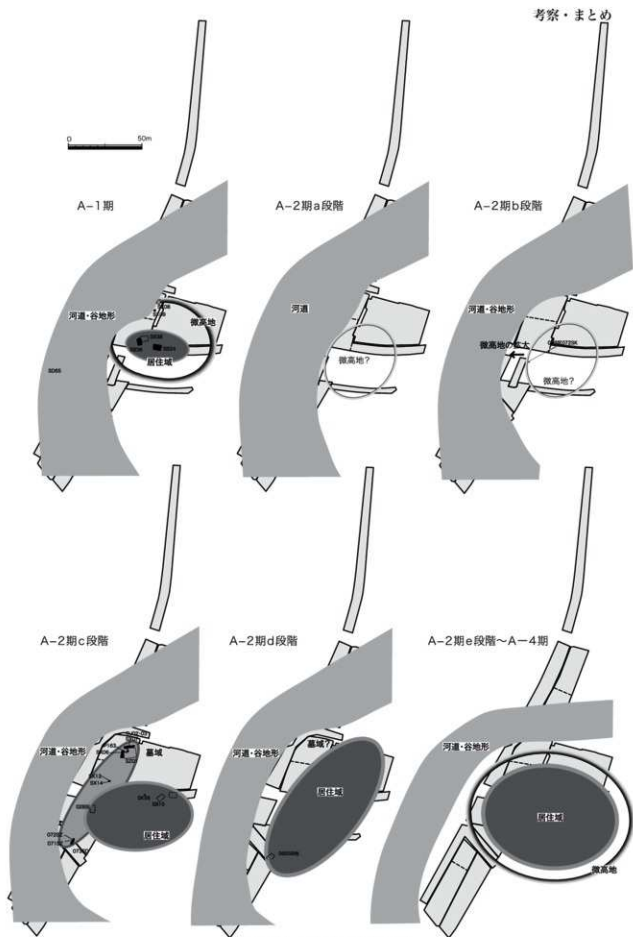
C—1期：河道北の微高地では掘立柱建物などの遺構が廃絶した後に水田遺構が検出されている。鎌倉時代には河道北の微高地から後背湿地に至る部分で水田が営まれたことが判明した。

C—2期：戦国時代から江戸時代では 2004 年度の調査でいくつかの遺構が確認されたが、今年度の調査では新しい知見を得ることはできなかった。

C—3期：江戸時代後期以降では、遺跡南西部を中心に 08C区 068NR など大型の遺構（または自然地形）が確認された。現鹿栗川に近い流路本体かその付近の不安定な立地を示しているものと思われる。（鈴木正貴）

引用文献

- 石黒立人 2001 『矢作川流域における弥生中期土器編年の再検討』『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 91 集
- 鈴木とよ江 2000 『西三河地方の台付墓の成立をめぐって』『三河考古第 13 号』
- 前田清彦・鈴木とよ江 2002 『三河地域』『弥生土器の様式と編年』東海編 木耳社
- 松井直樹 1998 『弥生時代中期後葉段階の「古井式土器」について』『岡島遺跡・毘沙門遺跡』西尾市教育委員会
- 宮腰健司編 2009 『惣作遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 158 集



第137図 惣作遺跡の遺構変遷

報告書抄録

ふりがな	そうさくいせき 2							
書名	惣作遺跡II							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第172集							
編著者名	鈴木正貴、永井邦仁、樋上昇、川添和暁、鈴木茂、黒沼保子、佐々木由香、 バンドリ スタルシャン							
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24 TEL0567(67)4161							
発行年月日	西暦 2012年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 °'〃	東経 °'〃	調査期間	調査面積	調査原因
そうさくいせき 惣作遺跡	あまじょうし きどうちやう 安城市木戸町	23213	540132	34度 53分 60秒	137度 05分 38秒	20080901～ 20091130	2100㎡	鹿乗川河 川改良工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
惣作遺跡	集落	弥生時代～ 古墳時代前期 奈良時代 ～平安時代 鎌倉時代～ 江戸時代	竪穴建物、 自然河道、 土器植墓など 竪穴建物、 掘立柱建物、 溝、土坑など 掘立柱建物、 溝、水田など	弥生土器、土師器 木製品など 須恵器、土師器 灰軸陶器、木製品 など 山茶碗類、 瀬戸美濃窯産陶器、 木製品など		弥生時代中期から 平安時代の集落 古墳時代前期の 良好な一括資料 と木簡		
文書番号	発掘届出(20埋セ第57号・2008.8.19) (21埋セ第41号・2009.7.15) 通知(20教生第1360号・2008.9.9) (21教生第1033号・2009.8.6) 終了届・保管証・発見届(20埋セ第94号・2009.12.24) (21埋セ第78号・2009.10.28)							
要約	今回の調査で確認された遺構や遺物は3期に大別される。弥生時代中期から古墳時代前期では、竪穴建物を中心とした集落が展開したとみられ、古墳時代前期の自然流路から多量の土器と木製品が出土した。奈良時代から平安時代には竪穴建物と掘立柱建物も伴う集落が営まれ、年号と人名が記された木簡も1点出土した。鎌倉時代以降は居住域ではなくなったように、水田や河道などの土地利用が確認された。 鹿乗川流域遺跡群の南部に所在する本遺跡は、周辺に点在する他の遺跡との関連が注目される。							

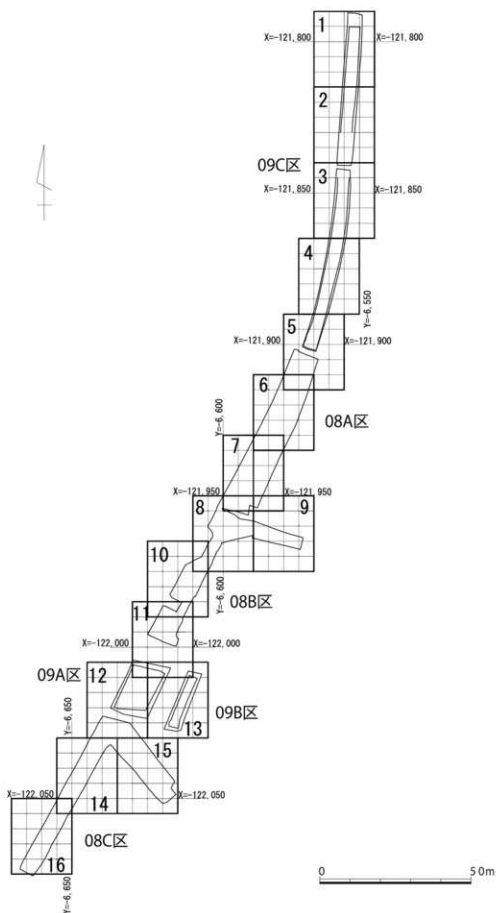
遺構図版

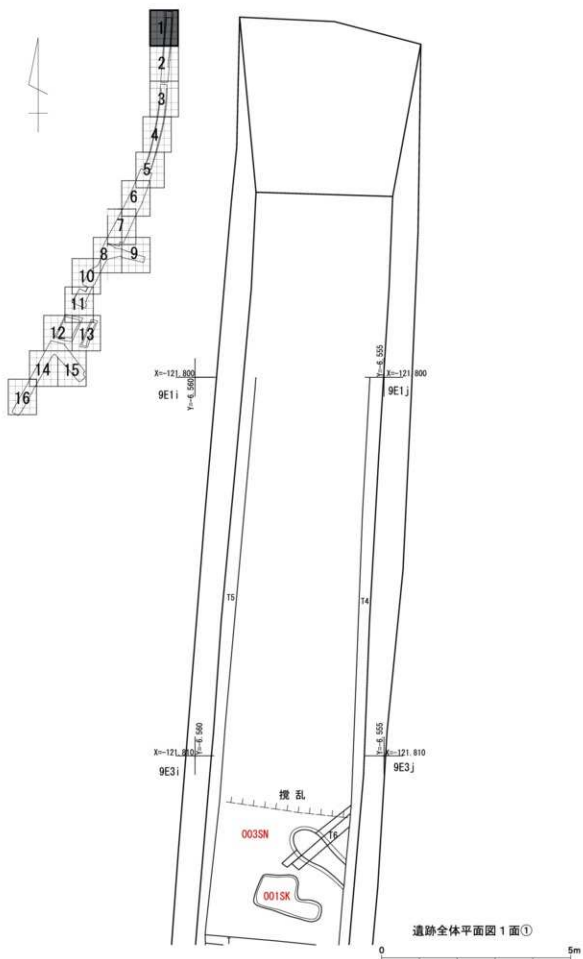
遺構図版割付

第1面遺構 (1～16 縮尺 1:100)

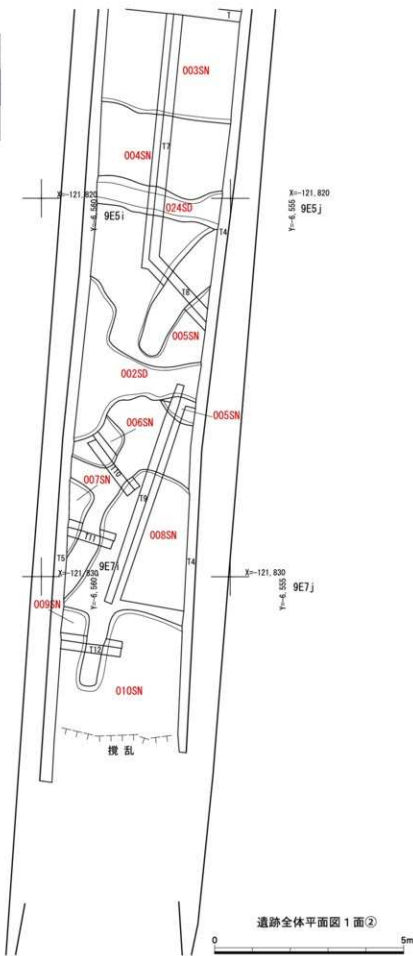
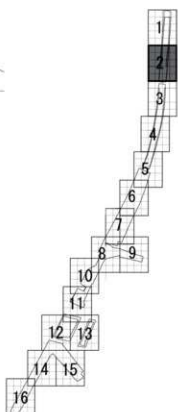
第2面遺構 (1～16 縮尺 1:100)

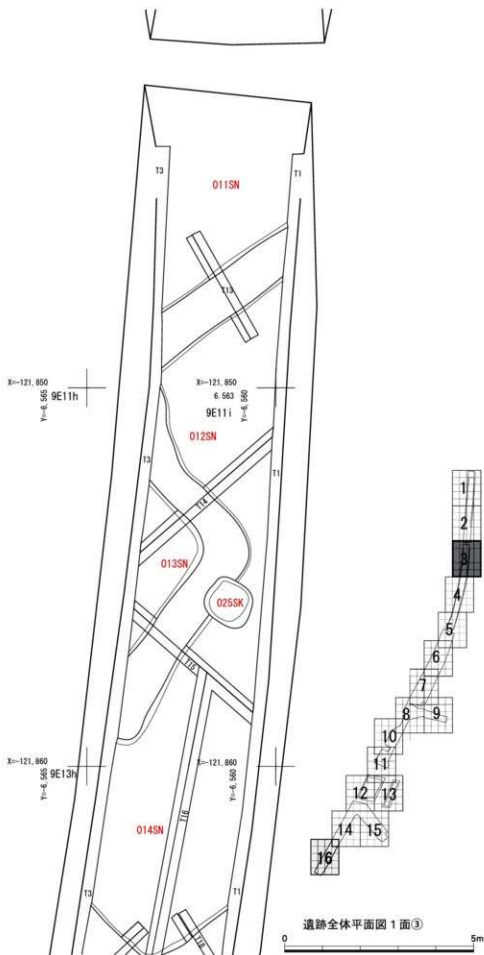
遺構図版 1



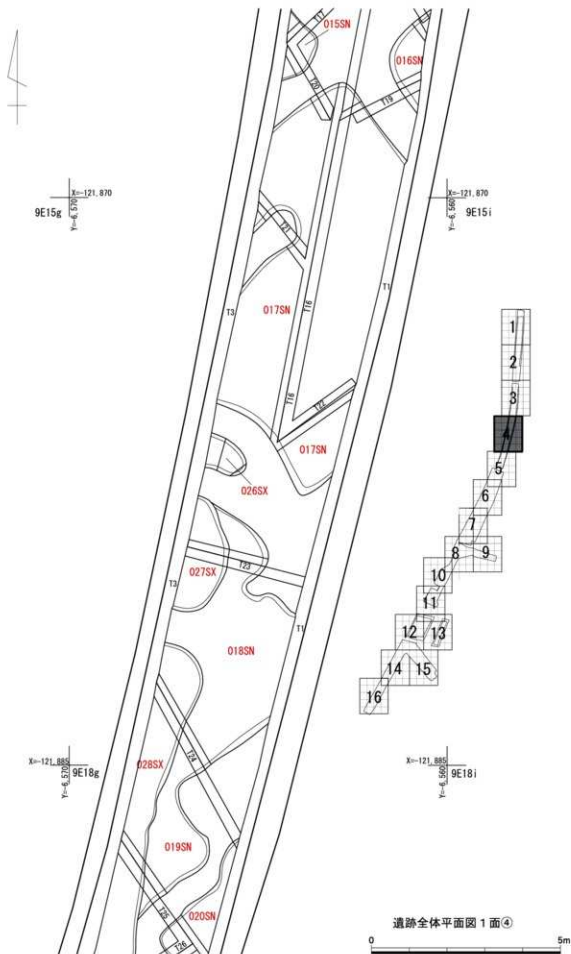


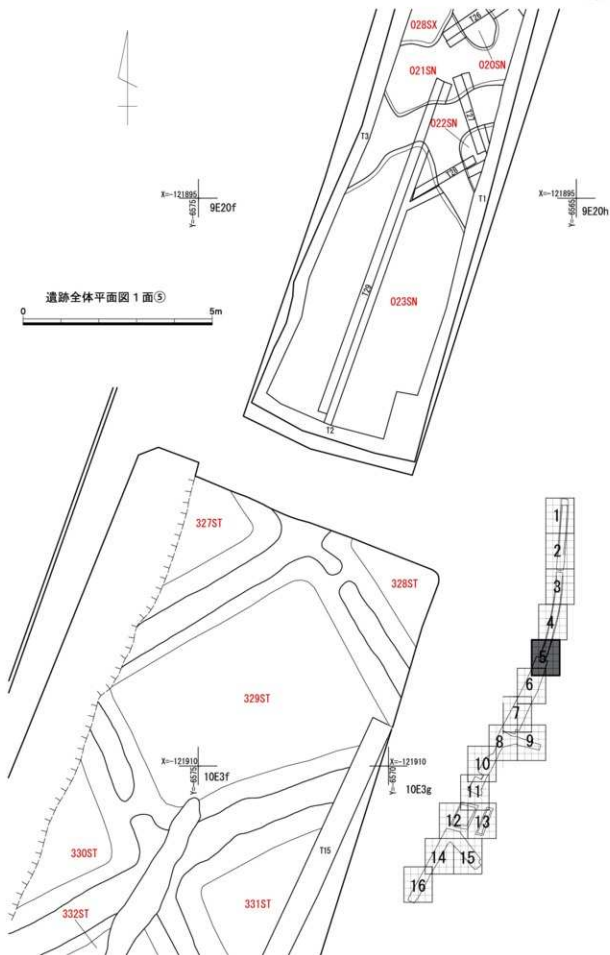
遺構図版 3



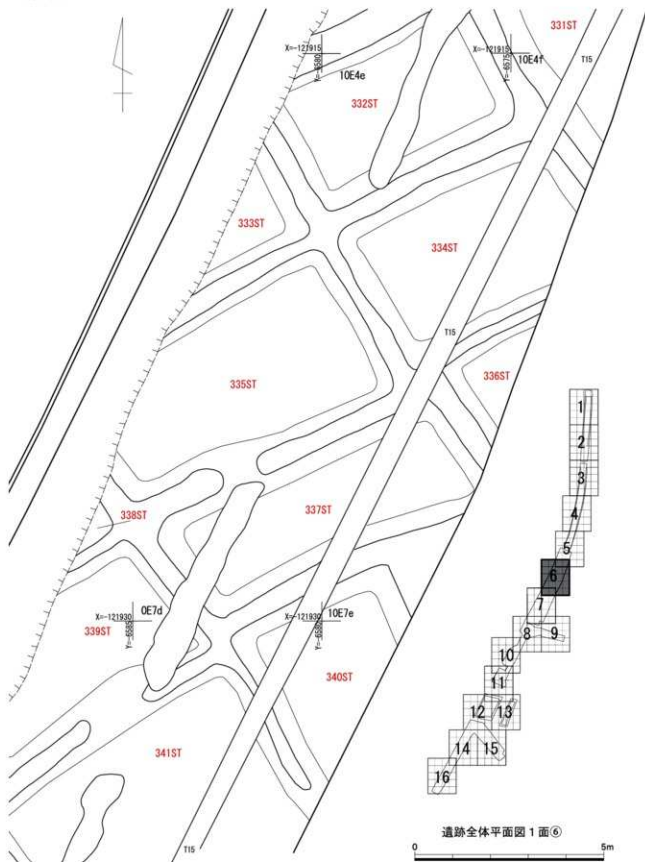


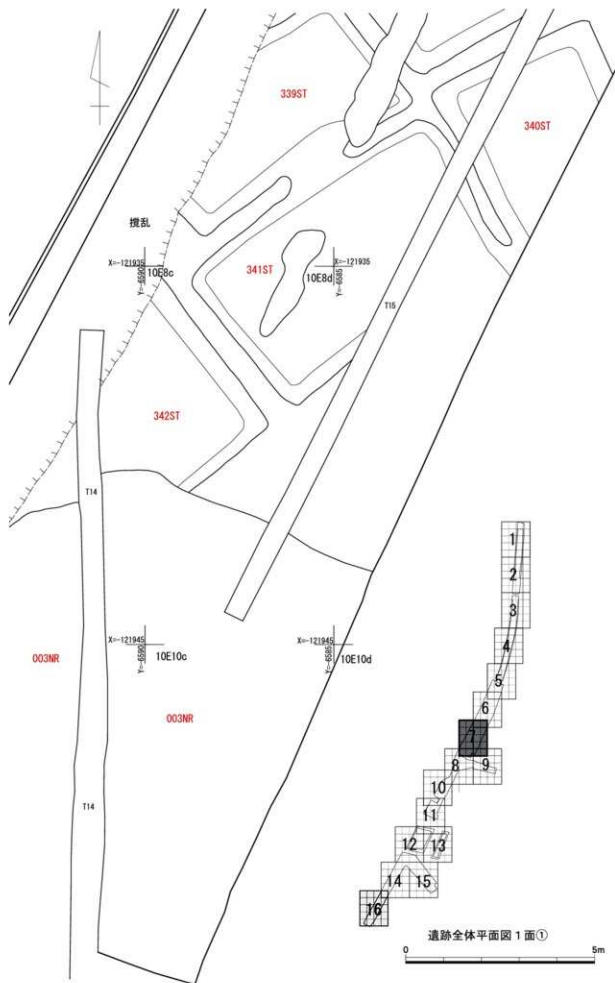
遺構図版 5



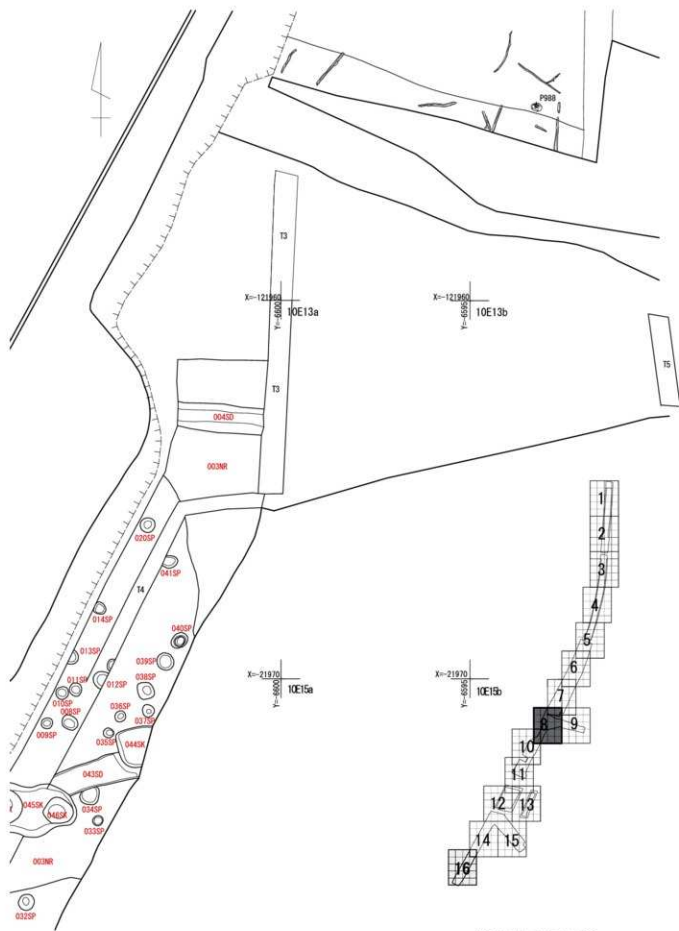


遺構図版 7

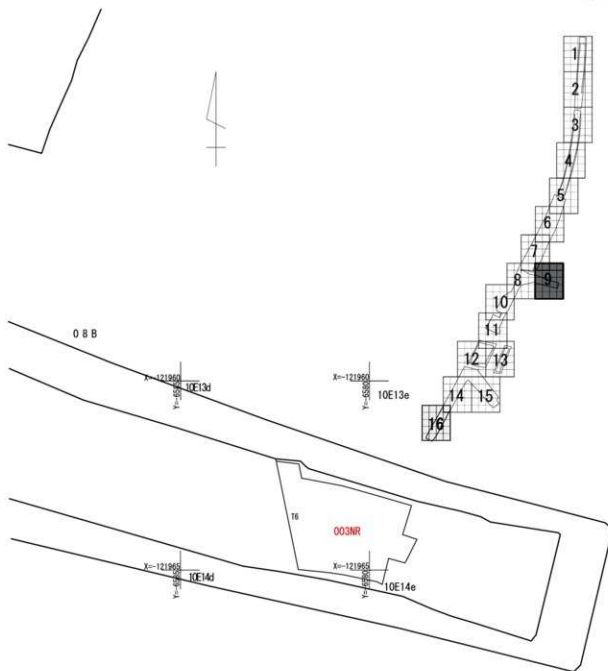




遺構図版 9



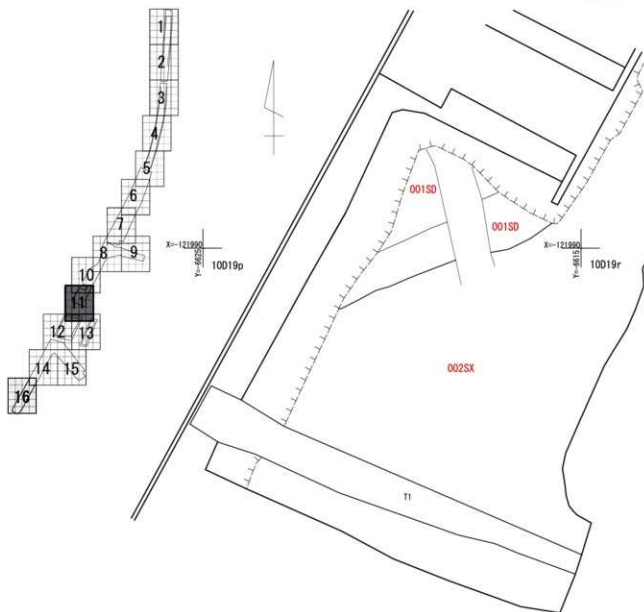
遺跡全体平面図 1面①
0 5m



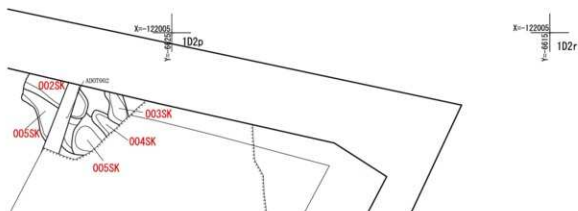
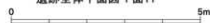
遺跡全体平面図 1面◎

0 5m

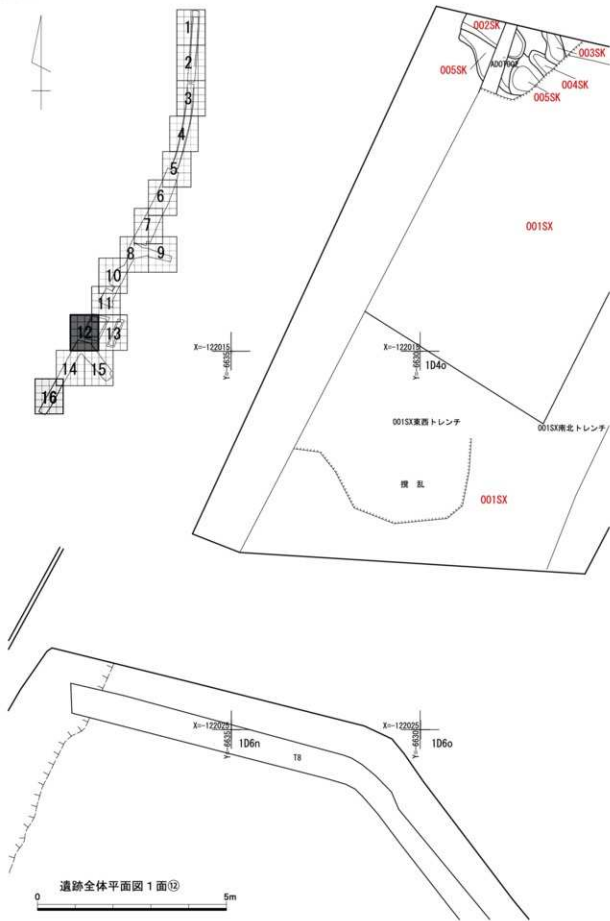




道路全体平面図 1面11

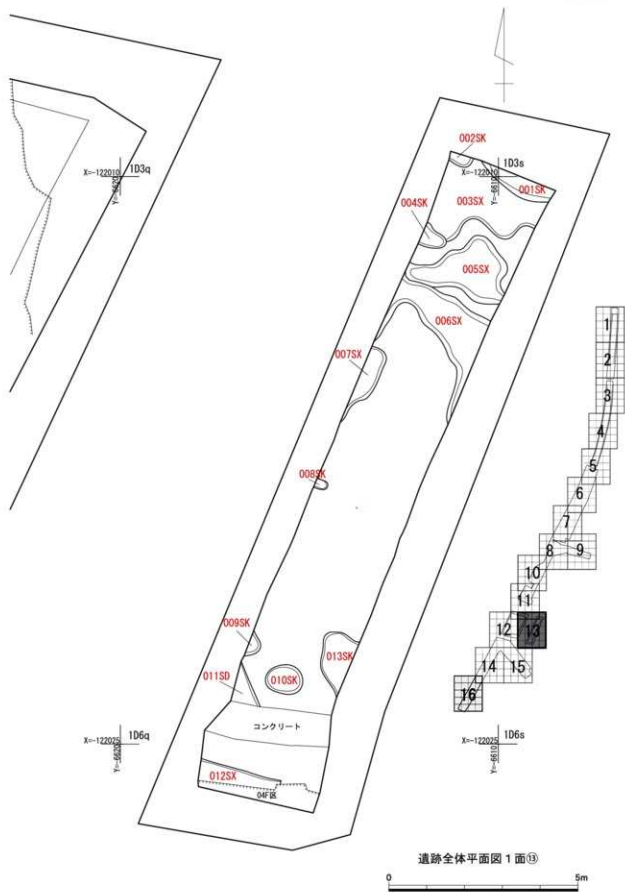


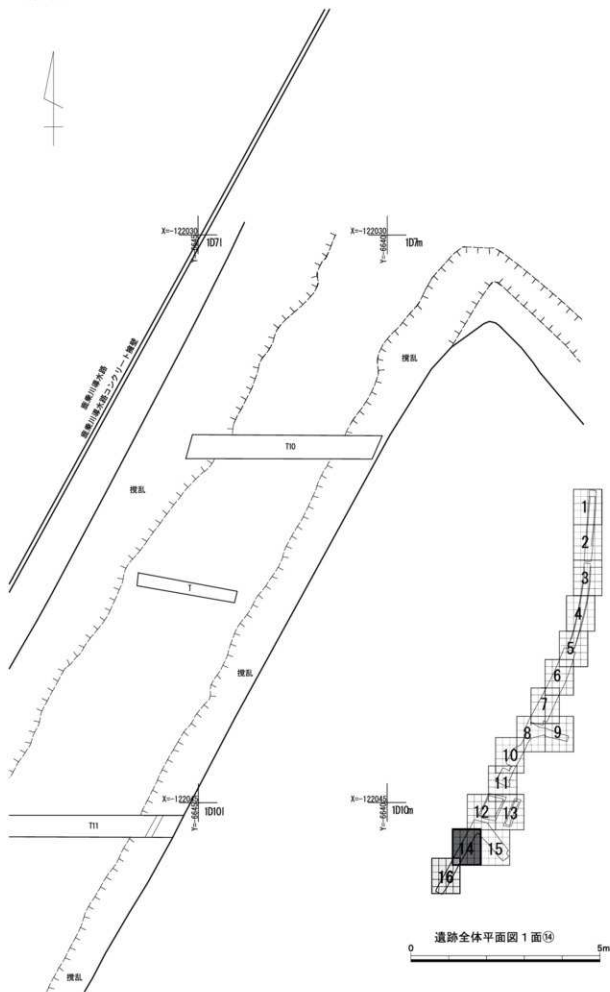
遺構図版 13

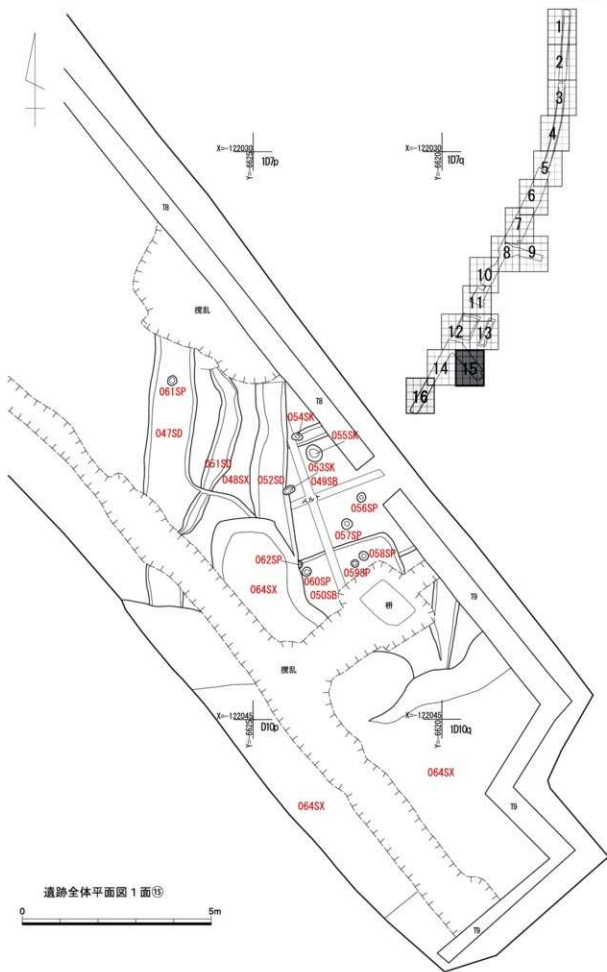


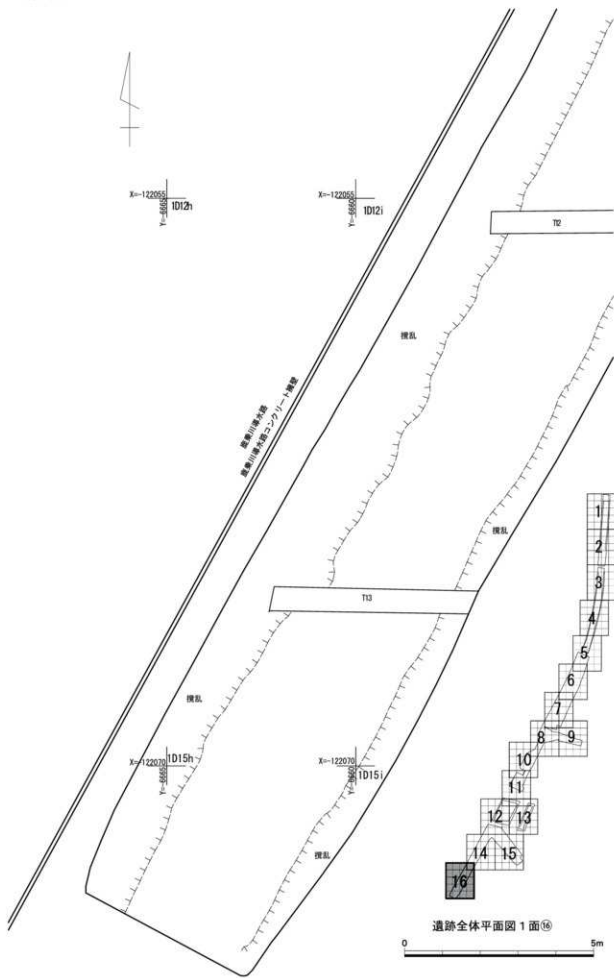
遺跡全体平面図 1面⑫

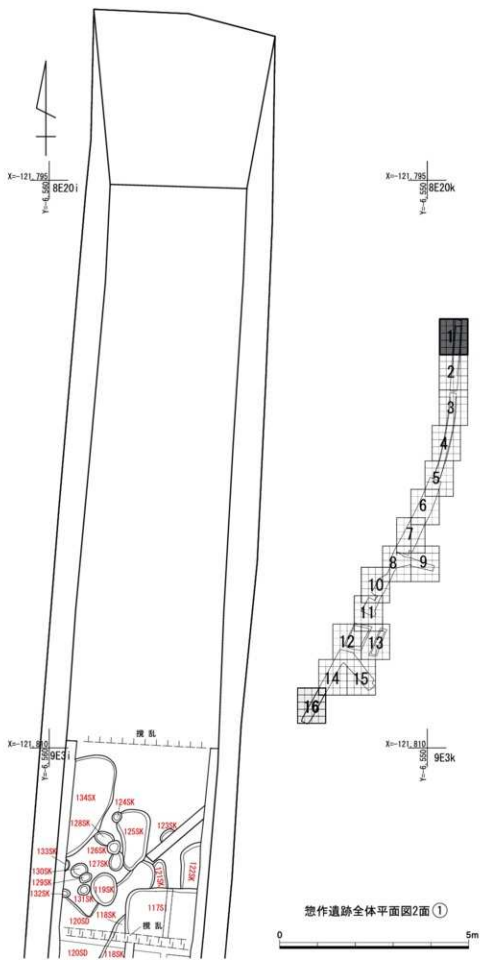
5m

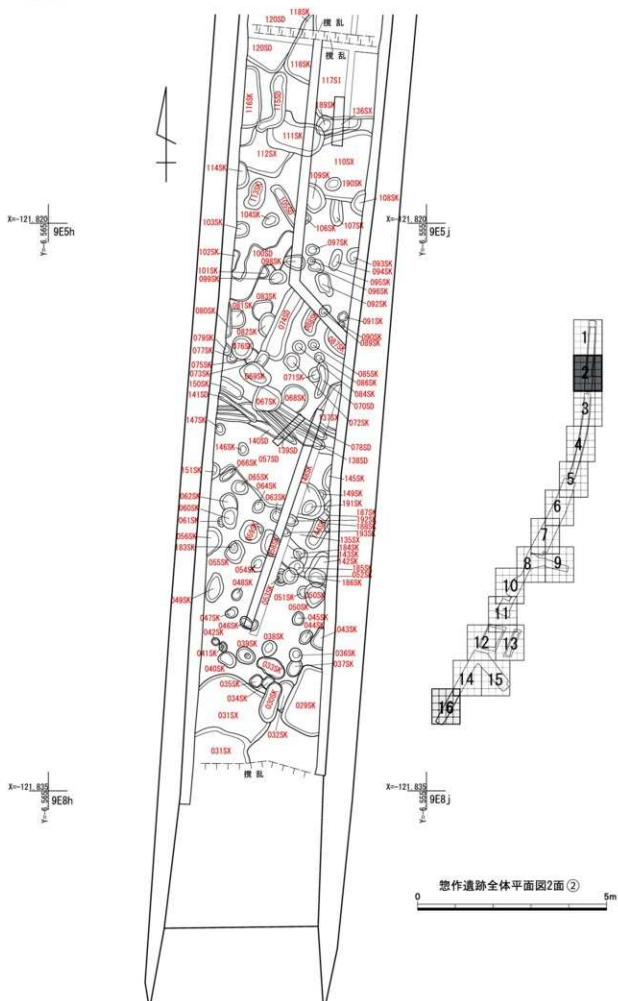




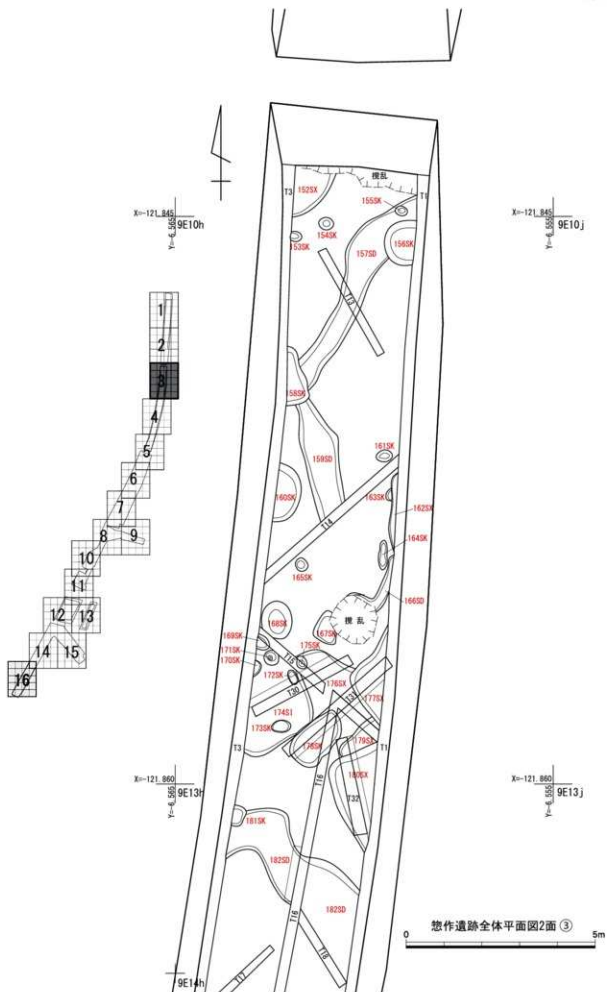


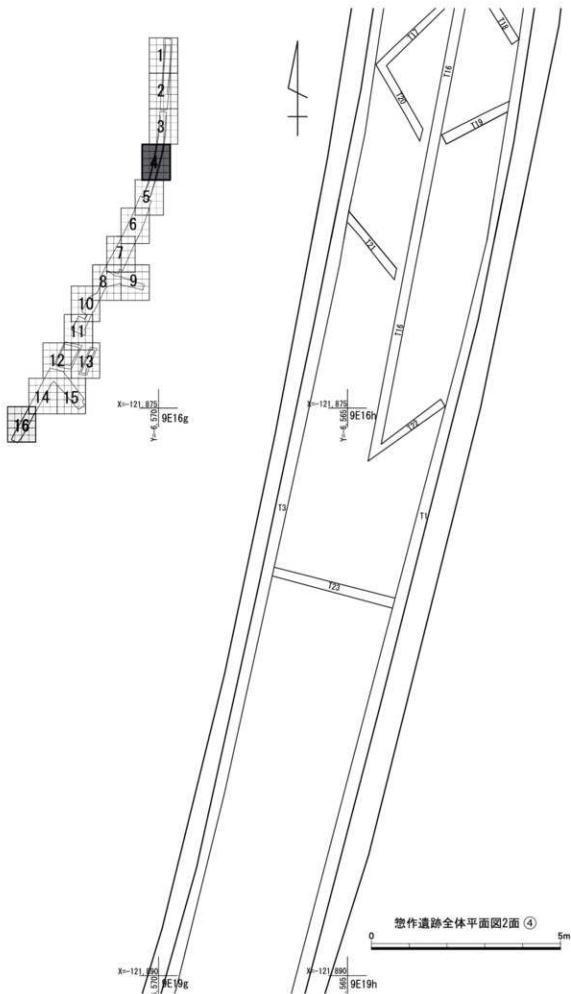


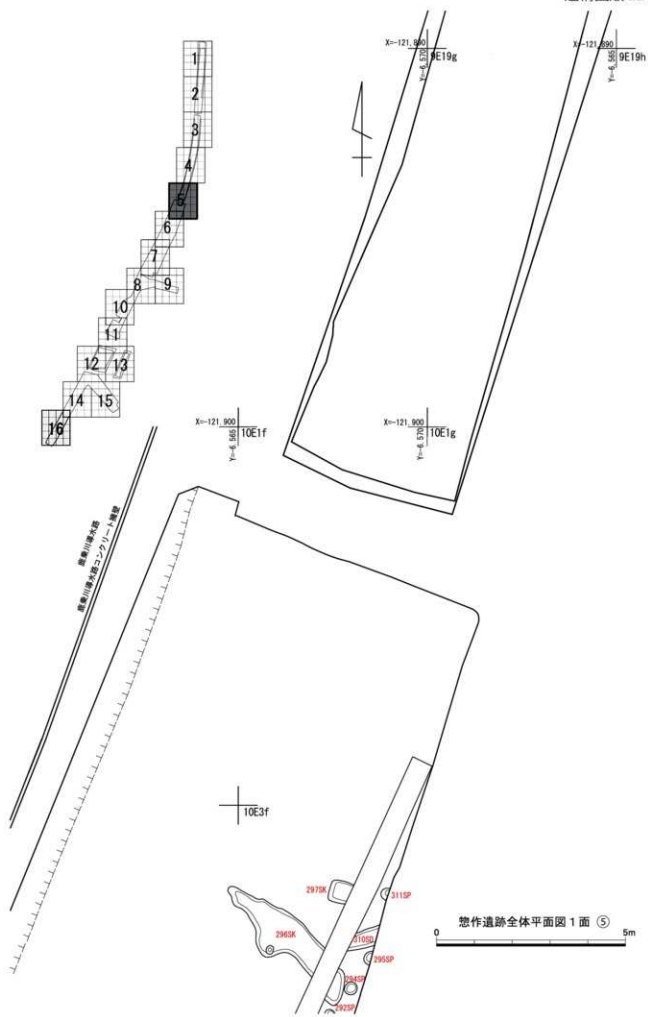


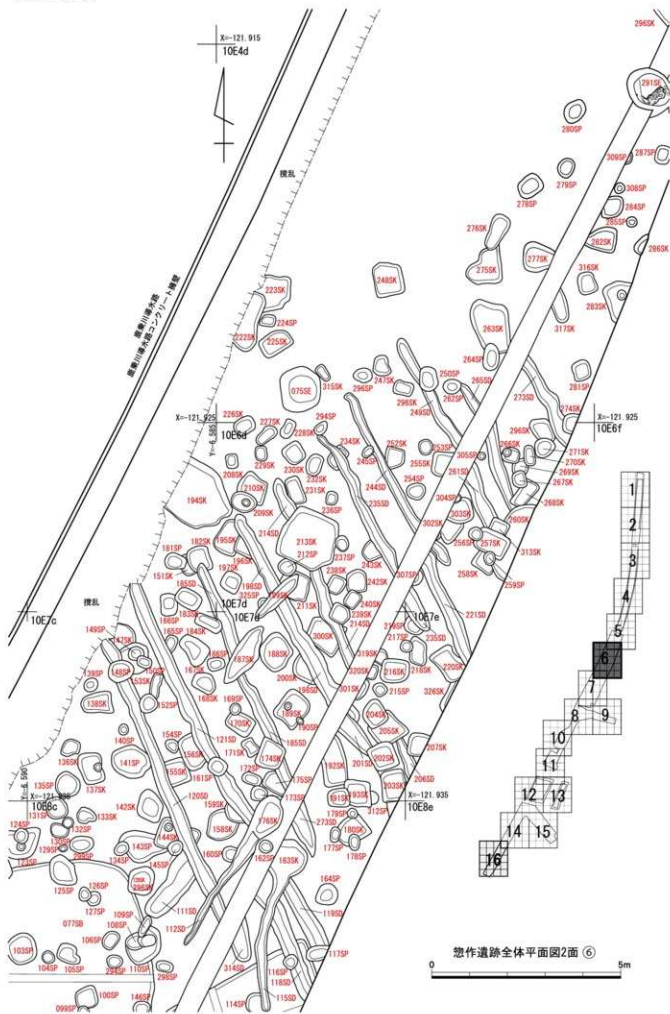


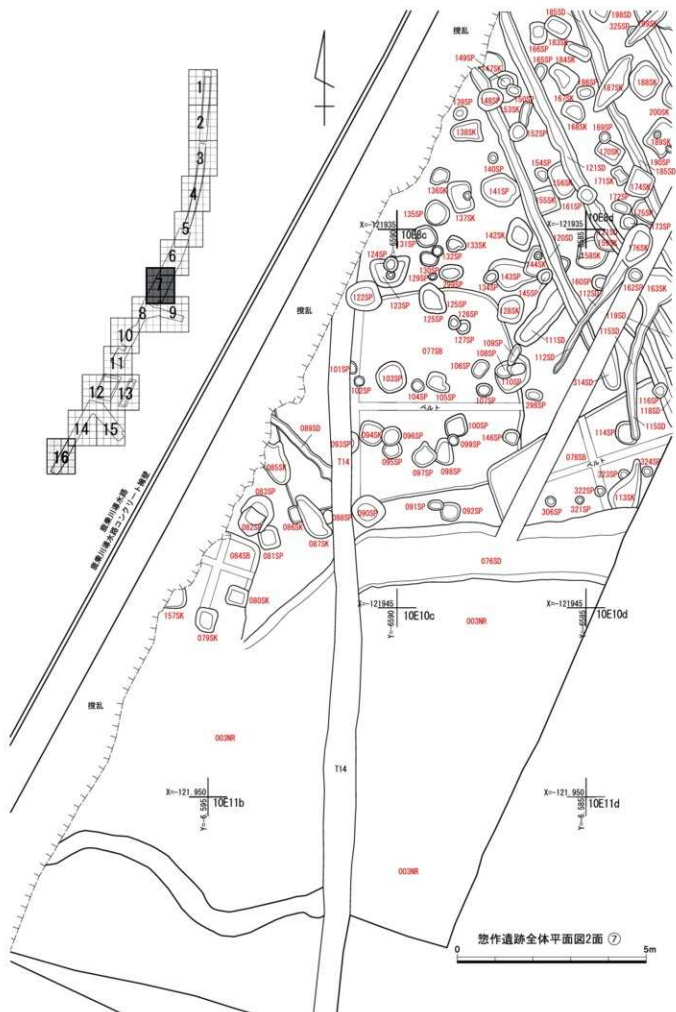
惣作遺跡全体平面図2面②
0 5m

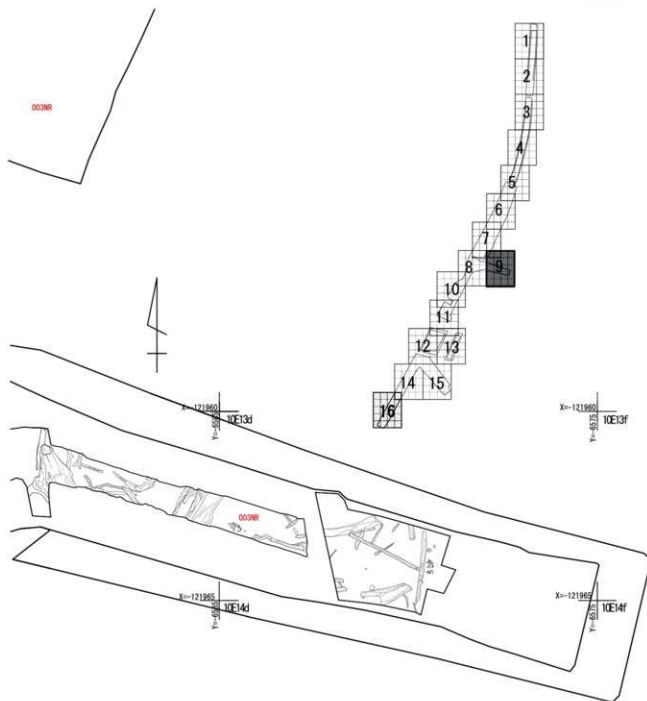






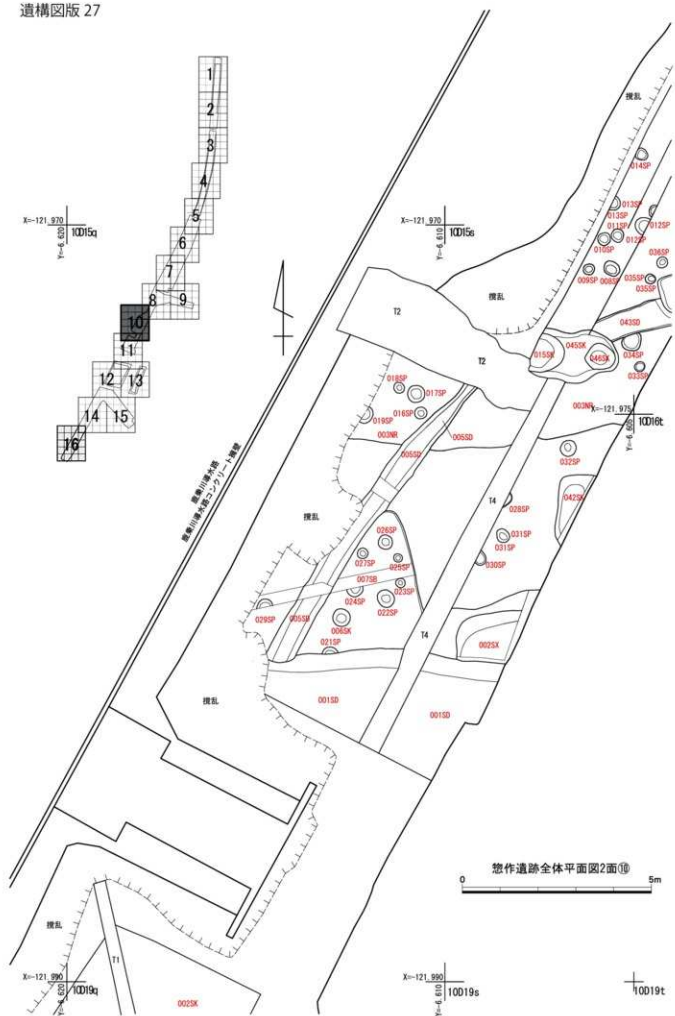


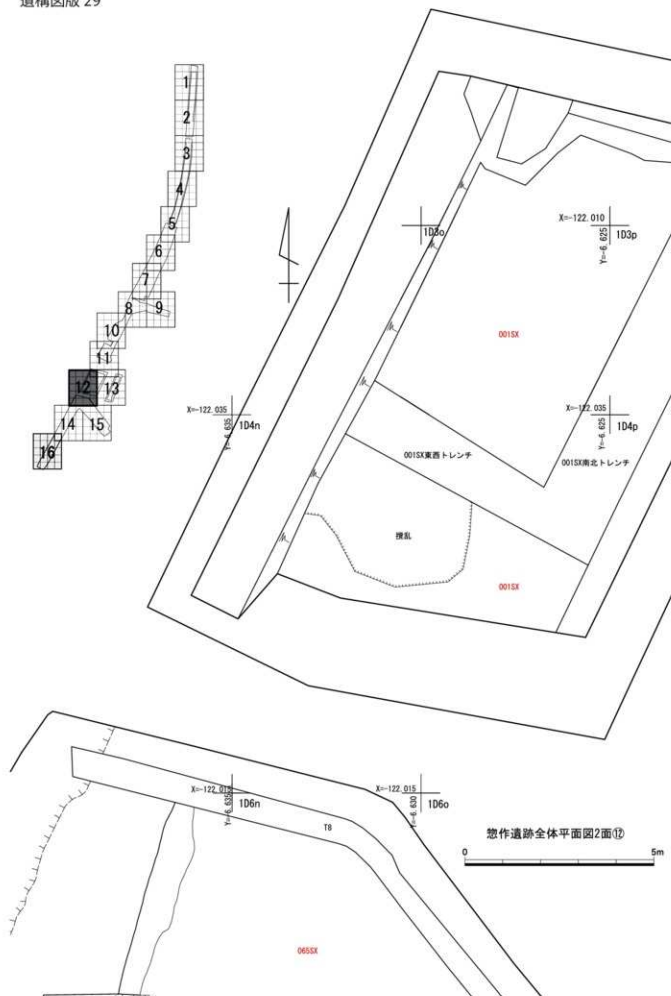




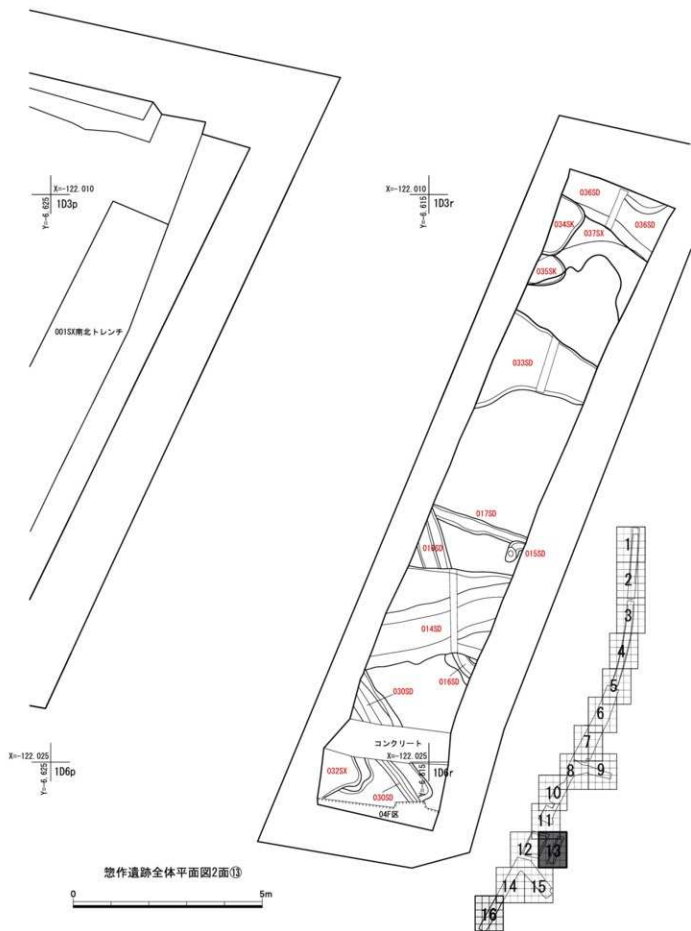
惣作遺跡全体平面図2面③

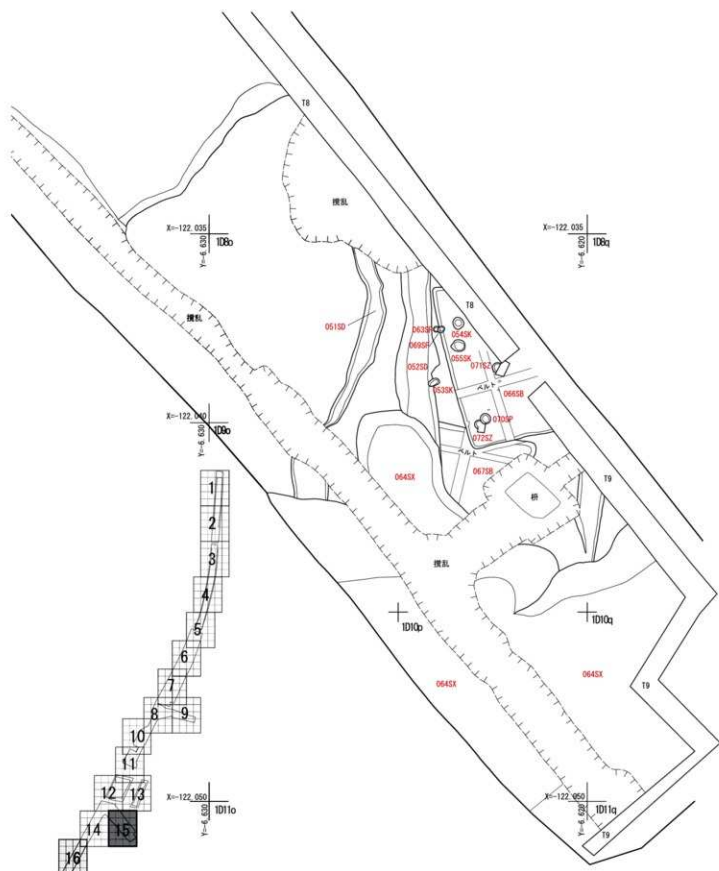






惣作遺跡全体平面図2面①





惣作遺跡全体平面図2面⑮





遺跡遠景 (南からみる)



08Aa 区 1 面遠景 (東からみる)



08C 区遠景 (南からみる)



08Aa 区 2 面遠景 (北からみる)



09B 区遠景 (南西からみる)



08B 区遠景 (北からみる)



09C 区遠景 (北からみる)



08Aa 区 2 面全景(西からみる)



08Aa 区 2 面検出状況 (東からみる)



08Aa 区 溝群 (南東からみる)



08Aa 区 0985P 土層断面(南からみる)



08Aa 区 0775B 土層(南からみる)



08Aa 区 0785B (南からみる)



08Aa 区 2915E 編物出土状況



08Aa 区 1 面遺構検出(南からみる)



08Aa 区 1 面中央部 (東からみる)



08Aa 区 0755E 土層断面



08Aa 区北壁土層断面 (南からみる)



08Ab 区 2 面全景 (南西からみる)



08Ab 区 2 面全景 (北からみる)



08Ab 区 003NR 土器出土状況



08Ab 区 003NR 木簡出土状況



08Ab 区 003NR 木製品出土状況



08Ab 区 003NR 木製品出土状況



08B 区南壁土層断面 (北からみる)



08B 区 003NR 須恵器出土状況



08B 区 007SB (南からみる)



08B 区 004SD (西からみる)



08B 区 002SX (南からみる)



08B 区 001SD (南西からみる)



08B 区 003NR 土層断面 (西からみる)



08B 区 003NR 遺物出土状況



08B 区 003NR 遺物出土状況



08B 区 003NR 遺物出土状況



08B 区 003NR 横斧柄出土状況



08B 区 003NR 遺物出土状況



08B 区 003NR 土器出土状況



08B 区 003NR 団扇形木製品出土状況



08B 区 003NR 土器出土状況



08B 区 003NR 土器出土状況



08B 区 003NR 曲柄鎌出土状況



08B 区 003NR 遺物出土状況



08C 区 0665B・0675B 土器出土状況 (北東からみる)



08C 区 0495B・0505B 土層断面



08C 区 0495B・0505B 完掘



08C 区 0665B 土層断面



08C 区 0675B 土層断面



08C 区 0735D (南からみる)



08C 区 0665B 土器出土状況



08C 区 0725Z 土器出土状況



08C 区 0715Z 土器出土状況



08C 区 068NR 遺物出土状況 (南からみる)



08C 区 068NR 下駄出土状況



08C 区 深掘り調査状況



09A区・09B区全景（南からみる）



09A区北壁土層断面



09A区東壁土層断面



09A区灰色粘土堆積状況



09A区002SK・005SK土層断面



09A区002SK～005SK完掘



09A区2面（南からみる）



09B区1面全景（北からみる）



09B区1面北半（北西からみる）



09B区2面南半（北東からみる）



09B区018SD・038SD



09B区060SD遺物出土状況



09B区018SD・041SD土層断面



09B区3面全景(北東からみる)



09B区4面全景(北からみる)



09B区3面遺構検出状況



09B区0185D



09B区0285I 遺物出土状況



09B区4面全景(北からみる)



09B区0265K・0725K 遺物出土状況



09B区遺物出土状況



09B区0285I 遺物出土状況(東からみる)



09B区0285I 下層遺物出土状況



09B区東壁土層断面



09C 区 1 面北半部 (南からみる)



09C 区 1 面北半遺構検出状況



09C 区 1 面北半遺構検出状況



09C 区 1 面全景 (南からみる)



09C 区トレンチ 12 土層断面



09C 区トレンチ 29 土層断面



09C 区東壁土層断面 (西からみる)



09C 区 2 面北半部 (北からみる)



09C 区 2 面北半部検出状況



09C 区 2 面北半部検出状況



09C 区 2 面南半部検出状況



09C 区 179SX・180SX 土層断面



09C 区 1175I・1185I 土器出土状況 (東からみる)



09C 区 025SK 土層断面



09C 区 0245D 土器出土状況



09C 区 1175I 完掘



09C 区掘立柱列



09C 区 1105X 出土状況











364



412



365



410



538



509



390



385



409



453



388



375



384



402



422



387



391



454



396



383



414



411



363



417







321



317



315



323



566



316



322



565



311



357



563



312



569



568







782



783



785



788



294



798



798



799



789







892



893



909



892



893



909



911



899

897

900

898



904



899

897

900

898



914

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第172集

惣作遺跡Ⅱ

2012年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社